

---

# 魔法少女リリカルなのは 春よ、来い

霧丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 春よ、来い

### 【Nコード】

N81890

### 【作者名】

霧丸

### 【あらすじ】

原作が始まるよりも前、なのはは夢に見たその人と出会う  
その人は無愛想でしかし大きく暖かい人だった、しかし出会いは別  
れへの確定だった

現在はトラは1の時期に該当します。

プロローグ 前編 龍神人（前書き）

感想待ってます

## プロローグ 前編 龍神人

### プロローグ 前編

いくつもの運命が交差し、いくつもの物語が生まれた街……海鳴市  
今その海鳴市は今にも雨が降ってきそうな灰色の雲に覆われ、どこ  
か暗い雰囲気を漂わせていた。

「破アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

バチイイイインっ！！！！バチイイイイイインっ！！！！

「シャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

その曇天の空、街を一望出来る丘と神社の境に存在する森の上空に  
て二つの黒と蒼の閃光が、雷鳴のごとき激しさ、火山の噴火のごと  
き苛烈さ、地震の如き熾烈さをもって互いを否定しあっていた。

「テリヤアアアアアッ！！！！！！」

“ ざっ シュっ ！！！！ ”

「 又オオオオオオオオオオオオオオオオオオっ ！！！！ 」

幾たび目か知れぬ交わりにおいて、蒼い閃光が黒い閃光を打ち落す。

黒い閃光は隕石のように地面に衝突し、クレーターを街が一望出来る丘に作り上げる。

凄まじい衝撃にて砕かれた地面の土砂が舞い上がり、土煙をつくり其れはまるでカーテンのようにその黒い閃光の姿を隠していた。

数秒の時を要して砂塵を丘に靡く一陣の風が運び去り、黒い閃光…否、黒い異形の姿をさらす。

「 ぬう うう …… 我が、この我が負けるなど有り得ん …… 」

地面にめり込む其れは、

黒いスーツを着た20台後半の男の様相を呈し

黒い髪に赤い瞳が映え、

何より人間のモノとは思えぬ両の手、

其れは、黒い影のような炎により通常の何倍も太く強靱でありながら洗練され5本の指が存在すべき手のひらはまるで大鷲が得物を捉え、引き裂く強靱なつめ、まるで腕そのものが大鷲の足の様であり、

肩口からは黒い炎の左右合わせれば男の全身を軽く包めるほどの翼が生えていた。

「これで終わりだ、【八咫鳥】……」

黒い異形……八咫鳥は頭上より響く声の主をにらみつける。

その声の主は内側から破けたようなぼろの黒いロングコートを羽織、

蒼い金属光沢を誇る突起の付いた甲殻にその手足を覆われ、

間接や首から顎にかけて甲殻よりやや薄い色の鱗に保護され、

米神から後ろに向けて水晶のような角を生やし、

やや茶髪に近い黒髪をなびかせその背より龍の支翼に蒼い炎の羽を携えた翼を広げて佇み。

曇天の空を背に左手に幾何学的な構造、模様のパールホワイトの輝きをもつ片刃の大剣を携えて八咫鳥をその縦にわれた瞳孔を持つ金色の双眸で見つめていた。

その姿はまさしく、神が如き神気を纏う龍人にして龍神、すなわち龍神人である。  
りゅうじん

「貴様、なぜ我の邪魔をする？貴様とて神の一柱であろう？青龍の血を引きし者よ。」

八咫鳥は自身を撃ち落とした蒼い異形に怨嗟をこめ語りかける。

「間違えるな……俺は東雲 亮、鬼切りにして人間だ。なぜだと？ 貴様が俺の大切な者を悲しませる元凶だからだ。

自身の身勝手で人を喰らう貴様を滅ぼすには丁度いい理由だと思うが？」

地獄の底から響くように亮は八咫鳥に告げる。

「おのれ……人間など我の食料でしかならぬというのに……おのれええええつ！！！」

八咫鳥は地面を蹴り碎き、稲妻如き激しさを持った速度で亮へと飛びかかる。

“ガキイイイインっ！！”

八咫鳥の全てを切り裂き貫く異形の爪を亮の持つ大剣が受け止め、金属摩擦音と紅い火花を辺りに撒き散らす。

其の時、八咫鳥の口が三日月のように“にたあ”と釣りあがり同時に、亮の背後に広がる林の木々の間から飛び出す一つの小さい人影が亮の名を叫ぶ。

「りょうおにいちゃんっ！……！」

その小さい人影は、4〜5歳ほどの栗色の髪を左右に縛り小さいながらも可愛らしいツインテールにした女の子であった。

その女の子は額に汗を浮かべ服は若干土に汚れ膝を擦り剥いており、必死に森を駆けてきたことをうかがわせる。

「っ！……来るな！！なのはちゃんっ！……！」

その一瞬隙が亮に生まれ、その一瞬の隙に八咫鳥は光速で移動し、小さい女の子【高町なのは】の眼前へと移動する。

「丁度いい所へきてくれたね……お譲ちゃん君の魂を美味しくいただくでしょう……」

八咫鳥のその異形にして超常の力を秘めた右腕がなのはに向かって突き出された。

爪は空気を裂きながら進み、肉を裂き、骨を断ち、胸を貫いた

……



「グっ！……がつー！」

「これは、これは……」

「りょうおにいちゃん……」

龍神人 東雲 亮の胸を

八咫鳥の右腕は深く、深く高町なのはを庇った亮の胸にめり込みそのうちに収められている臓器を鷲掴みにしている。

「思いがけない結果になったな、青龍よっ！……！」

“ブチっ！！ブチイイイイイっ！！”

「…ガハっ……！！！」

嫌な音を立てながら亮の心臓は4本の血管を引き千切りながら抉り出され、その胸から大量の赤い液体が漏れ出す。

抉り出された心臓は未だ脈動を止めず、血を吐き出す。

「クハハハハハハっ！！！！これで矮小な人間なぞいちいち喰わずとも膨大な力をこの手にし我こそが唯一絶対の神、至高神<sup>アイオン</sup>となるのだっ！！！！」

心臓を手を高笑いを行う八咫鳥、だが…

“ガシィっ！！！”

八咫鳥の心臓を握った手を掴む、蒼い甲殻に包まれた一本の腕。

「言っただはずだ……貴様は…此処で【終わる】となっ！！！！衛宮、貴様の魔術を借りるぞっ！【解析・開始<sup>トレース</sup>・開始<sup>オン</sup>】っ！！！！」

「き、貴様まだ生きていたかつ！！！！？なにをするつもりだっ！！！！何をするつもりなんだっ！！！！」

八咫鳥が喚くなか、亮は文字通り死力を持って八咫鳥を消滅させる手段を敢行する。

物理構成 解明

霊的構成 解明

精神構成 解明

因果構成 解明

全存在構成 解明完了

青龍 最終奥義 空転回帰 使用可能

「八咫鳥：いや、あへのせいけい“安部聖經” 貴様の時は終わる、さあ虚無へと帰れ【空転回帰】っ！！！！！！」

亮が告げると同時にいくつもの光の小塊が八咫鳥を囲み、その周囲を光速で回転し一種の力場を形成する。

「止めろっ！止めてくれ！！」

力場が八咫鳥を捕らえ、逃がさず光球が一個また一個と八咫鳥の体に触れたかと思うと触れた部分の存在時間を存在する以前にまき戻し、【なかったことにする】

「千年！！千年だぞ千年もの時を掛け漸く漸く、目的が達せられるというのになぜっ邪魔をするっ！！！！なぜ邪魔をつ……」

いくつ目かの光球がぶつかり消え、均衡が失われた力場は八咫鳥ごと消滅する。

八咫鳥…はるか昔に人間を超えることを目指し人外となった男は、言葉を言い切ることなく存在を消され、消滅した。

「言った……だろうがっ……貴様はっ……俺の大切な……者を……泣かした……だからだっ……!!」

心臓を抉りぬかれ、死力を使い切った彼は行き絶え絶えに、もはやその声は届くことのない八咫鳥に告げた。

“ピキッ……!ピシッ……!!”

蒼い炎の羽は消え去り、蒼い輝きを放っていた甲殻や鱗も見える見るうちに白く風化し罅が入る。

“パリンっ”

“ドサっ……!!”

硝子が割れるような音と共に全ての甲殻が砕け、灰となって風の彼方に消え去り、残ったぼろぼろの衣服を纏った青年 東雲 亮は地面に倒れ伏し。赤い模様を描き出す。

「はぁ、はぁ……つく……!!」

亮は何とか仰向けに体勢を変える。その顔を覗き込む一人の少女に告げる。

「サヨナラ……みたいだね……」

## プロローグ 後編 きつかけ

薄暗い灰色の雲：俺は其れを、見上げている。

ポツポツと雨が降り始めすぐに本格的に大粒の雨粒が大量に降り注ぐ。

天より降りし恵みを与え、時に災厄をもたらすそれは

今、俺の体を打ちつけ急速に体温を奪っていく…

ザアアアアアアアア”

雨粒が地面を打ちつける音を背に、街が一望出来る小高い丘で

もはや、起き上がるどころか視界も不確かなその状態で俺は横たわりその曇天を見上げている。

胸の真ん中よりやや左に位置する場所には人の腕ほどの風穴があきその風穴に納まっているはずの心臓はもう存在しない夥しい量の血液が溢れては雨によって流されていく…

血液と体温が不足し視界が失われつつある中俺の顔を覗き込む少女の顔がやけに鮮明に見える…

栗毛色の髪を左右で縛ったかわいらしいツインテールにした少女は雨でよくわからないが涙を流しているようにみえる。

「サヨナラ…みたいだね…」

今年で4つになる彼女は俺にそう告げるだがもはやどうしようもない。

誰が言ったかは知らないが【出会いは、別れへの確約】だ。

出会った瞬間からいつ訪れるかは誰も知らないが別れの瞬間が来ることは既に決定している。

つまりこの別れも確定事項なのだ。まあ、いままで80年近く様々な別れを見続けてきた。

鬼切り、其れは人に仇名す魔を狩る者であると同時に、この世に未練を残し彷徨う霊を命の大海へと送り届ける使命が在る。

命は星の血液みたいなものであり絶えず星全体を循環している、霊とはその流れに抗う存在、だが自然の理に反して存在している以上様々な弊害が起きる。

其れを防ぐために存在するのが鬼切り、輪廻転生の理念が存在する地方であれば古くから存在し人知れずに命の循環を守る。まるで血管を保護する筋肉のように

だがおれ自身見てきたのは別れの場面ばかり、使命の名の下

切実な願いを踏み躪り

魂の慟哭を切り捨て

ただ、屠り続けた…

だから、自分の番が来たただと納得はしているが……

だけど、もう少し……もう少しだけ

もう少し、此処に居たかったなあ…

「いやなの…こないやなの…」

彼女…なのはは俺の顔を覗き込みつつ、その小さな瞳から大量の涙が溢れ俺の顔に雨粒と真っしょに降り注ぐが、雨粒と違い彼女の暖かさが感じられる。

何時からだろう、永き時を生きて、ひたすらに別れを繰り返して続け、完全に色褪せてしまった世界がこんなにも美しく、輝いて見えたのは……

やはり、あの時からだろう…

俺こと、【東雲 亮】と彼女【高町 なのは】の別れが確定したとき

明朝の日が昇るよりも前の夜の闇がこれから上る日の明かりによって、紫陽花のような薄い紫や薄い水色に染まる朝と夜の境目の刻限



海鳴市の町が見渡せる丘、藤見台に突如空間に裂け目が入る。

人一人通れそうなその裂け目の虚空、空虚な空間より一つの人影が吐き出される。

人影は黒いロングコートを羽織った175cmほどの身長を持つやや茶髪に近い黒髪にブラウンの瞳を持つ青年、【東雲 亮】

「くっ!!」

彼は地面に足を着けるなり突如よろめく、その顔は蒼白に染まり額からは脂汗が滲み口を手で押さえつけている。

「……………」

ふらふらよろめきながらぼうぼうの体で近くに生える木に持たれかかり、深呼吸をすると共に自身をこのような状態に追い込んだ相手に対して呪詛を垂れ流す。

「あの宝石翁、ハッチャケジジイタダで道を開いたと思えば……………こういうことが…」

宝石翁、キシリア・ゼルレッチ・シュバインオーグそれは、第二魔法と呼ばれる無限に分岐し続ける確立分岐世界…すなわち平行世界を自由自在に行き来できる存在。

彼に平行世界への道をランダムで開かせたのだが、一つ大きな誤算があった。

平行世界への道を開くといってもいきなり向こうが平行世界というわけでも無く、全ての平行世界を内包した世界が存在する。

たとえるなら、水槽にためられた水がある、水中の水泡の一つ一つが世界であり其れを納める水という平行世界を納めた世界が存在する。

平行世界の移動とはまずその水のなかに水泡から飛び出し、別の水泡へと飛び込むことである。

でだ、この水のなかには水泡の中とは違い、完全な異次元である。

そんな中生身で飛び込んだのだ…視覚、聴覚、嗅覚、など外の情報の受容器官は認識できなくとも無いという情報を脳に刻むのだが、平衡感覚だけは違う情報が無いとはどういう情報なのか理解できず脳にエラーを叩き続けやがて麻痺し、体内の様々な器官に悪影響を与えるその最たるものが吐き気……すなわち

【酔ったのだ】

車酔い、船酔い、飛行機酔い……などなど

程度は違うがそれらと同じ症状だ、言ってみれば次元酔い

「少し……眠るか……」

そんな状態な亮は動くことも出来ずにそのまま眠りに着く。

だが、

「……ン……ンン……むにゃ……ムニャ……にゃ？へんなユメみたの」

一人の少女が無意識に遠見で夢としてみていた事を知る由は無かった。

## 第一話 出会い

過去の思い出はこの眠りの中で俺を唯一楽しませる。

当時の思いを呼び起こしありえないIFの未来を連想させ俺を不定期に楽しませる。

だけど俺の時計は止まったまま、だが記憶は劣化していき徐々に不鮮明となっていく

それは拭えない恐怖となって俺を蝕む。

俺は再び君に出会えるだろうか？

君は再びその太陽の様な笑みを向けてくれるだろうか？

何より、君は俺を思い出すだろうか、もしくは再び始める事が出来るだろうか

その結果は時の女神のみが知っている。

例え、再び巡り会う事がなくとも彼女人生に幸在らんことを願いながら待とう

目覚めの刻を…

## 第一話 出会い

「…っていうユメをみたの！くるしそうだったの！たすけてあげたいの！」

「そうかなら助けてあげないと、なのは。」

「なの!!」

栗毛の髪をかわいらしく両端でしばった女の子、高町なのはは朝食であるフレンチトーストが並べられたテーブルで椅子に座り着かない足をブラブラさせながら昨晚見た夢の事を父、高町士郎に語る。しゃべり始めたばかりの舌つ足らずの発音がかわいらしさに拍車をかける。

士郎はそれをほほえましく思いながら聞き手にまわる

「で、なのははどうやって夢の中の人を助けるんだ？」

「わからないの…」

彼女の兄である恭也は背伸びしたい年頃なのかコーヒをすすりながらどうしようもないから諦めるとでも言いたげに在りもしない解決法を問かけ、それを受けてなのははしょんぼりしてしまう。

「もうお！そんなこと言わないの恭ちゃんは!!」

ねえ、なのは？夢で見た場所はこの近くなんだよね？」

「そつなの！おはかのちかくなの!!」

「そつか、じゃあお母さん!!」

「しかたないあ…じゃあなのは今日のお散歩で夢で見た場所に行ってみようか？正夢かもしれないし」

先の恭也の言い方をいさめながらなのはの姉である美由紀がなのはに夢で見た場所を聞、母、桃子を呼び以心伝心でなのはのやりたいことができるようにしてやる。

「ありがとうなの!!」

「どういたしまして」

なのはお礼に美由紀と桃子がそろって応えこのあと温かい笑いが響くこととなる。

「こっちなの!!おかあさん!」

「こらこら、なのはそんなに急がなくても逃げやしないわよ」

とてとと走りながら坂を上るなのはに母である桃子は注意を促す。

「ほんとうかもしれないの!!だからいそぐなの!!」

しかし、そんなものど吹く風なのは坂を駆け上がっていく。

そして

「やれやれ、しかたがないなあ」

それを苦笑しながら早歩きで追いかける。

「おかあさん!!いたの!!」

「うっそ…ほんとに正夢だった…」

樹にもたれかかり眠りについていた黒ずくめの青年がいた。

「…え………ねえ」

誰かの声が聞こえた。

しかし、この声に聞き覚えはない。

一体誰だ？

ゆさゆさと軀が揺すられる。

「おきて！おきてなの！！」

ゆつくりと意識が覚醒し瞼が開かれる。

僅かに過ぎようとしている夏の日差しが眼に入りまぶしさに顔をしかめる。

眼はすぐに慣れ、自分を起こそうと躍起になっている少女の姿を捕らえる。

「…君はいつたい………？」

「なのは！たかまちなのは！なの！！おにいちゃんは何ていうなまえなの？」

「俺は…東雲…東雲 亮だ…」

## 第二話 鬼切

私は夢を見えています。

夢の登場人物は昨日の夢に出てきてお散歩で出会ったお兄さんです。

あの時お兄さんは具合が悪そうなので家に来て休んだらどうか？というお母さんの提案を断り、頑なに一緒に行こうとせず、“さようなら”といった何処かへ行ってしまいました。それが何故か無性に悲しく感じました。

そのお兄さんは、夢の中で夜の商店街に佇んでいます。

夜の闇を照らした蒼い月の光…それが雲に隠れ無明の世界へとお兄さんを誘います。

「出てこい…」

お兄さんは闇の中で何かに語りかけます。

闇の中ではブラウンだったはずの眼が月のように金色に輝いていました。

……… あああ… うああああ… 苦しい… 痛い… 寒い… 誰か… 誰か…  
一緒に… 一緒に…

闇の中で何かが動きうめき声が響きます。

やがて、月が雲から顔を出し、お兄さんと夜の商店街そしてそれを映し出します。

それは、死んだ人たちでした…



## 第2話 鬼切

「やはり、この土地は龍脈が歪んでいる…」

亮は商店街をそのありえないモノを見通す眼で見渡しながら呟く。

そして商店街の小道や物陰、ありとあらゆる闇に近しき場所で蠢く何かを見つけ、知覚する。

朧月が濃い雲に隠され、辺りを闇が包み込む。

「出てこい…」

蠢く何かを見つめながら亮は語りかける。

自分が居ると知られたからか、それは這い出てくる…

……… あああ… うああああ… 苦しい… 痛い… 寒い… 誰か… 誰か…  
一緒に… 一緒に… -

うめき声を挙げ、救いの手を求めながら…

夜の月が再び顔を出しその蒼い光が景色とその何かを映し出す。

その何かとは…

手足がありえない方向に歪んだ血まみれの少年…

下半身だけの少女と内臓を引きづりなら地を這うその上半身

頭部が欠落し脳髓が垂れ出ている女性…

右手、左足が欠落しているにもか変わらず歩く白骨化したスーツを着たおそらく男性

などなどさまざまだが死んでいるという一点でのみ共通している群れであった。

「この起点に引き寄せられた亡者か…今、楽にしてやる…」

亮の声からは温度が抜け落ち、そしてその金色に光る双眸で亡者たちを見据える。

「神経空間…展開!!」

商店街の空気が一変する、外観は変化しないのだが何かが違う亡者もそれを感じ取り各々周囲を見渡す…

「この空間は檻にして戦場さあ…殺し愛おう…」  
バトルフィールド  
プロセッサー

亮は疑似神経回路である魔術回路に龍の魔力を流し込む。

魔術回路は神秘を為す演算回路として稼働しありえない現象を引き起こす。

「シタミネー ショウト」  
混合・解除！

亮の開かれた両掌に幾つもの銀色の線が奔り日本刀の輪郭を描き出す。

そして腕からは淡い緑色の光が染み出て銀色の輪郭の刀を覆い固形化させる。

魔力の緑色の光が収まるとそこには紅い三酸化レニウムの刀身に白い桜の花弁が舞い散るように描かれた霊刀：白桜が亮の右腕に、

蒼いタングステン・レニウム合金の刀身に黒い風の文様が焼きつけられた霊刀：禍風が左腕に握られていた。

「さあ、来いっ！！貴様らを討ち滅ぼす者が此処に居るぞっ！！」

それが開戦の狼煙となり亡者は一斉に亮に集り出す。

「破あつ！！」

白桜を一閃、亡者を切り捨てる。

…

亡者は声にならない悲鳴を挙げ碎け散る。

「キキキ…！！」

「ぬるいっ！！」

後ろから飛びかかる亡者を禍風で切り裂く…

亡者はその腐敗したからだから腐った血液を飛び散らしながらも砕け散る。

「ふんっ!!」

“ズシャっ!”

亮は地面を蹴り砕き音を置き去りにして次の亡者へ肉薄し切り裂く、その手ごたえは生身の生きた人間を切るのと変わらない。

ただ違うのは、切られた彼らは骨も、肉も塵さえ残さず消えるただそれだけ。

「

っ!!!!」

幾つもの同類を葬る亮に亡者たちは竦み、そして悲鳴を魂の慟哭を挙げる。

それは呪いの歌、自分が死んでしまったことがただ悲しくて、信じたくなくて上げずには居られない命の嘆き。

それは物理的破壊をもたらしつつ、亮の魂を破壊するための呪いの破動として腐ったヘドロの様な色の波紋を広げる。

迫りくる呪いの波に対して亮は高く高く白桜を掲げる。  
白桜は月の光を吸収したかのように蒼い光に包まれる。

「切り裂くっ!!総てを!!」

絶空断 -

触れるモノ、地面さえ腐敗させ腐食させる呪いの波は振り下ろされた刃と剣圧によって切り裂かれ、亮を害することは叶わなかった。

「貴様らを火葬にて黄泉路に導こつ…」

“ガキンっ！！”

正面で白桜と禍風の柄と柄をつなげる。

炎刃剣醒

つながり一つとなった白桜と禍風は紅い紅蓮の炎に包まれ夜の町と亡者たちを仄かに照らし出す。

「あああああああ………」

そして、亡者たちはその炎に手を伸ばす。

触れれば己が身を焼くとわかっていながら求めずにはいられない。  
光を…温もりを…

炎槍・紅っ！！

炎の中から現れるのは、その炎をそのまま纏ったかのような装飾が為された十字槍

「燃やし尽くす……！！」

地面に槍を突き刺し絞り出すような声を吐き出し、同時に槍を地面に突き刺す。

亮を中心に紅い紅蓮の炎が渦巻き、亡者を飲み込み燃やしつくしていく。

骨も肉も、苦痛も、後悔も、願いも、呪いも、罪も、思いも一切関係なく飲み込み焼滅させ無に帰していく…

未だに渦巻く炎に照らされ、死者の灰を浴びながら亮は月を見上げる…

「どこの世界も、不幸と死に満たされている…まるで宇宙<sup>ソラ</sup>の様な無明の極寒の暗闇で俺は見つけれるのだろうか…奴らが求めた光と温もりを…」

ただうつすら雲のかかった朧月が亮を見下ろしていた。

それは少し悲しい御伽話の様な夢でした。

あの人はいくら頑張っても幸福の来ることのない戦いに身を投じているのだと思いました。

いくら頑張っても、誰も助ける事の出来ない戦い。

出来るのは悲しい思いをする人が少なくなるようにするだけの不幸の後始末…

起きた悲劇の犠牲者に終止符を討つだけ。

あの人の幸福はどこにあるのでしょうか…

### 第三話 夢物語り考察

「おかあさんっ!!」

朝早く日が昇るか昇らないかの時刻に桃子と士郎の間ですやすやと寝ていたはずの愛娘であるなのはが飛び起き桃子に抱きつく。

「どうしたのなのは？怖い夢でも見たの？」

桃子は眠りを妨げられたことをおくびにも出さずなのはをその腕に抱く

「ヒッグ…エッグ…」

桃子の腕の中でなのはは嗚咽を漏らしながら顔を桃子の胸に押しつけながら首を縦に振る。

「こわ…かったの…かなしかったの……」

桃子はなのはの頭を撫でながら母親の優しい笑みで話を聞く。

なのはは絞り出すように語る。夢の中で起きた出来事を…

### 第3話 夢物語り考察

そこで桃子は頬杖をつきならため息をつく

「ハア…どうしたものかな…」

「どうしたんだい？溜息何かついて」

そんな様子を見かねた士郎がカップを拭きながら問いかける

「ちよつとなのはの事でね…」

「あの見たっていう夢の事かい？」

「ええ…」

如何に子育てが大変だからといって夢それも正夢かもしれない荒唐無稽な夢で頭を抱える事になるとはさすがに思いもよらなかった。

「桃子、君はどう思う？夢物語りと思うかい？」

士郎の問いかけに桃子は若干眉間にしわを作る

「半々ってところかな？昨日の事を考えると難しいのよね…あなたはどうか？」

「本当に起きていた事だと思うな。僕は人づてでそういうのが居るって聞いたことがあるし常連さんに一人そっちの娘が居るよ。ほら、あのよく刀を持ってる娘」

桃子の脳裏に方言を使う常連の顔が浮かぶ

「ああ、あの娘ねえ〜ところで、なんで士郎さんがそんなこと知っ



ているの？」

「警察に知り合いが居てね…ちよくちよく協力してもらっているらしいんだ」

SPという仕事柄、士郎はそういう裏に一步踏み込んだところに情報網が存在する故に前例がある以上本当に起きたということは間違いないだろうと士郎は結論着けた。

「ふうん…」

「でも僕は最初になのはが見た夢の方が気になるな」

「????どういうこと士郎さん？」

士郎は話の主題である内容のなのはが悲しんで怖がっている事よりも最初の夢が気になるということに訳が分からず問い返す。

「桃子、いいかい？聞いた限り夢の彼は成仏できない霊を葬っているそう取れる。」

なのはの夢を見た限り善良な霊とは思いがたい、通常そういった類の霊は鎮魂という手法を持ちいり力づくというのは悪霊に対して行われる方法である。

「そうよね」

「じゃあ彼は何所から来たのかな？」

「!?!?!」

桃子は士郎の気にかかるということに気づく

「なのはによれば彼は突然あいた黒い穴から出てきた…これはどういうことなんだろう？」

「でも士郎さん、幽霊が居るんだったら瞬間移動とかそういうのかじゃないの？」

「じゃあ、何故彼は倒れるほど負担のかかる方法をとったのかな？」

士郎は戦闘者としての直感が違和感を感じ取る。

単なる移動にわざわざ多大な負荷を強いる移動方法をとるのは妙だ。普通に電車などの移動方で十分事足りるし仮に急いでいたとしても倒れては意味がない。

拭き終わったカップを並べほこりよけに布をかぶせ、桃子に向き直る

「ま、どちらにしても彼から一度話を聞かないといけないね…正直危険がないとは言いい切れないんだけど…君からみた限りにおいて心配はあまりなさそう？」

桃子は視線を上に見がせ前日にみた青年を思い出す。

「うーん、なんていうか錆びた抜き身の刀みたいな子だったなあ…美沙斗に雰囲気がちよっと似てるかも」

「美沙斗にか？」

「でも、切羽詰まった感じじゃないなあ」

「もしかしたらやるべき事が終わっているからなのかもね…」

「やるべきこと？」

復讐さ

私はまた夢を見ています。

登場人物はやはりあのお兄さんです。

お兄さんはまるで忍者のように公園の街頭や樹それに建物の屋根を飛び跳ねています。

そしてその手に持つ青白く光る錨のような形の弓で宙を舞う複数の何かを狙い光の矢を次々とまるで機関砲のように撃ち出していました。

しかし、宙に舞う何かは矢が届くよりも早く動きなかなか当たりません。

「ちょこまかと…！うつとおしい…！」

公園の樹のてっぺんに降り立ちお兄さんは忌々しげにつぶやきます。

そして宙を舞っていた何か…五体の生首がお兄さんの囲い旋回しながら言葉を口にします。

「かかかかっ…！！無駄だ！いい加減諦めてこの結界を解け！さ

すれば命だけは助けてやるぞ…」

「そうだ」

「その通り」

「ケケケケケ…」

「キキキキキ…」

「そんな気もないくせによく言う…さすが口だけだな！」

お兄さんは生首を眼だけで追いながら皮肉を言います。

「ほう…気付いたか！」

生首の一体、長い長い髪をなびかせたおばあさんの様な生首が応えます。

「貴様は我らの食糧となるのだ！」

まるで頭だけの達磨みたいなのが続きます。

「生憎と俺は食人趣向<sup>カニバリズム</sup>反対なのでな。遠慮させてもらつとするぞ！」

「減らず口を叩きよる…！」

堕ち武者の生首が言います。

「口は使っても減らないのでな存分に使わないと損であろう？」

皮肉を口にするお兄さんは右手の弓を握り占め、左手に新しい矢を作り出します。

「まあ、それもうじき聞けなくなるのだ、最後の言葉を選ぶがよい」

生首の内一体の言葉を聞きながらお兄さんは眼を閉じ賛同の言葉を口にします。

「確かに…な」

「ほう、やっと諦めよったか！」

だめ！諦めないで！！

私は夢の中なのに思わず叫んでしまいました。

だけど、ゆっくり眼を見開いたお兄さんは金色に変わった目で周囲を回り続ける生首達を見下すような眼差しで見つめていて

「勘違いするな…貴様らが聞くことのできる最後の言葉となるのだぞ！！」

初めっから諦めていませんでした。  
勝って当たり前、そんな自信で満ち溢れていました。

頑張つて！お兄ちゃん！！

私はそのお兄さんを応援しました。

### 第三話 夢物語り考察（後書き）

生首は飛頭蛮という妖怪です

## 第四話 負傷

### 第四話 負傷

「勘違いするな…貴様らが聞くことのできる最後の言葉となるのだぞ！！」

そついうなり亮は高く高く飛び上がる。

夜の空に浮かぶ月に人影を刻み上昇気流によってコートをはためかしながら眼の焦点をあえて外し総ての生首の軌道を追跡する。

遙か下方に居る生首達…飛頭蛮達に錨型の弓に構えた矢の切っ先を向ける。

「降り注げ星光…」

言葉とともに矢の先端に五芒星が青白い光の線で描かれ展開する。

アストラル レイン  
星海の泪滴っ！！！

矢が放たれ、五芒星を潜り抜けると同時に無数に分裂しその名の如く、星の雨として浄化の雨としてすり注ぎ地面を穿つ

大量の砂塵が舞い上がり生首達の姿を隠す。

フォミクリー  
「複製」

なにもないはずの空中に幾つもの黄金のラインが奔り輪郭を形成し骨組をい作り上げ、そこに極彩色の何か亮の魔力と魔術により素粒子レベルにまで分解された空気の構成成分が再構成され組み合わせられ肉となってその輪郭に存在を与える。

矢を放ち空となった左手でその三つのまるで十字架の様な紅い柄を指と指の間で掴み保持する。

エンチャント  
「魔術付加！火葬式典っ！！」

紅い柄に魔力が流し込まれ魔術式を刻みこまれた直刃の刀身を構成させる。

「まずは一つっ！！」

ありえない力の流れを見通す眼を持って砂塵の中に隠れた怪異に投げつける

“ヒュンっ！！”

鉄甲作用を付加された三つの黒鍵は空気を引き裂きながら猛スピードで爆煙に潜り込み

「ぎゃー！！……」

嫌な悲鳴が火葬式典が怪異を仕留めたことを告げる。

「おのれええええ！！よくも夫をおおおっおおおっ！！！！！！」



爆煙の中から老婆の生首がその長い髪と煙の尾を引きながら飛び出し亮に迫りくる。

「貴様も後を追え！！！」

亮はまっすぐと向かってくる生首に生み出した矢を構え弦を引き絞る。

「拙者達を忘れるでない！！」

さらに三体のい飛頭蛭が飛び出してくる、そちらに気を一瞬取られる。

「なにをばさつとしておるのじゃ！！」

「！！しまった！！」

老婆の生首の突進が迫る、弓で迎撃しようにも近づかれすぎた。老婆の生首の外見こそ普通の人間とそん色ない姿ではあるがその強靱な顎は一口で人間の頭部を噛みちぎり、引き抜くほどの力がある。

「くっ！」

空中で手足を連動してふりその反動による重心移動で空中でありながら回避する。

しかし

“バシュ！！！”

「かかった！油断したな人間！！」

通り過ぎた頭部から伸びた髪が首に巻きつき、亮の首を絞め体を釣り上げる。

まさしく釣り師に釣り上げられた魚の如く、亮の体は夜の空に釣り下げられる。

「ぐ、ぐううう……」

懸垂の要領で左腕で髪を引っ張り首にかかる力をなくそうとするが髪はまるでそれ自体が別個の生物のように蠢き首を絞め、さらにその先端が伸び左腕をも縛る。

「けけけけ……」

「飯だ！飯！！」

「馳走だ！！馳走！！」

さらに他の三体の飛頭蛭が亮の手足に喰らいつく。

「ぐっ！！」

亮は、歯が皮膚を突き破り、肉を抉ろうとする痛みに耐える！！

「さて、わしもいただとするか！！」

亮を釣り上げていた老婆の飛頭蛭が口をありえないほど先広げ、亮の頭を狙い急接近してくる。

上下の歯には唾液が糸を引いており見るモノの恐怖と嫌悪を掻き立てる。

絶対絶命…そんな状況下で亮は



「熱い」

「熱いイイイイイイ…」

蒼い炎が内側から吹き出し、炎に包まれる。

「焼滅しろっ！！！」

さらに大きな蒼い炎が亮の全身から吹き出し、生首達を飲み込見ながら大きな炎の塊となって落下していく。

“ダアアアアンっ！！！”

それは公園に大きなクレーターを作り上げ、大量の土砂を舞いあげる。

そして、その中で立ち上がる一つの人影…

“ヒュウウウン！！”

どこからともなく風が吹き砂のカーテンを何処かに吹き飛ばす。

“ポタ…ポタ…”

そこには血を流し、地面に真っ赤な水たまりを作りながらも立つ亮と

ほとんど原型のなくなった蒼い炎の塊が4つ転がっていた。

「真逆…真逆…貴様…朱雀の…」

一番大きな炎の塊はしわがれた老婆の声を発するもも最後まで言い切ることなく崩れてしまった。

「雑魚に…手間をとって…しまったな…」

右手と両足から血を滴らせ、破れた衣服からは見るも痛々しい肉の断面が見えさらに全身に重度の火傷を負っていた。

「だが、今やっておかないと後々やっかいな事になるな…」

亮は手足を引きづり、血の目印をつけながら公園の中の林の中を歩いていく…

そして

「見つけた…複製」  
フォミクリー

亮の左手に黄金のラインが奔り輪郭を作り出し、黒鍵のときと同じように周囲の物質を分解・再構成しそれが作られる。

儀式用短剣のアゾット剣が

亮はそれを振り上げ

「フンっ！！」

地面に突き刺す、そしてアゾット剣を通して龍脈の起点と自身の魔術回路を一時的につなげる。

「ナンバリング全24…五番停止、十三と接続…再起動…四番停止…八番と一五番を統合……………」

亮は、龍脈を操作し流れを徐々に整えていく…

「…………二五番形成・二三番と接続…………調律完了……………」

龍脈の操作がおわり、それを示すかのように地面にアゾット剣がひとりでに徐々に沈んでいきやがて見えなくなる。  
地脈が正常に機能し始めたせいか周囲の空気が、徐々に澄んだモノへと変わっていくのを肌で感じ…

“ボタン…”

意識を手放し地に伏せる亮、そしてそこには紅い池が徐々に広がっていった…

「おとうさんっ！！！！」

朝早く、美由紀・恭也と共に朝の鍛錬に出かけるべく準備していた士郎になのはが寝巻きのまま詰め寄っていく。

「どうしたんだ？なのは？」

「おねがいなの！！おねがいなの！！！！」

なのは慌てぶりは尋常ではなく、美由紀・恭也もどうしたもの何だと気を張る。

「ねえ、なのはどうしたの？」

「なのは、まずは落ち着け！何のことかさっぱりだ」

しかしなのはの耳にそれは届かないが、なのはは内容を口にする。

「あの兄ちゃんがコウエンで大ケガしてタイヘンなの！！しんじやうかもしれないの！！」

なのはの話の内容に顔をしかめる恭也と美由紀

「たしかそれってあの夢に出てくるお兄さん？」

「そうなの！！」

「馬鹿馬鹿しい、所詮は夢だ、現実には在るわけがない」

「ちがうの！！ホントウなの！！！！」

恭也はため息をつきながら在るわけがないと断じ、なのははそれに對してもう抗議する。

その様子を見ていた士郎はやがて口を開く

「美由紀・恭也まずは公園に寄ってみるぞ」

「おとうさん！！ありがとうなの！！」

士郎の発現に見違えたように喜ぶなのは

「父さん…所詮は夢の話だぞ」

「でも本当だった場合大変だぞ？」

「しかし…」

「なに、公園による程度どうってことないだろう？」

「まあ、確かに…」

文句をいう恭也を説き伏せる士郎、士郎自身おそらく本当の事であり大ケガをしているならば話をするには絶好の機会だと思つての打算と娘を思つての半々の行動では在るのだが、なのはが居る手前そんな事は口にも顔にも出さない。

「そうと決まつたらすぐ行くぞ！！時間がないからな！！」

「父さん…これは…」

「どうやら、本当の事だったみたいだな…」

「信じられない…」



## 第五話 恩義

“ホーホー”

夜遅く誰もが寝静まった時間帯の森の中で森の住人たる取りの鳴き声が響く

“ガサっ！ガサっ！！”

獣：いや幾つかの人影が蠢く

「いいか…目標は不破の生き残りとその関係者5人だ…」

リーダー各らしき防弾ジャケットを羽織った男が口を開きながら小道具入れから五枚の写真を引き出す。

それは、士郎・美由紀・恭也・桃子・なのはの高町家の皆である。

「男は殺せ、身体の一部を入手出来たらそれで構わない。女は生きのまま捕らえる。」

組織の構成員を作る道具になってもらう。」

リーダー各の男の言葉で残りのメンバーは暗視ゴーグルで顔が隠れてはいるが口もとに下皮た笑みを浮かべる。

「隊長、俺らが味見してもいいですかい？」

メンバーの一人がリーダー各の男に問いかける。  
それをつけて隊長各の男も下種な笑みを浮かべる。

「ああ、いいぞ…ただしほどほどにな？ 壊れてはせつかくの将来

有望な構成員が生まれなくなってしまう。」

“ 違いない ” と皆、嫌な笑みで応える。

「おい、お前は三人の中でどいつが一番よ？俺はやっぱりあの桃子とかいう女だな、旦那の眼の前で犯してやったらおもしろいと思わないか？」

メンバーの一人が隣のメンバーに話しかける内容は良心があれば憤慨する内容である…のだが

「……………」

話しかけられたメンバーは沈黙を保ったまま応えない。

「なんだよシカトかよ！ノリの悪い奴だな。」

無視されたと思ったのか男は憤慨する。

「……………」

それでも沈黙を保ったままの男にいらつき話しかけた男の堪忍袋の緒が切れる。

何とも短い堪忍袋である。

「おい！無視してんじゃ…な、なんだこりゃあああ！！！」

沈黙を保つ男の肩を乱暴に掴んだ男が悲鳴をあげる。  
その手に伝わる冷たさと質感に…

「どうした？大声を出すんじゃない？…な？！…！」

男の悲鳴に気付きリーダー格の男がそれを見て驚愕のあまり息をのむ。

「い、石になっていやがる？！」

沈黙を保っていた男は応える事が出来なかったのだ。  
背中に紅い極端に短い柄の剣が突き刺さり物言わぬ石像と化していたからだ。

“ヒュン！！ヒュン！！ヒュン！！ヒュン！！”

次々と男に突き刺さっていた剣、黒鍵が大量に残りの男たちに降り注いだ。

## 第五話 恩義

高町家の客室、和風の装いが為されたそこに蒲団が敷かれ一人の青年がまるでミイラ男のように全身に軟膏を塗られたうえで包帯を巻かれ、家庭用の点滴を打たれながら眠りについて居た。

「はやくおきないかな？なの！」

そんな亮を横で見つめ続ける少女がいた。

「父さん！！」

「何だ？恭也？」

居間でコーヒーをすすりながら新聞を読む士郎に恭也が切羽詰まった様子で話しかける。

「なんだじゃない！！なんであんな怪しい奴を家に上げたんだ！！」

「彼からは聞かなければならない事があるからだよ」

「危険すぎる！！」

恭也の疑念はもつともだった。二人それに美由紀は龍という犯罪組織に生家を滅ぼされているのだから。

美由紀に限って言えば二人の旧姓である不破と姻戚関係であり同じく滅ぼされた御神の党首の一人娘である。

その危険度は計り知れない。

そんな状況下で見ず知らずの怪しい重症の人間を家に上げたのだ下手をすれば相手に自分たちが生きている事がしれ再び命を狙われる危険性がある。

そうなれば当然、桃子となのはもその血みどろの戦いに巻き込まれる。

そついう意味で高町家は非常に危ういバランスの上で成り立っている平穩を享受しているのだ。

「だからだよ」

「どういう

「いま、彼の命は僕たちが握っている。彼の点滴チューブを引き抜

くだけでかれは感染症を起こして死ぬ、仮にそれがなくても満身創痍で僕たちに勝てるとは思えない。」

士郎は亮の命綱握っているのは自分たちであり、怪しい動きを起こせば即座に殺すと言外に言っていた。

「た、確かに…じゃあ聞きたいことってなんだよ」

士郎はコーヒーと新聞をテーブルに置き恭也に向き直る。

「いま、この町でよくない事が起きている。彼はその中心、もしくは近いところに居る。」

「だったら僕たちは知る必要がある。守るために…！」

「よくないこと？」

恭也の問い返しに士郎はうなずく。

「恭也、彼の手足の傷…あれをどう見る？」

「うん？歯型が在ったから何かに噛み千切られたとかじゃないのか？」

「そうだ、あれは何かに噛み千切られた傷跡だ…人間にな…」

「…！！そんな！ありえない！！人間にそんな事は出来ない！！」

人間の顎は強靱な力を発揮することはできるが人間の顎自体が耐える事が出来ないが故にそんな芸当はできない。

「でも現に彼は傷を負っている。ありえない何かと戦ったんだよ」

「そんなことに首を突っ込まなければ無関係で居られるだろ…！」

恭也の物言いに士郎は首を左右に振る

「多分、もう無理だよ。恭也よく思い出すんだ彼を最初に見つけたのは誰だい？」

「？俺達じゃ…」

「ちがうだろ？」

士郎の否定で、一瞬混乱するもすぐに関連性に気付く

「まさか…」

「そうだ、なのはだよ。あんな傷を負うような凄惨な戦いをなのは彼がこの町に来てからずっと見ているんだ。あんな年端もいかないう小さな子供が…」

士郎にとって亮はまさしく厄病神に等しい存在だが、娘の性格：

心優しい愛娘が戦いを見続ける事で心を痛めるのが我慢ならなかったのだ。

それといつ巻き込まれるかわからない危険を放置しておく方がよっぽど危険だと考え、断腸の思いで亮を治療したのだ。

「でも…俺たちが気を付けていればなのはが巻き込まれることもないはずだ。」

「恭也…俺たちは軀を守るだけではいけないんだ。何より心を守らないといけない。」

なのはが生まれてから変わっていた一人称が僕から俺へと変わっている。

「出来るだけ、このよくない状態を早く終わらすことがなのは為なんだよ……」

「なのは……どう彼は？」

「おねえちゃん……！」

客間の襖が開かれ、眼鏡をかけた少女が顔を出す。

「ねむねむのままなの！」

「まあ、大ケガだったからねえ……、そう簡単には起きないと思うな……」

「そうなの……」

美由紀から聞いた事実になのはしょんぼりとしてしまう。心なしかツインテールもうなだれて見える。

「ねえ、なのはお昼からこの人の洋服買いに行くんだけど一緒にいく？」

亮の服はスタスタのぼろぼろでとても着れたものではなくなっている。

「う……んと……」

自分としては起きる瞬間を見ておきたいのだが、買い物にも行きたくない気持ちとがぶつかり合う。

「多分この人しばらく下手したら明日か明後日まで起きないと思うな……」

「じゃあいくの……！」

「うん わかったよ」

美由紀のお墨付きで外出することが決定した。

「行ってくるねえ〜」

「いつてきますなの〜」

姉妹仲良く手をつなぎ出かける二人、

「気をつけて行ってくるんだぞ！」

「何かあったらすぐに戻るんだぞ！」

それを見送る男親子、ちなみに桃子は翠屋の方に居るためこっちはいない。

二人は、亮という爆弾にも等しいものが居るため家を離れないのだ。

「わかってるよ、二人とも心配性なんだから」

「なの〜〜〜」

なのはと美由紀が反しそれに続くなのはが何ともかわいらしい

「じゃあ、何所から周ろうかな？」

「インなの!!」

「わかった、じゃあ行こっか？」

「なの!!」



残夏の日差しが照りつける中、仲良く歩く美由紀となのは

「……………」

そしてその横を奇妙なことにつま先立ちで歩く男が居た。

男はいましがた通り過ぎたなのはと美由紀を振り返りながら呟く

「うまそうながきだな…そんなでもって一緒に居やがるのは…クッククク…おもしろいことになりそうだな…」

男は紅い瞳をギラギラと輝かせながら呟いていた。

その夜…

なんとなく目が覚めた、なのはは無性に亮の事が気になり、川の字に寝ていた両親の間から抜け出し、寝巻きの裾を引きずりながら客間に向かい、扉を開ける。

すると、突然自分の名が呼ばれた。

「たしか…なのはちゃん…だったかな？」

上半身を包帯でぐるぐる巻きにした亮が窓から月を見上げていたがやがて向き直り、月光を浴びながらなのはを見つめる。

まるで、御伽話のよふな光景、だと感じながらなのはもまた亮を見つめていた。

「うん、そうなの…えっとたしか…おにいちゃんのおなまえは…  
…あれ？」

にや？にや？と猫みたいな声を挙げながら混乱するなのはが無性におかしく

「くくくくくく…」

亮は必死にこみ上げる笑いを押し殺そうと頑張っていた。

「むう…わらっちゃだめなの!!」

なのはは笑われたことがお気に召さなかったのか頬を膨らませて亮に抗議し、亮は苦笑を浮かべながら謝罪を述べる。

「すまないね…」

“ シュルシュル…”

亮は顔の包帯を解き素顔をなのはにさらす。

火傷の醜いはずの傷は何所にも見当たらない素顔が顕わになり、そのブラウンの双眸がなのはを見つめる。

「改めて名乗ろう…俺の名は亮…東雲 亮だ」  
「りよう…おにいちゃん？」

首をコテンとかしげながらなのはは反復する。

「君たちには借りが出来たな…その礼とは行かないが君たちに迫る悪意を排除しよう…」

「どうということなの？」

ふと苦笑を亮は浮かべる。

「何、気にしないでくれ…君はただ母親の温もりでまどろんでいればいいよ…」

「にゃ?????」

訳が分からないと大量の?を頭上に浮かべるのは、そんな様子に亮は肩をすくめる。

「つまり、また明日…ということさ、夜も遅いお休み…なのはちゃん」

亮はそういうと窓に、向き直り飛び出した。

「にゅあああ!!!ここ2カイなの!リョウおにいちゃん!!!」

なのはは亮の突然の行動に思わず叫び窓にかじりつく。

しかし、転落しスプラッターになっている亮も落ちそうになっている亮も見当らなかった。

「にゃ?????」

やっぱり?を大量に浮かべたのはがそこには残されていた。

高町家近く森、その中の一つの樹の枝に亮は降り立つ  
不思議なことにその枝は揺れず、音もたたない

そして亮は右手を突き出し呪文を口にする。

「コンタミネーションアウト  
混合・解除！！」

右手に白桜が現れる。

「起きるんだ…かずさ月砂」

白桜が光に包まれ亮の手を離れ、足元に移動しみるみる内に小さい  
球体へと変化する。

「クウ〜〜ん？（呼んだ？）」

光の球から一匹の白狐が姿を現し鳴き声上げる。  
ただし、前足で脛を器用に擦りながらだが…

「ああ、無粋な連中がいる。偵察をおねがい出来るかい？」

「コン（わかった）

コン（でも眠いの〜〜）」

了承の意を示すが文句を口にする。

「後でゆっくり寝てくれ…どうせ雑魚だ直ぐに終わる…」

「クラン（そだね）…コンっ！（じゃ行ってくる！）」

そう言い残して白狐は夜の闇に消えていった…

「いいか…目標は不破の生き残りとその関係者5人だ…」

リーダー各らしき防弾ジャケットを羽織った男が口を開きながら小道具入れから五枚の写真を引き出す。

それは、士郎・美由紀・恭也・桃子・なのはの高町家の皆である。

「男は殺せ、身体の一部を入手出来たらそれで構わない。女は生きのまま捕らえろ。」

組織の構成員を作る道具になってもらう。」

白狐、月砂と視覚および聴覚を共有している亮はため息をつく、  
だが込められているのは救いようがないというあきれと怒りと憎悪  
である…

高町家に向けられていた悪意の発生源みつけそこで月砂が見聞きしたことが亮の逆鱗に触れる内容だったからだ。

「どこにでもいるのだな…ゴミは…」

脳裏に蘇るのは両親と一族の皆を殺し、亮に殺された魔術師たち…

亮はそのブラウンの双眸に殺意をたぎらせる。

「コンタミネーションアウト  
混合・解除

破邪剣醒」

亮の呪文と共に左腕に蒼い刀身の日本刀、禍風が現れすぐさま青白い光に包まれる。

「リゾナンス 霊弓…乙姫!!」

青白い光から、飛頭蛮を相手にしていた時と同じ弓が現れる。

「そう…だな…ただ燃やして終わり…というのはいささかつまらんな」

なにやら物騒な言葉呟きつつ亮は弓を右手に持ち変えつつ少々危ない思考を巡らす。

「フォミクリー  
…よし！複製」

空いている左手に一本、黒鍵が柄だけで生成される。

「エンチャント  
魔術付加っ！！土葬式典！！」

飛頭蛮の時とは違う術式が刻まれた刀身が魔力によって構成され、それが弓に携えられる。

「貴様ら下種に掛ける慈悲は持ち合わせていないのでな…無限の恐怖の内に葬って遣ろう」

ギチギチと音を立てつつ弦を引き絞りながら亮は遙か彼方…約600mほど離れた場所の男を無数に乱立する木々の間から狙う。

「最初の貴様は運がよかったな……!!……逝けっ!!」

“パシっ!!”

“ヒュウウウツウウツウ……”

矢として剣が放たれ、夜の殺戮劇が開幕する

第五話 恩義（後書き）

火葬式典・燃やす

土葬式典・石化

風葬式典・風化

水葬式典・腐敗（溶ける）

鳥葬式典・鳥に集られる



## 第6話 無慈悲

“ズタタタタタタ!!”

高町家を狙っていた男たち、龍の末端の構成員たちは突如として剣の雨に襲われる。

「ぎゃ!」

「ぎえぺら!!」

「ガッ!!」

そして幾人かの男たちが剣の雨粒である黒鍵に刺し貫かれる。

黒鍵自体は投合用の武装であるため、かく乱と牽制のために無作為に放たれたということもあり急所が外れ一撃必殺とはいかないが

「あ、ああああ…か、乾く…身体があ、乾く…」

「う、うわああああ!! 軀が石になるうううっ!!」

「熱いつ!!! 熱いイイイイイっ!!!」

黒鍵が突き刺さった男たちに変化が現れ始める。

ある男は、みるみる内に干からびていき、また在る男は刺し貫かれたところから徐々に石化していき、またある男は身体が腐り・溶解しまるで何処かの御伽話の巨神兵のように溶け崩れていく

「た、助けてくれ……」

「だ、誰か…」

「うう…うああああうあ…」

救いの手を求めて手を仲間たちに向けるが、その仲間たちに彼らは化物としか映っていないかった。

「く、来るなあッあああ！！！！」

「ば、化物おおおおっ！！！！」

「う、うわあああああっ！！！！」

伸ばす手が払いのけられる。

「そ、そんな……」

ある者はミイラ化していたためその衝撃によって崩れ灰となり、石化仕掛けていた腕は砕け、さらに腐りかけていた腕は“ボトン……”と嫌な音を立てて落下し、肉であった腐汁が地面に模様を描き白い骨を残して地面にしみ込んでいった……

「うっわあああああ……」

「逃げる！！逃げるんだっ！！！！」

「落ち着けっ！！今下手に動けば……」

急激に降り注いだ剣の雨、それに貫かれたものの末路……それによってメンバーは隊長格を除き恐慌状態に陥り我先にと仲間を押しつけ、踏み越え自分だけ逃げようとするが……

逃がしはせんよ

“ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン”

森のどこからか声が反響し同時に再び剣が降り注ぎ

「ぎゃえっ！！！！！！」

先頭の男を先程よりも長い刀身の黒鍵が脳天から股までを貫通しながら地面に突き刺さり、その左右にまるで檻のように次々と円を描きながら突き刺さり包囲し逃げ道を塞いだ。さらに黒鍵に串刺しにされた男の死体は燃え上がり、得体のしれない恐怖にメンバーは支配され誰も黒鍵に近づこうとはしなくなる。

「くっ！！何者だ出てこいっ！！」

リーダー格の男が夜の森の暗闇に向かって叫ぶ。

暗視ゴーグルにも映らない得体のしれない“何か達”と思われる何かに向かって。

上を見るんだなっ！！！！

男たちの頭上から声が聞こえ見上げる面々、そこにはさらに夜空の星を背に大量の黒鍵と共に上半身を包帯で覆った青年 東雲 亮が居た

なのはが布団から抜け出した事により士郎は眼が覚めており、同時に家に向けられる不快な気配に気が付き打って出ようとすぐさま準備を整え、愛刀を手に森へと駆ける。

そしてそこに居た男たちの会話を聞き憤慨しつつも息を殺し隙を窺い、一気に敵を総て撃ち倒す機会をうかがっていた。

本部から派遣された暗殺者だとすればあまりに練度が低すぎたからだ。

不破を軽く見ていたならテロをわざわざ起こしてまで滅ぼした意味はない。

つまり、どこからか情報が漏れたが末端の構成員どまりで本部まで伝わっていないと考える士郎は考える。

しかし、一人として逃してはいけないのだ。

一人でも逃げ切れてしまえばそこから本部に伝わりあらゆる手を使っても消されるか先程の下種が言うことが現実となってしまう。

つまり…チャンスは一度のみの後のない状態なのだ…いや、今の状態でも十分幸運ととれるほどの状況なのだ末端どまりの今の状況は

「おい、お前は三人の中でどいつが一番よ？俺はやっぱりあの桃子とかいう女だな、旦那の眼の前で犯してやったらおもしろいと思わないか？」

「……」

襲撃者の一人セリフが士郎の耳に届き、士郎の心が冷え憎悪と怒り

に支配される。

貴様の如き、虫けらが

何かが切れてしまった土郎は刃を引き抜き、狩りの用意を始め終えたその時起きた…

一族が長い永い時を掛けて鍛え続けた肉体、それは近親交配をも重ねる事で人間でありながら人間を超える領域に達した超人の一族がさらに鍛える事で到達できる一つの頂、そこまでの鍛錬をもつてしてもかろうじて聞きとれるほどの風きり音…その発生源がメンバーの背を貫いたのだ。

さらに追い打ち、そこから起きる不可解な現象で恐怖が引き起こされ、逃げ場を奪われ完全に恐怖に支配された襲撃者、そしてそれを駆るべく夜空から舞い降りる死神の姿を土郎は見るのだった。

「う、撃てっ！！」

腐つても戦闘者なのかリーダー格の男の声に従い襲撃者の面々は恐怖に支配されながらも空中の亮に向かい即座に脇のホルスターから銃を引き抜きその銃口を亮に向け殺意の引き金を引く。

幾つもの銃口から鉛玉がマズルフラッシュと共に吐き出され、空中の亮に一斉に迫る。

“チャキッ！！”

周囲に浮かんでいた黒鍵のうち最も近い黒鍵を握り振るう。

“キンキンキンキンキンキンキンキンキンキンッ！！”

腕がぶれて見えなくなるほどの速さで刃が振るわれ、弾丸が切り落とされた。

亮は襲撃者の面々の中央に降り立ち、地面を踏み碎き近ういた襲撃者のい胸に右手の黒鍵を突き刺し刹那の間にその柄に掌底を入れる。寸差で周囲に黒鍵が無数に降りそそぎ何人かの襲撃者を串刺しにし絶命させる。

“バアアアアアッ！！……ドンッ！！”

男はまるで、大砲に撃ちだされた槍を受けたかのように吹っ飛び、樹に礫にされ絶命する。

さらに

“ヒュンッ！！”

空気が切れた音がしたと共に、一人の男の首から先が消し飛びその奥の樹に生首が礫にされる。

首を喪った胴体から血の噴水が噴き出し、黒鍵を投合した後の亮の包帯を赤く染め周囲に

真っ二つになった弾頭がカランカランと音を立てながら地面に落ちる。

「この野郎っ！！！」

一人の男が亮に拳銃を向け引き金を引こうとする

「銃の有効射程をよく考えろ……」

いつの間にかその男の懐に入り込んだ亮が男の拳銃を持っている右腕の手首を掴み、内に曲げる。

既に条件反射によって引き金を引くことが止められなくなった男は息をのみながら

“バアアアンっ！！”

自身の得物と腕によってその脳髓を吹き飛ばす。

「フンっ！！！」

リーダー格を除いた最後の一人がアーミーナイフで刺突を行う。

「間抜けめっ！！！」

「あ……」

“ブシャアアアアッ！！”

亮は地面に無数に乱立している黒鍵を引き抜き、その腕を切り飛ばす。

「これが剣道三倍段という奴だっ！！！」

“ヒュンっ！！！”

亮の姿がまるで塵気楼のようにかき消える。

「よく覚えておけ……」

一陣の風が奔り森の木々から木の葉を落とし、その中に赤く染まった亮の姿が現れる。

つと同時に最後の下っ端の男は十七の肉片に解体され、その部品が地面に散らかったのちに紅い模様を描く。

それをしり目に見ながら最後まで“残しておいた”リーダー格の男へと視線を向けると、無様に逃げ去ろうとしていた男の姿が目に入る。

「在り方が醜いならばそれ以上の醜態をさらすな下郎がつ！」

空いていた方の手に一番近い黒鍵を握り地面から引き抜き、特殊なひねりを加え縦回転を加えて投合する。

”シュパンっ！！”

まるでシュレッダーのように回転しながら二つの黒鍵が男の手足を切断し、

“ドサアアアアっ！！！！”

「グガっ！！」

男の胴体が地面に墜落し受け取るべき手がない男は地面とキスをする。



ザッザッザッザッ…

男に地面を踏みしめる音が近づき、  
男の頭部装備を剥ぎ、その頭部の髪を驚？みにして持ち上げる。  
地面のみしか見る事の出来ない男の眼に亮の顔が映る。

「き、貴様は一体…何物だ？」

「ただの迷子だよ…さて貴様には聞きたいことがある」

「だ、だ、誰がいつか…」

意地をはってはいるが男の顔には明らかに恐怖が浮かんでいた。  
うまくいけば昇進、組織の中でもそこそこの地位を築けるかもしれない絶好の機会。

それを自分一人の手柄にするはずだったのが亮の介入によって水泡に帰してしまい自分の命も風前のともしびであることを男は理解しており、せめてもの抵抗にと小さな抵抗を試みる男。

「ああ、別に言わなくていい…見るだけだから…【俺の眼を見る】

」

無理やりあわされた視線の先の亮の瞳が金色に変わり、瞳孔が縦に人間のそれとは似ても似つかないモノへ変貌する。

「あ、ああ…ああ…」

男の顔がみるみる内に蒼白になり脂汗が瀧のように流れ出る。  
亮は男の網膜を通してさらにその先にある眼球が直接つながっているモノに保存されたモノを見る。



## 第七話 清瀧権現

とある廃墟の一室、そこには明らかに急ぎよ用意されたものである。うすステンレステーブルが備えられ、幾つかかけた電光灯がそこに向かいあつて座る二人の男を照らし出していた。

「その情報…本物なんだろうな？」

「おいおい、俺の情報が信じられないのか？」

心外だ！とでも言わんばかりに紅い目の男が肩をすくめ、それをじつと見つめる男

「仮に本当だとして…あの御神と不破だぞ？俺たちが勝てるわけがない」

「いや、今ならまだアンタたちが有利だ。考えてみるよ御神と不破の血を引くものは5人中4人、で内3人がガキしかも一人はまだ幼稚園児だぞ？」

つまり実質闘えるのは高町士郎一人だけだ。誰か…このなのはとかいうガキを人質にでもとれば…」

「チェツクメイト…という訳か…」

「ククク…そういうことだ」

紅い目の男の巧みな言葉に意識が誘導されていく男、

「…でどうするこの情報買うかい？」

「ああ、買つとするよいい情報ありがとう…料金はいつもの口座でいいか？」

「ああ、毎度あり…」

紅い目の男はポケットからUSBメモリーを手渡す、そのなかには何所から引き出したのか高町家の詳細なデータが収められていた。

「ああと、ちょっと待ってくれ」

それを受け取ろうとする男しかし、紅い目の男はメモリーが男の手に渡ろうかという瞬間に引っ込め持っていない方の手で静止を訴えかける。

「なんだ？」

紅い目の男の静止に怪訝な顔をする男、目の前でお菓子を取り上げられた子供の様な不機嫌さがその表情からうかがえる。

「料金は半分でいいから、このなのはとかいうガキを持って来てはくれないか？」

「それまたなんでだ？」

予想外の要求に片方の眉を上げる

「何、これほどの上玉ならいくらでも使い道はあるだろ？それにこれほどの上物は久々でね俺も喰ってみたいのだよ」

「ふ、ほどほどにな…」

男の個人的欲求だと理解すると男は歪な笑みを浮かべ納得する。あくまで男に必要なのは御神と不破の生き残りを見つけ出し処分したという実績なのだから自分には関係がなく作戦の際のおまけで高額な情報料が半額になるという誘いなのだから男にとっても良いものであった。

こいつか

## 第七話 清瀧権現

「やれやれ、面倒に巻き込まれた様だな…しかし、放置というのはいささか気分が悪いな」

男の髪を掴みその眼球を覗き込んでいた亮の瞳が元のブラウンに戻る。

幼きころ自身の両親を殺された記憶・さらに自分を実験材料とするための外道による犯行、細かいところが違うが在る意味で今のなのはとの境遇がかぶっていると思えた亮はなのはに親近感を覚える。

「かつ…！…かはっ…！」

男がまるで止まっていた呼吸を再開したかの様にえづく

「貴様…俺に…何を、した？」

達磨になった男は絞り出すように息絶え絶えになりながら言う。

そんな男に亮は口元を歪めながらいう。

「さあ？なんだろうな？まあどちらにしても貴様はもう用済みだ、俺にとっても飼い主にとってもな」

「それはどういう

「じゃあな」

“ずしゃっ！！”

男の胸に黒鍵が突き刺さり、その背から血に濡れた刀身がつきでる。

「あ、あが…」

「塵も残さず燃え尽きろ…」

刀身に刻み込まれた魔術術式が発動し突き刺した男の体を炎上させる。

やがて男の肉体は崩れ、幾つかの塊となって地面に転がりながら燃焼し続けていた…

「さて、後始末をしなくてはいかな…」

辺りを見回しながら亮は言う、辺り一帯が一種の猟奇殺人現場と化しているのだからそれも仕方がない。

警察も大変忙しく働かされる上に上司にもマスコミにもいびられる

だろう。

（まあ、それも面白そうではあるが面倒だ）

結構ドSな思考の亮である。

フォミクリー  
複製 -

亮の腕に起動キーとともにアゾット剣が生成され、それを地面に亮は深々と突き刺す。

清瀧権現

アゾット剣を通して、周囲一帯に混血…その中でも特殊な存在である自身の力を流し込む。

言ってみればアゾット剣は水道の蛇口に該当し、魔で在りながら聖の存在である亮の力が地面に浸透していく。

その影響か地面と森の木々が青白く発光していく、さらに、あちらこちらの地面や樹に突き刺さった黒鍵達と襲撃者たちの死体も発光していき、輪郭が捕らえれなくなると少しづつ蒼い光りの粒が乖離し徐々に小さくなっていく。

うつすらと蒼く光る地面と森の木々、それに魂が生前の罪や呪いなどから解き放たれ昇天していくような無数の蛍が舞うような光景はとても、とても幻想的であった。

「さて、そろそろ出てきたらどうだ？」

光が消え、辺りが再び闇に支配された時亮は森の奥に向かって問いかける。

「…いつから気付いていた？」

「最初からだか？」

森の奥、亮の視線の先から現れたのは高町士郎

士郎は亮をその鋭い戦闘者としての眼光で亮を射抜く

「なかなかの圧力だ、<sup>ブレスチャー</sup>まるで七夜の小僧と相対した時を思い出す。」

短刀を逆手に構える蒼い瞳の殺人貴が亮の脳裏に浮かび上がる。

「七夜？」

士郎は疑問の声を挙げる。亮にとってなじみ深いものでも士郎にとつては見たことも聞いたこともない言葉だからである。

「殺すことのみを極め続けた結果、切り捨てられ滅んだ哀れな一族さ  
最も俺は、あいつよりあんたの方が好ましいとを感じるがな」

在り方がいくら似ていようと目指すモノは全く別、ただ殺すことを目的に研鑽を積み続けた七夜、守るため研鑽し続けた御神

方向性は全く違うが在り方はよく似ている、  
ふつつは“皮肉なことに”で終わるが、まるで行きすぎた科学と魔法の結果を戦闘に置換して見えているようだ。



「まあいいで、なんで俺を手当てした？」

「君に聞きたいことが在った…それと……」

士郎が苦虫を百匹ほど噛み潰したような苦い顔をして言葉に詰まる。

「それと？」

「……………なのはが望んだからだ」

かなりの時を要して士郎は絞り出すように言う。

「そうか、では戻っていいかな？」

「何所へ行く？」

亮は背を向け歩き出す。それを士郎が後ろから問いかける。

「もちろんあなたの家だ。聞きたい事が在るのだろう？…それにこの格好はいささか寒い上に問題がありすぎる」

現在の亮の恰好は血に濡れて真っ赤になった包帯で上半身を覆っている状態、職質どころかいきなり逮捕されても文句言えない格好だ。

「確かにね……」

逃げられると警戒していた士郎だが亮の言葉に他にどう言っているのか分らなかった。

## 第八話

## F i r s t   O H A N A S I

にやあああああああああああああああつ!!!  
「!!!!!!」

夜遅く高町家を震撼させる悲鳴が鳴り響く。

「どうしたっ!!!!なのは!!!!」

「どうしたの?!なのは?!」

「夜遅いから静かにしなさい」

音の発生源である玄関に集合する高町家の面々…

「なにをしてたんだ父さん!!!!」

「あらあら土郎さん…重傷の子に何をしたのかしら…?」

「くらあ……」

「ちな!!!!まっかなの!!!!いたいいたいなの!!!!」

桃子と恭也の視線は土郎の横に居る人物…血まみれの亮へ釘づけとなり、美由紀は大量の血を見て眼をぐるぐる渦巻き状に廻しながら倒れる。

なのははパニックに陥り、慌てふためく。

「えっと…その…なんて説明しようかな?……手伝ってくれるとありがたいんだが…」

土郎は亮に顔を引き攣らせ脂汗をだらだら流しながら救いの手を求め視線を向ける。

そこには、わざとらしく腹を押さえ壁にもたれながら息を荒くしていた亮の姿が在った。

「くっ…聞きたいことが在るからと…重傷者を外に引つ張り出した揚句に容赦なく技を叩き込むとは鬼畜の所業だな…」

「貴様が鬼畜だっ！…！」

在りもしない事実を口にする亮、しかも息を荒くしているはずなのに一気に言いきる。

そしてそれに掴みかかろうとする士郎の肩が何者を持ってしても振りほどけない力で掴まれる。

「士郎さん…少しOHNASIしましょう」

振り返るといい笑顔の桃子がごごごごと何かオーラを纏い周囲の景色を歪めながら立っていた。

ちなみに恭也はそれを見てガタガタ震えながら引いている。中坊には若干きつい圧力だがどうやらそれだけではないようだ。

「覚えているよ……………あの桃子さん、私めはなんで物陰に引きこまれるのでしょうか？」

「なんででしょう」

何とも嬉しそうな桃子が親の仇の様な視線を亮に注ぐ士郎をずるずると引きずりながら物陰に引きこみ…

「おかあさん！…！」

「なあに？なのは」

「なのは！！」

桃子がなのはに呼び止められ、まさしく救いの女神を見るがごとき  
視線を愛娘に向ける父、  
しかし

「よろしくなの！！」

「任せなさい」

「なのはあああああああああつ！！！！！！！」

希望は無残にも打ち砕かれた。

「剛腕爆砕」

「ブロウクン・ファントオオオオオオオオオムっ！！！」

何か変な悲鳴が響き渡り…

「ニヤリ」

口元を三日月状にゆがめている亮の姿が在った。

亮が消えたことで上げたなのは叫び声によつて桃子、恭也、美由紀は眼を覚まし士郎が居ないことで何が在ったのだろっ？と疑問に思い皆でリビングで待つており、

「ただいま――今帰つたぞ」

という玄関の扉があく音と共に士郎の声が聞こえてくるなりなのは亮のことを士郎から聞き出すべく玄関へ駆け出し先の騒動につながったのだ。（運動神経が切れてるなのはが転ばずに誰よりもはやくたどり着いたことは驚嘆に値するが）

「さてと、まずは包帯を変えましょうか――！」

「いきなりだな御婦人」

「いつまでもそんな恰好じゃダメでしょ？」

「確かにそうだが、包帯はいいから俺の服を持って来てはくれないか？」

高町家のリビングでは折檻された士郎がソファで寝かされ（まさしくリビングデット）、その上に何故かなのはがちょこんと置かれている。そのためか士郎は顔をゆがめている。

（実は士郎が起きた時暴れ出さないための処置）

さらに別のソファ―では

「うゝゝゝん」

「大丈夫か？美由紀」

「まだ頭が重いゝゝゝ」

「そうか」

「薄情だよ、恭ちゃん」

「そうか」

貧血で気絶した美由紀が恭也に看病されており、亮は食事用のテーブルの椅子に座って、桃子が手当てをしようとしていた。

「冗談言わないの！あんな大ケガ一日二日で治るわけないでしょう？」

桃子はむうつとしてめつと子供に言い聞かせるように亮に言う。それに対し亮は苦笑にして自嘲を浮かべる。

「問題ない、既に完治している」

「は？」

亮の言葉に？を浮かべ聞き返してしまう桃子

「だから、完治している。嘘だと思うなら包帯を解いてくれ、さすがに背中のだ真ん中では手が届かない」

包帯の結び目が背中のだ真ん中でホッチキスで止められているため自分一人では解けない。

どちらにしても一度包帯は解かないといけないので桃子は亮の包帯を解いていく。

「うそ…」

大量の血を吸いこみ重くなった包帯が解かれると共に傷一つ見当たらない亮の素肌がさらされる。

重度の火傷を負っていたはずが、一日もたたず癒えているのだ。

「貴様…人間か…？」

「ちよつと！！恭ちゃん！！！！」

その様子を見た恭也が眩き、それを美由紀が諫める。

「半分は………な…」

「半分？それはどういう意味だい？…後、なのはどいてはくれないかい？」

「やつ！なの！！！！」

気を失っていたはずの士郎が亮の眩きを捕らえ聞き返す。ちなみになのはベシンベシンと士郎の腹や胸を叩きまくってそのたびに士郎はガフッ！とか嫌な声を挙げているが皆無視している。

「……………」

沈黙したままの亮、包帯の解ける擦り切れ音と士郎のうめき声それ

になのはの笑い声が場を支配する。

「あら？此処だけ治っていないわね」

ちょうど包帯が解け包帯の影から現れた亮の背中を見た桃子。

亮の背にはまるで鳥類の羽の様なあとがまるで焼き鏝を充てられたかのように痣が残っていた。

「それは元々だ。気にしないでくれ」

「そう…」

少し気まずい雰囲気となる。

（あんな大ケガにこんな傷、普通に暮らしているこがつける傷じゃないわよね…というより【意図的】につけられたように思えるわね）

「で、傷は完全に完治しているだろう？俺の服を頼めないか？」

「でもあれ、ズタズタのぼろぼろで着れないわよ？」

「問題ない、修復できるからな」

淀みなく言い切る亮に桃子は言おうと思っていたもう一つの言葉を口にする口にする。

「…わかったわ、でもまずは…」

「まずは？」

桃子が二力つと雰囲気を一転させる笑みをつかべその一言を口にす。



「シャワー浴びてきなさい」

返り血をたっぷり浴びた亮は髪も血液でベトベトで亮自身気持ち悪いと思っていたことなので

「ありがたく頂くとしよう」

受け入れることにした。

「ここだ…」

「そうか、礼を言おう」

「気にするな母さんの頼みだからだ」

「そうか」

風呂の着替え場で案内してきた恭也がぶっきらぼうな口調で亮と会話する。

（若いな…）

亮自身はそんな恭也を微笑ましく思いながら会話している。

着替え場から出ていく際に恭也は背中越しに亮に語りかける。

「もし、みんなに手を出してみろ……その時は…お前を殺す」

凍てつくほどの殺気を漲らせ、ドスの利いた声で恭也は亮に告げる。  
亮もそれに応える。

「その心配はない、俺が葬<sup>ほう</sup>るのは外道のみ…それが俺の受け継いだ斬魔の意志だからだ」

背中越しに己の闘うモノをぶつけ合う二人、まるでその間には見えない雷がぶつかっているかのようだった。

「貴様は一体何だ？」

「俺は………ただの迷子さ」

「迷子だと？どういう意味だ？」

恭也は振り向き亮に問い返す、

「高町恭也」

しかし亮背を向けたまま恭也の名前を呼ぶ。

「なんだ？」

「その問いの答えは一生見つからない方がいい、俺みたいな存在にはならない方がいい…」

大切な誰かを守り共に生きたいのならば…な、

一度でも失えば見つかるまでの間にその身を蝕む空虚は心を凍てつかせその身を蠢<sup>ソレینگデット</sup>く死体へと変えるやもしれんぞ」

「なにを…」

「そして、せつかく太陽を見つけ空虚を癒し心を溶かしても一度でも堕ちた者は呪に蝕まれ、太陽が血風と鉄爪によって碎かれ尚深い闇に堕ちる。」

そして非業の最期を遂げるだろう…多くの道連れと共にな…夢夢忘れずよく考えて生きろ守りたいモノを守り通したいのならな」

「貴様は何を言っているっ?!」

「忠告だ、眼の前で死なれるとなかなか堪えるぞ…」

第九話 暖かい日々の始まり（前書き）

書き直しました

大部分変更しました

## 第九話 暖かい日々の始まり

キューー

ザ

シャワーのノズルをひねり湯が噴き出しそれを浴びる

返り血で濡れていた髪から薄紅色の湯が滴り、血を濯ぎ落していく。

浴場のすぐ外の脱衣所に誰かが来る。

「あの、お着替え此处に置いておきますから」

たしか美由紀とか呼ばれていた女子の声が聞こえてくる。

「ああ、ありがとう」

「いえ…」

人見知りなのか、内気なのか一言言い残し脱衣所から退出する。

そして、浴場からでた俺は置かれていた着替えを広げ混乱の極みに至る

「なんでやねん…？」

関西人突っ込みを行ってしまう。  
浴衣が置かれていたことに対して

「いい湯だった。礼を言おう」

リビングに戻るとそこには美由紀、恭也、士郎の3人がおり、桃子となのはの姿はなかった。

「ああ、あの子はまだ小さいからね妻が寝かしつけているよ」

そうかと返しつつ、3人が座っているテーブルの椅子に亮も席につく  
「まずは自己紹介と行こうか、僕は高町士郎、二人となのはの父親だ。こっちは恭也、それに美由紀だ」

「よろしくお願いします」

「ふんっ」

美由紀はおずおずといった感じであいさつをし、恭也は亮を睨みつけたまま拒否の意を表す。

「ああ、こちらこそよろしく…俺は、東雲…東雲 亮だ」

恭也の態度はどこ吹く風で自己紹介を返す。

そして自己紹介も終わり、士郎がおもむろに口を開く

「一つ聞きたい奴らを殺したのはなぜだい？」

「借りを借りたままというのは性分ではなくてね…一つ言っておこう」

「何だい？」

士郎の問い返しに呼応するように亮の視線が鋭くなる。

「この家、御神と不破だったか…情報を売った奴が居る」

「なんだと?!」

亮の答えに恭也が驚きの声を漏らす、御神と不破の生き残りの中でおそらく一番狙われるのはSPとして活躍している士郎、そして御神の当主の娘である美由紀

私生児である恭也は3人の中で最も危険度が少ないと言えるしかも性を変えた今恭也は御神の剣を実際に見られるまで抹殺対象となるはずもない。

つまり、この家を狙ったということは完全にばれたか、士郎への逆恨みなどが考えられるがSPの情報は秘匿度がひどく高く士郎の交友関係によつて士郎とそれに関連する情報は総理大臣とて閲覧できるものではないよつて士郎個人を狙ったものとはあまり考えられない。

つまり完全にばれたのである。

「しかも目的はなのはちゃんらしい」

「?! いったいどうして…なのはは僕たちの中で一番狙われる危険性が低いはず…」

「人質という側面を除けばな……」

人質として小さい子供が有効なのはいくつか理由がある。

まずは小さいため傷を負ったとき死亡率が高く相手に恐怖心を植え付けることができる相手によつて大切であれば大切であるほどに

そしてもう一つは移動、小さいため持つて移動できる点が大きい仮に成人の人質であつた場合硬直などで文字通り足手まといになるこ

とが多いのだ

情報を持っている奴はなのは個人を狙っていると亮は言っているため、そいつはなのは個人に何かしらの価値を見出しているということだ。

だが同時に疑問もわく

「そうだが…なぜ君が知っているのだ？」

「あの外道どもの記憶をのぞかせてもらったまで…」

「…!! HGS能力者か?!」

半分人間だと言っていたことにも得心がいくし特異能力にもこれで説明ができる。

「そういうことにしておいてくれ…どうするのだ？」

あいまいな表現の返事、これは厳密にうと違うが似たようなものとも取れるが亮は体質として特異な能力を持っているということは確定だと一同に思い至る。

「……君にお願いがある……」

「なんだ？」

「なのはを守ってはくれないか？」

「父さんっ!!! なんでこんな奴に!!!!」

「正気か？」

「恭也…力量を見抜けないうちは三流だぞ。

…僕一人じゃ守りきれない、恭也も美由紀も御覧の通りまだ実戦は



早すぎる。ならば…」

「危険だとわかっていても俺に頼む方がまだましという訳か」

「……そういうことだ」

「考えさせてくれ……」

## 第九話 暖かい日々の始まり

「……そろ……きるんだ……」

何だろう？声が聞こえる

どこかで聞いたことのある声……

いや……すごく最近に聞いたことのある声だ……

「そろそろ……起きるんだ……なのはちゃん」

私の名前……それを呼ぶ男の人の声、

“ユサユサ……”

体が揺さぶられ、微睡の中にいた私の意識が徐々に浮かび上がってくる。

だが、まだまだ眠っていたい欲求に駆られ布団を抱きしめ意識を再び眠りの底に沈めようとする。

プッン

何か切れるような音がしたような気がした

「いい加減…起きんかぁアアアアっ!!!!」

布団が剥ぎ取られる

「にゃああああああっ?!」

朝の微妙に冷たい空気が布団の温もりでふやけた全身の肌に容赦なく突き刺さる。

その刺激が否応なしに私を眠りの国から現実へと引き戻す。

「やっと起きたか…」

「もつとやさしく起こしてほしいの!リョウおにいちゃん!…!」

わたしは声の主へと恨みの籠った視線を向ける。  
と…

「…え?????」

何とも間抜けな声を上げてしまう。

「君の寝坊癖は筋金いりどころか鉄骨いりだな……」

私にむけて白い目を向けているその人…

昨晚血まみれで帰ってきてお父さんが

しばらく家にいるから明日またお話しなさい

というのでしゅしゅ眠ったせいでお話しできなかったおにいさん  
リョウおにいちゃんが…

「ん？どうしたんだのはちゃん？」

月 リメイクよろしく！！

とか言っているデフォルメされたはっちゃけている猫っぽい金髪さ  
んの描かれたエプロンをつけてそこにいた。

どこその殺人貴がカラフルな子供用包丁でホットケーキを切ってい  
るほど似合わないというか違和感バリバリだ。

「…自前なんだが…そんなに似合っていないか…？」

「ええと…」

コメントしづらいつ！！！！

「ごめんなさいなの」

とりあえず謝っておいた。

その頃、高町家の道場では

「行くぞ！！…父さん！！！！」  
「こいつ！！恭也！！！！」

ゲイ・ジャルグっ！！

獄死・七夜

人外決戦的なことが

「…なんか、父さんと恭ちゃんが壊れた…」

起きてたとか起きてなかったとか…

そんなことは置いといて

高町家あさの食卓

「なあ…父さん」

「なんだ恭也？…あ、桃子サラダよそつてくれ」

「はい、あなた？」

「なのはちゃん、箸の持ち方が違うよ」

「にやっ！？」

士郎と桃子はバカップルぶりを発揮し、亮はまだ幼いなのはの食事の世話をしている。

そんな様子に恭也はこめかみを引くつかせいらだつ

なんでこんな奴と一緒に食事をとっているんだ!!

「きよ、恭ちゃん落ち着いてよ」

美由紀がなだめるもさして効果はなく。

一種の固有結界を展開している桃子と士郎は恭也のギスギスした空気もなんのそのと無効化し、亮は風を受け流す柳の如く気にせずなのは食えることと食べ方について集中し気づかず。

美由紀のみが恭也の被害を受けていた…

「ん？このトマトいつもより甘くないか？」

「それね、トマトは普段のだけど亮君が作ったのよ。

………なんか隠し味でも入れた？」

「ああ、紅茶の葉をすりつぶしてまぶしてある。」

「なるほど、茶葉の苦みがトマトの甘味を引き立てるのか」

「そついうことだ」

「亮おにいちちゃんはお料理も上手なの!!」

まさしく狂犬状態の恭也とそれを抑える美由紀、そんな二人そつちのけで団欒をな四人…

美由紀は年端もいかないうちから胃が痛むのを感じるのであった。

（もう、ゴールしてもいいよね…）

いきなりくじけそつになつていた美由紀であった。

「いいお天気なの！！！」

「そうだな」

朝食を済ました後、夏の太陽が照らす中、なのはの散歩に付き添い公園へと来ていた。

「遊ぶの！！！」

全身の体重をかけて亮の手を引っ張るなのは、

しかし亮はたかが幼子一人が全力で引っ張ろうがびくともしない。

「ちょっと待ってくれちょうどいいのがそろそろ来るはずだ」

無邪気なのはに苦笑を浮かべつつ、高町家を出る前に呼んでいたものが来るのを待つ。

「ちょうどいいの？」

「ああ、君のお友達になれそうな奴さ」

「お友達！！！やったなの！！！」

なのはが喜びの意を表したと同時に茂みが揺れガサゴソと音を立てる。

「こゝん（きたよゝゝ）」

茂みの中からは白い狐が、月砂が現れる。

間抜けにも頭のところに木の枝を引っ掛け、なぜか赤く口元を染めて…

「血なの！！真っ赤なの！！イタイイタイなの！！！！」

なのは血に濡れた月砂をみて返り血濡れた亮を見たときと同じリアクションをとっていた。

「き、貴様は……！」

亮は額を抑え青筋を浮かべながら月砂の首元を掴み、水道へと駆ける。

「あれほど摘み食いすると言っただろおっおおおがあっ！！」

「コーーーーーーンっ！！！！（つまみ食いじゃないよおおっ！！！！）」

大量の水が流れる音とこする音それに月砂の断末魔が響き渡った。

「っとお待たせ、なのはちゃん。

こいつの名前は月砂、一応狐だよ」

「コン！！（正真正銘！！純度100%で狐だよ！！！！）」

ブランと首根っこを掴まれてぶら下げられた月砂になのはは目を輝かす。

「かわいいの！……真っ白いの！……！」

先ほど土汚れと血で薄汚れていたが、亮によってしっかりと洗われ、元の神秘的なほどの真っ白い姿へと月砂は戻っていた。

亮はなのはへと月砂を差出、なのははそれを抱きしめ頬擦りするが月砂自体は子ぎつねではないのでなのはより大きいのでミニチュア版もののけ姫になっているのだが……

「柔らくてあったかいの……でも、どうして汚れていたのなの？」

「コ……ン（――；）（いやあ、存外にスズメがおいしくて……）」

器用に頭をかきながら月砂が答える。

「スズメ食ったからこうなったそうだが、全く腹を壊しても知らんぞ」

「コンコンコン……ン（野生の力舐めないで！）」

「……野生の力ってなんだよ」

「こ……ん（なんだろう？）」

亮の問い返しに対し尻尾を？マークにして逆に聞き返す月砂

「……野生じゃないからわかるわけもないか……」

「コっ！？（まじでっ！？）」

びっくりしたように尻尾がぴいんと天上を刺す。



「他になんと言えるのだ？」

「こゝん？（さあ？）」

再び？へと形を変える。

そんな亮と月砂をなのはは目を丸くしながら見つめていた。

「亮おにいちやんすごいの！狐さんとお話しているの！！！」

「なのはちゃんも月砂とお話したいのかい？」

亮はなのは屈みなのはと視線を合わせ頭をなでながら聞く

「うん！！狐さんとお話したいの！！！」

「そうか…月砂任せたぞ」

「コっ！？（何をどうしろと！？）」

「コンコンコン？（狐さん言葉わかりますか？）」

「コ　　んっ！！！！（わかるわけ無いようっ！！！！）」

亮と月砂はつながっているため言葉がわかるがなのはが狐の真似をしたところでただコンコンと言っているだけで月砂にもわかるわけはなく。離婚寸前の夫婦のようなすれ違いを繰り返しているなのはと月砂。

亮はそれを微笑ましく思い、うつすらと優しい笑みを浮かべ近くの樹にもたれかかりながら見つめていた……

いつの間にか夢をみていた。  
夢だと分かっているのに覚めない性質の悪い夢だ

フユウウウウウウウ…

…全てが……終わりを告げる

廃墟となった町の中                      倒壊しかけのビルが幾重にも折り重なるように倒れ、土は抉られ草花はや民家は跡形も残っておらず上から見ればぽっかりと町に穴が開いているように見える。

まるで町が食い破られたかのような激戦の傷跡がそこに残る。

町の一区画を破壊しつくすほどの激戦があつたにもかかわらず、今は物悲しいまでの静寂が辺りを包み込み、吹き抜ける風がぽっかりと広がってしまった心の空洞を吹き抜けているように感じる…

俺は袖のなくなった外套から現れている自分の血によって赤くなつた腕で年端もいかない少女の体を抱きしめている…

「なぜ…なぜ……なぜ……俺は……本当に救いたいものを…救えない…」

よく見ればその少女の体はうつすらと透けており…自分の物でない大量の血によって衣服が紅く染まっている。

「なぜ…俺は本当に助けたいものを……殺すことしかできない…」  
抱きしめていた少女の体は硝子細工のように砕け青白い光に染まり  
一つまた一つと白い光粒が離れ乖離していく。

白（正）と黒（死）……この二つの狭間の世界は通常隠されている、  
見えないものが見え、同時に否応なく俺に世界の真理…悲劇と死に  
満ちた現実を突き付ける。

狭間の世界の住人であり、あらゆる意味において狭間の存在である  
俺はどちらにも属することは出来ない。

まさしく蝙蝠…

生者の狂信者からは存在を否定され、愚者どもからは資料としてし  
か認められず、異能故にふつつの世界では暮らせない…それでも…  
のため戦った…

時の民であり、星の民であり、鬼切であるが故に

いつか…守った者たちの中に俺を変えてくれる者が、渴きをいやし  
てくれる者が生まれることを信じて…

すぐるように消えていく少女の体を抱きしめる

強く…強く

「……………にいちちゃん！……………リョウ……………ちゃん！…」

強く、強く

「……ちいの……くるちいの……リョウ……おにいちゃん……」

つと、抱きしめているものに確かな質感

夢であるはずなのに感じる感触と聞き覚えのある声、

「くるちいの……リョウおにいちゃん……」

「!?!?なのはちゃん!?!?!?」

ふと抱きしめているのが月砂と遊んでいたなのはということに気づいて急いで抱擁を解く。

「もう……だめ……なの……」

“ガクッ”

なのはは力尽きた。

「なのはちゃぁんっ!?!?!」

抱擁が苦しかったのかすっかり目をぐるぐる回したなのはを揺する亮

「こゝろん……(何やってんの……)」

そんな二人を呆れながら見つめていた白狐月砂がいた。

## 第十話 昼の一風景

「で、なんで俺の寝顔なんか覗き込んでいたんだ？つまらないだろう？」

「あのね…おにいちゃんがすごく悲しそうな顔になっていたから何かしてあげたかったの…」

「…そうか」

眼前の少女は頂垂れながらに語る、そして理解する。眠りというもつとも無防備な姿を彼女に晒し、近寄られても目覚めなかった理由を。

この娘は純粹に俺を想ってくれたから俺は、無防備になれた。そして、この娘の優しさに惹かれ安心したから仮面を脱げた…  
思えば初めて会った時からこの子の魂の色に見惚れていたのかもしれない。

まるで春のうらかな日差しと風のような暖かく包み込むような、桜の花びらによく似た桃色の輝きを持つその魂に

苛烈ではなく月の様にただそこにあり包み込むような暖かなそれでいて星の様に儚いが力強い輝きに

それは無意識的な行動だったかもしれない。

俯きな頭にそつと手を置き撫で、感謝の言葉を口にする。

「ありがとう」

## 第十話 昼の一風景

「さて、昼食の時間だな…」

「おなかすいたの」

「くうくうん」

時刻は正午をわずかばかり過ぎた辺り、苛烈な日差しがジリジリと地面を照りつける中、クレープ屋の屋台が目に入りそれを指さしながら訪ねる。

「あれはどうかかな？」

「クレープなの…!!」

なのはは目を輝かせる、小さい子供にとってクレープはまさしく御馳走なのだろう

「では買いに行こうか？」

「なの!!!」

ピンクを基調としたカラフルなペイントが施されたトラックを改造した屋台の前でウィンドウに並べられた本物と瓜二つの作り物の見本を前になのはは指を口に添えながら唸っていた。  
もっとも身長が圧倒的に足りないので亮に抱え上げられながらではあるが。

「う~~~~~んと~~~~~」

彼女の脳裏ではさまざまなトッピングがなされたさまざまなクレープが巡りに廻っているであろうことが容易に想像できる。  
幾つもの種類からたった一つを選ぶのは苦行であるかもしれないがそれについて頭を抱えるのもそれも醍醐味の一つであると言える。

「暑いからアイスなの!!」

ビシィ!!となのはがウィンドウの内バニラアイスにカラフルなチヨコとイチゴソースがトッピングされたクレープを指す。

「そうか、俺はミカンクレープを…」

“ クイクイ ”

なのはと自分の分を注文しようとしたところでズボンの裾が引っ張られる。

視線を下に向けると月砂がつぶらな瞳をどこぞのチワワの様に瞳をうるうるさせながら視線で訴えていた。

私も食べたい      と

「……………」

“ うるうる ”

月砂と視線が交差し時がゆっくりと流れる

「……………」

“ うるうる ”

「……………」

“ うるうる ”

「……………」

“ うるうる ”

「……………演技は通じんぞ」



「チツ！」

「舌打ちされた！？っていつかできたのか！？」

唾を吐き捨てるように舌打ちされた。

月砂がほんとに狐かどうか生態を疑いたくなる。

「月砂ちゃんにはこれなの！！」

月砂とのコントを意に反さずなのはがツナサラダクレープを注文していた。

「…なのはちゃん、狐はイヌ科だぞ。」

「にゃっ！？そうなの！？」

どうやら狐 猫 魚 ツナと連想していたようだった。まあネコ目であるため間違えるのも無理もないが

「コっ！？（マジでっ！？）」

自分のことだろ、いままで自分が猫科だと思っていたのか？

「いただきますなの！！」

「くう～～ん（いただきま～～～す）」

クレープを入手した一行は公園の樹の木陰になのはを中心にして座り、それぞれ口にする。

月砂は目の前に広げられた紙の上に置かれたクレープをガツガツと貪って、なのははその小さな口いっぱいに頬張る。

「そんな急いで食べなくてもいいだろう？急がば回れ、焦ってもよいことはないぞ」

やれやれと亮は苦笑しながらなのはたちに落ち着きを促し自身もクレープを口に運ぶ

「フム、なかなか美味だな…」

口の中に生クリームのクリーミーな甘味が広がりミカンの果実の酸っぱさが混ざり合い程よい甘さと酸味を醸し出し、生クリーム自体もしつこくなく後味もよく後に残る感じがなく美味と言える。

亮がクレープに舌鼓を打っていたとき

「～～～～！！！！頭がいたいの～～～～～～」

なのはが頭を抱え悶えていた。

「だから言っただろう？焦ってもよいことはないと…」

「だって…急がないとアイス溶けちゃうの……………」

キリキリと一気に冷たいもの口に入れたとき特有の痛みが頭を締め付けながら涙目で急いでいた理由を告げるなのは、それに対し亮は苦笑を漏らす。

「溶けかけのアイスもそれはそれで美味だそういう変わっていく味を楽しむのもこういった食べ物醍醐味だぞ…ほら、口元にアイスがついているまるで白ひげの様だぞ」

クレープを買ったときについてくる紙の口吹きでなのは口元を汚すアイスその他もろもろをふき取る。

「むううう…」

亮のからかいに対して？ながらもなすがままなのは、ふと、視界の隅にぴくぴくと痙攣している何かを見つける。

「月砂ちゃん!？」

それは、真っ白い毛でありながら顔が真っ青に染まっている月砂であつた。

「くう~~~~ん（ああ、綺麗なお花畑だ~~~~）」

「ふむ、クレープの生地がのどに詰まったようだな。花畑が見えるぞうだ。」

「お花畑!? 川の向うじゃないよね!? っていうかなんでおにいちやんそんなに普通なの!？」

「くう~~~~ん（舟守さんこれ川の渡し賃よろしくね）」

「おお、いよいよ渡るそうだ。」

「渡っちゃだめなの

っ！！！！」

なのはの叫びが響き渡るのであった。

本日の教訓、無暗やたらに焦ってもよいことはない【急がば回れ】  
なにか違う気がするが気にしてはいけない。

## 第一一話 閉ざされた墓地に住まうもの

夕焼けが世界を赤く染め上げる。

徐々に青かった空が茜色に染まりやがて藍色から夜の闇へとその色を変えていく光景はなぜか無性に郷愁感を引き起こし懐かしいと思う気持ちを心に打ち上げる。

そしてその郷愁感に促されてか子供たちは温かな食事とそれを用意する家族の元へと帰っていく。

そして、夕焼けの公園を一人の青年に手を引かれながら歩く少女…  
なのはも例外ではない。

「……………にゅむう……………」

何とも眠たそうな声を上げるなのは、その首は眠りの国へ向けコックリ、コックリと船をこぎ出し始めている。

遊び疲れたため彼女の幼い躰は体力の限界を突破してしまったのだ。

「…眠いのか？」

「大丈夫なの…おうちでゆっくり寝るの…」

「無理をするな」

亮はなのはの前に背を向けて屈む、おんぶの恰好だ。

眠気により思考が働いていないのか、それとも純粹に甘えているのか亮の背中にもたれかかる幼女

亮はその軽いが確かに存在する重みと子供特有の高い体温からくる暖かさを洋服越しに感じながら歩を進める。

なのははうつうつらうつらと首を揺らし、瞼はうつすら開いたり閉じたりを繰り返す

( B G M : 運命      S A D A M E      )

亮の口から唄が旋律に乗って流れ出る

それはユックリとしたリズムでなのはの耳から心に浸透し安心感を湧き起こし眠りを確かなものへと変えていく

それは、幼きころ実母が遊び疲れた自信を寝かしつけるのに奏でた子守唄

溢れんばかりのどう表現してもいいかも分からない愛という烈情を旋律と歌詞を持って形無き形にしたもの

例えば自身も身が朽ちるとも我が子の幸を祈り続ける母の、無償にし

て無限の愛が込められし詩

今亡き母との思い出が、胸を締め付け郷愁の念を宿すが還るべき場所はどうにない

だけど

心は風に揺れる風の様に、大海原の様に澄みながら穏やかだ  
この背にある暖かさを持った重みがどこもなく安らぎをくれている  
のだと感じる。

そろそろ…止まり木に留まり羽を休めよう。

この世界で、俺は守るべきものではなく守りたいものを見つけた気がした。

カラン、カラン

喫茶 翠屋の鈴付きのドアが開かれる。

「いらっしゃ…なんだ君か。なのははどうしたんだい？」

扉を開けると高町士郎が愛娘の姿が見えないので聞いてくる。

「あなたたちのお姫様はこの通りだ」

「あらあら、よく眠ってるわねえ〜」

背ですやすやと安らかな寝息を立てている幼女をその両親に見せると微笑ましい目を注ぐ

母親である桃子はなのはの頬を突つきその柔らかい感触を堪能し、そのたびになのはは微妙な表情の寝顔に代わる。

眠りに着くなのはの周囲には穏やかで温かい空気が流れていた。

「ここはどこなの？」

幼女なのはがつぶやく  
気づいたらそこにいた。最後の記憶は途切れ途切れの夕焼けと自身を背負う大きな背

しかし、周囲にはそれらは一つもなく草花が生い茂り小高い丘の上に聳え立つ大樹の葉の一枚一枚が白く発光し周囲を照らし、その大樹の根元へと続く道…その中央になのははいた。



空は何とも言えない夜明けの前の空のような、月のような不思議なそれでいて幻想的な色合い

ふと、周囲の草花が生えている物に気付く。

「おはか…なの」

それは墓標だった。

十字の杭に刻まれた名前、積み上げられた石、地面に突き刺さった剣、槍、銃、四角い和風の墓石や洋風の墓石…

周囲、いやこの閉じた世界を埋め尽くす無数の墓標。

この世界は墓地だった。

本来だれも決して訪れることない閉ざされた墓地

しかし、すべての墓標に蔦が絡み付き花を咲かせ、苔が生い茂り無機質な墓標を命で覆う。

その光景は美しいと感じさえる。

動くモノのない世界は寂しいと感じるが墓標を覆う植物によって美しいと感ずるのだ。

なのは丘に聳え立つ大樹の麓へと続く道を歩む。

不思議と疲れはない。

まるで引き寄せられるように大樹の元へとその歩を進める。

そして丘の根元が目に入ると同時にそれも目に入る。

それは…

巨大で長い体軀を大樹に巻きつかせ蜷局を巻く金属光沢を放つ甲殻と鱗を持つ一匹の龍だった。

その頭からは天を衝く水晶のような角が天を突き背の羽は小さく折りたたまれ瞳を閉じ眠りに着いていた。

そしてその全身にはさまざまな武具が突き刺さり、銃で穿たれた傷もあり鮮血があふれ出している。

まさしく満身創痍、瞳を閉じ眠りに着いている様子は死んでいるのかさえもあいまいにする。

恐る恐るなのはは龍に歩み寄り手を伸ばす…がその手と足が止まる。

龍が目を覚ましたからだ。

「G u u u u u u u u u u ……」

地の底から響くような唸り声が龍の顎門から洩れる。

「だいじょうぶ…だいじょうぶなの…」

警戒を露わにする龍にもなのは自身にも言い聞かせるように声を発し、傷だらけの体にそつと触れる。

瞬間、なのはの脳裏に言葉と様々な感情が流れ込む。

それはなのはの自意識をたやすく刈り取り白い光の本流に連れ去る。

光の中でなのはの心に光が染み込む

それは、ただ悲しくて空虚な感情の本流

あまりに痛すぎて痛いとも感じることでできなくなってしまった心

それを感じる取る。

そして聞こえる声

「生きる…」

「生きて…」

「あなたが…」

「お前が…」

「私たち／俺たちの生きた証だ」

それは、願いにして呪い…

ただ生きて幸福になってほしいという親の心、だがそれは受け取った本人を生にしがみつかせる鎖となる。

生きる理由はただ一つ、両親の生きた証である自身が生き続け証を消さないこと。

生きることが望みではなく義務となってしまうている心

…そして彼は求めた、自身が生きなくなる理由を

自身が生きて帰りたくなる場所を…

自然と瞳から大粒の涙が零れ落ちる。

喉の奥が渴き、内臓に溶けた鉄を流し込まれるような錯覚を覚える。腸が煮えくり返るとはこのことを言うのだろう。

それは怒りだったのか憐れみだったのか、分からないが純粹に救ってあげたいと感じる。

瞬間、光の本流の奥底で桜のような桃のような温かな薄い緋色を背景に笑う自分の姿を見た気がした。

この心の奥底に根付いた生きなくなる理由を直感的に感じ取るのは例えそれが吹けば飛んでしまうような儚いものだとしても、嵐にも負けない大樹へと育てようとなのはは幼いながら心に誓うのだった。

「戻ったの…？」

気が付けば元の大樹の根元に龍に触れたままの状態でいることに気付く。

そして龍がどことなく優しさを感じる瞳を向けているのに気づくそして、自身の衣服が血まみれになるのも構わずに抱きつく

「痛かったよね…もうだいじょうぶ…だいじょうぶ…」

幼子に言い聞かせるように、優しい声色でなのはは龍に語りかける。それは先ほどまでの恐怖を抑え込むものではなく慈愛に満ちた声だった。

龍はその長い巨躯の頭部を動かしたのはの前に顔を運び、なのはの顔を見つめる。

交差する視線、流れが遅延する時…

そして ペロン

龍がなのはの顔をなめる。

「うにゃあああ!？」

突然のことにびっくりし先ほどの聖母のような空気を木端微塵に吹き飛ばししりもちをつく。

龍はさらに倒れたなのはの顔を数度舐める。

「ダメなおくくすぐつたいのおくくく」

まるで飼い主に甘える猫のような行動をとる龍となのはは楽しく時を過ごすのだった。

## 簡単な人物紹介

東雲 亮

一応主人公だが視点が少なく死亡フラグが立っている（実はFAT Eからの転移者で第6次聖杯戦争でバーサーカーのマスターだった）

二刀流の使い手で高い身体能力と回復力を持ち料理の腕も高い  
また霊視能力者でその手の関係と魔術に精通している

二刀流なのは

「一本の剣で守れるのは己のみ、何かを守りたいのならもう一振り刃がいる」

という信念に基づいてのこと

なのはとの出会いで徐々に生来のおおらかな心を取り戻していく

東雲とは夜明け直前の時間帯をさし、亮は高きところで輝くものという意味があり、言い直すと明けの明星ルシフェルをさすとともに光と闇の両極性を所持しているという意味になる。

（ルシフェルが墮天すると竜の姿になる）

ちなみに最初になりようになったのはダイレンジャーのリユウレンジヤーの亮から連想している

モチーフは日本人版ローズレッド・ストラウスを志貴と士郎の二人

に対して正反対であり同質を目指して加工したもの（ちょうど二人と三角関係の位置になるように）口調はアズラッドをまねている

## 基本技

混合魔術、物質を分解しその構成素材を自身の肉体一部の物質構成の隙間に混ぜ込むことで武器を体に収納させている、取り出しも自由ただし、綿密な魔力、生命力、霊力を制御できなくては体内の力の流れが変調し精神に異常をきたす。

複製魔術、変化から派生した魔術で周囲の物質を素粒子レベルに分解、再構成することで任意の物質を作り出す、投影と違い通常物質で作られているためこれで作られた物質は消滅しない。（宝具の複製も可能だが詰められた概念いわば魂も複製する必要があるためもはや第3魔法の領域、だが東雲は膨大な魔力と霊力を消費することで可、干将莫邪で凜10人分くらいの魔力がいるが）

時間操作魔法、亮の流の属性と青竜の血によって可能となった第4魔法、ただし制御に難あり

剣術、黒鍵による投合、霊術を組み合わせたオールマイティな戦闘だが純粋な剣術は一对一のときか街中ぐらいじゃないとつかわない、（力任せに薙ぎ払った方が効率的だから）

実は、アルクエドと基本スペックでガチバトルができ、相性から勝利できるが、式や志貴、衛宮士郎、ギルガメッシュ・・・ジークフリートなど鬼門となる存在も多い

高町なのは



主人公兼ヒロイン？

舌足らずでしゃべる元気な幼女、誰かと触れ合うのが大好きな3歳よく走ってはこける

最近は月砂の毛に埋まるのが趣味？

亮の本来の心を直感的に感じ取りなついている

（士郎の事故がまだ起きていないため普通の子供？）

もしらばの秋穂とヴァンパイア十字界のステラを目指してキャラ作りをしている。

高町 桃子

なのはの母親、なのはと同じく亮の性格を見抜いており結構信頼している

怒るととても怖い

（ゲーム版をベースにしているアニメ描写が少なすぎる）

高町士郎

亮の実力を見抜きなのはの護衛を亮に頼む

最初は信用していなかったがなのはとかかわり徐々に変わっていく亮を見て信用し始めている

（どうしようもない）

高町 恭也

なのはの兄で士郎の連れ子、生後すぐに母親に捨てられるという悲

劇の子

亮を嫌悪しているがそれは自身が届かない高みにいる彼への妬みが原因

最近学校での劇の準備のためか何かのセリフをいうことがある

高町美由紀

士郎の連れ子その2、

久遠

登場予定の狐

紅い目の男

御神と不破の情報を持つ男、正体不明

情報の希少価値を高めるために無暗にばら撒かず少数に高額で売っている

## 第12話 冷たい手と心

ピピっ

高町夫妻となのはが一緒に寝ている和室に電子音が鳴り響く

「……………三十八度、六分…間違いない」

和室に敷かれた布団に寝かされたなのはの口元から体温計が引き抜かれ、亮によつて温度が読み上げられる

「…そんな……………」

なのはが絶望に染まりきった声を発する、まるで今から魔王へささげられる生贄のように怯えている。

そしてその耳下…頬は腫れ上がっている。

「ああ、間違いない……………」

「言わないでほしいなの…」

「現実を直視するんだ」

「でも…」

布団に顔を半分埋めながら涙目の視線をなのはは亮にそそぐが亮は

無情にも事実を突きつける。

「間違いなく“おたふくかぜ”だ」

「びょういんは嫌なの~~~~~っ!!!!」

「なのはのことを頼むよ」

「私たちもお昼には一度戻るからよろしくね」

「ああ、分かった…」

遠くで両親と亮の会話を聞きながらなのはは寝室で疎外感を味わっていた。

（なんだか寂しいの…）

徐々に頭痛が増し、高熱による悪寒と身を灼く暑さがなのはは何重もの苦痛を与える。

やがて、両親が仕事に行き姉も学校へと向かったため辺りが静寂に包まれ、先ほどの疎外感が加速し孤独感を感じる。

（くるしいの…）

絶えずなのはを襲う苦痛のせいか無性に心細くなったなのはは今家

にいるであろう一人の青年を思い浮かべる。

(…リョウ…………おにいちゃん……………)

寢室の扉が開かれるのをなのは待つ

あと一秒、次の瞬間には扉が開かれて基本的に無表情だが時折暖かい笑みを向けてくれる青年が現れるのを待ち続ける。

あと一秒…

もうあと一秒…

次のもうあと一秒…

しかしいくら待とうとも扉が開かれることはなかった。

(そうだよね…なのはが勝手に来てくれると思っていても来てくれるわけではないなの…)

なのはが諦めかけたその瞬間

「体はどうだ？」

「リョウおにいちゃん…」

来てくれたっ！！！！

なのはの心を喜びが満たす。ちょっと涙目になりつつもなのはは亮を見つめる。

亮はお盆に何かをのせてなのはの枕元に歩み寄り、腰をつけお盆を置く。

ふとなのはの鼻に漂う香りが舞い込む。

「どうだ？軽く飯を作ったが食べそうか？」

麵つゆなどで味を整えられ、溶き卵と一緒に煮込まれた一部地方ではお粥の代わりに使われるおじやである。

「ん、少し食べてみるの…」

亮はなのはの上半身を起こしてやり、レンジに一掬いなのはの口に運ぶ

「いただきますなの…」

それを数回に分けてなのはは口に入れ飲み込む。  
卵という栄養価の高いものをベースに春の七草と一緒に刻まれ煮込まれており胃腸にも優しい食べ物でないはずの食欲がわずかに掻き立てられる。

「どうだ？」

「おいしいの」

なのはは先ほど食べたおじやの味付けが母である桃子のものとは違う味付けだと気づき、同時にそんなものを作る人物は目の前の青

年を置いてほかにいないことに到達し、すぐに看病に来てくれなかった理由を察する。

（なのはのためになのはがたべれるものを作ってくれてたなのっ！  
！！！）

内心恥ずかしくて口には出さないが、感謝と喜びの念が大体、三対七の割合で渦巻く

「どうだもつと食べれそうか？」

「ん…食べたいけど無理そうなの…」

しょんぼりとした口調でせっかく作ってくれたのに…と罪悪感を感じる。

「無理をするな」

それを察したのか頭をなでながらに言う亮

「分かったなの」

「じゃあ薬を飲んで眠るといい」

「は〜い」

亮がなのはの口に粉薬を運び、なのはが薬を口に含んだところで水を渡す。

水を少しづつ飲み、薬をのどへ流し込むふと水に少量のレモンの香

りがが漂い、取れていく体の熱と相まって清々しい感触を感じる。

「ん、と全部飲んだの」

「えらいな」

「えへへへへへ」

亮に褒められ顔が綻ぶのを感じる。

「ほら、あまり起きていると体に障る無理して寝なくてもいいから布団に入っていないさい」

亮に促され寝かされ、掛布団を被される。

「少し待っていてくれ」

亮はお盆を持ち片付けのために立ち上がり部屋を出ようとする

（いけないでっ！！！！）

それは無意識の行動だったのか、

「ん、どうした？」

布団から手を伸ばし亮のズボンの裾をつかみその歩みを止めようとしていた。

「…なのはが寝るまででいいの…一緒にいてほしいの……」

縋るように亮に訴えかけるのは



「しかたがないな」

亮は苦笑しつつもお盆を床に置きなのはの枕元に腰をつけ、そつとなのはの額を優しくなでる。

…その手はひんやりと標準よりも冷たくなのはの高熱との温度差もありなのはにとっては冷たすぎず温るすぎない適温となる。

「ん…冷たくて気持ちいの」

「…俺は冷血だからな…」

ふと亮が漏らす

「れいけつ？ってどういう意味なの？」

なのはは亮つぶやきを聞き漏らしはしなかった。

「…冷酷、薄情な人間のこと…要するに心が冷たい人間のことだよ…」

「ちがうのっ！…！」

自嘲気味に薄ら笑いを浮かべながら亮が説明する。

それをきいたなのはが自身の体調も構わず憤慨し、亮は驚きなでていた手を止める。

「おかあさんが言っていたの、「体が冷たい人はその分暖かい心を持つてるのよ」ってだから違うのっ！！…なのはは知ってるのりよ

うおにいちゃんは“れいけつ”じゃないのっ!!」

なのはの言葉がなぜか胸に深く深くしみこんでその奥の何かを溶かす感触を感じる。

今まで、封印指定、討伐指定を受け戦いの日々の連続で相対する者たちは最後に口をそろえていった。

この化け物めっ!!

-

そしておれはそれを容赦なく、躊躇いも慈悲もなく切り捨てた……  
そのたびにどんどん何かが零れ落ちていくのを感じた。

言葉が突き刺さるたびに、切り捨てるたびに

それが心の温かさだと思っていた、心が死んで行っているのだと思っていた。

でも……まだ残っていたようだ。

「……………そうか、俺は冷血じゃなかったのか……」

「なの!……!」

目頭と胸に熱い何かを感じた。

## 日常（前書き）

今回だけ日記形式にします

## 日常

9月00日

なのはの風邪が治り、暑い日だったので百物語をしようということになった。

もっとも安全等の理由からろうそくは10本だったが。

その中で鉄鼠というネズミの妖怪の話で、主食が子猫という話が出た

「じゃあ、なのはは食べられてしまうな」

「にやっ！？なのはねこさんじゃないのっ！！！」

「いまでも、猫みたいな鳴き声あげてるじゃないか」

「…なのは食べられたちゃうの…？」

「ああ、きっと頭からバリバリむしゃむしゃと食べられてしまうだろうな」

「そんなの嫌なの~~~~っ！！！」

恭也にからかわれたなのはが泣きながら抱きついてきた、涙目で俺の足に隠れ顔を半分出してこちらを見上げる様子はとても愛らしかったと記しておこう

因みに

「昔ある登山部の4人の学生が冬の山に登ったところ急な吹雪で遭難し、たまたま近くにあった休憩小屋に避難したんだ。

だけど、吹雪影響か電気が通ってなくて暖炉を燃やす燃料もない…

このままでは凍死してしまうと思った、だからそれぞれが4隅に分かれ合図とともに一人が壁伝いに移動し、もう一人に触れたら今度はその触れられた人が移動し次の人に触れるというゲーム…を始め  
たのさ

動き続けている限り眠らない、だから4人は暗闇の休憩小屋をぐるぐる無言で回っていたのさ

そして、朝が来て無事吹雪もやり4人は一人もかけることなく無事山を下りられたそうだ。」

という話をした。

「よかったの！！みんな無事だったの！！！！」

なのはは純粹に喜んでいたが4人は顔を青くしていた。

「4人って…続けるには一人足りないよね…」

「あ、ああ…」

「気づくとクルわねこれ…」

「さり気無くえげつない…」

…次の日

「っ！？一人足りないの！？お化けなの～～～～っ！！！」

少々遅いが気づいたようだ

9月 x日

気づいたの気づいてしまったの！！！！

4人で順番に壁を伝っていったら4人だと最後の人で終わっちゃうの！！お化けなの！！！！

とりあえず近くにいた月砂ちゃんをもふもふしてみたの、フワフワで温かいの！！！！

でもだめなの…月砂ちゃんじゃ気持ちいけど落ち着かないの

亮おにいちちゃんが近くに來たので抱っこしてもらったの！！とって  
も安心できたの！！！！

追記（恭也）お兄ちゃんが…

「では始めよう…永劫の開園を、永劫の終焉を…  
闘争の狂想曲オーケストラ

始まりの終わりを…終わりの始まりを…クライマックスだ」

と何かの本を片手に声に出して読んでいたの…何かはまりすぎだと

思っの！！

9月 日

朝の自己鍛錬を高町美由紀に見られ、弟子入りを申し込まれた

基礎と一つだけ技を教えてそれがものにできたら教えてやるという  
たらやる気を出してどっかに往った。

追記 高町恭也が

「罪魂を欲し！貪り！

そして、自らの魂まで食い尽くせ！！！

フッフ…堕ちてみれば、心地いいものだよ」

と言っていた、劇のせりふらしいが何かいろいろ混じっている気がする。

9月 日

「ん？何をしているのだパソコンで」

「お絵かきなの！！」



「…これはなんだ？」

「へびさんなの！！！」

「……俺にはバトンリレーをしている奇怪な生物にしか見ないが…手足生えて走ってるし」

「へびさんがリレーしたらこんな感じだと思っの！！！」

「…蛇足って知ってるか？」

「????？」

9月 日

「また、パソコンで絵を描いているのか？」

「なの！！！」

「ヒュドラVSヤマタノオロチ!？」

「九本首のへびさんが勝つと思うの！！首の数で！！でもジャンケンは行方が分からないの！！」

「いったいどんな物語が君の頭に展開されてるんだ!？」

九月 日

「新しいへびさんかいたの！！！」

「・・・今度はどんなのだ?・・・」

「お手てがあって足があって、角があって羽があって・・・それから・・・」

「君の中のヘビの定義はどうなってるんだ!?最初の時点でヘビじゃなくなってるぞ!?!」

九月 日

「今度のヘビさんは懸垂するの!?!?!」

「君は一体ヘビにどんな幻想を抱いている!?!」

「なせば成るの!?!?!」

「生物学的に無理だ!?!?!って言うかできたらそれはもはやヘビじゃない!?!」

「そうなの?」

「俺が間違ってるのか?.....」

## 第二三話 異端の詩

「ねえなのは〜?」

晩御飯が終わり皆がそれぞれの時間を過ごしておりなのははテレビを父 士郎と一緒に見ていたが、ふと母に呼びかけながらソファーの背もたれにのしかかるように向き直る。

「にゅ? なになの?」

首をかしげながら自分を見つめるわが娘に桃子は微笑みながら切り出す

「明日ね、お祭りが!! あるのよ」

関西の血のせいaka微妙に高いテンションの桃子

「行くの!! 行くの!! 行くなのっ!!!」

ソファーの上でぴょんぴょん飛び跳ねる幼女、士郎は飛び上がったところでなのはの脇をつかみ自分の膝の上に置く

「こら、なのは危ないしソファーが痛むじゃないか。物も自分も大事にしない奴にはもったいないお化けが来て食べてしまっぞ?」

「!!!!!!」

ぴいんっとなのはの頭の毛が逆立ち瞬間、士郎の膝からなのはが消える。

思わず周囲を見回す土郎

…よく見るとソファアの端からヒョコツと飛び出した触覚のように縛られツインテールにされた髪が揺れながら小刻みに震えている。

「食べちゃダメなの…食べちゃダメなの……なのはおいしくないの…」

ソファアの陰に隠れながらぶつぶつと震えながらうずくまりつぶやく様子は小動物のようで（実際に小さいが）無性に保護欲を誘う。

（…何気に神速使ってなかったか…？）

わが娘のことではあるが通常、運動神経が切れているのが無性に惜しく思えるが同時に人の必死さに舌を巻く土郎であった。

「ほらあなた、なのはを怖がらせないの！」

めつと言わんばかりに言いながら桃子はなのはを抱き上げよしよしと背中をなでる。

「ほら、なのは怖くないわよ。なのはは物を大事にするいい子だから勿体無いお化けなんてこないわよ…」

「ほんと？」

「ほんとよ」

「そうだな、なのは怖がらせてすまないな」

「うん、もういいの！！なのはいい子になるの！！」

「そうか」

自分の妻の腕に抱かれる愛娘の頭をなでる士郎、それは普通の家族の一風景であった。

その光景を扉の陰から見つめる一人の青年、彼は既知感デジャブを感じながらそれを見つめる。

「……………」

ゆっくりと音を立てずに扉を閉める。喉を潤すために来たのだが入れなかった。

かつて失ったそれに記憶のページにあまりに似ていたその光景に……

亮に与えられた部屋、もともと外来用に用意された和室へと亮は戻り座りながら壁にもたれ掛り額に手を当てながらつぶやく。

「……俺は……ここに居るべきでは……ないのかも……な……」

力は、異常は、特異は必ず災いを呼ぶ……

一般人の中にも稀にだが異常な存在はいる。

（あの子も異常な存在だ……俺と同じ……精霊の血と力を引いている……）

精霊の力……精霊種の血を発現した存在が必ず持つ力、世界の一部である精霊種は世界に満ちる力……体内で生成運用される力を“オド”というのに対して大気に満ちる力“マナ”を取り込み己がものとする力それが精霊種特有の能力。

通常の人間……と言っても魔術回路を持つ存在に限られるが魔術師は生命力を魔力に変換し理を書き換える力とし、経絡が発達している霊的遺伝子が優れた存在は生命力を世界に隠された理を顕現させる力、霊力に変換・使用できる。

つまり通常の人間が自身の内部の力に限定して使用できるのに対して精霊種は大気に満ちる力をそのままダイレクトに世界から力を補給できる。

自分が聖堂教会、魔術協会の追手を退けてこられたのは精霊種特有の能力による無尽蔵のスタミナのおかげに他ならない。

さらに、精霊種の血を発現した人間は退化した霊的遺伝子が活性化し魔術回路も発現するため強大な力を行使することができる。

もつとも大半の人間は異常を眠らせたまま人生を終えるのであまり関係ない。

仮に目覚めても、体は人間なので器が耐えられないか器に合わせて力が縮小する。

肉体も精霊種のそれにならなければ意味がないのだ。

だが、自分は肉体さえも精霊種のそれだ。  
なぜ自分が人間と精霊種の両方の特徴を持っているかという生家であつた青龍家の起源が関係する。

青竜とは地球のアルティメット・ワンの一種だ。  
幾つか種類があり挙げるとすれば

破壊と地の精霊王      白虎

守護と水の精霊王      玄武

生命と炎の精霊王      朱雀

変化と風の精霊王      青龍

秩序と光の精霊王      黄麟

などだ

真祖の吸血鬼は、月のアルティメット・ワンの模造品にして“あれ”が地球で抑止力に妨害されず活動するため星をだまして作らせた人間と自然の調停者という名目の器だ。

だが、星も…ガイアも何の保険もなしに異物を受け入れるわけがない。  
もしも朱い月が侵略行為を行おうとしたとき戦うために其々別々の方向性を持った地球のアルティメット・ワンを吸血鬼の素体となった人間と混ぜた。

朱い月に対する抑止力、それが俺の一族

真祖と対になるもう一つの真祖、吸血衝動などない真なる魔王

…完全な真祖が滅び世界から排除された一族…

その中でもさらに特異な存在、朱雀と青龍のハーフ

雷、風、液体など限定的にしか受け継がれなかった青龍の力を完全に受け継ぎ限定的に朱雀の力を宿した存在

異常の中の異常…それは排除される運命にある。

近しき者たちを自身を狙う血風が薙ぎ、鉄爪が切り裂く

故に、近くにいてはならない。

それは容易になのはを戦いの世界に引きずり込むかもしれない。



そうれだけの要素がそろっているのだ。

あの子を異端にする訳にはいかない

そうだ自分は

Ich ?berlie? sowohl den Traum  
als auch die Hoffnung der Verg  
angenheit weit

夢も希望も遙か過去へと捨てて来た

Einfa?h, weil das Leben, um  
t Blutstill zu einem Tanz zu  
nzen, eine Klinge und der Auf  
eher ?berall im Leben wird

生涯、刃と供に血風と共に舞い踊る生涯なればこそ

Das Lied ist f?r mein Begr?bnis  
s der ?berreste unn?tig

我が葬送に歌は不要

Die Blume ist f?r meinen grave  
post unn?tig

我が墓標に花は不要

Ich setze fort, mit dem Namen

der toten Person zu sich selbst, das ich f?rbe, in meiner Seele zu schnitzen und wurdertig

朽ち錆びた我が身 我が魂に死者の名を刻み続ける

Wie f?r dieser K?rper ist es eine Konnotation... H?gel im Gravesteposts von der Phantasie, die das Ende von einer anderen Person weg abhakte...

この身は他者の終わりを刻んだ幻想の墓標達を内包せし丘...

Fantasy graveyard

幻想墓地であつた

「誰だったかな... 大事なものを近くに置いていればそれを血風と鉄爪が攫う...

そう... 言ったのは... 誰だったかな...?」

あの子に俺は安らぎを覚え始めている、このままではいけない

止まり木に止まっではいけない

その止まり木は... いや、龍が止まれる止まり木など有はしないのだ

から

「そうだな…世界を回ってみようかな……」

亮が一人つぶやく

「りょうおにいちゃん…どこか行っちゃうの…?」

扉がいつの間にか開かれており、不安そうな顔を見せているその子  
なのはがそこにいた。

### 第二三話 異端の詩（後書き）

アルクが時間経過でのみ回復するといっていたことを合わせて魔導師「精霊種の混血だと思っています。（相当に遺伝子が退化していると思います…）」

## 第一四話 当夜（前書き）

第一七部日常に追加があります

## 第一四話 当夜

なのははランランウキウキといったご機嫌な様子で廊下を半ばスキップで歩き亮の部屋へと向かう。

（一緒にお祭りに行くの！！）

桃子の関西人の血を受け継いだせいか、単純に性格が似たのかなんというか行事：特に祭り事となるとなんというか：血が騒ぐ！！のだ。

まあ、そんなわけで亮を明日行われる祭りに誘うべくなのはは行くのだった。

小さいなのはには少々高い戸の引っかけに手を伸ばし開けようとするとそれは聞こえてきた

Ich ?berlie? sowohl den Traum  
als auch die Hoffnung der Ver-  
gangenheit weit

夢も希望も遙か過去へと捨てて来た

Einfach, weil das Leben, um  
t Blutstill zu einem Tanz zu  
nzen, eine Klinge und der Auf-  
s  
eher ?berall im Leben wird

生涯、刃と供に血風と共に舞い踊る生涯なればこそ

Das Lied ist für mein Begräbnis  
s der?berrester unnötig

我が葬送に歌は不要<sup>レクイエム</sup>

Die Blume ist für meinen grave  
post unnötig

我が墓標に花は不要

それは唄だった、詩であつた。

ドイツ語で歌われるそれをなのはが聴解できるはずもないが、その言葉の本質はなぜか理解できた。

それは…己が生きざまを形無き形にしたものであつた。

否応なしに、あの初日にみた夢の光景がなのはの脳裏によぎる。

ただ、

死んだことが悲しくて

もう、

大切な人たちに会えない、ふれあえない、語りかけてもらえない

ただ、

苦しくて、痛くて助けてほしいと救いの手を差し伸べる

それに

もう、

どうしようもないと無慈悲に終わりを下す

それが自分の役割だからと、いつか生まれてくるものと出会うためだからと

刃を振り続けた一人の青年の生き様…

だけどそれに、普通を守った彼に賛美の声はなく  
有るのは畏怖の銃口と殺意の引き金それに拒絶の刃、

Ich setze fort, mit dem Namen  
der toten Person zu sich selbst,  
das ich fürbe, in meiner Se-  
ele zu schnitzen und wurde ro-  
stig

朽ち錆びた我が身 我が魂に死者の名を刻み続ける

彼はその魂にその人を、その腕に感触を刻み続ける。

自身が葬った者たちを彼はすべからず記憶している。

そう、彼は死を刻みつけ続けた結果心の痛覚が麻痺してしまった。  
あまりに痛すぎて、痛いと感じることができなくなってしまった。

Wie für diesen Körper ist es  
ine Konnotation. H?gel im gra-  
ve posts von der Phantasie, die  
das Ende von einer anderen Per-  
son weg abhakte…



この身は他者の終わりを刻んだ幻想の墓標達を内包せし丘…

ゆえに彼は、死を内包したモノ…

Fantasy graveyard

幻想墓地であつた

なのは幼いながらに感じていた。

月夜に異形や亡者を狩り、その血雨の中を駆け抜ける彼の表情は能面のように無表情の仮面をかぶっていて、その裏に痛いと助けると泣き叫んでいるように見えた。

だからこそ、笑ってくれると嬉しい自分が何かしてあげられていると達成感を感じ、彼がたまに見せる優しさが限りなくうれしかった。

この人なら自分を守り抜いてくれるという確信がある。子どもというのは総じて庇護を求める、居場所を求めるものであり、なのはにとって彼は言いようもない善人でありまた絶対の守護者であり自分が、自分だけが笑顔にできると自分がその人にとっての特別と認識できる唯一の人物であつた。

「そつだな…世界を回ってみようかな……」

亮が一人つぶやく

そんな彼がいなくなってしまうことを示唆する言葉を口に出す。それは、なのはの心をどうしようもなく揺らす

「りょうおにちゃん…どこか行っちゃうの？……」

彼がいなくなってしまう、それはまだまだ狭い世界観を持つ子供にとつて世界の大部分が消滅することにつながり亮がない日常を一瞬とはいえ想像したなのは言いようもない喪失感に見舞われる。

「そうだね…いつかはここを離れるのだろう。」

否定してほしかった言葉は肯定の言葉で紡がれる。

「嫌なの！…ずっと一緒にいるの！…！」

「分かってほしいな、俺はいつまでも此処に居るわけにはいかないよ。」

「なんでなの！…！」

なのはは亮に詰め寄る、かべにもたれ掛かり座っている亮となのはの視線が交差する。

「クツクツ……なに、今直ぐというわけじゃないよ。だから焦らないでくれ」

苦笑を漏らしながらに発する亮の言葉にほっと胸をなでおろすなのは

「心配させないでほしいの！」

むうとほほをむくれさせながらなのはが訴える。

「……それより俺に何か用事があつたんじゃないのかい？」

亮の言葉に思い出したかのようにハツとする

「そうなの……明日お祭りなの……いっしょにいくの……！」

「……すでに確定事項になっているぞ」

そして次の日の夜

高町家の玄関には3人の男が待ちぼうけていた。

「……遅いな、みんな何をしているんだ？」

「準備に時間がかかっているのだろう女性とはそういうものらしいからな……」

「はっはっはっは……！！二人ともまだまだ子供だな！！この待っている時間に女性が自分たちに美しい晴着を見せるために時間を要していると思えばごはん3杯は往けるだろう？」

なんか妙にハイテンションな高町士郎に微妙にひくその息子と亮

（なんか、今日の士郎は少し壊れていないか？高町恭也よ）  
（まだましな方だ。…結婚したばかりのときはこの比じゃなかった  
……………“二人”ともな…）

どこか遠い目をする恭也、その目じりにうつすら光るものが浮かんでいた。

（苦労したんだな…）

（わかつてくれるか！！）

（おおかた、高町桃子に着せ替え人形にでもされたのだろう？）

（やめてくれ！！思い出さたくない！！！！）

女物の着物を着せられて市中引き回しの刑に処された記憶はかなりの心の傷となつて高町の恭也心の奥底にこびりついていた。

・・・頑固な油污れ並みにしつこく

「あの時の恭也は可愛かったな！！さすが桃子だ！だから新しい娘がほしくなったのだから！！」

何かを思い出した高町士郎の口から驚愕の事実が告げられる。

「……………」  
「……………」

そっと恭也の肩に手を置く亮、

そして、

「強く生きる…」

「ああ…」

なんか、亮のねぎらいが心にしみた恭也であつた。

そして亮は感づいていた、これから先アルバムという超一級の災厄が一生ついて回りいじられ続けることにそれ故にこの言葉を贈つたのだつた。

「おまたせ……」

ガラガラと扉が開かれ女性陣が現れる。

桃子は清涼感漂う水色の生地に朝顔があしらわれた浴衣で高町美由紀は黒い生地にユリの花があしらわれた浴衣

そして、なのはは

桃子の足に隠れていた。

「ほら、なのは皆に見てもらいましょう?」

「だって……恥ずかしいの……」

桃子の浴衣の裾をつかみながら陰に隠れているなのは

「なのは、似合っているから大丈夫だよ」

「ほんと？」

顔だけ出して桃子を見上げながら訪ねるのは

「ほんとよ、ね？お母さん」

「そうよ、なのは飛びつきり可愛いから！！！」

「なのはの可愛い姿僕たちに見せてくれないかい？」

美由紀、桃子、土郎の3人に促され、やっと出てくるなのは

「どう……かな？」

恐る恐る問いかける。

その身は桃のような薄紅色の生地の色とりどりの泡が描かれたもので可愛いものであった。何よりもじもと恥ずかしがっている小動物の様な様子が可愛らしさに拍車をかけていた。

「なのはは可愛いなああああ！！！！！」

「よく似合っている…可愛いぞ」

「ああ…よく似合っているぞ」

「恭ちゃん相変わらず淡泊だね！！！」

テンションが天元突破しなのはを抱きしめながらほおずりする土郎、

普通に褒める亮、そしていつも通りの感想を美由紀に突っ込まれる  
恭也

ちなみになのはは士郎の頼ずりが嬉しいが微妙に嫌という表情をしていた。

「ふむ…時期外れにはなかなか大きな祭りだな…」

10月という季節外れの時期に催されるそれから小規模なものだと思っていた亮は驚嘆の声を漏らす。

八束神で行われているそれは心臓破りの階段の前に伸びる路地にも夜店が立ち並び大勢の人でにぎわい活気に満ちていた。

「そうよ、後で花火大会もあるのよ」

「それは楽しみだな」

「それよりもはやく行くの……！」

なのはは駆け出し、やれやれとなのはを追いかける高町家＋1の面々だった。

「…これはすごい人だからだ……な」

「これでは身動きが取れない…」

夜店が並ぶ路地は所せましと人であふれかえり、例えるなら人の波に吞まれているというべきか皆身動きをとれずにいる。

「みんな、逸れるなよ」

一家の大黒柱たる士郎がみんなに呼びかけるが…

「あつ！にやあ~~~~~~~~~」………」

桃子と手をつないでいたなのはが人の波に流され、浚われていき猫の鳴き声ような悲鳴は人のうごめく音とお祭りを彩る音楽の中に消えていった。

「なのは！！」

桃子が追いかけようとする。

「待て、ここは俺が行く下手に動いてはミイラ取りがミイラになる・  
・それに女性が一人で動くには少々危険だ」

亮が制止を掛ける。このような場所では必ず莫迦が混じっているから一人で女性が一人で動くのは褒められたことではなく、そうなるにあぶれて危険がなくなのはを探すには守るものがない亮が動くのが最適だった

「なのはのことたのんだよ」

「任せられたからには全力で見つけ出そう」



士郎の声を受けそして亮も人の波に消えていく。

「きゅう~~~~~」

人の波にもまれにもまれ目を渦巻き状にぐるぐる回したなのは人の流れの比較的少ない場所に吐き出される。

「目が~~~~~めが~~~~~回ったの~~~~」

なのははいまだ余韻でグルグルとまわり、やがてしりもちをついて止まる……がいまだ目はまわったままであった。

「……ここどこなの？」

やがてそれも収まり、立ち上がり周囲を見廻すが先ほどいた場所と全然違い、周りにいる人は皆見知らぬ人ばかりで小さい自分と比べ壁のように大きい人だからはなのはに不安と恐怖を覚えさせるには十分であり

「おかあさん……」

家族を探し歩み始めるなのは

「おとあさん……」

「おにいちゃん・・・」

「ついでにおねえちゃん・・・」

知っている人の呼び名をポツリポツリと呟きながら歩く、周囲を見廻すが知っている顔はなくまるでその人たちが得体のしれないもののように恐ろしく思えてくる。

「りょう……おにいちゃん……」

最後の頼みとばかりに亮の名を口にするなのは、その瞳は心細さから決壊寸前のダムのように涙が蓄えられている。

「みんな………どこ行っちゃたの?………」

「全く、ずいぶんと探したぞ?」

ポンとなのはの頭に手が添えられる。

なのははその手の主を見上げ、名前を呼ぶ

「りょうおにいちゃん!!!!」

“ドォーンっ!!!!ドォーンっ!!!!”

同時に遙か後ろで空に満開の花が咲く

「おや？始まってしまった様な…」

「にゃ！？急いでおかあさんたちのところいかなきゃ！！」

あわわといった感じでなのはが慌てふためく

「…………ふむ、今から合流するのは難しい」

「そんなぁ…………」

しよぼんとするなのは、それに亮はいたずらっ子のような笑みを浮かべる。

「だから、二人で特等席で花火を楽しむでしょう」

「にゃ？」

亮の言葉に首を傾げ頭上にでっかい？を浮かべるのはであった。

## 第一四話 当夜（後書き）

美由紀の扱いが雑だが気にしてはいけない

次でやっとバトルがかかる！！

（日常よりも戦闘の方が簡単な気がする・・・）

## 第一五話 探していた何か

「りょうおにいちちゃん？ここだと何も見えないの」

八束神社は山の一角に作られており敷地を少し離れると人気は一切ない山中へと変貌するそこになのはと亮はいた。

「いいかい、今から見るものは誰にもお父さんやお母さんにも言っちゃだめだ」

「なんでなの？」

「言っちゃたらまず俺は君といられなくなる」

「！！！！わかったの絶対に内緒なの！！！！」

「約束だよ？」

「約束なの！！」

（推奨BGM：君をのせて）

なのはと約束を交わし、亮はすうつと息を吸い込み、瞳を閉じる。

龍魂……解放っ！！

言葉とともに瞳が見開かれその瞳の瞳孔が縦に割れ金色に染まる

そして同時に背中から衣服を突き破り何かが生えてくる。

・・・それは骨組みだけの翼、竜の翼から翼膜を取り除けばそのようなような翼であつた。

しかし・・・次の瞬間には蒼い焰が背の付け根や翼の節目から溢れ出て蒼炎の羽となつて骨だけの翼をアツと言う間に蒼炎の翼へと変貌させる。

「……………綺麗なの……………」

蒼炎の翼が夜の山中をうつすら青白く照らし、それを背に携えるその姿はどこか神々しく……………なのははそれに見惚れていた。

そして亮は燐光を発する翼を背になのはにまるでおとぎ話のような台詞とともに手を伸ばす。

「では参ろうか、小さなお姫様？」  
リトル・プリンセス

その手に誘われるように手を取るなのは

亮はそのままなのはを抱え上げ、満開の花火と月の浮かぶ闇夜を見上げる。

「目を瞑っておいで」

亮の言葉に素直に従いなのはは目を瞑る。

次の瞬間、一瞬の無重力を感じる。

ちょうど空中に放り投げられたらこんな感じだろうと思い、そのあとに来るであろう落下の恐怖に備えるべく目を瞑り身を縮こませる。

「ほら、見てごらん」

しかし、そんな感触はいつまでたつても来ずに人の温もりも常に感じ、亮の言葉に従い恐る恐る目を開けると…

「うわぁ……………」

感嘆の声を上げるのは、その瞳には空高く舞い上がっているがゆえに通常のよりも大きくハッキリと見える大華が映る。

ドォーン！…ドォーン！！…ドォーン！！

幾つもの炎でできた満天の華が幾つも夜の空に浮かび上がっては消えていく…

そしてその火花がなのはと亮を照らし出す。

「すごい！！すごい！！すごいなの！！！」

ただ、何の混じりけのない感情で

ただ、ただ無心で、その輝きを鑑賞する。

ただそこにあるだけでこんなにも美しいと

純粹な思いで讃え、詞を紡ぎ感動している。

亮は、そんなのはに見惚れていた。

ただ、美しいものをありのまま感受できるなのはの綺麗な真直ぐな心  
それをありのままに表している笑顔：

（この笑顔を見て良かった…………）

苦笑や嘲笑、社交辞令などの意図的ではなく初めて心から笑えた、  
嬉しいという感情を完全に思い出した瞬間だった

なのはを抱え神社の近くの山中にゆっくりと降下し地面間際で数度  
羽ばたきながら着地する亮。

地面に足が着くなり蒼炎の羽は爆ぜ散る。

何枚かの羽がまるで無数の蛍が舞っているかのようにゆっくりと降  
下しながら消え、残った翼の骨組みもみるみる内に風化しひびが入り

やがて砕け散った。

なのはを地面におろし向き直る。

そして口を開く。



「…見ての通り俺は人間じゃない…翼をもった人間などいるわけもない…」

高町　なのは、君は俺をどうする?」

亮はなのはに問う。

なのはは亮の瞳を見上げ見つめる。

(推奨BGM:砂塵の彼方へ      R e v o   &   a   m   p ;      梶浦由記)

目とは心を映し出す鏡だ。

ゆえに本心で語り合うには相手と目と目を合わせ正面から向き合うことが大切だと両親から教えられなのはもそれが正しいと思っている。

そして、なのはは亮の瞳が最後の賭けに出ているような如何しようもない不安に彩られているように見えて仕方がなかった。

そして、翼を持った亮の姿と今の瞳の二つがそろったとき、なのははある物語を思い出す。

それは、どこにでもあるような御伽噺

午後五時頃のテレビでも放送していそうな本当にどこでもある御伽噺

ある時一人の天使がいた

天使は一人ぼっちで孤独だった。

さびしくて、さびしくて天使は人里に降り立った。

しかし、

「化け物め！！殺してやる！！」

人間たちは翼を持った天使を恐れ、あつてはならない存在と言い天使を殺そうとしました。

石を投げつけ、矢を放ち追い立てました。

天使は命からがら逃げ延び、泣きましたただひたすら泣きました。

自分以外誰もいない空で…一人ぼっちで

やがて、天使は雲になりその涙は雨となり世界に降り注ぐのです。

地上を追われる天使が翼を捨てることができたのなら人間とともに暮らせたかもしれない…しかし彼は…亮は？

その身に宿した異形の血は切り離すことはできない…彼は一人なのだ。

…いや、一人より尚つらい

彼が、人を守っても人は彼を受け入れない。

なのは自分と違うものをなぜ排除するのか分からなかったが御伽  
噺は実話をもにしたものが多いことも何となくわかっていた。

辛いのを我慢していたのもうすうす感じていた。  
だから、なのはがとる行動も必然と一つに決まっていた。

「大丈夫…大丈夫なの…」

身長がないことが悔やまれるがそんなことお構いなしに亮を抱きし  
める。

「りょうおにいちやんが例えお空で一人ぼっちになっても必ずなの  
はがお空まで行くの、だから……大丈夫だよ」

この翼を見せて嫌われるかも、恐怖されるかも、嫌悪されるかも…  
という疑念はあった。

その場合は高町家から消え、敵を排除した後世界を巡ろうと考えて  
いた。

……しかし、受け入れられたらどうするか

その答えはいまだ自分の中に無かった。

ただ…求め続けていた。

荒ぶる螺旋に刻まれた神々の断罪の果ての地で

血塗れて 磨り減り 朽ち果てた聖者の道を

あと一つ砂塵を超えたらきつと見つかる

砂塵せかいの彼方できつと見つかる

そう信じてただひたすらに歩き続けて…… やつと見つけた。

「りょうおにいちやんが例えお空で一人ぼっちになっても必ずなのはがお空まで行くの、だから…… 大丈夫だよ」

そういつてくれる存在を、考えもしなかったその言葉を…

これからそうするかなんてまだわからないが… ころころ返そう

目の前の小さくとも愛しき存在を抱きしめながらに

「ありがとう」

と返そう…… 感謝の涙と供に

やがて、しばしの時が流れた…

「さあ帰ろうか」

「うん！！」

亮はなのはとつなぎ歩き出す。

その時

“ヒュンっ！！！！”

空気を引き裂きながら短刀がなのはの眼前に迫っていた。

「え？……………」

「誰だっ！！」

なのはに迫っていた短刀はなのはの顔数センチというところで静止している。

その刀身を亮がつかみ止めていたが故に

人間では有り得ない超人にのみに許された超反射神経と超高速思考によってなせる芸当である。

亮の手はその手に握る刃によって切れ、紅い液体を滴らせているがそんなことお構いなしに闇を睨み付け、その先に誰もいないことを悟り亮の双眸の視線が動き回りその存在を探している。

「りょう……………おにいちちゃん……………」

なのはが不安の声を上げ同時に月が厚い雲に隠され周囲の明かりが消えた瞬間、山中の闇夜よりそれが

先ほどのなのはに投合されたそれを放ったであろう男が、亮となのはの死角から浮かび上がりなのはにその凶刃を振り下ろす。

“ガキイインっ！！！！”

亮は振り向きざまに虚空より二振りの刀を抜き放ちそれを止め、鋼が交差する金属音が夜の山中に響きわたり火花が散る。

「貴様：何者だっ！！」

言葉とともに裂帛の気迫を持って相手を吹き飛ばす。

「答える気はないようだなっ！！！」

左手の青い刀身の日本刀 禍風を手から離し虚空より黒鍵を抜き放ち空中にいる男に鉄甲作用という体術を持って投合し自由落下が始まる前に再び掴む。

“ヒュン”

それとほぼ同時に空中にいる相手も袖口に隠した短刀を投合、黒鍵を迎撃する。

“ガキンっ！！！！”

甲高い金属音と共に二振りの刃が宙を舞う。

そして地面に突き刺さり、月が再び顔をのぞかせあたりを照らす。

その男は純白の神父服を纏い首から金の十字架ロザリオを下げ身の丈ほどの装飾大剣を携えている。

どういわけかその片方だけ長くのばされた白い前髪で左半分が隠されていた。

「ふっ…御神に出会えたな…」

微笑と共に言葉を発する男、は二刀流の亮を御神と間違えたのか言葉紡ぎだす。

「殺しあつための技術と研鑽を血がにじむほどに重ねた同士…」

装飾大剣を外観からかなりの重量であろうそれを片手で振るい眼前

に構える男

「比べあおう…どっちがより上手く切って殺せるかを……」

東雲 亮の新たな戦いは本当の意味で幕を開けたのだった。



## 第一五話 探していた何か（後書き）

男はグリフというアニメ版トラはでてきて美由紀に倒された剣士です。

（レイブの加藤じゃないよ）

## 第一六話 スライサー

神獣召喚っ！！

亮はその手に携える対の双刀、白桜と禍風を虚空へと投げ言霊を発する。

虚空を舞う二振りの刃はそれぞれ激しく光を放ち閃光弾と同様の効果を放ちまわりにいる者たちの視界を奪う。

「刃菊、月砂！！その子を！！！」

御意

分かった

「にゃ~~~~~！！！！なんなの~~~~~！！！！」

激しい光の中でなのはの声が遠くにすさまじい速度で消えていき。自分の式神がなのはを遠くへ移動させたことにより意識を完全に戦闘者のそれへと切り替える。

やがて光が止み、山中が再びの夜の漆黒に覆われる。

そこになのはのすがたはなく無手の亮と装飾大剣を持つ男のみ

「…御神ではないのか？…まあい…」

狂った笑みを浮かべる男

「切って殺せばいいだけだからなあああ！！！」

大剣を振りかぶり男は亮に向け疾走する。

男はその名をグリフと言い、スライサーと称される凄腕の剣士であり病的なまでに剣同士の戦いを求めていた。

人とは自分が才を見つけ修得したモノを実践せずにはいられない生き物であり、生死に係るものであればあるほどその兆候は強い。

自分の命をチップに報酬を相手の命とし一瞬の油断も許されない命の駆け引きという究極のギャンブルに彼は魅せられたのだ。

彼は、それが強者であるならば鬼であろうとも、仏であろうとも切る。

それにしか生きがいを求められない鬼：剣鬼であった。

そんな彼のもとに流れ込んできた御神の剣士の情報、

彼は、思った“闘いたい”と

人間のプリミティブな衝動に従って生きる最低最悪の人間である彼は高町家の中で最も強い実力を持つ亮を狙い、彼を本気にさせるためになのはを狙った。

実際に剣を振るうのを見たことはなかったが間違いなく彼は剣士だとグリフは確信を持っていた。

情報を持ってきた男の頼みなどどうでもよかった、

グリフの望みは一つに集約されていた、本気の亮と戦いたいというそれだけに

真正面から豪速で振り下ろされる大剣、

亮はそれを真直ぐ見据え神秘を具現化させる言霊を発する。

コングリフ  
混合解除

“カアン”

甲高い音とともに大剣の軌道がずらされ場違いな方向に大剣が振り下ろされる。

放たれた剣圧で地割れが作られ砂塵が舞い上げられる。

だがその砂塵を切り裂いて刃が振るわれ、グリフは驚異的な反射神経と経験それに持ち前の勘の良さをから迫りくる刃を感じとつさに後方へ跳躍し回避する。

…しかし頬から紅い滴が流れ出て焼け付くような痛みが奔りそして思わず、口元を狂喜で歪める。

一陣の風が尻グリフに振るわれたそれを隠していた砂のベールを浚

い、それが月光に照らしだされ、澄んだ光を反射させる。

禍風：白桜よりも長大な二振りの大太刀：対神・対霊宝具　大包平  
それに蛭丸である。

亮は二振りの大太刀をその手に携え、グリフを鋭いまるでその手に携える双刀の如き目つきで見据え宣告する。

「貴様は俺の絶対不可侵領域に土足で踏み込んだ　　ここから  
先は其の意趣返しと知るがいい」

相対するだけでその身を千の刃に切り刻まれるような剣士特有の殺気、剣気が解き放たれる。

それを受けグリフは歪に顔を歪める歓喜で驚喜で狂喜で

「東雲家　番外位鬼切　東雲　亮　　参る」

「スライサー・グリフ凶刃をもって応ず」

二人の超越者は同時に動いた。

夜の住宅街、人気の無くなったその道を二匹の獣が疾走する。

一匹は夜の闇が凝固したような漆黒の体躯に紅い目を光らせる犬であり、もう一匹は純白の神々しいまでの白い毛並みの狐でありその

背に幼女を乗せ疾走していた。

「こつちだ」

「うん」

黒い犬が人語を発し、なのはを乗せた白い狐、月砂を誘導する。  
そしてそれに応える月砂

「え〜〜と、月砂ちゃんと…犬さんはどうしてしゃべっているの？」

「我<sup>オレ</sup>たちは奴の式神：自我を持った奴の武器だ。」

「もともと私は神で刃菊は巨魅なんだけどね：現実世界へ干渉するには憑代がいるんだけどそれが亮の刀というわけだよ。」

「??????」

月砂の言っている意味が分からずなのはは混乱するしかなかった。

「…あれ？月砂ちゃんとお話ししようとしていたなのはのがんばりは一体…」

「無駄な努力というやつだな」

“ガ                    ンっ！！！”

刃菊の言葉によりなのはは落雷のごとき衝撃が奔る。

「そ…そんなあ……ひどいのお…」

月砂の毛に埋まりながらなのはは落ち込むのであった。

「コンコン鳴いてるのはちゃんは可愛かったよ」

「にやあああああああ！！！！！」

「ちょ、毛をプチプチ引き抜かないでお願い！！後生だからあああ！！！」

後に月砂に十円禿がしかも大きめのものが出来、それを謝りながらなのはが慰めていたのは別の話である。

「でえい！！！」

ブウウン！！

グリフが全身のバネを使い装飾大剣を振るう。

“ドオオオン！！！”

巨大な鉄塊と称してもいいほどの大剣が神速で振るわれ空気を吹き飛ばし衝撃波となって山の大樹をプリンをフォークでくずすかのよう

うに吹き飛ばす。

「ふんっ！」

亮はその吹き飛ばされ粉々に砕け散った大樹の破片を足場に、次々

と飛び移り衝撃波によって舞い上げられた粉塵の中を移動しグリフの死角へ移る。

そして

そびえ立つ山の木の幹をけり、グリフへ弾丸のように跳躍する。  
そして右手の大太刀を振り下ろす。

「っ!!」

“ キン ”

亮の大太刀の一撃を直前に気づき剣を斜めに構えながら受け流すグリフ

二つの鋼が交わり耳障りな金属擦過の音とともに火花を散らす。

「破っ!!」

受け流されたと悟るや否やその勢いを利用し左の大太刀を地面に突き刺しそれを回転軸とし体制を変えグリフの左蟀谷に蹴りを放つ

「クッ!!」

とつさに左前腕を盾にガードされる。

“ カアアアン ”

鉄板を殴ったような音が響き感触が足に伝わる。



（手甲……いや、仕込刀っ！！）

亮がそう悟った瞬間右手の装飾大剣が振り上げられ、眼前に迫る。

「ちいつ！！」

“カアンン！！”

とつさに地面に突き刺していた左の大太刀を力任せに地面から引き抜き迫りくる大剣を弾きその軌道をずらしながら着地すると同時に地面を踏み砕き音が発生するよりも早く右手の大太刀を神速で突き出す。

「はあああ！！」

と同時にグリフも左袖に隠していた刃を袖から射出しその手に握りしめ亮の顔面に向け突きを放つ。

“ガキンっ！！”

「……………」

「何っ！？」

亮の放った大太刀はグリフの頭部右側面をかすり頬から齧谷、耳の上までを大きく切り裂き裂傷を作り出して、

対する亮に向け突き出された刃は…

（…僕の斬撃をこうまで躲すか、それにこんな傷を負わせるとは…期待以上だぞっ！…）

亮が口で止めていた。

グリフは左の仕込刀を放棄し後方に跳躍、体制を立て直し自分の頭部から顔にかけて作られた傷から漏れ出た鮮血を一掬いし、口に含む

「……“齒”で……白刃どり……面白いなあ…キミハア!？」

そして剣を正段に構えながらにグリフは顔に浮かぶ狂った喜びを表す狂喜の表情で狂言を発し続ける

「そうだ…剣士の戦いはこうでないとイケナイ…もつとだ、もつと来てくれえ…」

まるで薬物中毒患者が麻薬を求めるように狂喜の雄たけびを上げる  
グリフ

「もつと！もつと！もつともつとだっ！……！」

「…貴様は鬼だな！闘うことしかできない修羅の鬼だ……！」

亮は、目の前の男に嫌悪を感じていた。

今まで唯ひたすらに戦い続けてきたが、がらんとした心のままで歩んできたが

殺し合いに快楽を見出したことなど一度もなかった。

使命と僅かな希望にすべてをささげ闘ってきたが自らの道行だけは絶対に見失わない。

見失わなかった。

そんな亮にとってグリフは汚物に等しい存在であり、それが自分を

必ず一人にしないと云ってくれた少女を害しようとしたことが無性に苛立たしく思えてしょうがなかった。

「それがどおした？さあ、早く…早く来てくれえ！！」

「いいだろう　貴様という鬼を俺は“斬る”っ！！！！」

(…概念顕現は使用できない、空想具現化も複製魔術・霊祁剣醒いずれも発動プロセスが多い、行おうとした瞬間首が飛ぶ。そして

俺の剣を避けたのは直感と心眼のスキルそしてそれに追いつく驚異的な反射神経の賜物だろう…)となると奇襲奇策は無意味…)

幾ら異形の血を引こうが亮は人間の属性を持っているがために、純潔の精霊種と違い世界のバックアップを常時受けているわけではない、それゆえ概念の守りがないのだ。

サーヴァントや真祖の吸血鬼に通常武装が通じないのは彼らが幻想

の存在であり幻想の存在に普通の攻撃は通じないという概念、漠然としたイメージが顕現化し攻撃を無効化しているためであり。これを概念顕現と呼ぶ。

つまり、人間にとっての致死攻撃は等しく亮にとっても致死攻撃になるため一種の未来予知を修得している高位剣士は異能の使用を気配などから察知し必殺の一撃を繰り出すため亮は純粋な剣術のみで闘わなくてはいけないのだ。

ならば

「冥途への手土産とせよ、魔道と武道…決して交わるはず無い二道が交差するその時をつー！」

剣を向けたまま動くことのなかった二者のうち片方、亮が駆出した。

## 第一六話 スライサー（後書き）

大包平：国宝にして現存する宝具の一つ

姫路城で宮本武蔵が怨霊討伐に用いた刀で幽体に致命的なダメージを与えることができ真名解放は持ち主の魔力を吸収し斬撃として飛ばす。

日本刀の最高峰である大太刀で武器としての性能は他に類を見ないほど優秀

蛭丸

鎌倉時代に作られた国宝指定だが行方不明の大太刀、3月1日打たれ刃こぼれしても蛭の光が集まりその傷を修復すると言われている

宝具に関する説明

FATE本編でサーヴァントが使用する宝具は厳密に言うところサーヴァントと同じく座にいる本体の完全複写体であるため厳密な意味で言うところレプリカに値し座に記録された本体とは別に過去の英霊が生前使用していた武具も数は少ないがオリジナルが残っていることが稀にあり東雲が持ち出した二本の大太刀はそのうちの数少ない現存する宝具の一つということであり座の記録の原本と言えるものである。

## 第一七話 修羅の行方

（推奨BGM：真実の行方）

復讐：そのために生きて力を蓄え、練磨した。

やっと：やっと追いつめた復讐相手 衛宮 矩賢は俺の目の前で息子に撃たれて死んだ。

そして、自分を振り返り気づいた、

この身は血塗れて磨り減り  
心は潤いを失い、生きる目的を失った

だが、生きなければ成らなかった：例え意味などなくとも、意義などなくとも

それが、自分の責務であり両親の願いであつたから

ならば、生きる目的を生きたいと思う理由を探そうと思った。

幸福を探そうと思った。

だが、手遅れだった。

資料としてこの身を狙われ、あつてはならないと存在を否定され

一時的に協力関係を結ぼうとも目的が達せられた瞬間後ろから刺されたこともあった。

僅かながら心を通わせた相手を入質に取られ殺されたこともあった。三日三晩など比べ物にならないほどの人海戦術を充てられたこともあった。

世界のどこに居ようと執拗に探し出され駆り立てられる。

心が摩耗するのに大した時間は掛からなかった。  
絶望と虚無に心が染まるのに時間は掛からず

孤独という極寒に身をやつし冷え切ったと思っていた心は人間らしさを奪っていった。

だけど

世界の果てで俺は温もりに出会えた  
俺にとって彼女は

氷河期を終わらせる陽光そのものであり、冬の終わりを告げ春の始まりを知らせる桜のつばみであった。

故に幾度であろうと血塗られた力を振ろう  
君を守るためならば。

「冥途への手土産とせよ、魔道と武道…決して交わるはず無い二道  
が交差するその時をつー!!」

地面を踏み砕き、音を置き去りにして踏み出す。

体を駆け巡る赤い血に含まれる竜の血が目覚め、瞳を金色の竜眼に変貌させる。

風切音さえ聞こえることのない無音の世界へ突入する。

全魔術回路励起

行動確定

行動終了地点確定

眼前の敵は我が身を打ち砕くべく大剣を振りかぶっている。

その大剣は奴の間合いに入った瞬間、頭蓋を叩き割り首をへし折るだろうが

この業の前では無意味

「奥義：凶殺の魔翼」

時間跳躍

なぜなら始まった瞬間に終わっているのだから。

亮がグリフの間合いに踏み込んだ。

天性の柔軟であり高密度の筋線維が長きにわたる修羅道によって極限まで鍛え上げられ、それが振るわれる大剣に異常な速度と質量の



脅威をもたらし今まで相対したものの達の体を両断し粉碎した。

それが亮に向って、今振り下ろされた。

「奥義、凶殺の魔翼」

大剣の刀身が亮を“残像を叩き割った”。

“ダアアアアン”

むなしく空を切った大剣から放たれた剣圧が地面を断つ。

“ザッ”

後方で山の地面を踏みしめる音がグリフの耳にと届き、剣を片手に振り向くグリフ。

その時、

「グっ！？ガハアッ！！」

腹部に熱した鉄棒を突きこまれたような熱さが奔り、口から大量の血液が吐き出された。

自分の腹部を見るグリフ、その腹には純白の神父服が赤く染まり赤い模様を自身の血液によって徐々に広げていった。

自分が一切知覚出来なかった謎の攻撃、それにグリフはゆがんでいた顔をさらに狂喜で歪め、それを見つめる。

視線の先に血に濡れた刃を携える亮を。

亮は一匹の剣鬼を見つめる。

「は、ハハはツハ…強いなあ……強いぞあ…もっとだもつと殺ろう…」

グリフは腹と口から赤い血液を漏らしながら尚、大剣を杖にし立闘おうとする。

「もう、終わりだ」

すでに死に体、もう間もなくグリフの命の炎は消える。  
だが、グリフはなお命のやり取りを望む。

「もつとだあ、もつともつともつとだよあ……終わっちゃあいないぜえ!!」

「……修羅は獄炎にて地獄に帰せろ」

グリフを冷めた目で見据えながら両手に携える大太刀を舞わせながら地面に突き刺す。

そして力を左拳に集め、亮の手に蒼炎が宿る。

サラマンドラバーン  
炎龍燃牙っ!!!!

蒼炎が撃ち出され、其れは竜の頭を形作りグリフを飲み込んだ。

「ガアアアアアっ!!」

炎に包まれる凶戦士、しかし尚闘おうと剣をつた儘亮へと歩み寄る。  
恐るべき執念である。

「もつとだ、もつともつと・・・モットダア…モット…」

しかし、途中で燃え尽きた文字通りに。

未だに燃え続ける凶戦士を見つめながら亮はかつての己を思い出しながら呟く。

「…もしかしたら俺も、お前と同じ鬼に落ちていたのかもな…」

本当に僅か、何かのただ一つでも歯車がずれていたら自身も剣鬼に墜ちていたと亮は自分に言う。

両親がくれた矜持と心、義理の両親の願い、そしてあの子がくれた  
暖かさ

そのうちどれか一つでもが手に入らなかったら、目の前の存在と同じに墜ち、やがて自身の炎に焼き尽くされていただろうと亮は思う。

「ではな剣鬼、せいぜい地獄で鬼相手に戯れている…」

亮は剣鬼の燃え滓に背を向け歩き出す、決して振り向かず。

自身の有り得たかもしれないそれと決別し、帰るべき場所に帰るために。

そして…

「ただいま」

「おかえりなの……！」

## 第一八話

### 月見酒

空に浮かぶ黑夜を照らす三日月

太陽光を反射して闇夜に移るそれは太陽のような苛烈さを持たずただほのかな燐光で夜を照らす。

季節は秋に変わり、澄んだ空気はそれをはっきりと浮かび上がらせる中、浴衣姿の亮は縁側から月を見上げていた。

「月をこんなにも穏やかな気持ちで見上げ、純粹に美しいと思えたのはいつ以来だろうか…」

あちら側では月の存在は戦闘における有視界領域の判定と発見の危険度の指針でしかなかった。

月を見上げながら亮は一族に伝わる歌を口ずさむ。

それに、楽譜はない父から子へ子から孫へ代々口伝で受け継がれてきた詩。

自分も父母が歌っているのを聞いて覚えた。

眠れる楽園に彩られ

流れ落ちる星、時、夢は瞼を閉じる

透明な指先で綴られた言葉の扉に鍵はなく

いつしか連なる世界の中で玉なる幽幻の嘆きも慎む

眠れよ子らよ    あなたたちの翼はまだ若く    この地の安らぎの  
枝はまだ遠い

眠れよ子らよ    あなたたちの足はまだ弱く    凍れる大地はまだ  
痛い

奏でる祈り、誰へと届く

いつしか消える記憶の淵で    それでも私はここにいる

いつの日か    約束の地を踏みしめるその時まで

それは世界に詠いかける旋律<sup>メロディ</sup>

究極の概念を顕現させる聖句にして呪詛

一つ一つの音が響き言霊に意味を持たせ星間領域に干渉し世界を変  
える歌となる。

あらゆるものを眠り付かせ、凍りつかせる子守唄

それが

ソフィア・コード  
天音律

「なかなか綺麗な歌だね」

「士郎か…」

声をかけられ振りむくとそこになのはの父である高町士郎が御猪口と焼酎を持っており、  
やがて横に少し間を置き腰を付ける。

「一杯どうかな？」

焼酎の銘柄を亮見せながら、月見酒を奨めるのであった。

御猪口を受け取りそれに酒が注がれ、それを一気に口に含み飲み干す。

「おっ！いい飲みっぷりだね。」

士郎は感嘆の声を上げ  
胸を焼くような熱さを覚えながら亮は月を見上げつつ士郎に問いかける。

「何か、話があったのではないのか？」

「そうだね…」と

自分も酒を口にした士郎は亮の御猪口に酒を注ぎながら口を開く

「なのはを守ってくれたようだね、それについて礼と…君について少し聞きたいな…君の剣は修羅のものだそれぐらい僕でもわかる。それを身につけつつどうして道を見失わなかったのか聞きたい、な

のはの父としても一人の剣士としても」

士郎は亮が戦う光景を一度見ており、感じ取っていた。

亮の剣は御神のように先祖代々長い時をかけて完成された剣ではなく血塗られた戦場の業火と血で鍛え上げられた、ただ相手をいかに早く切り殺し退けるかその一点のみに特出したそれはさずめ妖刀ともいえる修羅の剣であると。

亮は器に注がれた酒に移る月を見ながら口を開く

「なに、簡単な話だ…昔、異能を使う一族が4つ存在した。

しかしある一つの一族を除いて異能の力は時と共に消え、残った一族を残りの一族は妬み、保身を兼ねて異能の力を狙う外道と手を組んで滅ぼした。

だが、その一族最後の子供は生き残った。」

「…それが君か」

「そして居場所を失った子供は名退魔士の夫妻に拾われてその名の大部分を捨てて、それなりの幸福に包まれて過ごした…だけどそのうちには消えることのない憎悪が宿っていた。

それから十数年後に少年は青年に成長したが悲劇が起きた、相對した異形との戦いで義理の両親を失った。

もうどうせ待つものがないのならと青年は旅に出た…復讐の旅に…

存外早く見つかったさ復讐相手は…

そいつは不老不死を目指していてその資料として一族を狙ったそうだが、青年は刃を手にそいつを追いつめた…だけどあと一歩というところ



「ここでそいつは正義を志す自分の息子により撃たれて死んだ…」

「君の復讐は終わってしまったのか？」

「ああ、あつけないものだろう…」

士郎の言葉に相槌を打ち酒を煽る。

「…それから本当の地獄だった。」

亮は空になった器を見つめながら空虚な瞳を晒す。

「ないがあつたんだい？」

「異能の存在がある集団に見つかった。聖堂教会という人間以外の霊長類は神を汚すものだと思じてやまないもの達に異能の存在が知られんだ…そいつらとある研究者いや、探究者というのが正しいのかな…まあどちらでもいい…がそいつらに狙われた。」

…そこからはただの戦いの連続だった。昼は人間、夜は異形…たまに人間も混じるが、朝も昼も夜も…血を見ない日などなかった、殺さなかった日などない、それが当たり前だった。…そうやって日々を生きていくうちに俺の剣は形を為していったのさ」

「辛くは…なかったのかい、罪悪感とかそっいうのは…」

士郎の言葉を飲み込みつつ再び酒に浮かぶ月を見つめる。

「罪悪感は微塵もなかった…だけど、誰にも理解されない誰も平等に見ない誰も近づけてはならない…そう悟ってからは少し楽になっ

た…いや、麻痺していたのかもしれない。

…それでも藁にすがる気持ちでいつか今を変えてくれる誰かが現れるのを待ち続けた…あの世界では結局現れなかったがな…」

自嘲気味に微苦笑を漏らす亮

「…凄まじい人生だね…」

「そうでもないさ、ただ悪あがきをし続けただけさ。

理不尽な不幸など人生に付き物さ、特に異端であれば必ず大なり小なり経験するもの…俺はあがいて足掻き続けた結果それが長引いただけだ。」

「ひどい言い方かもしれないけど、そんな人生でなぜ生き続けようと思ったんだい？」

どこかおだやかな微苦笑を浮かべながら亮が答えを言う。

「両親の願い、俺が生き続けることが両親がいた事の証明だ。それを消すことなどできなかった。

…それに不幸の後の幸福ほどそれに勝るものなどあるまい？」

いたずらっ子のような笑みと共に言い切る。

永遠などない終わらない夜はない、そう信じて生きていれば、生きてさえいれば希望はやって来る。

それを希望に獄炎の中を駆け抜けてきた言っているのだが。亮の答えに士郎は戦慄を覚える。

いつともしれない希望を持って戦い続けることができるほど人間の心は強くない、できるとすれば人間の体に生まれついた化け物だ。そして、亮の身の上はいくらかの相違はあれど自分たちと同じ…いや、尚ひどい

彼が嘘をついていると土郎はどうしても思えなかった。

なのはに向ける笑みや、態度を見ても彼はそう器用な類の人間でないことはすでに知っていたからだ。

「それにしても、僕は息子と杯を交わすのが夢なんだけど恭弥のやつ下戸でね…どうにかならないかい？」

「経験上言わせてもらうなら…慣れるしかない！弱くても慣れればどうにかなるものだ」

（作者は高知県出身なのですが下戸のおじさんがそれで鍛えられ何とか飲めるようになってました（途中かなり泣きを見ていたが））

何気に恭也の死亡フラグを強化しつつ土郎と亮は杯を交わすのだった。

八束神社近辺の山中

“ざっざっ”

一人の男が湿った獣道を歩きやがて亮とグリフの決闘の跡地へとたどり着き踏み込んでいく。

男は珍妙なことに爪先立崩さず赤い目が異様な雰囲気をもたらしている。

その赤い目が人型の燃え痕を見つける。

「…なるほどこの人間臭い妖気、誰かは知らんが混ざりモノが一緒にいるようだな。

ククク…なら同じ混ざりモノ相手してもらおうとしよう…楽しみだ恐怖に歪んだ上物の魂は格別だからなあ…」

男は舌なめずりをしながら想像する。

生きたまま手足をもぎ取り若鶏の手羽先のように貪り、内臓をソーセージのように食い千切り

目玉を抉り出しキャンディーのように舐めながら味わい、頭蓋をかち割り脳髓をココナッツミルクのように吸い出す。

そしてその最後にその魂を食らう光景を

男にとって白鮭の鮭児にも等しい幻ともいえるほど希少な食料を食らうその瞬間を思い浮かべ舌なめずりする。

その時、男の腹の虫が鳴る。

「いかな、ここしばらく人を食っていなかった…だが大人は臭くて食べたものではないのだがなあ…背に腹は代えられんか？」

まるで夜食のメニューを考えるように男は人を喰うのを脳裏にうかべ獣のような笑みを浮かべるのだった。

## 第一九話      ファントム・レディ

「おはよう」

亮が桃子と一緒に食事の用意しているとなのはが瞼をこすりながら寝間着で居間に出てきたので亮は声をかける。

「おはようなの！ーりようおにいちゃん！ー」

「なのちゃんは今日も可愛いな。」

「うにゃーてれくさいのー」

亮の言葉で全身を使い喜びを示すなのは。

最近亮は、なのはに対して明るく優しく接している。

というよりも自然体でいることが多くなってきていたそれ故に亮の生来は大らかな性格であり口調も柔らかくなっているのだ。

なのはもなのはで日中どうしても一人でいることが多くなってしまっていたが亮が来てからは面倒を見てもらっているので自然となっている。

父と兄が嫉妬という砥石で刀を研ぐほどに

「なののはは今日どうするの？」

朝食の席で桃子がなのはに話しかける。

ハムハムとジャムの塗られたトーストを頬張ってハムスター状態に

膨らんでいたが数度に分けて口の中のモノを飲み込み言葉を発する。

「かずさちゃんと、はぎくちゃんと、りょうお兄ちゃんと一緒に遊ぶの!!」

「そうか、よかったななのは!!」

「なの!!」

士郎に元気よく答えるのはだった。

秋の過ごしやすい空気、  
夏のように湿気に満ちておらずかといって冬のように乾いていない  
適度な湿度と適度な涼を感じる気温が肌に心地よい。

そんな秋の空気を感じながらなのはと供に俺は道を歩いている。

「あつ! ススキなの!!」

なのはが道端のアスファルトから顔をのぞかせる其れに気づき駆けやる。

「にゃっ!?!」

が…つまり足が宙を舞い体が浮き次の瞬間には重力に従い落下する。

「ふっ！」

地面を人外の脚力の何万分の一という力でけり、風のように移動したのはが落下し始めるよりも早く抱きかかえる。

「ほら、気をつけろといつも言っているだろう？」

なのはを地面におろしながら注意する。

「ごめんなの…でもありがとうなの」

少しシヨボンという擬音が聞こえてきそうな様子で落ち込むが次の瞬間、向日葵ひまわりのような笑顔で礼を言ってくれる。

この笑顔を見るたびに胸を掬うような感覚を覚える。

…この感覚はとても心地いい。

「どういたしまして…ほら、転ばないように手をつないでいこう？」

「あい!!」

小さな手が重ねられ、その子供特有の高い体温が暖かさをもたらす。どこか、胸の奥の何かがにほのかに灯りが灯るように感じる。

「りょうお兄ちゃん…て、治ったの？」

グリフとの一戦でなのはを庇い付いた傷を心配しているのだろう。

「もう、傷一つ残っていないよ」



短刀をつかんだ方の手を見せながら言う。

「…なのはいつも守ってくれてありがとう」

向日葵いや、もっと穏やかで優しい色合いの花、例えるなら桜のような笑顔でなのはが礼を言う。

その言葉に自分でもわかるほどに目が見開かれる。

なんだろう、ずっとこの一言がほしかった気がする

人知れず世界を救うか…大した美談だな  
人生は目が覚めているだけで楽しいのだ。

しかし、貴様は眠ったままだ。遙かなる過去より貴様は一瞬たりとも目覚めていない

二人の魔道元帥の言葉が脳裏に浮かぶ。

「どういたしまして」

霸道 鋼造、ゼルレッチ…俺は、俺の意志で生きる

これが ゼルレッチの言葉を借りるとするなら東雲 亮という人間が完全に目覚めた瞬間であった。

なのはと手をつなぎ道路横の歩道を歩む、この光景を見たら何も知

らない人は親子か年の離れた兄妹とみられるだろう。

時折追い越し、通り過ぎる車が若干不愉快ではあったがいつもと変わらない日常を満喫している。

曲がり角曲がる、見えてきた景色は日常ではなかった。

「あんだ達何すんのよ!!!」

「急げ!!!人が来ると厄介だ!!!」

赤い基調の洋服の軽くウェーブのかかったブラウンの髪を靡かせる少女が如何にも数人の怪しいと言わんばかりのサングラスをかけた男たちによつて車に押し込められている光景だった。

「ムーっ!!!ムーっ!!!ムーっ!!!ムー……」

少女の声はその姿と供に車の中に消えていきやがて、車はキイイイというアスファルトとの摩擦音を残しエンジン音と供に遠くへと消えていく。

「りょうおにいちゃん……」

つないでいた手が引かれる。

「どうしたんだい?なのちゃん」

「あのおねえちゃん助けてあげてほしいの……」

悲しそうな瞳で自分を見上げる少女、しかし下手に厄介ごとに手を出すとは碌なことにならない。

あのような裏の連中は報復を絶対忘れない、それが裏の掟であり生き残る唯一の術だからだ。

「…それは俺の仕事じゃない、警察の仕事だ。急いで交番に行こうか？」

「なんでなの！？りょうおにいちゃんはなのはを助けてくれたの！だからあのお姉ちゃんも助けてあげてほしいの！！！！」

心が鋼刃に似る鋭さを持っていることに気づいてはいるが首を横に振る。

「俺たちとは関わりがない、助ける理由がない。なのちゃんにはまだ分からないと思うよ…」

「……なんでなの…う、ひっぐ…なんでそんなこと…い、いうの…」

なのはの目に涙がたまり涙滴となって零れ落ち地面に模様をつくる。

「あの、お姉ちゃんきつとひどいことされるの…辛くて、苦しいこといっぱいされると思うの…なのははそんなのいやなの…りょうおにいちゃんならきつと助けてあげれるの…だから助けてあげてほしいの…」

……この子は他人のために泣けるのか

なのはの純真で真直ぐな心、それを持っているが故に今この子はその心を痛めている。

ふと、自分の手が震えていることに気づく

そうか…俺は怖がっていたのか

かつての間に踏み込んでからの血みどろの戦い…それを忌避し理由をつけて遠ざけようとしていた自分に気づく。

「…あの子は俺にとってどうでもいい存在だ。」

「そんな…！」

なのは顔が跳ね上がり幾つもの涙が宙に舞いきらきらと反射しその一つ一つが亮となのは反つしている。

「…だけど、君を泣かした原因を作ったあいつらは万死に値する。ついでにあの少女も助けるとしよう。」

「りようおにいちゃん…！！！」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃだがその笑顔は綺麗だった。

刃菊、月砂

御意

棕解

腕の袖から光と影が飛び出、蜷局を巻き形をなし月砂と刃菊が現れる。

「なのちゃんはいつもの公園で二人と遊んでいてくれ」

「なの！！！！」

そう言い残し、地面を踏み碎き翔け出す。

「がんばって！！りょうおにいちゃああんっ！！」

なのはの声を背に一陣の風となって翔ける。

昏い廃墟のビル、ひび割れた床や割れた蛍光灯が散乱するその部屋でそこに数人の黒服の男たち一人の少女が縄で縛りあげられ地面に転がされておりその周囲を取り囲むように数人の男が銃火器を携えている。

「バニングスさん、お宅の御令嬢を預かっております。こちらとしては事を荒立てたくはないので指定の口座に……………なに？娘は誘拐されていない？……………おいそいつの名前ちゃんと確認してんだろぅな！？」

黒服に金髪と言った出で立ちのリーダー格の男は電話相手の予想外の返答に声を荒げながら部下に怒鳴り散らす。

それを受けて、しばらくあげていた少女の口を塞いでいたガムテープを剥がし確認を取る。

「おい、貴様の名前はなんだ？」

一人の部下が、少女の首にナイフを突きつけながら問いかける。

「アリサ…アリサ・ローウェルよ…」

消えるような細い声でやっとそれを口にする少女。

「なに！？」

「人違いだつてのか！？」

ファーストネームは同じだが全くの別人、外見はよく似ているが年齢も全く違い髪と瞳の色も違う。

「何やってやがる！！この役立たずがつ！！！」

「ひいい！！すんま…」

“ハシュ！！”

リーダー格のスーツに金髪の男は懷から銃を引き抜き、確認作業を怠っていたメンバーに向け引き金を引いた。

サイレンサーがついていたため空気の抜け出るような音しかないがそれは確かにメンバーの眉間を貫く。

“ドサ…”

眉間を穿たれた男の体は宙に浮き、やがて重力に従い落下し虚ろな瞳を晒しながら地面に紅い模様を描き出す。

「……………」

あたりが静寂に包まれる。

「り、リーダー……」

「なんだ!？」

メンバーの一人が恐る恐る声を掛けるが不機嫌なリーダー格の男は怒鳴り散らしながら

「こいつは中々の上物ですから、それ相応に調教して売りさばけばそれなりの金になる思っているのですが……」

「フム……」

「ヒッ!！」

メンバーの男の失態を少しでも補おうとする苦肉の策ではあったが確かにそれなりの金にはなりそうだと男はあたりを付ける。

その自分を値踏みするような視線に短い悲鳴を上げるアリサ・ローウェル。

「確かに結構な金になりそうだな……よし、お前から相手してやれ」

「へへへ……リーダーも気前がいいな」

「ああ……まだちとシヨンベン臭いがいい声で鳴いてくれそうだ……」

下劣な笑みを浮かべにじり寄ってくる台の男たち、アリサには男たちが得体のしれない化け物に見えて、恐怖のあまり金縛りにでもあったかのように動けなくなる。

「おつと動くなよ、大事なところがズタズタになっちまうかもしれないからなあ」

舌なめずりしながら一人の男が折りたたみナイフを出し、衣服を切り裂いていく。

いや、誰か…誰か助けて!!!

孤児としてこの世に生を受け、IQ200という非常識な高い頭脳を持ち、それ故に孤独  
それでも必死に生きていたというのに、こんな下劣な奴らに…しかも人違い

「いや…来ないで…だ、だれか…たすけ……」

「無駄だよお嬢ちゃん…こんなところに誰も来るわけないだろう？」

「誰か!!! 誰でもいいから私を助けて!!!」

“ダアアアアアあん!!!!”

少女の無垢な叫びに応えるように部屋の天井がブチ抜かれ黒い何か



が舞い降りる。

コンクリートの粉塵でその姿は見えないが声が響く。

「分かった、聞き届けよう！！その願い」

なのはと別れた後、亮は町に並ぶ建築物の屋根や屋上の上を飛び跳ね先ほどの車を探す。

同時に、この海鳴市すべての自然物と視覚を共有する。

星の一部である精霊種は自然物に限りだがあらゆる干渉が可能となる。

もつとも二重の意味で純粹の精霊種とは違ったため少々骨は折れたが、まるでトンボの複眼を見ているように幾つもの視覚を同時得てそれはすぐに見つかる。

なるほど、人気がない廃ビル…場所選びは普通だな

移動拠点でも持たれていれば厄介だが急場しのぎの拠点であるならばいくらかでも手はある

この手のテロリストのような連中は攻めることは慣れていても攻められることになれたはいない。

思考しているうちに目的の場所の上、廃ビルの屋上に降り立つ。  
強い風が吹き抜ける、髪を揺らす。

「術式遠隔起動：虚数展開カタパルト作動…」

左掌に幾つもの魔術文字が燐光を放ちながら溢れ、組み合わせりラインとなりさらにそれは広がり魔法陣を展開する。

そして、腕を振りぬく。

そして魔術文字で編まれた魔法陣は一瞬のうちに消え、漆黒のロングコートがその手に携えられている。

「これを着るのも思えば久しぶりだな…」

少々感慨にふけりながら袖を通す。

「魔術回路接続……概念顕現」

漆黒のコートに幾つもの魔術文字が流れ、まるで蛍のような燐光のラインが無数に奔る。

この身は、竜の血を引いているが故に鬼門となる存在や法具、宝具は数えきれないほど多い。

単純な洗礼系の攻撃は人の属性故に無効化できるが竜殺しだけは無効化できず、あと純粹な攻撃も致死威力であれば驚異となる。それを補うため作り出したのがこのコート。

聖骸布で編まれ、イブン・ガズイの粉薬を水銀に溶かしたものを染み込ませて魔術的加工したそれは魔術回路を形にしたような構造であり魔力を通すだけで対魔力などの守護の概念を生み出すサーキットとなる。

「龍魂覚醒」

体を流れる紅き血に含まれる竜因子が活性化…肉体を人外のそれへと変化させる。

其れによつて瞳は金色の竜眼に変化する。

「いや…来ないで…だ、だれか…たすけ……」

「無駄だよお嬢ちゃん…こんなところに誰も来るわけないだろう？」

「誰か！！誰でもいいから私を助けて！！」

圧倒的に向上した全感覚が建築物と空気という触媒を伝わる振動…声を認識する。

「時間がないな…」

前屈姿勢を取り拳を引き絞る。

と同時に魔力を魔術回路に流し込み術式を発動させる。

振り上げられた右前腕に燐光を発するラインが奔る。

重力・慣性制御

「破あつ！！！」

裂帛の気迫を含んだ呼気と共に拳を撃ち落とす。

概念の守りはこの時ツクルダスターとしても機能し威力を外的要因で度外視に増した拳はこれが無くては自分の威力によって粉々に吹き飛ぶ。

“ドオオオオオン！！！”

意図的に重たくされた拳とその衝撃波が廃ビルを一直線に少女が囚われてるフロアまで直通の道を作る。

同時にあたりに響き渡る轟音が人を集め敵の脱出をより困難とし少女の保護を早める要因となる。

体が巻き上げられた粉塵の充満する縦穴の中を落下する。  
そして外道どもが立並ぶそこに降り立ち、

少女の無垢なる叫び、切実な願いに応える。

「分かった、聞き届けよう！！その願い」

肉体溶け込んだ、霊刀にして現存する宝具にして日本刀の最高峰  
あちら側で国庫から拝借した其れの構成物質を分離、再構成させ左腕に顕現させ携え、俺は駆出す。

## 第一九話 ファントム・レディ（後書き）

拝借：って泥棒！！

アリサ・バニングスとアリサ・ローウェルが同一人物と誰が決めた！！

ファーストネームと同じ顔以外共通点はない！！

ローウェルの方はなのはたちより5歳年上ってことで

そのくらい実家の近所にもいたわ！！（マジで同じ顔で同じ名前だったんだ苗字は違ったがちなみに姻戚関係もない）

アリサ・ローウェル

廃ビルに居た地縛霊、原作とらは3のなのはと友達になり彼女との別れはなのはの心を大きく成長させた。

原作の数年前廃ビルで凌辱された拳句殺され、IQ200の超天才、ハーフ、孤児という幾つもの要素から孤独の中に常におり自分のために泣いてくれる友達がほしいという未練で成仏できずにいた。

なのはのアリサ・バニングスとは外観とファーストネーム以外共通点は一切ない。（髪も目も声も違う）

## 第二十話

「ふわふわなの～～～」

「ZZZZZZ……………」

亮を待つ間、なのはは地面に寝転がっている月砂に乗っかり毛に埋まりその肌触りを満喫している。

月砂は月砂で惰眠をむさぼっている。

「ガウ…（緊張感のかけらもない奴らだな…）」

いや、信じているからこそか

地面に腹をつけながら呆れつつも二人を見守る刃菊しかし、今にも消えそうなほどか細いそれに気づく

む、微弱だが妖気と霊気を感じる

首だけ向きを変えそれに視線を向ける刃菊。

その先には茂みがありガソゴソと不自然に揺れ動いている。

起きろ月砂！何か来る！！

念話でもう一人の守護者を叩き起こす。

「くう～～～ん…（むう、この程度私が出なくても刃菊一人でどうにでもできるでしょう？）」

若干不機嫌ながらもしぶしぶと言った感じで起き上がる月砂

そうこうしている間にも茂みの揺れは大きくなり

「くうくうん」

小さな子ぎつねが現れた。

「にゃ！！ちっちゃなかずさちゃんなの！！！」

なのはのツインテールが跳ね上がり目がきらきらと光り輝く。  
そして子ぎつね向けて駆出そうとする……………が次に子ぎつねの口か  
ら放たれたそれによって固まる。

「おかあさん…………」

「にゃ！？」

「は！？」

「え！？」

三者三様の間抜けな声が上がリ秋の風が吹き抜けるのだった。

粉塵を突き破って現れる黒衣の青年、亮は姿勢を極限まで低く地面  
すれすれの高さを速さを持ってその姿勢を維持し移動し外道たちに  
迫る。

「くっ撃て！！」

一斉に銃口が向けられ数十の鉛玉が音速を超えて殺到する

全ての銃口から情報の並列処理・状況認識能力を極限まで極めたものが到達できる一つの頂

スキル：影視を持ってすべての弾道を予測し視覚化してその隙間をすり抜ける。

そして

「少々痛い目を見てもらっぞ…っ！！」

メンバーの男の一人の懷に一気に踏み込み右から左へ横風の一線を峰で放つ。

“ドガっ！！”

鈍い音が鳴り、男が地面に転倒する。

しかし

（手ごたえが妙だ…）

打撃際の刀から伝わる感触に違和感を感じる。

“ダンっ！！ダンっ！！”

と感じた瞬間に男が寝ころびながら銃を放つ。

「くっ！！なにか着込んでいやがったか」



“キーン！キーン！！”

驚異的な動体視力と反射神経それに走りながら針の穴に糸を通すような驚異的な技術を持って弾丸を左手の大太刀で切り飛ばす。

しかし、そのために足が止まってしまふ。

「今だっ！！一気に撃ちまくれ！！」

号令と共に無数の弾丸が全方位から放たれる。

それは一瞬のうちに亮の身を砕きひき肉へと変えるはずだった。

### 風刃剣醒

亮の眉間3センチといった距離ですべての弾丸が止まっていた。弾丸の周囲には絶えず風が渦巻き捕縛している。弾丸は風の鎖に囚われたのだ。

そして

左手にあった大太刀はその姿を変えている。

規則正しい波紋の浮かんでいた透き通るような鋼色の刀身はまるで水晶のような半透明の直刀へと変じていた。

「…颯……切り砕けっ！！」

言葉と共に無手の右腕を振るう。

すると一斉に捕縛されていた弾丸は砕け砂となって消えていった。

まるで見えないミキサーに掛けられた様に…

「では、峰打ちが効かん以上かなり痛い思いをして貰うぞ」

“ダッ！”

音を置き去りにして再び駆ける。

「化け物がっ！！」

懲りずに再び銃弾が殺到する。

「フっ！」

吐き出す息とともに地面をけり反転、天井に着地し“そのまま駆ける”。

男たちの目が見開かれ顔が驚愕の色に染まる。

天井蹴り反転、慣性の法則により男の真ん前の位置に着地することとなる。

“ヒュンヒュンヒュン”

三度、空気を裂く音とともに目にもとまらぬ速さで颯を振るっ。

“ブシャアアアアアア！！！”

男の利き腕、両足から真つ赤な鮮血が噴き出る。

「ぎぎやああああっ!!」

耳を劈く様な悲鳴をBGMに次の敵に迫る。

「くっ!!」

迫る亮に銃口を向ける男

“ヒュン”

銃を向けた瞬間すでに亮は踏み込んでおり再び風切音と共に刃が降られる

「え…?」

間抜けな声とともに手に持っていた銃の銃身が切れ、内部に仕込まれたスプリングの力によって分解し部品が散らばる。

「腹にいくら着込んでいようと顔面が無防備なら…!!」

呆けている男の顔面に右拳をたたき込む。

「そこを狙わない手はない」

”ドガッ!!”

「みぎやつ!!!!」

妙な声を挙げながら鼻血を吹き出しながら男は白目をむいて地面に倒れ伏す。

そして残りの敵を見据えながら不敵に亮は口元を釣り上げる。

「ぎゃぱら!!」

最後の一人が悲鳴と共に地面に倒れ伏す。

地面に倒れ伏す男たちは皆手足を切り裂かれ顔面を強打しているため口や鼻から鮮血を垂れ流し、うめき声をあげている。

が一人たりとも死んいない…が手足の腱は断ち切られ繋ぐ事は出来るだろうが二度と元の筋力は戻らない。

「さて、最後は貴様だけだな。」

（不殺はなかなか面倒だったな…）

おそらくリーダー格であろう男を見据えながら亮は言葉を発する。

男は少女の首に腕を回しその首にナイフを突きつけながら銃を亮に向けている。

少女は恐怖のためか硬直ししゃべることさでぎずにいる。

「くっ…化け物が！貴様の目的はなんだ！？」

「とりあえず、その御嬢さんをこちらに渡してもらおう、痛い目にあいたくなければな」

「はい分かりましたとでも渡すと思ってんのか！？このガキを無事に離してほしければ素直に逃がしやがれ！！」

「……忠告はしたぞ」

「なに………を………？」

亮は刀を投げ捨てると同時に男の懷に一気に踏み込み両手首を掴み不敵に言葉を短く発する。

「潰れろ」

“ゴキンっ！！！”

一気に素手で戦車であろうとただの鉄屑へと代えてしまっほどの力が籠められる

嫌な、骨が砕け靱帯がグヤグチャに成る音が響き、意識を白く点滅させるほどの激痛が男を襲う。

「ぎ、ぎゃあああああああああああああ！！！！」

「腕の骨が砕けた程度で吠えるな」

腰の入ったジャブが顎にあたり脳を揺さ振り男の意識を刈り取った。

「きゃ！」

それによって支えを失った少女が倒れるが地面に落ちるよりも早く  
亮が抱える。

「無事か？」

「え、ええ…ありがとうと言つべき？」

颯を拾い上げ、少女を拘束していた縄を切り、気絶している男の衣服を剥ぎ取り少女に被せる。ついでに気絶している男たちの財布の中身の現金も一緒に剥ぎ取っておく。

RPGで盗賊から金銭がもらえるのはこのシステムがあるからだとしみじみ思う。

そして、縛られていたせいか赤くなった手をさすりながら少女は聞く。

「どういたしまして…とでも言つてほしいのか？」

「普通、聞き返す？」

「知らん、強姦されかけた割には元気だな」

「おかげさまでね…それよりあんた名前ぐらい教えなさいよ！！」

「貴様に名乗る名は無い！！」

馬鹿正直に答えるのが少々尺で何か余計なことに巻き込まれそうな

気がしたのでこの前なのはと一緒に見たアニメのセリフで答えてみた。

「……それ、悪役に言うセリフなんだけど………」

「何事も例外は存在するものなんだ。」

「故にそれは例外と呼ばれる…哲学ね」

博識な人物との会話はやりやすい、こちらの言ったことの意味を正しく理解しそれ相応の返事を返す。逆に馬鹿との会話ほど疲れるものもない意味を理解できず言葉遣いが粗暴でうるさく会話が成立しない。

「年齢の割に口が達者だな。」

「IQ200の天才を舐めないで！」

「…で、其れで」

「それでって…ほかに何か無いわけ!!」

「そんな“付属品”に興味はない」

「付属品ってどういうことよ？」

「付属品は付属品だ。地位、出生、能力…すべて本人を構成する要素ではあるが本質ではない。

いわばおまけつまりは付属品だ。そんな下らんもので態度を変える気など俺は毛頭ない。誇られても興味外だから反応しろと言われて

も無理な話だ。」

「！！！！」

なにか驚いたように目を見開く少女

「文字通り目から鱗だわ…ガキにも大人にもわかる人はいないのよ」

「そうか…君も苦労したんだな。」

「なんかしみじみ言われるとむかつくんだけど？」

じゃあ如何しろと？

つと少女との会話を続けていく内に幾つものサイレンが聞こえてくる。

「ふむ、俺が此処に居るとあれなのでそろそろお暇させてもらう」

「立派な追剥だしね、アンタ…ってちよつと待ちなさいよお！！」

少女の静止の声を無視して、天井に開いた縦穴に飛び上がり各フロアの天井：床の断面を蹴り三角飛びの要領で穴より屋上へと飛びでてなのはまつ公園へと向かうのだった。

「おかあさん…」

しゃべりながらチワワのように震えながら月砂にすり寄る子ぎつね。



混乱する月砂

落ち込み地面に手を着き項垂れているのは  
なんか冷や汗だらだらになっている刃菊（犬なのに）

「これはいったいどういう状況なんだ？」

到着するなり混沌とする状況に首をかしげる亮だった。

## 第二十話      （後書き）

無外流：東雲がかった剣術、古武術の一つで相手の手足を浅く斬り戦闘力を奪う流派

実在した古武術で有名どころだと新撰組の沖田が使い手

## 第二十一話

「おかあさん……」

どこのチワワのように震えながら細かい声で母を呼び子ぎつね

「おかあさん……てなのはのこと？」

大いに期待を込めながらなのはが自分自身を指さしながら問いかける。

しかし

「ちがう」

「ガ

ンっ……なの……」

即断即決、0.2秒

即座に簡潔に一言で否定を口にする子ぎつねに対しなのはは膝から崩れ落ち地面に手を着き落ち込み、その周囲はなのはのマイナス思念を具現化するように黒く淀む。

「……てことは刃菊？」

「怒るぞ？」

「ごめんなさい……！」

こちらも即断即決

黒犬に陳謝する白狐という珍妙な光景が展開される。

「おかあさんをいじめないで…」

そうこうしている内に子ぎつねは月砂を庇うように刃菊の前に立ちふさがった。

「やはり、貴様が母親か…で誰が父親なのだ月砂？」

「ちょ、私子供なんていないよ！？生んだこともないよ！！……ああっ！！ごめん！ごめんだからそんな泣きそうな目で見ないで！！！」

自分を見上げる小さく愛らしい存在が自分の言葉に傷ついて泣きそうなる姿に罪悪感を掻き筆られ即座に謝りながら子ぎつねの顔を舐めてやる月砂。

もはやその光景はなんの言い逃れもできないほどの狐の親子の光景であつた。

「よかったな、母親が認知してくれたぞ。」

観察結果から危険が今のところ無と判断した刃菊は少々からかいを含めた言葉を掛ける。

「おとおさん…」

「なんだとおおお！？」

今度は刃菊が度肝を抜かれるのであつた。

「っでこの混沌とした状況が出来上がったというわけか……」

亮の言葉に頷く二匹、相変わらず月砂には子ぎつねが引っ付いている。

「ほら、なのちゃん元気出すんだ。母親になれなくても友達にはなれるだろう」

「…そうおもって、お友達になろうっていったの…だけど…」

子ぎつねに一步近づくなのは、しかし子ぎつねはなのはが近づいた瞬間に月砂の影に隠れてしまう。それでなのははしゅんと落ち込んでしまう。

「なるほど…」

「なのは、あの子とお友達になりたいの!」

「…わかった、一つ手段を講じてみよう。」

そして、高町家キッチンへと場所は移る。

台所にはエプロンを装着した亮となのはが準備万端とでも言いそうな感じで立ち並ぶ。

ちなみに月砂と刃菊はあの子ぎつねと一緒にいる。

「まず、あの子ぎつねとなのちゃんはお友達になりたい。其れでい

いんだよね？」

「なの！！」

足場となる椅子の上でなのは大きく首肯する。

「ならばまずは好物で近づくことから始めよう」

「きつねさんのすきなもの？」

首をかしげながら頭上に？を浮かべるなのは

「それは…」

「それは？」

口元にやりと笑みを形作る亮は高らかと言い放つ。

「稲荷寿司だ！！」

まずに、木の桶にご飯を盛り、そこに細かく切った人参、牛蒡、シイタケ、コンニャク、山菜を入れ、まずは鰹節、昆布、出汁、醤油、味醂を混ぜ合わせた土佐酢の瓶の口を親指でふさぎながら振り少量を掛けながらしゃもじでかき混ぜ下味をつける。

「なのちゃんは俺がやっている間、米をうちわであおいでくれ」  
「わかったの！！」

片手で其れなりの重量の瓶をシャカシャカと振りながら全体にまんべんなくかけ混ぜ込んでいく亮とその横で必死にうちわを振り風を

送るなのは。

ある程度混ぜ込んだところで、亮はいったん止め少量のコメを取り口に含む。

「フム…下味はこの程度だな、なのちゃん。」

「にゃ？」

うちわを仰いでいたなのはが首だけ亮に向く。

「はい、あ~~~~ん」

「あ~~~~ん」

亮が少量の取ったコメをまるで寿司職人のように軽く握りなのはの口に運び、なのはもそれを受け入れるべくその小さな口を開く。

「あむ、ムグ…ごつくん……なんかいつものごはんとは少し違うの」

「下味をつけたからね、いいかい？なのちゃん料理つてのは、化学実験と同じで手順…やり方の順番さえ間違わなきゃ失敗しない。だから正しい手順と味の確認が大切なんだ。

それを適当にやる人が料理が下手糞に分類される…つまり料理べたは馬鹿なんだ。」

「じゃ…おねえちゃん馬鹿なの？」

「そうなのか？」

「そうなの」

悪意0パーセントで断言するのはであった。

その頃……

「はうぁっ！！！」

「ど、どうしたのだ？みゆきち！？」

「なんか……無垢な刃を心臓に突き立てられたような気が……」

「…なにそれなのだ」

さらに別の場所では…

「む！…お兄さんに美由紀を預けたのが失敗のような気がしてならない」

さらにさらに別の場所

“ガタっ！！！”

「うお！？なんや！！急に本が自分は関係ないと思うとつたが痛いところを飛び火でドンピシャにやられたみたいに揺れ動いた！！！」

さらにさらにさらに別の場所では…



“グサッ！！”

「愛さん！！しっかりして！！！！」

「耕介さん…私、もうだめです…生まれ変わったらペンギンに

」

”ガクッ”

「愛さ

んっ！！」

「さて、次の段階だ。」

海鳴市のあちこちと海を越えた先での異変などつゆ知らず料理を進めるふたり。

亮は土佐酢とは別の瓶…ゆずの果汁を発酵させたゆず酢を同じように振りかけ、混ぜる。

時折、米を口に含み味を確認しつつ混ぜ込み味を調える。

「ふむ…味はこんなものか…」

「で、できたの…」

うちわを仰ぎ続けバテ気味のなのはが救いを求めるように言う。

「…ああ、味はな……これから小一時間混ぜながら仰ぐだけだ」

「にゃ！！！！…そんなあ~~~~…」

一時間と言えばアニメが二本も見れる時間ではないか！！と驚きと疲労……

終わらない重労働に虚脱感がなのはに重くのしかかる。

「うつん、きつねさんとお友達になるためにがんばるの！！！」

首と一緒に諦めの感情を振り払いやる気を再びたぎらせるのはだった。

そして…

「ふむ、とりあえずは完成だ」

「やったなの！！！」

亮の言葉により清々しいまでの達成感と解放（開放？）感を感じるなのはは万歳をしながら飛び跳ねる。

そんななのはを横目で微笑を浮かべつつ見やり、木桶につまった五目寿司を味見の時と同じように握る。

「なのちゃん、あ~~~~~ん」

「あ~~~~~ん」

握りをなのはの小さな口に運んでやる。

「~~~~~っ!!!!!!」

頬を手で押させびよんぴよん飛び跳ねながら声にならない声をあげる。

「おいしいiiiiいのっ!!!!」

やっと飲み込み感想を述べる。

頬が墜ちそうになるというのを体現したなのはに、そこまで喜んでもらったことに対する喜色の感情が亮に渦巻き顔が自然とほころぶ。

「そうか、じゃあ仕上げに入るか。」

「にゃ?これでかんせいじゃないの?」

クスリと苦笑し亮はなのはに説明する。

「これじゃあ唯の五目ずしだからね。」

「うにゃ……………そうなの……………」

油揚げの一边を切り取り広げ袋状になった揚げに寿司米を詰めていき、相当量の稲荷寿司が結果として出来上がる。

「よし!!あとは酢がなじむまで時間をおけばほんとに完成だ」

「たのしみなの!!!」

大皿に並べられ冷蔵庫へと納められる稲荷寿司を見つめながらのはは翌日の楽しみにするのだった。

そして、次の日

子ぎつねの居る公園に亮と共になのはは向かう。

「きつねさん、食べてほしの！」

相変わらず月砂の影に隠れた子ぎつねになのはは皿に稲荷寿司を乗せて差し出す。

「くうくうくうん」

眼の間に置かれた好物に鼻をひくひくさせながら顔だけを覗かせる子ぎつね。

「怖くないから、なのはちゃんと話さない」

子ぎつねの首根っこを咥えなのはが持ち出した稲荷寿司の乗った皿の前に移動させる月砂

「……………」

恐る恐ると言った感じで稲荷寿司に顔を近づける子ぎつね。

そして

“バク”

「どう…かな？」

「…………おいしい…………」

「やったなの！！！」

一言子ぎつねが発する言葉になのはは喜びの笑顔を出す。

「もっとたべていい？」

「いいよ！」

がつがつとものすごい勢いで食べ始める子ぎつね、月砂が私も食べたいと視線で訴えていたがなのはは気づかない。

「おいしかった…ありがとう…………」

「どういたしましてなの！…きつねさん」

子ぎつねのお礼を受けなのはは本題に乗り出す。

「…………なに？」

「なのはとお友達になってほしいの！！！」

「…わかった、くおん…………なのはの友達になる…………」

「くおんちゃんていうなまえなの？」

「そう」

「かわいいなまえなの!!」

「なのはも可愛い名前…」

「ありがとうなの!!」

じゃれあう一人と一匹、を微笑ましく見守る亮と二匹の式神

「亮、私にも稲荷寿司」

「残ってるから後で食わせてやる、だから空気読め。」

「食い意地の張ったやつだ……」

食欲優先の月砂に白い眼を向ける亮と刃菊の視線がなのはの周りと  
違い絶対零度の空気を作り出していた。

「にへへへへ……ジュルリ……」

…が頭にお花のさいた月砂には関係の無い話だった。

## 第二十一話      （後書き）

ほのぼのとした普通の子供のなのはがかければ幸いです

### アイテム解説

#### 東雲のコート

聖骸布に魔力伝導率の高い水銀に物質と霊質を結びつけるイブン・ガズイの粉薬を溶かし込んだものを染み込ませ魔術的加工を施し作り上げたもので染み込んだ水銀が疑似魔術回路へと変貌しているため聖骸布の外界からの守りの概念が何倍にも増幅され歩く聖堂クラスの防御力を誇る。

さらに虚数展開力タパルト（デモンベイン参照）の術式が刻み込まれ東雲の居る場所に東雲の任意で取りよせれるほか東雲自身の空間転移にも使える。

…が東雲自身が転移した時は馬鹿でかい被害が転移先に発生しなおかつ魔力も馬鹿食いするのであまり使わない

## 第二十二話　もう一つの直死の魔眼

深夜二時、山中

闇夜の山中に設けられた国道をライトの閃光で照らしながら駆ける一台のトラック  
海鳴市に運びこまれる物資や運送物を運ぶそれは通行量の少ない夜中を使われ運ばれる。

運行表通りの時刻である峠に差し掛かる。  
シフト

そこは事故が多いことで有名であり数か月前にも幼稚園の遠足のバスが転落し、運転手と20人の園児が非業の死を遂げそれ以来事故が多発することでも有名である。

「安全第一……ってな」

事故が多いという認識からペダルに込める力を弱め、速度計に目を通しつつバックミラーで後ろを確認する。

その時鏡に映るそれに気づく…

「ん……………ひい！…！」

短く上がる悲鳴

二人乗りの後部座席など存在しない荷物運搬用トラック……………その運転席に座る自分

その肩を掴む白い手



それを見てしまい運転手は一瞬目を閉じ再び鏡を見やる。

腕は影も形もなくほっと一息つく運転手。

しかし

ふと自分の足元の闇に眼をやると “目が合ってしまった。”

「う……うあ……」

上手くのどに力が入らず声が出ない…

その間にもそれは……上半身だけの子供は、血の通っていない真っ白な青白い肌の子供は脹脛から膝そして太もも順番にゆっくり……しかし確実に這い上がってくる。

足を掴まれ這い上がってくる感触とその冷たい体温を文字通り肌で感じる運転手は…

「ひ、ひいいいいいいいっ！……く、来るなああああああ  
ああっ！……！」

恐怖に竦む運転手、運転手がペダルから足を離しているというのに  
ひとりでにトラックはその速度を上げていく。

その先はU字カーブになっておりその速度ではガードレールを突き破り彼も仲間入りするだろう。

そして這い上がってくる子供の口が声を出さずに動いた。

いっしょに死んで

崖が見え、その先の闇夜がライトの明かりに照らされ速度を増しながらトラックは峠に向けて突き進んでいく。

突如として闇に溶け込んで見えなかったが黒衣の外套を纏った青年が道路のど真ん中でライトに照らしだされる恐慌状態の運転手はそれにさえも気づかない。

それどころじゃないのだ。

そして、その存在は新たな獲物が舞い込んできた人間には声として認識出来はしない声でそう告げる。

そのまま轢き殺せ

つと

さかのぼること数時間前

「りょうおにいちちゃんがつくつたの！！なのはもお手伝いしたの！  
」

「ああ、よくがんばったな」

「えらいわねえ～～なのは」

「そうか！！楽しみだな！！！！」

「よくできてるじゃないか」

「うにゃ～～」

なのはの初めてのお手伝いということとで妙にハイテンションな高町  
夫妻と苦労をねぎらう亮そして感嘆の意を表す恭也

「そんな…私は台所に入るのもダメなのに…」

リビングで立ちふさがる現実に膝をつき“の”の字を描き始める美  
由紀

回数を重ねることに早く綺麗になっていくの

【美由紀は“の”をうまく書くをしゅうとくした】

「お前が何かしたら産業廃棄物が出てしまうだろ。」

「はうあっ！！」

恭也の言葉のナイフがぐさりと突き刺さり止めを刺した。  
いったい何を生み出してしまったのかは気になるが関係ないので置

いとく。

「さて、いただくのでしょうか」

「腕前みせてもらっわよ〜」

「はやく食うぞ美由紀」

「うううゝ恭ちゃんのいじわる」

「早く食べるの!!」

なのはに急かされ稲荷寿司を口に運ぶ一同

つ!!!!!!!!!!!!!!

稲荷寿司を口に入れ味が下を伝わった瞬間脳内の電気信号が激しくまるで落雷の如き激しさを持って駆け巡る。

「桃子……」

「ええ……あなた……」

「うまい!!!」

「これはうまいな……」

「男の人にも負けるって女として終わっ  
たかも……」

リアクションはさまざまだが全体的に好評ということで亮も自分の口へ運び、その味に納得し頷きながら食す。

ええ…次の特集ですが六か月前に起きた…

ふと聞こえてきたテレビに視線を移す亮

「ああ、これか…確か追突事故で遠足に行っていた幼稚園のバスが崖から転落した奴だったな…」

「ええ…ひどい話よ…さぞかし無念でしょうね…」

同じ年の子供を持つ身の上なのか士郎と桃子が若干くらい声でテレビの内容を説明する。

こちらがその現場です美月アナよろしくお願いします。 -

こちら現場の美月です。ご覧のとおり現場にはU字カーブになっており事故の名所として知られています。不思議なことに同じような地形は他にもあるにも関わらず

しかし、亮の視線はテレビに注がれてはいるものの普通視線が向けられるテロップやアナウンサーを移さず別のモノに視線が注がれている。

無言でテレビを凝視し続ける亮を怪訝に思いその顔をなのはが覗き込む。

「りょうおにいちゃん……！！！！！」

名前を呼んだところで亮の目を見て息を呑む。

「?なのは、どうしたん…っ!!!!!!亮その目は!!!!」

士郎も覗き込みその変貌した、ブルーサファイアのように光り輝く瞳に息を呑む。

普段うつすら隠れてはいるものの優しさを秘めた気高い視線は身をひそめ、まるで能面のような表情にまるで死を映しているような底なしの無明の暗黒を映しているような深い蒼い目に驚きを隠せない面々。

「用事が出来たようだ…」

席を立つ亮、そのまま玄関へと向かう。

「待ってくれ!!!!」

亮を呼び止める士郎、顔だけ振り向いた亮の死蒼の視線は語っていた。

と、  
邪魔するならただではすまないぞ

幾たびの死線を潜り抜けてきた士郎と恭也ではあるがそのあまりにも暗く鋭い気配に舌の根が乾き体が硬直し震える。

美由紀、桃子、なのはの三人は立っていることさえもできないでへたり込んでいる。

「なんだ?この家には三重に結界を張ってある、警護役もおいでいる。」

「いつの間に!?!」

恭也が東雲の発言に驚きを隠せずに叫ぶが亮は無機質な声で一言告げる。

「無論、貴様らの気づかぬ間にだ」

恭也は東雲を当初から警戒しており何かすればすぐに分かる様に気を張り詰めていたがそんなことぐらいはどうでもいいと子供の兎戯に等しいとまで暗に言われたのだ。

士郎が亮に問う

「君は何をしに行くつもりなのか教えてはもらえないだろうか……？」

士郎の問いに歪な笑みを浮かべた亮は

「何を……か、狩りにだよ………」

そう言い残し玄関から消えていった……

もう、あの家にはいられないかもしれないな

山中のテレビ特集が行われていた事故の現場に亮はいつもの漆黒のコートを羽織り訪れていた。

その顔には、自嘲とも後悔ともいえる表情が浮かんでいる。

しかし、これは俺の仕事、鬼切の使命だ

闇夜に浮かび上がる死蒼の瞳、活性化した浄眼であたりを見渡す。

ここまで濃い気配ならば浄眼はいらないのだから

思考と裏腹に問答無用で死を見せつける瞳、それは虚ろなる存在とそれが隠そうとしているものすべてを問答無用に押し付ける。

七夜志貴の直死の魔眼とは別の意味でこの目は死を見せつける。

死者の魂のみならずその残留思念…無念、後悔、恐怖、怒り、憎悪、悲しみ、恨み、渴望、羨望……死に関するあらゆる負の思念が瞳を通して流れ込んでくるのだ。

しかも、今回は“群体”しかも感情むき出しの幼子の群体だ。

その死の際の鮮烈な感情は普段眠らしてある目を叩き起こし亮の精神を犯す。

その超一級の呪いにも等しいそれを真正面から受けて正気を保っている亮の精神は異常だが。

ある意味、亮が退魔を行うのは自己防衛の意味合いもあるのだ。いつまでも精神攻撃を食らっていたのでは正直いつ壊れてもおかしくないのだ。

それ以上に、死魂が現世に留まり続けた結果の悲劇を知っているからこそ放っておけない、そしてその結果起きる幾つもの悲劇を止め



ることが義両親から受け継いだ斬魔の意志でもあるのだ。

「来たか」

短く言い放ち、自身に向け突進してくるトラックを見やり、おもむろに片腕を伸ばす。

亮に構わず轢き殺さんとするほどの勢いで突進するトラック。

…そして、

“ダァァァン”

激しく衝突する音が夜の山道に響き渡った。

## 第二十二話　もう一つの直死の魔眼（後書き）

しばらく、ダーク&シリ阿斯（つうかホラー）で行きます。（トラは1・2のキャラが結構出てきます）

あと10〜20話でこの章が終わるのですが第二章以降は題名等を変えて別の小説として出すか、章管理で分けて継続するか悩んでいます。（時間列も数年飛びます）  
意見がありましたら書き込みをお願いします。

## 人物紹介2

陣内 啓吾

美緒の養父でさざなみ寮の初代管理人。現在は仕事で香港に居住するが、さざなみ寮の住民は現地で何をしているのか誰も把握していない。なお、高町士郎とは同業者として知り合い。

実は世界最強にして非合法ぎりぎりの法の守護者・香港国際警防隊の副隊長

外見は志貴が年を重ね後ろ髪を伸ばし束ねた感じ（まじそっくりでびっくりた）

ちなみに戦闘スタイルは、両手に鋼鉄の短棍を持つというものであること。

その腕は、御神流屈指の使い手である士郎氏をして「闇に潜む死神」と言わしめたほど。

（口調も戦闘スタイルも七夜黄理そのもの…）

一ノ瀬 （旧姓、現在は陣内） 神奈

耕介の叔母。さざなみ寮2代目管理人。旅行中の管理人代理として耕介に寮を任せ旅立つが、旅行先の香港で運命の男性（啓吾）と巡り合い、耕介を後任に仕立てて恋に走る

香港で銃弾飛び交う中、日本食屋台を引きつつ日本と国際電話で姉妹（耕介の母）と世間話を行うほどの豪の人物

槇原 耕介

とらは2主人公にしてさざなみ寮三代目管理人

神咲 薫（那美の姉）を軽くしのぐ霊力の持ち主でかなり強い 霊  
刀 御架月の所有者で神咲一灯流の使い手

無印第一話でユーノを治療した獣医さんの従妹 （まだ結婚してない  
だろうがこの人と結婚する可能性が一番高いと言われている）

身長191cmの大男 上記の二人とは叔母甥の関係

神咲 薫

鹿児島出身。『とら八』の神咲那美は妹。剣道部所属でその腕は  
全国レベル。ただし真雪と剣道で打ち合うと大抵負ける。実は退魔  
師で、実践剣術である「破魔真道剣術 神咲一灯流」当代伝承者。  
頑固で堅物、かつ生真面目な性格で、自堕落な真雪や気ままな美緒  
に対して風紀委員のように口やかましく叱りつけるため二人からは  
鬱陶しがられている。また、当然、耕介入寮時も反対派。しかし、  
体が丈夫な方ではない上、ナイーブな性格の持ち主で、。なお那美  
と異なり薩摩訛りが抜けていない。 耕介の剣の師匠

ちなみに高3

久遠に封印を施したのもこの人

退魔師、そして当代としての責務から、仕事とあればどんな相手であれ斬り抜うが、反面、生真面目な性格もあって、退魔とは死んだ人間をもう一度殺す行為であり、殺人者と同じことをして金を貰いのうのうと暮らしている自分は許されるものでないと仕事の度に悩み、心を痛め続けている。

綺堂 さくら

月村 忍の叔母

実は「夜の一族」と称する吸血鬼と人狼のハーフで、普段は隠しているが獣耳と尻尾を持つ。靈感応、心理操作、不老長寿と数々の特殊能力を持つ上、人狼の血が混じることから指先から鋭い爪を出すこともでき、これを剣のように用いて接近戦闘をこなすことも可能と歴代キャラでも屈指の戦闘力を持つ。しかし、自らがこのように妖怪の一種であることが彼女のコンプレクスであり、かつて一族が人間に虐げられた歴史があることもあって、初対面の相手、特に男に対して警戒心を隠さない。

ただ、彼女自身は人間との共存を望む。そのため、吸血鬼でありながらほとんど人間の血を摂取してこなかったため、体質が虚弱でかつ身体的成長も遅れた。

氷村 遊

純血の吸血鬼でさくらの異母兄。（必然的に忍やすすかの叔父）  
美男子だが性格は傲慢かつ残忍、人間を見下し奴隷や食料としか思  
っていない。

### 第二三話 背負いしモノ

「啓吾かつ！俺だ士郎だ、お前のところに退魔師の子がいただろう準備を頼んでくれ。場所はさっきの チャンネルの特番でやってた幼稚園バスの事故があった場所だ！！こっちから迎えに行くから頼んだぞ！！」

ガちゃんと言を立てて受話器を乱暴に置くと士郎は何か追われて理うように急ぎながら準備をする。  
亮を追うとする士郎に恭也が声を掛ける。

「父さん！！やっぱりあいつは危険だ！あの眼は…人殺しの目だ！！」

「…恭也、準備をしろ……さざなみ寮へ行ったあとあのニュースの現場へ行くんだ。彼が何のために剣を振るつかその目で見極めろ」

恭弥の剣幕をもともせず士郎は恭弥の目を見据え言い放つ。

「おとうさん…」

「ん、そうしたんだいなのは？」

先ほど亮から放たれた死の気配に怯えていたなのはが恐る恐る語り掛けそれになるべく怖がらせないように優しい声色で士郎は聞き返す。

「りょうおにいちちゃん、助けてあげて…すぐくつらそうな眼をしていたの…」

顔を塞ぎ、ぱたぱたと涙滴をこぼす愛娘の頭をなでながら

「ああ、任せるー!!」

士郎は、陽性の笑みを愛娘に向け断言するのだった。

## 第二三話 背負いしモノ

「恭弥」

「なんだ父さん」

グロリア  
車を運転していた士郎は助手席に座る恭也に話しかける。

「彼…亮君はな……俺たちと同じなんだ…」

「俺たちと？」

恭弥の問い返し首肯し月を見据えながら一切の感慨もなくただ事実として、まるで物語を語る様に自身のことを語る亮を思い出す。

「ああ、彼は俺たちと同じで力を持った一族の出でな、もう彼ひとりしか残っていない…」

「いや、其れだけならよかつただろうな…」

「他にも何かあったのか？」



「劉機関、佐波田医師のことは知ってるか？」

「たしか、少し前に香港国際警防に検挙された人体実験と人身売買とかをやっていた奴らだな……」

恭弥の答えが正しいと頷きながら士郎は話を続ける。

「亮君は異能を持っていてそういった奴らにも追われ続けていたそうだ。

想像できるか？ただ一人生き残り、標本としてその身を狙われ、力を持つているが故に俺たちと同じように命を狙われ……俺たちと違いただ一人だけで戦い続けてきたんだ……」

あの、修羅の剣が形を成すほどに、どれほどの時を血と死で彩ってきたのか俺たちには想像もつかない。」

「……………」

沈黙する恭也、毛嫌いしていた相手が自分たちよりも深い地獄に居たと理解する。

自分は確かに不幸な人間に分類されるかもしれないがそれでも人並の幸せは享受していると思っっている。

愛する妹、従妹、幼馴染……初めて親の情を覚えてくれた義母、破天荒で常識を母親の胎に置き忘れてきたような非常識極まりないが目標とすべき父

それらを守りながらともに生きる。

それは幸福と呼べるものだ。

けど、それだけじゃない

「……たかが地獄を潜り抜けてきたただで俺たちが疎むほどの剣気を放てるわけではない。」

あれは、背負っているものの差だ、どうしようもない絶望的なまでの比べるのも愚かしいほどの差だ…奴は一体何を背負ってるんだ？」

「それを確かめて軽くしてやるために向かうんだよ！！」

士郎はアクセルを踏み込み、車を走らせる。

“ドオオオオオオオオンっ！！！！”

山中に響き渡る衝突音、重さ何十トンものトラック時速数十～百キロで衝突したのだから亮はひき肉になっていてもおかしくない衝撃をその身に受けたこととなる。

“キュルルルル…”

亮を轢き殺しているはずのトラックはそのタイヤを空回りさせゴムが燃焼する嫌なにおいと共に煙を上げその正面を亮は片手で止めていた。

足は地面のアスファルトに蜘蛛の巣状の日々を走らせ若干陥没させ、トラックの正面は亮の手がついている右腕を中心にへこみそれに引っ張られフロントガラスが奔る無数の罅

によって白く染まっており、運転手は衝突の衝撃をもろに受けたのか気絶している。

やがて、観念したかのようにタイヤが停止する。

「さあ出てきたらどうだ？」

トラックを片手で抑えながら亮は峠のU字カーブの先の闇を見据える。

...ゆるす

“ボ才…ボ  
ボ  
ボ  
ボ  
ボ  
…  
”

幾つもの青白い焔、人魂が浮かび上がる

それだけに留まらず、焰を中心に像が結ばれ幾人かの幼子が闇夜に浮かび上がり同時に大破したバスの像がうつすらと浮かび上がる。

それに体ごと振り向く亮に声が見え聞こえる。

ねえ、なんでその人を遠ざけるの……

音にならない特異な音階で言葉が発せられる。

闇夜に浮かび上がる幼子たち……その姿は……人として原型をとどめてはいない。

事前に幼稚園のバスという情報がなければ何がしゃべっているかも判別は難しいだろう。

頭部がない、衝撃により目玉が飛び出している、鼻から上が挟れてなくなっている

下半身がなくなり臓物が垂れ下がっている、焼けたただれ人体標本の  
ような姿に成り果てている、腐食している。炭化した皮膚が口ボロ

崩れ落ちている……

お母さんのところに帰りたい  
お父さんに抱っこしてもらいたい  
おねえちゃんに会いたい  
おにいちゃんに会いたい  
おうちに帰りたい

唯一の一人として生きてはいない、一番ましなものとして頭部に巨大なガラスが突き刺さっているか、その腹を鉄骨が貫いている者ぐらいである。

怖いよ  
熱いよ  
苦しいよ  
寒いよ

僕たちは／私たちは……そのおじちゃんに連れて帰ってほしい  
だけなのに

なんで      なんで      なんで      なんで      なんで  
なんで      なんで      なんで      なんで      なんで  
なんで      なんで      なんで      なんで      なんで

津波の直前に一気に海が引くように静寂が訪れ  
そして

“何で邪魔するのとおおおおおおお！……！！！！！”

！？”

文字通り怨嗟を持って地獄の底から響き引きずり込むように亮に殺到する。

それを、亮はどこか悲しみを秘めた死蒼の瞳で見つめながらつぶやきながらに虚空より二振りの大太刀を燐光と共に抜き放つ。

刃は淡い光の軌跡を描きながら亮に構えられる。

「せめて……苦しむ間もなく葬ってやろう……」

“  
チャキ！！  
”

構えた刃が金属の澄んだ音を響かせる。

「無限獄に墜ちてしまう前につ！」

地面を踏み砕き駆ける。

遥か過去に紡がれし誓約を

優れた靈的遺伝子によって発達した経絡に超大な靈的質量をもつ魂から生命力が流し込まれ靈力を生成。始動キーとなる言靈が神秘を紡ぎだす。

大太刀の刀身が澄み渡るような蒼光に包まれまるで飛行機が雲の尾を引くように光の尾が切っ先に引きずられる。

「覇あっ！！刃あ！！ハアアアア！！！！」

結界刃

袈裟、逆袈裟、横風

裂帛の気迫と共に三度を刃を振るう。

刀身に宿る青白い光はまるで鎌のように飛来する斬撃となって飛び、何体もの幼子の亡霊を両断し粉碎する。

“ あ、ああああああああ ”

生と死、全く逆位相のエネルギーである斬撃に切り裂かれた幼子の棒れは共鳴と反発による放電現象を伴いながら消え去る。

こわい

怖い

怖い

怖い

怖い

来ないで

来ないで

“ 来ないでよおおおおつ！！！！！！”

「

っ！！！」

幼子の亡霊はそろって雄たけびを上げる。

それは濃い紫色の津波となって波紋を広げ、周囲を腐敗させていく。ぼこぼこ泡立ち溶解する地面、一瞬で枯れ腐る植物、瞬きの間にその命を消しよくわからない液体に変貌する虫

「遙か過去に紡がれし誓約を

」

再びその言葉を紡ぐ、

言霊が霊力という神秘を具現化させ不可思議な物質をまるでクリスタルのような結晶体のような半透明の盾が亮の眼前に展開されそこから先には一切の呪いの波動は進まない。

「エデン・コード  
真音律第三境界葬」

夢見る時間は終わりを告げて

世界に歌はしみわたり、眠れる楽園は眼を覚ます。

津波のごとく広がる呪いの波紋が止まった。

祈り、言葉、詩、記憶

無くした欠片 どこから目覚め、どこへと眠る

峠にこだまするささやかな音色、

呪いの波動を押し返し中和させていく歌

かすかな旋律と共に蒼い光の波紋が亮を中心に広がっていく。

想い、時編、夢、なみだ

無くした願い　どこから生まれどこへと還る

大地を不気味にくすませていた濃紫のヘドロのようなそれは蒼い粒子を受けて消えていく。

その様子に怯え始め、一か所に集まっていく幼子の亡者。

その光が呪いの波動という力の“流れ”を完全に消滅させていつているのだ。

すべての眠りを解き放ち、朝焼けの大地に私は一人

大いなる扉のその前で　無くした鍵を探し続ける

全ての忘れられた　のために

約30秒、呪いは一切消え去っていた。

幼子の亡者たちは震え、泣き叫ぶが先ほどの呪いの波動は起きない。

「無駄だよ、その力の流れは消した　遙か過去に紡がれし誓約を」

“リイイイイン！”

まるで鈴が鳴ったような清らかな音色が鳴り

蒼い水晶の様な物質が顕現化し、長方形四面、正方形上下二面の棺となつて個別に幼子の霊を閉じ込める。

蒼い光、結界系の霊術である。



「ごめんな、俺には君たちを助けることはできない…」

僕にできるただ一つの願いを

月明かりを反射させていた鈍い鋼色の刀身が紡がれる言葉と共に緋色の光に覆われる。

大包平や霊柩は霊体を殺すためのもので成仏させるものではない、故に

余力があるのならば、緋色の光 洗礼系術式で葬り、半ば強制的に成仏させる。

「俺にできるのは終わりをもたらすことだけ」

“ヒュン！！ズシャ…”

水を切るような感覚が手に伝わり幼子の霊が霞と消える。

「君たちに明日はない」

また一体、また一体と葬り次々と葬って往く。

「来ないで、怖いよ怖いよ…たすけておかあさあああ  
“ズシャ！”

泣き叫び助けを求める霊を縦に蒼水晶の棺ごと断ち切る。

「うわあああああ」

幼子の叫びがポルターガイスト現象を引き起こし、アスファルトの破片や石礫を浮かび上がらせ、それが一世に亮に向けて撃ち出される。

纏っている漆黒のコートの概念によって礫はすべて逆に打ち砕かれ粉塵となる。

そんな中、機械的刈り取っていく亮、霊は最後の一体となる。

最後の霊は下半身は千切れ飛びなくなっではいるが上半身はほぼ無傷な少女の霊だった。

「来ないで…来ないで…来ないでっば                    つ！！！！」

一際強い、思念が放出され圧縮された衝撃波となって亮の額を穿つ唯一の一撃とはいえあまりにも純粹で強いそれは概念の守りを突破し亮の額はまるで銃弾を受けたように仰け反るが、直ぐに元の位置に戻る。

「気は…済んだか？」

問い返す亮の額から紅い筋が垂れる。

「では、逝け！！！」

左手の蛍丸の緋色な光に包まれた刀身を振り上げる。

だがその時、

「やめろおおおおおお東雲ええええつ！！！」

常人では視認できはしない速度で双刀【八影】を携えた高町 恭也  
が怒涛の叫びと共に刃を振りかざして迫る

続く。

## 第二十四 美談

“キ、キキイイイっ!!”

ブレ キ音を鳴らしさざなみ寮の前に急停止する車、それに玄関から飛び出してくる幾人かの人物。

窓を開け、中へと土郎は促し刀をそれぞれ携えた二人、

高校高学年ほどだが凜とした顔立ちに黄色いリボンで髪を後ろに束ねポニーテールにした藍色の髪、白い上に黒い袴の神主のような式服を纏っている女子

男の方は二十代前半と言った所で191cmと長身にどこか人のよさそうな顔立ちに動きやすい黒の七分シャツにジャージと言ったラフな格好だがその手には不釣り合いな野太刀が握られている。

後部座席に駆け込む二人。

“ダァン!”

ドアが閉まる音と共に車を急発進させる土郎

「いったい何があっただんですか？」

方言の抜けていない訛りのある発音で式服の女子、神咲 薫は土郎にその後ろの座席から問いかける。

「いや、僕たちもよくは分かっているんだがテレビで数か月前

の園送バス転落の特集をやっていてそれ見た亮君…同居人がいきなり狩りに行くと言って家から出て行ったんだ。」

「狩りに…ですか？」

おうむ返しに薫の隣に座っていた槇原 耕介聞き返す。

「ああ、そういえば目が蒼く光っていたが君たちは何か知らないかい？」

士郎の言葉に目を見開く薫

「蒼く光る眼…まさかっ！？…十六夜！！」

おそらく間違いないでしょう

十六夜と呼ばれた刀から女性の声が発せられ響く。

「刀がしゃべった！？」

驚く恭也、それに槇原 耕介が説明する。

「俺や薫の刀は霊剣と言われていてね、精霊が宿っていて俺たちはその精霊と協力して霊と戦うんだ。俺の刀は御架月っていうんだ。ほら、御架月」

耕介の言葉に連動し刀がしゃべる。

どうも、神咲一灯流 霊剣 御架月と申します、姉の十六夜ともどもよろしく願います

「どうも、高町 恭也です…って姉弟！？」

私ども姉弟は元は人間だったのですが妖に襲われ死したところ  
初代様の手によって刃にその魂を宿され以後、神咲の方たちと共に  
退魔を行っています

恭弥の驚きに律儀に答える薫の刀：十六夜

「それよりも亮君の目について知っていることを教えてはくれない  
かな？」

ややしびれを切らした士郎が話が終わるタイミングを見計らい声を  
掛ける。

「はい        その人の眼は恐らくは、浄眼と呼ばれるものでしょう。

」

「浄眼？それは一体なんだい？」

浄眼、それは有り得ざるものを見据える瞳、靈魂や力の流れ、  
思念を見通す人にして人を超えし者の瞳です、すでに所有する者の  
いない幻の目のはずでしたが

薫は士郎に応え、士郎はそれは何かを聞き返し、さらに十六夜が答  
える。

「それって単に靈感が強いだけじゃないのか？」

耕介が疑問を口にする、単に見るだけなら自分とて可能なのだから  
当然といえば当然の疑問なのだ。

「いえ、根本的に違います、私たちは見えとるんじゃない、見せてもらってるんです。力も漠然と感じてるだけ言ってみ見えてはいないんですよ。」

霊感の強い人は言ってみればただの受信機：だから向こうが姿を現さない限りどうしようもないんです。」

薫の説明に確かに言われてみればそうだと納得する耕介、大体向こうから現れてくれるので失念していたのだ。

そういえば、風芽丘に居る地縛霊の女の子は出てきてくれないとか言ってたな

「ということは」

「おそらく、彼は浄眼で現場の何かを見てしまったのでしょうか：でも妙です」

「そうだな薫、あそこは」

「はい、私たちが確かに払ったところです」

基本、霊による災害：霊障が発生した場合即座に周囲を警察の手を借りて封鎖、お払いが完了するまで何人も入れないのだからテレビ特集が行われたということはすでに払った後であり、そこには自分たちもいたのだからと二人は若干苦い顔をしながら説明する二人。

二人の脳裏には今も助けを求め泣き叫ぶ幼子の悲鳴が木霊していた。

やがて、4人を乗せた車は峠へと到着し一斉に四つの扉が勢いよく

開かれ4人はそれを見据える

「　　っ!!!」

蒼水晶の棺に閉じ込められた幼子の霊とそれを機械的に刈っていく  
東雲

「…薫、あれは間違いない……俺たちが払った子だっ!!でもな  
んで…あんな姿に……」

「分かりません…確かにあの時は……普通の姿だったのに……」

思わず口を覆いながら絞り出すように声を発する薫と耕介  
かつて払ったときは普通の“生前”と同じ姿であったのに…今や、  
蠢く死体そのもの…

グールやゾンビと言われても素直に信じてしまいそうなほどに変わり  
果てた姿。

「来ないで、怖いよ怖いよ…たすけておかあさああああ  
“ズシャ!!!”」

「うわああああああ　　」

泣き叫び助けを求める幼子を躊躇いなく無慈悲に切り裂いて壊して  
いく亮の姿…  
それが恭也の琴線に触れた…



「来ないで…来ないで…来ないでっば

っ！！！！！」

腸に熱湯を流し込まれたかのように腹がカツ！と熱くなり、頭は冷え音が消える

襟首と腰の隠した双刀をとっさに引き抜く。

眼前では泣き叫ぶ幼子に向けて亮が刀を振り上げている。

普通の斬撃では間に合わない、鋼線、スローイングナイフでは確実に止めることはできない。

如何なる状態、距離を関係なく勝利を手にする。

御神の必勝の奥義

肉体のリミッターが外れ尋常ではない脚力により音を置き去りにして風の如く駆出す高町 恭也

「やめろおおおおおお東雲ええええっ！！！！」

その視界は白と黒のモノクロに移り世界がスローモーションに映る。これこそ御神を最強足らしめる秘奥の一つ

神速

豪速で東雲の背後へと駆け抜けていく恭弥、通常ではその速度に目が追いつかず瞬間移動を行っているように見えるだろう。

それに首だけ振り返り迫りくる恭也を横目で見据える亮、白と黒のすべてがゆっくり動く世界で亮の口が動いた

邪魔をするな

と

背後から迫りくる殺気を感じ、足音と地面をかすかに伝わる振動風を切る音、風の流れあらゆる感覚情報が亮の脳内で統合され死角さえも脳内で視覚化され迫りくる恭弥を脳内で見える亮は迎撃のために半身振り返る。

神速で迫りくる恭也、通常では何が起きているか認識する間もなくその刃に沈むだろうが…

刃を振りかざしつつ跳躍、切りかかってくる恭弥の姿を完全にとらえている亮の死蒼の瞳。

邪魔をするな

左足を軸に振り返りつつ蹴りを放つ

「ガッ！！ア

っ！！！！（神速が……”見切られた”！）

」

恭弥の腹部にめり込む亮の右足、恭弥自身の速度によってその蹴りは何倍もの威力に跳ね上がり切りかかった恭弥は吹っ飛ばされる。

“ダン、ダアアアアアアンっ！！”

地面にワンバウンドしたのちに転がり続けやがて止まり地面に這いつくばる状態となる恭也、それを冷めた目で見つっ、恭弥をしり目に再び刃を振り上げる。

（やめろ！！やめろ！！やめろ！！！！俺は…御神は護るための剣だろうが！！ここであいつを止めなくて、泣き叫ぶ子供を目の前で殺されて何が神を御る剣だ！！動け！！動け！！）

何とか顔だけ起こしそれを見据え叫ぼうとするが一気に空気をたたき出された肺は一時的な呼吸困難を伴い声は出ずに体を硬直させる。

その間に刃は闇夜に高く振りかざされ緋色の光がよりその輝きを増す。

！」

「光射す世界に汝ら暗黒住まう場所無、乾かず餓えず無に…還れ！

「やめろお

っ！！！！」

ズシャ！！

叫びはむなしく刃の振りぬかれる音と蒼水晶ごと幼子が切り裂かれる音にかき消され、蒼水晶は内側が赤く染まった  
後に

“ パアアアアアん！！ ”

ガラスが割れるような音と共に爆ぜる

「あ、ああ……」

目の前で無残に散ってしまった命、その欠片のような青白い雪のような破片が雪の涙のように周囲に降り注ぐ…

そしてそのうちの一つを掌に取りを握りしめる。

「なぜだ！…なぜ殺した！！答えろっ！！東雲ええええ

「うるさいっ！！！！貴様に！！貴様に何が解かるっ！？何が解かる  
というのだ！？」

恭弥に背を向けたまま東雲が恭也の吐露する激情の叫びを遮る。

それに呆気を取られ地面に這いつくばったまま亮の背中を見上げる  
恭弥

「死もその断片とて見えない貴様が！！たかが20も生きてない若造がっ！！」

何も知らない盲目暗愚たる貴様如きが何をわかるといふのだ！？あのまま、一時の感情に流されあの幼子たちに無間地獄を彷徨えというのか！？」

「な、何を……言っている………？」

ゆっくり振り返る亮、額から流れ出る紅い筋はまるで涙の様…

「死後成仏出来なかった霊は、その存在が徐々に薄れ感覚がそぎ落とされていくのだぞ…

唯でさえ普通の人には見えない、語り掛けてもらえない、触れない…それとて苦痛であるうが、命数が尽きた靈魂は触覚が消え、嗅覚が消え、聴覚が消え、視覚も消え…

“五感すべてを無くし”一切の何もない世界で唯泣きつづけるしかないのだぞ……！」

「な、なんだと…」

地面に倒れ伏す恭也を見下しながら亮は問う

「そうなつてしまえば　そうなつてしまえば　こちらからはもう一切の干渉ができない。

答える、貴様にはあの幼子たちが未来永劫に救いのない世界から解放させる手段が　貴様にはあるのか　」

高町　恭也は答えることが出来なかった

（推奨BGM・君をのせて　by Piano　もしくは　ヒカリ：樹海）

「俺たちに退魔の道に生きるモノは起きてしまった悲劇の尻拭いとそれによってもたらされるさらなる悲劇を食い止めるだけ…俺たちはただの掃除屋だ。」

生きている限り、争いと悲劇はどこに行っても目についた  
限はなかった。

何も悲劇の無い世界を夢見ていたわけじゃない　ただ、俺は  
せめて自分の知りうる世界では誰にも泣いてほしくなかった  
ただ　それだけだった

初めから感謝をしてほしかったわけじゃない  
英雄ともてはやされたかったわけじゃない  
俺はただ　俺を受け入れてくれる世界が欲しかっただけなのに

そこの二人ならわかるんじゃないのか？  
俺たちも普通から見たら異端　排斥の対象であると。  
」

突然亮に言葉を向けられた耕介と薫  
「そんなことは

「あるんです耕介さん。」

否定しようとする耕介の言葉を否定し亮の言葉に首肯する薫、彼女  
とて幼き頃、霊が見えるが故に純粋な子供故に心なき言葉を突きつ  
けられ、十六夜に慰められていた過去が存在する。

霊剣：十六夜は今でも覚えている。  
泣きながら「こんな力はいらない」と「普通でいたい」と泣きなが  
らすがりつく幼い、小さくか細い女の子　神咲　薫のあの時の

姿を

本当に救いたいもの達を救えず殺すことが最大の救いとなる皮肉  
護っている者からは畏怖と恐怖、嫌悪の対象として時に命まで狙わ  
れる

恭弥は亮に畏怖する。

その苦痛を自分と似た境遇の上でさらに背負う亮が　その心が化  
け物としか思えなかったからだ。

「幾ら目を瞑ろうと耳をふさごうと涙と悲鳴は俺を苛む、見て見ぬ  
振りもできない、救うこともできない  
ならば　せめて

せめての最悪の結果を回避しようと、

家族を見守りたいという願いを切り捨て

恋人と共に同じ時間は生きられないけど共に居たいという望みを切  
り捨て

孤独から助けてという救いを伸ばす手を切り払い

さて、その次はなんだったのかな

ただ俺は

せめて救えないなら終わりくらい安らかであってほしかっただけの  
にな」

自嘲気味に笑みを浮かべ顔を横に振る亮、

「だけど　そんな身勝手に多くの願いを踏みにじってきた俺で  
もただ

“ただいま”

“お帰り”と言ってくる場所が欲しかった。

ただそれだけが在ればよかった          なのに“奪われた”」

心情を吐露する亮の声色が変わる、怒りと憎悪に

「だから      だからっ！！」

どうしようもなく許せないんだ          自らのエゴと欲望のために他  
者の幸福を踏みにじる邪悪が          “貴様の事だぞっ”！！」

“バツ！！”

即座にコートを翻し振り向き怒りと憎悪に染まった視線をU字カーブの先の断崖絶壁の先へと注ぎ、二振りの大太刀を構える亮

突然の亮の行動に呆氣にとられる4人

それを全くの意に介さず睨み付けその名を叫ぶ亮

「出てこいっ！！巨魅<sup>かみ</sup>よっ！！！！」

“ヒタヒタヒタヒタヒタ          ”

がけ下から徐々に近づいてくる足音？

「何が来るんだ…？」

誰かが呟く、やがて足音は止み          “バツ！！！！”

断崖絶壁の人がいるはずのないそこから          崖の角によって死角  
になっているそこからガードレールの足元に



突如として白い手が伸ばされ何かが這い上がってきた

続く

## 第二十四 美談（後書き）

もしも明日が晴れならばの設定が混じった

## 第二五話 巨魅葬り

断崖絶壁から伸ばされるそれ…死を体現する白い腕

死者の腕が地面を掴み何かが這い上がってくる。

我に気づいたか人間

魂に直接語り掛けてくる、それ

見るも悍ましい死の異形、それが放つ空気は触れているだけで精神を発狂させかねないほどの負の質量をもっていた。

「な、なんだあれは…」

あれは、昔の僕と同じ怨霊だ…だけど僕とは格が違うっ！！

耕介が震える声で言い、霊剣 御架月がその存在の正体を告げ真直ぐにそれに敵意の死線を注ぐ亮が説明する。

「巨魅…それは神の位階まで力を高めた怨霊 人間の魂つてのは肉体という枷に抑えられて入るがその実大きな力を持っている…そして稀に存在する強い魂は現世に残り続けることがありそうだった靈魂が年月を重ねその魂の概念の重みを増していった強い霊は精霊に…邪悪な怨霊は巨魅というそれがあれだ。」

其れの全容があらわれる。まるでヤモリやイモリと犬を人間を基調に混ぜ込んだような異形、その足は十ほどあり背中からも生え、そ

の形は足というより人間の手に酷似している。

そこにひょっこりについている人間の頭部が不気味さを増している。全体的に死体のように不気味な白体色と合わせり生物的嫌悪感を掻き立てられる。

その頭部は死のものに酷似しているがやはり全体的に白く口も鼻もなく眼窩は縦に割れておりその割れ目を二つの目玉がそれぞれ別々に上下に動きそれが吐き気を催させる。

「もつとも巨魅のなりそこないの様だがな…」

いかにも未だ我は巨魅となり得てはいない、そのためにあれを  
“引き込み”

「ただそれだけの……そんなくだらないことのためにあの子たちを殺し、怨霊にし、払われて尚その残留思念をかき集め不完全な怨霊として使ったのだらう…」

子供が持つ純粹であるが故に強力で無自覚な悪意となる悲痛の叫びを利用するためにっ！！己の贄とする獲物と呼び寄せる道具とするために！！」

明らかな憎悪と怒りを秘めた声で巨魅の言葉を遮り吠える。

その地獄の戦鬼を連想させる剣気に気圧される4人

「亮……君？」

士郎と恭也は内心驚いていた、亮は普段の生活で基本的に作り物臭い表情しかない、唯一なのはと一緒に居る時のみ素の表情を見せておりここまで感情を露わにすることがあるとは知らなかったのだ。

その通り！！しかし所詮は餓鬼…少しの役にも使え

「黙れ！！」

超高密度の圧力がさらにその量と密度を高め解き放たれ、巨魅は言葉  
葉を遮られあまりのプレッシャーに後ずさる。

（推奨BGM 荒野流転）

「そして聞けつ！！」

我は憎悪に燃える空より生まれ落ちた涙

我は流された血を舐める焰に宿りし正しき、怒り

我は…魔を断つ剣成りつ！！！！  
ツルギ

東雲家 番外位鬼切 東雲 亮これより巨魅葬りを開始する。」

## 第二五話 巨魅葬り

「…薫！！俺たちも！！」

「あ、はいっ！！」

“チャキ”

それぞれ霊剣を手に前へふみ出ようとする二人の行方を亮は刃で遮  
りとめる。

「これは俺たち鬼切の敵だお前たちは黙ってみている」

「無茶だ！！あんな化け物一人で！？」

「問題ない、あの程度の外道なぞ俺の敵ではない」

巨魅に向けて蒼眼の死線を注ぎながら宣言し、亮は空気を破裂させる音を残して駆出す。

吠えるなっ！！人間風情がっ！！

自身の巨体を支える最低限の足を残して残りの足がまるでゴムのように伸び亮に迫る。

「確かに貴様等巨魅に対して人間はあまりに無力だ……………だけどっ！！」

幾つもの手のような足が地面に突き刺さり亮ごとアスファルトを砕き粉塵を舞い上げる。

しかし地面に突き刺さった足の一本の上を走りながら粉塵を突き破って亮が二振りの大太刀を手に蒼目が残光の尾を引きながら現れる。

決して曲げず、揺るがず、立ち止まらず

「人間の本気と人間だけが持つ強さ…それを……………」

亮の携える大太刀の刀身が言霊と共に黄金の輝きに包まれる。攻勢霊術、位の高い僧にあると言われる後光の光、降臨系術式の光である。

亮を叩き潰し挽肉に変えようと伸びる足が再び亮に迫る。

後光旋風刃っ！！

足場に使っていた巨魅の足を蹴り跳躍、宙に躍り出るなりまるでミキサーのように亮の姿が刃の残光で見えないほどの速さで回転し触れる巨魅の足を次々と切り裂き、細切れにし消滅させる。

「舐めるなああああっ！！！」

遙か過去に紡がれし誓約を

僕にできるただ一つの願いを

決して曲げず、揺らがず、立ち止まらず

清らかな音色が響き、霊術が発動する。

霊術、それは強化や投影に近い

癒し、攻撃、障壁…それぞれの概念を持った波…それを自身の霊力で生み出し言霊・詩という一つの波と重ね合わせることで具現化させる。

故に大切なのは想像・想<sup>イメージ</sup>う心を像にする。

洗礼系術式は癒しを、相手を悼む心を

結界系術式は守護を、守り抜く誓いを

降臨系術式は攻撃を、正しき怒りと憎悪を

巨魅の巨体を蒼水晶の輪が縛り付け拘束し、黄金の光の槍が突き刺さりまるでハリネズミのような姿に変え、さらにそれら全てを覆う

緋色の水晶の様な六面立方体。

さらに緋色の棺に閉じ込められた巨魅は自身と全く正反対の光属性の力で作られた棺と共鳴・反発による放電現象にその身を焼かれる。夜空を背に浮かぶ亮が口ずさむ各術式の始動キーすべてをつないだ詠唱、それらをまとめ上げる最後の詠唱を持ってこの術式は完成する。

我は刃と共に駆け抜ける

黄金の槍と蒼水晶の拘束具に込められた魔を打ち払う聖属性の力が暴発、

それは緋水晶の結界によって逃げ場を失いそのうちに閉じ込めた巨魅を蹂躪する。

“ザザアアアアっ！！”

地面に砂埃を挙げながら亮が着地する。

「死 呪 悲 怒 つ……………！！」

其れと同時に緋水晶が割れ、呪いの詩が濃い紫色の波動が・先の幼子の亡霊の何倍も濃く禍々しいそれが広がる。



「っ！！」

強い怨霊が持つ固有の呪いの詩　魔笛：その効果はさまざま発狂、精神操作、腐敗

猛毒：世界のすべてを犯し壊死させる呪い。

これを直接身に受けければ徳の高い僧侶とて霊障を負うことは必至、そして霊障を受けた人間は徐々にその魂を喰らいつくされやがて死に至る。治療するすべはただ一つ、霊障を負わせた霊よりも強い霊力の持ち主による洗礼系術式による浄化のみだが巨魅を超える人間はそうはいない。

対巨魅戦において傷を負うことはすなわち勝っても負けてもその者の死を意味する。

呪詛の波動によって現実世界にあらゆるものが生物・非生物が壊死していく。

溶岩が泡立つような音と共に、草が一瞬で白化し、地面が躍る様に破裂し粘液上に溶けていく。

「やらせはせんよっ！！」

広がっていく呪いの波動、その流れを止める歌

眠れる楽園に彩られ

流れ落ちる星、時、夢は瞼を閉じる

それは世界に沁み渡り、凡てを凍てつかせる

無慈悲で冷酷されど慈愛に満ちた歌

透明な指先で綴られた言葉の扉に鍵はなく

いつしか連なる世界の中で玉なる幽幻の嘆きも慎む

眠れよ子らよ    あなたたちの翼はまだ若く    この地の安らぎの  
枝はまだ遠い

眠れよ子らよ    あなたたちの足はまだ弱く    凍れる大地はまだ  
痛い

光の粒子が溢れ波紋として広がり呪詛の波動、魔笛と重なり合う

奏でる祈り、誰へと届く

いつしか消える記憶の淵で    それでも私はここにいる

重なりあつた瞬間、紫色の津波魔笛が凍った。

薄蒼のまるでガラスのような美しいと形容するしかない透き通る氷  
へその形を保ったまま凍てついていく呪詛の波動、魔笛

いつの日か    約束の地を踏みしめるその時まで

全てに変化をもたらす時を凍らし、その流れを止める歌

ソフィア・コード  
天音律

それは、時の流れと同じく最も残酷で優しき歌

そして、それは呪いの波紋の中心点、発生源である巨魅さえも凍らせる。

ボロボロの巨魅足は何本か欠落し、その体表は焼け爛れているまま氷の棺に巨魅は閉じ込められ身動きは取れなくされている。

なぜ、人間如きがわが呪詛と同質にして異質な力を

「簡単な話だ、混ざりモノだからだよ…だが、貴様を滅ぼすのは人間の力だっ」

右手の蛍丸を逆手に持ち替え、勢いよく地面に突き刺右手の左手の蛍丸を水平に掲げる。

「我が義父より受け継ぎし破魔の雷を刻めっ!!」

“ジジ・・・”

虫の羽音に良く似た音が鳴り蛍丸に瞬雷が奔る、

#### 雷刃剣醒

目覚めの言葉と共に亮の内ね眠る雷が目を覚ます。

“バチっ!!バチィ!!”

先ほどとは比べ物にならない膨大な電力が蛍丸を包み稲妻のように激しい発光現象を引き起こす。

その白色の雷の中で蛍丸を触媒として霊的な武器が顕現化する。

其れこそ高位の退魔士が己が命を燃やし、精神（心）で鍛え上げた唯一無二の魂を武器に加工したモノ。

亮の義理父の魂から生まれ出た最強の退魔士の証たる仏魔の雷の武装受け継がれた斬魔の意志を体現する刃

「霊刀：雷慧」

刃が降りぬかれ、刀身を覆っていた百雷が打ち払われ刀身が露わになる。

純白のまるで真珠の如き神秘的な輝きを放つ日本刀：

まるで結晶体のように究極の完成された刃を連想させ、どのような剣豪であろうとも愛刀を投げ捨て手を伸ばしてしまうような究極を形にしたような剣。

純白の刀身に漆黒の鰐と飾り布が映える。

「発っ！！！」

跳躍、下方に氷漬けになっているに狙いを定め牙突の構えを取る。

「往くぞっ！竜虎の牙っ！！！」

亮の瞳が金色の竜眼へと変貌する。

切っ先に稲妻が集い、神速の突きによって撃ち出される。

“グオオオオオオオオオオオオ”

稲妻の槍は巨魅を氷の棺ごと突き破り、凍りを蒸発させつつも巨魅を内と外から灼く。

たまらず苦痛の声を挙げる巨魅、

だが、それだけでは終わらない。

月を背負い闇夜に浮かぶ亮は純白の刃を肩に担ぐように構える、鏢が展開白光があふれ巨大な刃を作る。

[illegible]

怒濤の氣迫と共に落下しながらそれを振り下ろす。

ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオ・……

巨魅は光の本流に吞まれ消滅する。

膨大な力の本流の余波により蒸気が立ち込め、亮の姿を薄ら覆い隠していたが、それを振り払う刃で切り払い、剣を垂直に立てる。

天を衝く白光の巨剣を手に亮は宣言する。

「我に断てぬ存在なし」

## 第二五話 巨魅葬り（後書き）

裏設定：鬼切位階は属性によって決定され対巨魅に対する攻撃力で分別される。

壹位 雷

貳位 破邪

参位 水

四位 土

五位 風

ちなみに亮は内四つを持っている上に人外の血を引いてるため番外位とされている。

## 第二六話 残ったモノは死のみ

夜の山道を吹き抜ける風を一身に受ける亮、漆黒の外套は風に煽られバサバサと音を立ててはためいている。

“ガキン”

道路のアスファルトに突き刺さった大包平を引き抜き、言霊を紡ぐ。

「靈祁封印

「コンタミネーション・イン  
混合開始」

左手に携えられていた雷彗の純白の刀身が罅割れ砕けその内部より蜚丸の刀身が顔を覗かせたかと思うとすぐに刀身の輪郭を残して光る粒子となって散り、亮の肉体に吸い込まれていき残った剣の輪郭もまるでアルコールが揮発するように消える。

「剣が…吸い込まれていった……………」

「亮君…さっきの不思議な現象といいそれはいつたいなんだい？  
…いや、君は一体なんだい？」

有り得ない光景を目に愕然とする恭也とそれを問う土郎。

「その問いの答えは後回しにさせてもらっ…いまはこの土地の浄化が優先だ」

プロジェクト  
投影

亮の手の内に黄金に光り輝くラインが奔り輪郭を形成し、それを覆

う光が奔ると共に魔力による疑似物質が顕現しそれに存在を与える。  
亮の手に握られていたのは不可思議なことに世界各地に同年代に存在し始めた楽器  
オカリナ

其れの吹き口を口へ運び息を吹き込み、巧みな指先で風量を調節し  
特定の音階の旋律を奏でる。

霊力の込められた涼しげな音色が響きあたり一帯の淀んだ空気を澄  
んだものへと変えていく

“ポオウ…ポオウ…”

一つ、また一つと地面から不可思議な色合いの幻光が舞い上がって  
いく。

「これは…」

「いったい何が起きようとしているんだ？」

「綺麗…」

まるで雪のように蛍のように舞い上がっていく光が当たりを照らし、  
一つ一つは取るに足らない灯りだが膨大な数の燐光が尾を引きなが  
ら舞、辺りを照らし出す。

それに唯々見惚れる面々、それに合わせて亮の奏でる旋律が流れる。  
それは、穏やかで静かで清らかで、悲しげな旋律…

「あ、あの子たちは…」



「どういうことだ…？」

幾つかの幻光が集まり人型を形作った、それは先ほど亮に切られ消滅したはずの幼子たち

いや、それだけではない

どこにでもいそうな普通の家族の一行、おそらく恋人であろう男女、老夫婦……

あらゆる老若男女達

この峠で死に、過去に巨魅に取り込まれたすべての人たち…その思念、魂…

死して尚縛られ続けた者達である。

恭也が守ろうとして守れなかった幼子たちの口が亮、恭也、薫、耕介に向けて動いた。

ありがとう      と

「え？」

思わず聞き返してしまう恭也

しかし、その問いに答えることなく幼子たちは弾け光の小塊となり消え、

そして、旋律が止み周囲に漂っていた幻光も消え辺りは再び夜の闇と静寂に包まれた。

“ヒュウウウウ….”



“ドゴンっ!!ドゴンっ!!ドゴンっ!!ドゴン!!ドゴオオオオオオオオオオオ!!”

何度も何度も地面を殴り付かせ陥没させていく亮、ただ遣り切れない怒りを、救えなかった無念を、己に対する憎悪をただ吐き出すように地面にぶつける。

そうだ！！いつも！！いつもそうだ！！俺ができるのは掃除だけだつ、起きてしまった悲劇の後始末だけつ！！悲劇をなかつたことにはできないっ！！この身はいくら力を持つていようと無意味っ！！！！

心の中で自分を罵倒する亮、いくら戦おうと誰も救えない、すでに死んでいる身なのだからそれもしようがないのだが心は納得できない。

死んだ者をもう一度殺すに等しい行いは常にたとえそれが苦しみからの開放であろうと亮の心を傷め苛み続ける。

救えなかったという無念が、ただ殺すことしかできない己に向ける憎悪が

「俺は！！俺は！！こんな事の為にiiiiiiiiiiiiっ！！」

それは退魔の道に生きる者の宿命  
分かつているが、誰かその苦しみを理解し、ただ一言「ありがとう」

、「お疲れ様」と労ってくれる者がいるだけでどれほど楽になれるだろう。

そのたった一言を言うてくれる相手は亮にはおらず、それどころか同じ苦しみを背負うはずのもの達から敵意と憎悪を持って追われていた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお……」

その果てにある結末はいつも同じ、  
唯、黙ってみていることは出来る、其の身に纏う聖骸布で目を覆い隠すか魔眼殺しを使うもしくは目を抉ればいいだけだ。  
しかし、そんなことは 自分自身 が許せない。  
見て見ぬふりなどしたら自分で自分を許せなくなる。

今までは悲しむ間さえ与えられなかった。なのはとの触れ合いにより取り戻した、解けて動き出した心と異世界故に与えられた時が亮に悲しむ機会を与えたのだった。

それが、場違いに嬉しく、ただ憎たらしい。

（すまない、なのは………お父さんには彼を救うことができない……）

すでに力の入らなくなった拳を地面に打ち突ける亮を見据えながら士郎は愛娘に心の中で謝罪するのであった。

「亮君、家に帰ろう…なのは達が待っている」

士郎が亮の後ろから呼びかける。

それに振り向く亮は、驚いた表情で問う。

「俺は…あの家に帰ってもいいのか…？」

「当然じゃないか…君はもう家の一員、家族じゃないか…」

亮の問いに何を言っていると言わんばかりに応え手を刺し延ばす士郎

「すまない…いや、ありがとう」

亮はその差し伸べられた手を取るのだった。

## 第二七話

女性が夜道を歩いていた。

彼女は、残業で帰りが遅くなり精神的にも肉体的もたまった疲労を癒すべく自宅に向かっていた。

しかし未だオフィス街であり深夜に近い時間帯も相まって人気はななく細々とした街路灯が夜道を照らすのみ

“ヒュウウウウウウウウウウウ”

嫌な風が吹く

今は、秋だというのにしけた生温かい風が吹く

気味が悪く思った彼女は、急ぎ足で帰宅の歩を進める。

“ガサツ”

後ろの方で物音が聞こえてくる。

「な、なに？何かいるの？」

恐怖から声を出さずにはいられなかった。

“ニヤアアア”

真つ黒な猫が曲がり角から飛び出し闇に消える。

“なんだ猫か” と安堵の息を吐きながら胸をなでおろす。

“  
カアッ！！  
”

羽ばたきの音と共に一話の鴉が降り立ち鳴き声を上げる。

「なんだカラスか……びっくりさせないでよ……」

タイミング的にB級ホラーだと後ろから化け物にバクリというタイミングに驚いたもののたかが鴉だと再び胸をなでおろす。

しかし、一羽また一羽と次々とまるで女性を包囲するようにその周囲の塀や街路樹、街路灯、手すりなどに無数に止まっていくカラス

「え、ちょ……なにこれ？」

まるで獲物にたかる禿鷹のように目を輝かせるカラスの群れに竦む  
そして……

喰らえ

「きやあああああつ……! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

一斉にカラスが幾つもの羽音を立てながら女性に殺到した。

“ブウウウウン……………”

薫と耕介をさざなみ寮へ送り届けた後一行は士郎の運転する車で住宅街を駆け抜ける。

街路灯の灯りが次々と移り変わりながら窓の外の景色を眺める亮の顔を照らす。

「亮君」

「なんだ士郎？」

「君の事…悪いと思ったけどいろいろ調べさせてもらったよ。」  
「……………」

士郎がこれから言うであろう事実を黙って聞く亮  
探偵どころか役所に行くだけで辿り着く事実、ましてや士郎は裏の人間だ調べようと思えばたいいていのことは判明するパイプを持っていた。

「君はどこから来たんだい？君…東雲 亮という人物は存在した痕跡が数か月前まで一切ない」

「どういうことなんだ父さん！？」

「出生、戸籍、活動履歴…生きていれば必ずあるはずのそれが一切ない…きみは…」



「車を止めてくれ!!!」

士郎の言葉を遮る亮、そのあまりに切羽詰った声色に思わず士郎はブレーキを踏み込み車が急停止する。

そして急停止した車から亮は飛び出し跳躍、電柱に飛び乗りさらにほかの建築物の上を飛び跳ねながらそこへ向かう。

「ちい!!!間に合わない!?!」

人外の超感覚が捉えた、女性の悲鳴の元へ

“ブチブチ、グチャグチャ”

肉を引き千切り咀嚼する音が響く

無数の鴉がかつて人であったモノを啄ばみ贅としているのである。

その鋭い嘴で肉を抉り、適度な大きさを引き千切り飲み込で行くが近づいてくる圧倒的な強者の気配に一斉にその動きを止めその方向を見つめたその時・

“ヒュン、ヒュン、ヒュン”

空気を引き裂き飛来する三つのナイフ

一斉に飛び立つカラス、しかし何羽かがナイフの餌食となり地に倒れ伏す。

まるで、舞い上がる煙のように飛び立つカラス、その近くに着地する黒い外套を纏った青年

「…すまない、あと2分早く来るべきだった。」

黒衣の青年、東雲 亮はそれに向かって謝罪する。

まだ生きている肉塊、かつて人であったモノに

「いま、楽にしてやる…」

腕や足などは肉が綺麗に食い尽くされ骨となり、内臓は散乱し、顔はまるで人体標本のように食われまくっていてどんな容姿かは判別不可能

例えるならどこぞの赤い4つ目の人造人間の劇場版の末路の样である。

最後にと取っていたのか未だに脈動を続ける心臓に黒鍵を突き刺し苦痛を終わらせる。

心臓から噴き出た返り血が頬に付着する。

喉を食い破られ言葉を発することは不可能であったかつての人は最後に何を思ったかも分からない、遺言さえ残せなかったのだから。

「仇は取ってやる…」

勿体無いことを…それにしてもはたして君如きにできるかな？

亮の背後の歩道の手すりに止まったカラスが人語を発する。

カラスは鳥類の中で最も優れた知能と視力を持ち、人の個別の顔を判別することどころか訓練次第で人語も発することもできる種ではあるがその行動はひどく人間臭かった。

「出来る出来ないじゃない、やるかやらないかだ」

よく言っただな、その覚悟に敬意を表して私自らが相手をしよう

言葉と共に先ほど散ったカラスが、語り掛けたカラスを中心に再集結し人型に膨らむ。

「コンタミネーション・アウト  
混合解除っ！！」

背後の鳥の人型に振り向きつつ二振りの大太刀を刃を引き抜き構える亮の眼前で表層を大手板カラスの羽が一斉散り、その中から紅い目をランランと輝かせた漆黒のスーツを纏う男が現れる。

「ふむ、人間にしては不可解な力を使う……そうか！この地に伸ばしていた私の触角を切ったのは君か！！」

「貴様はっ！？……そうか、なるほどな龍脈に偽装した霊絡をこの地の龍脈につないで力を吸い取っていたな？この地の龍脈を歪めていたのは貴様だったのか！！」

「その通り！！しかし君が私の触角を切ってくれたおかげでこの地に足を運ぶ必要が出来たのだが……いやはや、幸運というのか最上級の食材を見つけることができたよ。」

「っ！！なのは事かつ！？」

かつて高町家を襲撃した男の記憶にある人物と目の前の人物は容姿が一致している。

つまりこの男を呼び寄せてしまったのは自分の行動の結果だと悟る。その結果、あの子が悲しむましてや死するなど到底許せぬものではない。

同時に 【地獄への道は善意で舗装されている】。とはよく言ったものだと言嘲する

「そうだ、あのなのはという餓鬼だ。おそらくは先祖がえりなのだろうがあれば力を持つ存在はまれであり我らには極上の贅となる。」

「やらせると思ってたか？」

刃を構えを突き刺すように切っ先を向ける。

「やってみろ！混ざりモノ風情がつ！！！」

同時に二人の異端が動いた。

士郎と恭也は神速を多用しつつ亮の行方を追い、オフィス街に到着する。

“ドゴオオオオおおン！！！”

先ほどから絶え間なく爆発によく似た轟音が鳴りそれを目印に向かっていた。

そして追いつく、

「亮君っ！！！！」

「東雲っ！！！！」

ビルの間の小路地を通り抜け、音の発生源に到着する。

「っ！！！！」

そして息を呑む。

「ぐ、……」

「混ざりモノにしては頑張ったな……しかし君如きでは私には勝てないよ。」

右手の大太刀を地面に突き刺し杖にし何とか立つ亮、足元のは全身の裂傷と額から流れ出る紅い滴によって水たまりができ、

その左腕は二の腕から千切れ飛び少し離れた場所に刃を握りしめたまま転がっている。

なぜかその断面は黒く炭化しておりぶすぶすと黒い煙を上げている。

金色の竜眼で眼前の男を見据える亮は苦しげな声色で言う。

「火の神性を持つ鳥神……貴様の真名は……」

「君の予想通りだよ」

男が駆出し、それに合わせて刃を引き抜き振りかぶり、男が間合いに入った瞬間振り下ろす。

「ハアッ!!」

振り下ろす過程で刀身が変化、一瞬包まれそれを打ち破って雷替に変化した刀身が破魔の稲妻を纏って振り下ろされる。

“ガキン”

「どうした？片腕が落ちてから動きが悪いぞ？」

どんなものでも断ち切る雷刃は黒炎の宿った男の片掌に掴まれとめられてしまう。

それもそのはず、亮の剣は極限まで研ぎ澄まされた速さと鋭さをもつて初太刀ですべてを両断する一撃必殺の剣

片腕を失ったことは重心を変化させ、太刀筋をずれさせいつもの切れ無くさせる。

これは亮のような荒々しくその実繊細な剣を使うものにとっては致命的な誤差となり、いつものアクロバティックな動きを行うにも障害となる。

「もっと楽しませてくれんと……」

刃を掴んでいない拳を握りしめる紅目の男、その腕に黒炎が噴き出宿る。

「張り合いがないぞおっ！！！」  
「っ！！！」

そして拳が振るわれ、まるで間欠泉のような黒炎が腹部に向けて振るわれた拳から放たれ亮はそれによって流され、黒炎の本流と共にビルに突き刺さる。

辺り一面を覆う蒸気、亮を吹っ飛ばした黒炎は地面を抉り、突き刺さったビルの構造物を赤熱化させ、歩道のタイルはガラス化、アスファルトもタール状に変化している。

士郎は悟る、そんな高温を身に受ければどうなるか、最低人間の形はしていても決して生きてはいないと。

「貴様…よくも！！」

恭也が刃を抜き放と構える、街路灯の明かりを鈍く反射させる刀

士郎も双刀を抜き放ちあたりを見廻す、罠があるとも限らないからだ。

「ふむ…君たちは不破の生き残りか……たしか恭也と言ったかね君は帰っていいぞ、その士郎氏ならあいっより一枚…いや二枚は劣るがそこそこ楽しませてくれそうだがきみはだめだな」

「なんだと！？」

「そう、まずはそれがいかんだよ、剣気というものはむやみやたらにまき散らすものではない、内に秘め必勝と心得たその一瞬のみ

に解き放つものだ。

士郎氏を見給え、彼はまず自分の状況を判断してから刃を抜いた、所構わず敵がいるからと武器を構えるのは三流だよ。」

「キサマアアっ！！！」

「待て！！恭也！！」

士郎の静止の声も無視して地面を蹴り男を斬るべく走り出す。

「ふう、血気盛んなのはいいことだけど時と場合、それに相手を考えなくてはだめだよ、しかも馬鹿正直に真正面からとは……」

再び黒炎を拳に宿させる男、亮に放ったものと同じ黒炎が恭也に向けて放たれる。

「この程度っ！！」

道路を蒸発させながら恭弥に迫る黒炎

しかし、命中寸前で恭也の姿が掻き消え、その横に現れ一瞬で移動したことを指し示す。

神速を発動し、迫りくる黒炎をサイドステップで紙一重に避けたのだ。

服と髪を焼く匂いが鼻につくが回避には成功したと確信し、通り過ぎる黒炎を見やった後に男に視線を移す。



その視界は、迫りくる黒炎で埋まっていた。

サラマンドラ・バーン  
「炎龍焼牙つ！！！」

突如として横殴りに飛来した蒼炎の龍の頭が黒炎の本流にぶつかり、行き場を失ったエネルギーが爆発する。

「がつ！！！」

それに木の葉のように吹き飛ばされる恭也、地面に打ち付けられるが即座に起き上がり炎龍が飛来した方を見やる。

そこには満身創痍の亮が残った右腕を突き出すように掲げていた。

そして、徐に漆黒の外套を脱ぎ、投げ捨てる。

「知っているか？貴様は知っているか…八咫鳥、誰にも消せない命の歌を…」

亮を中心に蒼い焰が吹き荒れる、それは漏れ出た力の奔流

「ほう、よく生きていたな…その生き汚さは驚嘆に値するぞ」

「俺は知っている、誰にも消せない命の歌を…聖約の言葉は一つ…変・神つ！！！」

吹き荒れる焰が火柱となり亮を覆い隠し、その炎は亮の肉を焼き、

骨を熔かしそして…

凝固し新たな肉体となる！！

炎の柱は何かの内側から切り裂かれ、中からそれは現れる

炎が凝固したかのようなマグマが冷えて固まったような質感の甲殻、それは青黒い金属光沢を放ち白い湯気立ち上っている。

さらに巨大な爪が指から生え三つのまるで連結刃のような尾が各々自由にまるで波に揺られる海草のように揺れ動き獣を連想させる。

蟀谷からは後ろに向けて天を衝く2本のまるで水晶の様な角が生え、その背には竜の翼が携えられている。

“ガキンっ！ガキンっ！”

金属が地面とぶつかる音を立て赤い火花を散らしながら亮は姿勢を整え大地を踏みしめる。

「纏うは竜鬼、振るうは絶大…」

輝龍戦鬼 闘牙

体のあちこちから上がっていた白い湯気を吹き飛ばし進む力が噴き出ると共に竜の翼に蒼い焰の羽が宿る。

「ここに現臨っ！！」

圧倒的な威容、それが魔であるなら如何なるものであろうと弾劾する最強の龍人にして鬼神

「亮…君…其の姿は……」

「邪魔だ士郎、恭也下がっている」

士郎の声を遮り、地面を蹴り八咫鳥に向かう。  
その衝撃で地面が爆ぜ飛び粉塵が上がる。

「フム、どれほどできるようになったか魅せてもらおう……なっ！  
」

言葉の途中で八咫鳥は目を見開き己が腕を見る。右腕はなくなっており鮮血が噴水のように噴き出る。

眼前に居たはずの亮はすでにおらず、知覚もできずに後方におり、  
欠落した左腕の断面に引き千切った八咫鳥の腕を押し当てる。

”ボオオオオオっ！”

一瞬で蒼炎に包まれた八咫鳥の腕は炎が消えると共に亮の腕として  
青黒い甲殻に覆われた竜の腕に再構成されていた。

「時間跳躍による因果の結合…だと！？貴様…人の領域を超えてい  
るぞ…！」

千切れた右腕を抑えながら亮を見やる、それをしり目で金色の竜眼  
で見据える亮。

「……ここでは君が強い、君と相対するにはそれなりの準備が必要だようだ。」

「逃がすと思ってか？」

「逃がさざる得ないさ……この町には私の着族が無数にいるさっきの食材と同じ末路を辿る人間はいくらいるのかな……？」

挑発するように歪な笑みを携える八咫鳥に亮は齒嚙みする、

力を巨魅と再生に使いすぎた、固有結界をどころか神経空間も展開できない

事象の領域にまで昇華された神、八咫鳥……それを討滅するには亮の方も準備も状態も良くなかったのだ。

「致し方ないか……」

「ずいぶんと物わかりがいいな君は…では」

「ああ……」

（（次に会った時が貴様の最期だ））

双方胸の内に一字一句違わない決意を秘めつつその真意は真正面から反対の思いを秘めている。

「くくくく…それじゃ“死ぬまで”お元気で、なのはという子とな  
かよくな あははははははははは」

不愉快な笑い声と共に八咫鳥は爆ぜ黒い羽となって消え去った。

「死なせはしない、その前に貴様を殺してやる……」

不愉快な魔の残照と鴉の鳴き声の中で亮は呟くのだった。

“ピシッ！”

亮の体を覆う甲殻に罅が入り白く風化し、砂となって崩れ落ち夜の闇に運ばれる。

そして、崩れ落ちた甲殻の中からはボロボロの衣服を纏った無傷の亮の姿が現れる。

「亮君、あいつは…君は一体…」

「士郎…あとを……頼…む……」

士郎が駆け寄り亮に問うも亮は限界であり崩れ落ちるように倒れる。

「亮君っ！！」

遠くで自分を呼ぶ声がするが亮に意識を保つほどの余力は残されていなかった。

## 第二七話（後書き）

龍神人形態は・hack G・U・TRILOGYのハセヲビーストフォームが蒼く、髪も黒髪になり翼と角がついた感じです。

## 第28話

「う、ここは…」

意識が覚醒する。

やがて眼が慣れ周囲を見渡すと高町家のリビングにあるソファーに寝かされていると悟る。

窓からは朝陽の明かりがさしこんでいる。

「気が付いたかい？」

声がかけられ、そちらに首だけを動かし視線を向ける。

30を超えるというのに未だ20代に見えるほど若々しい男、高町士郎が俺を見据えていた。

ふと周囲を見渡そうと体を動かすと腹の上に暖かさと重みを感じそちらに視線を向ける。

「すーぴー…ZZZ…」

幼女、が小さな寝息を立てて眠りについておりその幼女　なのはごと布団が掛けられていた。

「どうしても君の傍から離れようとしなくてね…しかもそのまま寝てしまったんだ」

苦笑しつつ自分の愛娘を見やる、その手は亮の寝間着をしっかりと握りしめている。

「そうか…」

着崩れた布団を掛け直しそのまま頭を撫でる。  
サラサラした髪感触が心地よかった。

「あら、起きたのね。初めて来たときみたいにボロボロで土郎さんに抱えられて帰ってきたからどうしたのかと思ったけど傷がないよ。うだから安心したのよ」

ひょつこと顔を覗かせた桃子が笑みを向ける。

「父さん、母さんおはよう」

「あ、起きたんですか。あらなのはまだ寝ちゃってるかわいい」  
「」

続いて恭也と美由紀がそろって部屋に入ってくる。

そして、

「君の事、教えてはくれないかな…亮君、君は一体どこから来た何者なんだい？」

高町家のリビングに一同がそろい、土郎が面々を代表して亮に問いかける。



ちなみになのはまだ亮の膝を枕にして寝ている。

「簡潔にいうと最も近く限りなく遠い世界、並行世界からの転移者だ」

「並行世界…確か量子力学かなんかの多世界的解釈論だったかな？」  
「父さんそれは一体なんだ？」

士郎がうる覚えの知識をひねり出し、恭弥がそれについて問う  
桃子は調理師の資格と修行に若い時を奔走していたので知る意味も  
時間もなく恭弥・美由紀も現在中学・小学であり知るわけではない。  
つまり、現段階において高町家の学は高いと言えないので説明する。

「生物の進化を図に表した樹形図というものがあるだろうそれを思い浮かべると良い、

生物の進化が分岐するように世界は各々の選択によって常時IF…  
もしかしたらの世界とこうなった世界に分岐し続けているんだ。

つまり、この世界とて樹形図を見た際の分岐した一ルートにしか過ぎないというわけだ。

そして俺はそんな幾つものまるで合わせ鏡のように無限に存在し相互に干渉できない隣り合った世界の内一つから来た言う話だ。」

「つまり、あなたはこの世界で生まれたわけじゃないから経歴が存在していないということ？」

「平たく言つとそういうことだ、ちなみに魔界とか天界とかそういつた非常識な世界じゃなくてこの世界が歩むかもしれない可能性の世界だから相違点はそんなにないぞ。」

桃子の要約に頷き土郎と恭也を見据える

「この世界に來た理由は…言わずともある程度分かるだろう?」

その言葉に苦い顔をする三人

恭也はともかく土郎は弟と両親を美由紀は実父を似たような理由で失い逃れるために名前を変えたのだから。

「俺が何者かというと、人に仇名す魔を討つ為に魔と交わった者の末裔、半人半魔という奴さ…そして世界の神秘を探究する秘法、魔術を使う退魔士…さしずめ魔術使いの靈術師というわけだ。おかげで向こうの連中には忌み嫌われていたがな。」

「君の魔としての姿…それがアレ…か」

「えっと、私たちは見ていないんだけどなんか変身したんだっけ?」

「ああ、竜因子を活性化させそれに合うように肉体を造り替えた、血に目覚めた混血・紅赤朱の完成形の一つと言えるのかもしれないな」

紅赤朱の究極とは人のままで魔の力を操ることにあり、肉体変化を起こさず魔を操る遠野家はその極みにいるが力を行使する度に自我を少しづつ飲まれ魔に落ちる反転と呼ばれる現象に悩まされ続けている。

亮は逆にある程度は肉体変化を起こさずに異能を使えるが本気を出すには人間のままで耐えれないため一時的に肉体を造り替え幻想種の肉体を得ることで最大限異能をつかえ、その中で人間としての自意識を失わないという遠野家とはまるで逆の存在だ。

「そう、人間とは似て非なる人間である俺だが…あんた達には選択権がある。

俺を受け入れるか、拒絶するか…化け物である俺を娘に関わらせたくないというのなら去ろう。」

真直ぐな瞳で何のためらいもなく言い切る、当然だ初めから決めていたのだから。

周囲は若干不穏な空気に包まれる。

「それは困ったな、君がいなくなったら誰がなのは面倒を見てくれるんだい？」

「君たちが狙われる再び原因となった八咫鳥を引き寄せてしまったのは俺だぞ？そんな災厄の根源をそばに置いておくか？正気を疑うな」

「だけど君はなのは守ろうとしてくれるそんな君を拒絶するほど僕は愚かじゃない」

「亮君はどうしたいのかな？」

「俺は…」

桃子の問いに言葉が詰まる。

脳裏にはなのはとの日常が浮かぶ、それは60年ぶりの安らぎだった。

りようおにいちゃんが例えお空で一人ぼっちになっても必ずなのはがお空まで行くの、だから……大丈夫だよ

…なのはをいつも守ってくれてありがとう

そういつてくれた視線を膝に頭を乗せたまま眠っている幼子を見やる。

しかし、自分が災厄を引き込んだことには変わらない。これからも呼び込むかもしれない。

だけど…この子の傍に居たいという自分も確かにいる。  
葛藤<sup>ジレンマ</sup>が苛む。

「すーぴーZZZ……ん、むにゅ……」

不穏な空気を感じ取ったのかなのはが目を覚まし起き上がる。

「…にゅ……おはようなの……」

瞼をこすり妙な鳴き声と欠伸を挙げながら周囲を見渡し、亮の顔を覗き込む。

「うにゅ？どうしたのみんな？」

一人状況が全く分かっていないなのはが改めて小首を傾げながら周囲を見渡す。

そんななのはに桃子が問いかける。

「ねえ、なのはは亮君のことどう思ってるの？」

「にゅ？大好きだよ」

間髪入れずに即答するのは

「というわけだ、君がいなくなるとこの子は悲しんでしまう、それに君がいないと昼間なのは一人になってしまうじゃないか」

なのは亮が来てから本当に楽しそうに過ごす。

今日何があった、どんな遊びをしたか、どんなことを教えてもらった、話してもらった、本を読んでもらった、お菓子を作ってもらった。

士郎は父親の役目をもろもろ取られたような気はするが日中あまりかまってやれない娘の面倒のほか家事もこなす亮に士郎は感謝とも恩ともいえる念を抱いており自分も暗殺を生業とする家に生まれ裏稼業で外道を何人もその刃に沈めてきた過去から本当に怖いのは力を持つものではなく心に鬼を飼う外道だと理解している。

亮のことは…体は鬼と呼べるものかもしれないが心は人間そのものだと感じている。

誰よりも卓越した殺戮者が殺人を嫌っている。

それはなんて皮肉だろうか、狂ってしまえば心を逸脱させてしまえば楽になってであろうか彼は彼自身がそれを許さなかった。

剣鬼の剣を持ちながら人の心を持つ彼は人外の化け物の肉体を持つつつどこまでも人であった。

「りょうおにいちゃんなのはといっしょなの……」

「亮君は居てもいいのよ、むしろいてくれなきゃ困る」

「なのはもなついてるし、心強いし…反対する要素がないね」

「……………俺を鍛えてくれるのなら」

なのは、桃子、美由紀が賛成を露わし少し渋って恭也が妙な条件と共に賛成する。

全く素直じゃないが中学とはそういう年頃なのだろう。

それでも

「そうか」

短い言葉と共に亮は自然な笑みを返すのであった。

そして、その夜

「……………」

高町家の庭で秋の風が吹き抜ける中、朧月を見上げる亮の姿があった。

秋の風によってそのやや茶を帯びた黒髪が周囲の舞い散る木の葉と共に揺られ、どこか悲しげな表情の青年が纏う儂い空気を一層に引き立てる。

なぜ？俺は戦った

命の流れを正常に保ち、彷徨える霊に終わりをもたらしつつ、いつか生まれてくる救いをもたらす存在と出会うため

すでに出会えたのに何故闘った？

分からない      解からない      判らない

命を絶つ感触が手から、涙が目から、悲鳴が耳から離れない  
だけど

「放って置けなかった」

「なにがなの？」

後ろからいつの間にかいたのかなのはが問う

「いや、なんでもないよなのちゃん」

「“うそ”」

短く告げられたその一言に一瞬背筋が凍るような感覚が奔る。

「うそなの、なんでりょうおにいちちゃん泣いているの？」  
「いや、泣いていないのだが…」

困惑する、幼女は自分が泣いていないのに泣いているというのだ。  
それが分からない。

「泣くときは声を出して、涙を出さないといけないなの」

なのははトテトテと自分に近づき手招き、しゃがめというジェスチャーを行う。

なぜかそれに素直に従いしゃがみ視線を合わせる。

なのはは俺の頭に手を置いて左右に動かし撫でながら言う。

「我慢しなくていいの、泣きたい時は泣かないといけないの」

ピクリと体が震え、心に言葉が沁み込み目から零れ流れ落ちる熱いものに気づく

涙だ

歪む視界の中では彼女、なのはが笑っていた。

なのはを抱き上げる。

泣き顔を見られたく無かったからだ。

「少しこのままでもいいさしてくれ……」

「ん」

嗚咽交じりの声で言うと、首を縦に動かす感触が伝わる。  
そして、ただ…ただ涙を静かに流す。



今まで泣けなかった分も含めてまとめて洗い流すように

## 第28話（後書き）

なのはと亮の愛情は親愛でありラブじゃなくライクです。

（まだね…）

## 第二九話　なのはの不思議な冒険　前編

朝の凜とした空気に包まれた武家屋敷には必ずあるであろう武道場  
高町家の裏に立てられたその建築物の中は今にも張り裂けそうな空  
気のもと裂帛の気声と空気を裂く音が響いていた。

「ハアっ!!」

「たあっ!!」

中に居た一人の青年と少年

高町　恭也と東雲　亮

恭也は鉄心入りの双刀を持って無手の亮に幾たびかの斬撃を放つ。

左上から右下への袈裟切り、それに対して亮は刀身の側面に掌を当  
てその軌道をずらす。

「てえやあっ!!」

ずらされた瞬間に左手の刃を横風に振るう。

「フンっ!!」

短い呼気と共に亮は左から水平に迫る刃を右腕の肘と膝で挟んでそ  
の刃を止める。変則白刃どりである。

「視線を狙った場所に向けるなっ! 狙いが見える」

「がつ!!」

亮の左拳が恭也に水月に入りピンボールのように吹っ飛ばされる。

「いいか、古武術というのは敵との仕合を想定しどんな状態からでも同じ打ち込みができるように体に染み込ませ、その時々に応じて最適な型を選択することこそ真髄だ。」

故に最も大切なのはイメージだ、相手も自分も常時何かしらの法則に支配されている、そこから相手の装備、構え、体格といった情報源から動きを想像し予想しろ。そしてそこから最適な型を選択するのだ。ただ技を覚えるだけなど三流もいいところだ。」

「ゲ…はいつ!」

道場の床に転がる恭也が起き上がり再び双刀を構える。

「だあああああつ!!」

トンと小気味良い音を立てて恭也が亮に迫る。

「気合だけでどうにかなると思うなっ!!」

刃を振る直前、亮の姿が恭也の視界から消え旋風脚で足払いをされ恭也の体が宙に浮く。

「クッ!!」

とつさに恭也は視界の外、真下に向けて突きを放つ。  
放たれた刃の先には亮の側頭部

「フンっハア！！」

が刃が亮の顔面に触れるよりも早く真下から蹴りが放たれ、胴体に亮の足がめり込み吹っ飛ばされる。

「ガハっ！！」

真下から蹴りあげられ放射線状に舞った後、恭弥は道場の床にその体を叩き付けられる

「グ…ガハッ……」

仰向けに倒れたまま息絶え絶えの恭也に対して余裕の表情の亮は恭也を見下ろしつつ口を開く。

「そんなに殺気満々ではたとえ目を瞑っていても避けれるぞ。どんな特異な動きで意表を突こうがだめだ狙い所に意識が向きすぎて視線から動きを予想できる。」

恭也を鍛えるにあたってまず手始めに模擬選をやったのだが三本中三本とも亮の圧勝

技を教えることは出来ないが戦闘理念を教えることで高みへと登らせようとしているのである。

恭也は技の熟練度こそそこそのレベルに到達していたのだがそこまで、戦闘理念が欠落していたのだ。

一流と二流の壁それが恭也にとって大きな壁となっていたのだった。

ちなみに士郎は美由紀の方についている彼女はいまだに体作りの段階であり本格的な技にはまだまだ早いのだ。

「いいか、敵の虚を突くには【仕掛け】【間合い】【間】を外すのが基本と思えそのどれかを読まれれば何万回試そうとも一流と呼ばれる熟練者には通じない」

「は…いつ…！」

“ガラっ…！”

「りょうおにいちゃん、おにいちゃん…！ご飯なの…！」

「くーん」

「魂っ…！」

扉を開けてなのは朝食の用意ができたと呼びに来た、久遠も月砂の背に乗って一緒にやってきた。

だがやけに月砂の気合が入っている気がする主に鳴き声から推察するに。

「よし、鍛練はここまでだ。今言ったことを考えずに反応できるレベルになるまでよく鍛えてみるんだな。」

そうついつつ恭也に隅に置いていたタオルを投げて渡す。

「ありがとうございました」

「かわいいわねえ〜」

「くーん」

久遠を抱き尻尾を撫でる高町家の母 桃子

「高町母よ動物は毛が散らばり雑菌を持ち込む可能性があるから連れてきてはいけなと決めたのはあなたでは？」

「えー……だって可愛いんだもん」

恭也が最もなことを言うがこねる

「ほんと可愛いよ恭ちゃん？」

「くーちゃん可愛いのー！」

「くーんー！」

「かずちゃんも可愛いのー！」

「コンー！」

久遠ばかり可愛がられるので自分は？となのはに訴えかけた月砂にももちろんとなのはがいい嬉しそくに尻尾を振る月砂

「ああ……なんだ恭也、諦めろ」

「それが喫茶店のマスターのセリフですか」

「愛の絆故にだ」

「そんな絆どぶに捨ててしまえ!!」

恭也と士郎氏で議題が紛糾している。

「愛の絆うんぬんは兎も角その狐は妖狐だから雑菌の類はレジストしているから大丈夫だと思うぞ。毛は：知らんシャンプーでもするしかないな」

朝食の沢庵をボリボリと齧りながら亮が事も無げに言う

「くーちゃん実はすごい狐なの?」

「なのちゃんきみは久遠と話してなかったか?

まさか狐が人語を話せる生き物と思ってはいないよな?」

「え? 違うの?????」

「最初に月砂と話そうとしてコンコン鳴いていたのはどのどなたでしたっけ?」

「にゃああああああああっ!!!!」

亮のちよつとしたからかい

あまりの恥ずかしさに奇声を上げつつ錯乱するなのは

桃子、士郎、美由紀は惜しいものを見逃したと箸を握りしめ後悔している。



「いろいろ突っ込みどころが多いのだが誰も疑問に思わないのか？  
……それとも俺がおかしいのか？……………」

恭也のみが常識人であつた。

「さて、準備は出来たか？」

高町家の玄関で亮がなのはに声を掛ける、なのはは可愛らしく小さい黄色いリュックを背負い真つ白な帽子をかぶり同じく真つ白な長袖の下着の上にピンクのワンピースを着こみ艶のある栗毛の髪を後ろで可愛らしく二つに束ねている。

「ハンカチおっけー、お弁当おっけー、帽子もおっけー、くーちゃんもおっけー、おとうさんから借りたカメラもおっけー……おーるおっけーなの！……！」

亮はラフなジーパンに濃緑のフィールドジャケットというラフな格好に黒い鞆にいくらかの荷物を積み込んで肩にかけている。

因みに鞆の入り口のジッパーは少し開かれそこから久遠が首だけ出している。

「いつてらっしゃいね、なのは」

「おかあさんいつてきますなの……！」

なのは元氣に見送る桃子に手を振り亮に手を引かれて出かける、  
そう遠足に出かけるのだ。

そして、電車とバスを乗り継いで二人は越知町という山間の町とい  
うかほとんど村の片田舎へとやってきた。

「くう~~~~~~~~と」

長い間すわりっぱなしで固まった体を背伸びで伸ばす。

ふと、空を見上げると秋の澄んだ空気によっていくつかの流線型の  
雲が青空に浮かぶ様子がはっきりと目に映る。

「うにゅ~~~~」

「くう~~~~ん」

なのはと久遠は亮の真似をして伸びをする。

大中小と並んで背伸びする様子はどこか微笑ましい。

もつとも大小特小かもしれないが微笑ましいことには変わらない。

だが背伸びする子ぎつねを微笑ましいと思うか珍妙だと思うかは人  
それぞれであらう。

「ふう…やはり自然が命溢れる土地は力の回復が早いな」

感嘆の声を漏らす茶髪よりの黒髪の青年、ジワリと染み込むように空気中の魔力や生命力、霊力が体に入り込んでくる。

亮は精霊種との混血であり精霊はマナを取り込みオドと併用して使うことができた亮にとってこの土地は最高の療養地となり得るのだ。

ふと足に暖かい感触が伝わり視線を下げるとなのはが足に密着していた。

「りょうおにいちゃん、あのねあのねっ！」

ぴよこんと飛び跳ねて少女が手を伸ばす。

（なんだろう？手をつないで歩きたいのか？）

亮がそう口にするより先に本人はにっこりと笑顔でこちらを見上げ、

「なのは、肩車がいいの」

「そうか、いいよ」

一度しゃがみ少女を肩に乗せ立ち上がる。

「わー、高いの！りょうおにいちゃんよりも高いの！！」

「あまりはしゃがないでくれ、バランスが危ないことになる！！」

頭上ではしゃぐ彼女をなだめつつ亮は足元の久遠と共に道路沿いの道を歩き出す。

田舎の国道故のやや広めの道路の淵の落ち葉が積もった歩道を歩み橋を越え、目的地の公園へと向かう。

その公園は子供向けの遊び場というわけではなく川と隣接したその公園はイベント用の広場とただコスモスの花畑のみがあるのみ。

しかし、そのコスモスの花が一齐に咲き乱れ見渡す限りの彩色の光景が広がる。

「すごいの！！すごいの！！ピンクの絨緞みたいなの！！」

先ほどの注意も忘れ亮の頭の上でその景色を目にしはしゃぐなのは白、薄桃色、濃桃色の花が咲き乱れている、なのは身長よりも高い茎の先につけられたその花々が映し出す光景は大人の身にもみ許された光景

なのはは亮に肩車され、その光景を目にする。

圧巻の一言、そして少し遅れて美しいと感じる。

“ばしゃ！パシャ！！”

頭の上でカメラのシャッターが墜ちる音がするなのはがその光景をデジカメのメモリーに焼き付けているのだ。

「う~~~~いまいちな」

デジカメの記録映像を確認したなのはが不満の声を漏らす。

「なのちゃん、景色はうまく撮ろうとするんじゃないだよ。  
ただ心が震えた光景を切り取っておきたい、写真を見た人に今感じ

た感動を伝えたい。

それを心にシャッターを切るんだそうすれば自然に上手くいくはずだ。」

「わかったの」

再びカメラを構えるのは、真剣な様子でレンズを覗き込む

そして

“パシャ！パシャ！！”

シャッターが再び落ちる。

「ん〜と……やったの！！」

「ちょ、はしゃがないでくれバランスが！！」

満足のいく写真が撮れたため亮の頭上で万歳をして喜びを表すのはだがそんなことをすればどうなるか…

「あわわわわっ！！」

ゆらゆらと揺れる亮の上半身とその頭に捕まってパニクるなのは

「よっつとっ！！……気を付けてくれ、この状態で転んだらなのはちゃんが大けがをしてしまうかもしれない、そうになったら土…お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、久遠…みんな悲しんでしまっ」

巧みな足さばきでバランスを取り戻した亮が頭上のなのはに諭す。

「…りょうおにいちゃんは？」

やや不安気な声で聞き返すてくるなのは

「もちろん俺もだよ」

「わかったの！」

亮の言葉に安心したのか元気よくなのはは返事をする。

「すごいの～～～」

「くうん！」

一面のコスモス畑の中に造られた遊歩道を亮と手を繋ぎ歩くのは周囲の自分よりも背の高いコスモスを見上げる。

遊歩道と言ってもコスモスの間をロープで境を作り砂利を敷いただけなのでなのはには緑のトンネルにも見えているかもしれない。天井はないが

「にゃ！トンネルなの！！くーちゃんいくの！！」

「ちょ、なのちゃん待ちなさい！！」

歩いていると子供ゆえの低視線故に目に入るコスモスの茎の隙間、

狙ったかどうかは分からないがトンネル状になった獣道のような隙間を見つけたのはは久遠と共に駆け込む。

コスモスの茎のトンネルをどんどん進んでいくなのは、ちょっとした冒険気分だ。

真直ぐからジグザグ、ループ方向感覚がグチャグチャになりつつもなのははトンネルを真直ぐ進んでいく。

「プハア！！」

「くうん！！」

最後の薄い壁？を突き抜け円状の空間ちょっとした広場のような場所に出る。

「にゃ！？」

「くっ！？」

そこになんかいた…

ソフトボールくらいの白い微妙に半透明のモコモコした丸い物体からピヨコンと立った白い耳らしきもの、黒く小さいつぶらな瞳をもつ何と表現していいのか分からない生物がいた。

一瞬それはなのはと久遠を見ると、

“ヒュウウウンっ！！”

なんかあわてて駆け出しコスモスの茎の茂みに消えていった。どうやら体の毛に隠れて見えないらしいが二足歩行らしい後ろに丸いふ

わふわした尻尾らしきものもあった。

「追っかけるの!!」

「くん!!」

がさがさと時折当たるコスモスの茎を払いながらそれを追いかける。

“ がさあ ”

「にや?今度は樹のトンネルなの!!」

茂みを超えるとそこは小さな子供一人分ぐらいの空間を持つ木の根で出来たトンネルであり隙間から微妙に陽光が入り込み中を照らしている。

そしてトンネルの中を左右に見渡す。

まずは右、そして左  
すると…

「いたの!!」

視線の先にひよこひよここと歩く先ほどの生物

それを目を輝かせながら追いかけるのは&久遠

「!!」

後ろから迫ってくる少女に気が付いたそれは猛ダッシュ、全力で木の根のトンネルを駆ける。



幾つかのカーブを曲がりその白い謎の生物は木の根の主であろう大樹の根元の僅かな空間に飛び込む

…が隙間に挟まってしまう。

「まってなの……っ!!」

「ク　　ンっ!!」

迫りくるのはと久遠にあわてて体をねじり足をばたつかせる白い毛玉のような謎の生物

“ヒュポンっ!!”

小気味良い音と共にすっぱ抜け大樹の根元の暗闇にちよつとばかり汗のようなものをまき散らしながら落ちていく。

「ん……なにもみえないの」

「くうん……」

その暗闇を覗き込む追跡者たち。

その背後で先ほどの生物しかも少し大きめの青いのが増えていて肩?に風呂敷を下げその先頭を歩いている。

ひょこつと現れトンネルの壁の隙間からソロリ、ソロリと抜き足差し足忍び足で移動する二匹

いったい地下構造がどうなっているのか全くの謎である。

「にゅっ!!」

“ピキーンっ!!”

どこぞの新人類のように凄まじい直感で背後の希薄な気配を読み取り振り向くのは、  
それに連動しビクリと固まる二匹の謎の生物

“キラーン!!”

振り向くのはと久遠の目が怪しく光る。

まるで滝のように冷や汗をたらだらかきまくる二匹の謎の生物

「にゃ                    っ!!」

「ク                    ンっ!!」

「「!!」」

そろって飛び掛かるのは達

あわててダッシュで逃げ出す生物、それを追いかけるのは&久遠  
先頭の青い中ぐらいのが担いでいた風呂敷から団栗どんぐりが零れ落ち、そ  
れを後続の白くて小さいのが拾うが2、3個で手がいっぱいになり  
それ以上は拾えず拾っても零れ落ちてしまう。

その落ちたドングリを目印になのはは追っかける。

そして、入り乱れた樹木根のトンネルをくぐり終点：先ほどモノと  
は比べ物にならないほど大きな、どこか神聖で優しい空気をもつ巨

木の根元へと出る。

「はあ~~~~」

しばしその巨木を見上げ感嘆の息をつく。

そして視線を元に戻すと団栗が点々と続いて根元の木の根の間の空洞へと続いているのを見つける。

木の根の間はどこまで続くともしれぬ暗闇でありなのはと久遠は一人余裕で乗れるほどの太い木の根の根の地表に現れている部分からそれを除きこむ。

「まっくらなの」

「くうん」

「くーちゃんみえない？」

「くうん」

ふるふると首を横に振る久遠に残念と言い再び覗き込む  
さて、幼児というのは体に対して頭が大きい、そんな幼児が乗り出すように覗き込めば…

「にゃ！？」

「コっ！？」

当然、重心が前により過ぎて前のめりに落ちる。

「にゃあああああああああつ！？」

「くううううううううううんっ！？」

落ちる直前になのはに尻尾を掴まれ共に落ちていく久遠

木の根の間にできた縦穴をごろごろと高速回転しながら落ち、そして縦穴は曲がり水平になり穴から“ポン”と小気味良い音を立てて吐き出される。

「にゅ~~~~~~~~目が目が~~~~~」  
「くう~~~~~~~~ン」

孔の中を回りに回ったのはと久遠は目を回してしまっている。その頭の上で もしくはヒヨコが回っているのが幻視出来そうである。

やがて、目の回転も止まりあたりを見廻す。

大樹の中にできているような巨大な縦穴、不思議なことに何所からか陽光が差し込み内部を照らし壁や床は青々しい苔で覆われている。

隅にはやはり苔に覆われた瓶が幾つかあり団栗が詰まっている。

なのはは気づかないが蓋になっている大きな【はすいもの葉】が起き上がり暗闇からそつと二対の視線が二人に向けられている。

視線を一週させると壁に一際大きな空間が開けられておりそこには

「なんか、灰色のでっかい毛玉がいるの」  
「くうん？」

第二九話　なのはの不思議な冒険　前編（後書き）

となりのトト　トッ　口~~~~

### 第三十話　なのはの不思議な冒険　後編

大きな縦穴：あたり一面コケが生え茂り黄緑色の壁と床に覆われた深塚の中にいたなのはは底のちよつとした壁に開いている空間にいる灰色の毛玉みたいなものを凝視している。

「なんか、灰色のでっかい毛玉がいるの」  
「くうん？」

見たままの感想を口にし隣にいる久遠もこれなんだろう？と首をかしげている。

「にゅ？」

ふとその毛玉の一部が穴から垂れ下がっているのに気づき近づく。その垂れ下がっている一部でさえなのはの全長よりも大きい。

「？」

なのはは首をかしげながら右、左、下といろいろな角度から垂れ下がったそれを見る。

そしてそれをなでてみる。

“ブワっ！！”

“ビクっ！！”

突然それが跳ね上がり巻き起こった風によってなのはの前髪が巻き上げられる。

「はぁ~~~~~」

ゆっくりと再び垂れ下がりもとの位置に戻るそれを【面白いもの見つけたっ!!】という子供特有の好奇の輝く目で見つめる。

“チビ！チビ！！”

今度は何度かそれを突つつく

“ブワっ！！”

再び跳ね上がるそれはなのはの顔をなめながら跳ね上がる。

一瞬くすぐったい感覚がなのはの顔を覆う。

（ふわふわのふかふかなのっ！！！）

その垂れ下がっているものの感触に思わず抱きつきたい衝動に駆られそのままジャンプし抱きつく。

すると…

“ヒュウウウウン”

なのはがつかまったままそれが持ち上がり円運動を繰り返す横穴の奥へとなのはは消え、毛玉が“寝返り”を打ったからだ。

大きな全長3メートルほどの灰色の生き物、前進ふかふかの毛に覆われ首は肉に埋まっているのか毛に埋まっているのか判らないが見

えず、腹は丸く色違いの肌色の毛が生えくを横にしたような模様が並んでおり顔はひげが左右3本つつ生えている。

全体的にファンシーな熊か猫をふくろうを基調に混ぜたような珍妙な生き物、なのはが飛びついたのはその尻尾だったのだ。

そして、その生き物の瞳は閉じられ規則正しい寝息と腹部の起伏から眠りにについていることが見て取れる。

「んしょ、んしょ、んしょ……プハあ！」

ちよつとした小山を上るように横穴の奥からなのははその珍妙な生き物の腹をよじ登り一息つく。

灰色の珍妙な生き物の腹はなのはを乗せたまま上下を繰り返す。

「ふわあ~~~~~」

「ヴァ~~~~~？」

意識\*ん~~~~？

なのはが腹の上からその珍妙な生き物の顔を覗き込んでいるとひげがもぞもぞと動き眼が薄っすらと開かれる。

しかし、再び閉じられ安らかな寝息が立てられ始める。

「にゅっ！~！」

なのははその腹の上を移動しまるで猫の鼻のにそっくりな鼻をなで



すると鼻がムズ痒かったのか口をもごもごさせそれに連動するひげそして赤い舌を出し自分の口を周りを鼻ごとぺろりと一舐めする。

「にゃー!!」

それによって再びもごもごと動く口周りといひげ

「ふあ……ふあ……」

短くもれ出る出そうでない吐息、くしゃみ発射3秒前によく似ている。

ファックオオオオオオオオ！！！！！！！！

「にやあああああつ！？」

實際そのとおり大きくしゃみが発射されなのははその腹の上を吐息によつて吹き飛ばされごろごろと転がる。

ある程度スッキリしたのか再び口の周りと鼻を舌で舐め眠りに着くとするも腹の上を這い上がってきたのはが首？胸？のあたりにしりをつき顔を再び覗き込んでいたのでかなり眠たい、寝ぼけた頭で薄っすらと眼を明ける。

「ヴォア~~~~~?」

意識：なに~~~~?

その顔を興味津々といった様子でにんまりと見つめるのは

「あなたはだあれなの?」

「ドウオ、ドウオ、ヴォロー」

意識：眠いよー

欠伸と一緒に出た言葉?によつて大きくなのはを一飲みできるほどの大きい口が開かれるがやがて閉じる。

「トトロ?トトロっていう名前なの?」

「ドウオ、ドウオ、ヴォロー」

意識：寝かせてー

「やっぱりトトロっていうの!」

「ドオヴォア」

意識：もう何でもいいよー

完全にすれ違う二人?

トトロはもはや安らかな眠りに着きたいということしか頭にない。  
夜行性の彼?は昼間は眠いのだ、ものすごく。

「トトロ」

なのはトトロの胸の色違いの毛の上に寝そべってその珍妙な生き物の名前（なのは命名）の名をよぶ。

いつの間にか久遠もなのはの横に移動し寝そべっている。

「ヴオ……………」

トトロは一回大きく息を吸い込む、腹と胸が吸い込まれた息によってふくらみなのはと久遠を持ち上げる。

ゆっくりと息を吐きながら再び瞼を閉じ、なのはと久遠ののっているそれはふかふかの毛とぽかぽかの暖かい体温それに生物特有のやわらかいて低反発クッションのような柔らかさを持っていた。

昼寝には最高の条件が揃っている。

それに加えトトロの眠りに感化されたのか徐々に重たくなる瞼、無理して起きている必要もなくなのはと久遠は眠りに落ちる。

“ひよこ”と隅の壺から出てきた水色の中トトロと白いチビトロそれに加え天井から染み込む日差しがそれを見守っていた。

「やれやれ、あのお嬢さんはお転婆なことだな」

一人の青年、東雲 亮が秋の紅葉が疎らに咲く照葉樹林の深緑に包まれた山を登っている。

山のコケの生えた湿った土を踏みしめながら歩いていると、ふと白い直径十数センチほどの白い人影が視界の隅に映る。

気にせずどんどん山を登っていく亮、その周囲にうかがうように白い小人影が木の陰や根っこの影から亮を覗く。

その数は一体、また一体と徐々に増えていくそして

“カタタタ、カタタタ”

まるで木の実を無数に打ち合わせたような乾いた音がこだまする。

「木霊か…森が豊かな証拠だ…」

一旦立ち止まり森の木々を見回す。

そして視線を足元に向けると無数の白い半透明の人型が集っていた。その頭部はまるでかわらの小石のようで、様々な形の丸いものでできており眼と口のような黒い穴がぽっかりと開いている。

森の精の一種“こだま”である。

「すまないが、この森に小さな女の子と子狐が迷いこまなかったか

な」

しゃがみ木の根の上に胡坐を掻いていたこだまにしゃがみ視線を合わせながらどことなくやさしい声色で問いかける。

すると問いかけられたこだまは森の奥を指さしながら胡坐をかいのまま後ろを向きながら“すう”と透明になつて消える。

「ありがとう」

苦笑をもらしながら亮はこだまの指差した方向へ歩み始める。

森の澄んだ空気の中を突き進む、それに平行し走るこだま達ひょうきんな顔の彼らは子供が珍しいものを見たときのような行動を走つてその後を追いかけてたり地面をける足に飛びつこうとしてつま先に飛ばされそれが面白かったのか何度か繰り返したり様々な行動をとっている。

「これがお前たちの母親か…」

そしてたどり着いた先にあつた一本の巨木を見上げる太さ数メートルにも及ぶ巨大な木、木には年輪と呼ばれるものがある。

年を追うごとにその太さを増していくその段階を記したものが年輪、いわば木の年齢を記したものの。

つまり木の太さと年齢は比例するものでありその大きさからこの木が一体何百年のあるいは1000年を超えるかもしれない長いときを生きてきたことを髣髴させる。

その根や枝には無数のこだまたちが並び座っており各々自由気ままな行動をとっている。

その巨木の一箇所、根のすきまを大量のこだま達が指差している。

「そうか、そこにいるのか…」

ゆっくりとその指差す場所へと向かう亮、そしてこだま達と一緒にその根っこの隙間を覗き込む。

そこには久遠となのはが仲良く眠っておりその周囲を何体かのこだまが指を口にくわえるような仕草をしながら眺めていた。

「さあ戻ろうか、二人とも…」

二人をそっと抱き上げる亮、無意識なのか亮の衣服を握り締め抱きつく。

「すーぴーzzzz…にゃあ…」

「くおん…zzzz…おはぎい…じゅる」

「ふ…」

うれしそうな鳴声をあげるなのはに微笑をもらしそして巨木を見上げる。

「この子達が世話になった、始めましてそして久しぶりだな“ミミンズク”…」

俺にはもう見えないがいるのだろう？」

巨木に礼を言いつつ気配でいることはわかっている亮はそれに語りかける。

「機会があればまた遊んであげてくれ、この子かはたまたその子供になるかはわからないがな……」

腕の中のぬくもりに意識と視線を向けた後に再び宙に浮いているこだまの下に視線を向ける。

「じゃあな、眠たがりの森の主よ。」

巨木に背をむけ歩き出す亮、その後姿をこだまを頭に乗せた灰色の生き物が頭と周囲のこだまと青い中ぐらいのと白い小さいのと一緒に手を振って見送っていた。

第三十話　なのはの不思議な冒険　後編（後書き）

ミミンズクはトトロの初期設定のなまえです

フクロウのミミズクからきた？

ちなみに中トトロはズク、チビトトロはミンだったとか



### 第31話 楽園幻想

ふと

さらさらと流れる水の音、川特有の澄んだ水のおいに気がつく  
気がついたということは意識が覚醒し眠りから覚めたということ

「おや、目が覚めたかい？」

頭の上からやさしい声がかけれまだ思い瞼をこすりつつすらと明  
けながら自分が頭を置いていたものが何なのか知る。

「ん…おはようなの」

公園に隣接する川の岸の芝生の上で彼に膝枕をしてもらい眠って  
いたのだ

「にゅ？トトロどこいったの？」

「？トトロ？」

寝ぼけた頭で周囲をキョロキョロと見渡すなのはの様子に亮は首を  
かしげる。

「うん！、こん~~~~な目をしてて、こん  
なに大きいのっ！！！」

指で自分の目を上下に思いつきり広げ、その後に背伸びとあわせて  
両手を広げいかにそれが大きかったのかを全身で表現するのは、

その小さな頭をなでてあげる亮

「そうか、君も会ったのかミミンズクに」

「みみんずく？ちがうよトトロだよ、そう言ってたの」

「そうか、君が会ったのはトトロという名前なのか、  
……懐かしいな、昔は俺にも見えたのだから」

「リョウおにいちゃんもトトロにあったことあるの！？」

遠い、とても遠い故郷を思い出し幻視する視線を虚空に注ぐ亮に興  
味津々といった様子で問いかけるなのは

「ああ、昔は俺もあいつとよく遊んだよ……、もっともあのちゃんが  
会ったのは別のミミンズクだけだね。」

「そうなの」

「ああ、ミミンズク……トトロはね、森の主でもう何百年も前から森  
に住んでいて子供にしか見えない上になかなか会えないんだ。」

「じゃあ、りょうおにいちゃんもトトロに会えないの……？」

「そうだね、なのちゃんはとてもラッキーなんだよ普通は一生会う  
ことも出来ない生き物とあえたんだからね」

「ラッキーなの……！」

笑顔で元気よく返事をするのはの様子がとても懐かしくとても微

笑ましく

かつて自分もそうだったその姿に亮は郷愁の念に駆られる。

しかし、もう自分の故郷へ帰還する術も無く帰還したところで帰るべき場所も居場所も無い

だから己は自分の世界と決別したのだから。

なのはのまるで太陽のようなその影の一切無い笑顔は直ぐに郷愁の念を払拭させる。

「さあ、お昼ごはんにしようか？おなか…空いただろう？」

「なの…!!」

「く~~~~ん…くっ!？」

弁当を広げようと鞆を手繰り寄せたところで久遠が寝返りを打ちそのまま川に落ちる

“バシャアアアアン!!”

水しぶきを上げ川に流されていく久遠

「キャイン!!キャイン!!!!」

「くーちゃんっ!？」

川でバシャバシャともがく久遠、びっくりしながら久遠になのはは視線を向ける

しかし、そこは子供の膝ほども無いせいぜい足首かそこらほどの浅瀬である。

「  
:  
<  
?  
」

「クーちゃん……」

足がつくことにそれに気づいた久遠は落ち着いてそこに立つ。

くうん

気まずそうになのはと亮を見上げる久遠

「くーちゃん、びちよびちよなの」

濡れ狸ならぬ濡れ狐となつた久遠に近づくなのは

「くぐうー  
つ!!!」

“ぶうううううううううう！！！”

「にやあああああつ!!!」

久遠が全身を震わせて体中の水気を吹き飛ばす、なのははそれを真正面から受け悲鳴を上げる。

「なのはがびちよびちよなの……」

水を滴らせるのはが少ししよげる。

[illegible]

L

その様子があまりに可笑しくて最初はこらえようと我慢していたが、ついに堪えきれずに笑い出してしまった。

「むう！笑っちゃだめなの！！！」

「はは！ごめ……無理っ！！！」あははははははは

L

腕を振り上げむくれるのは、しかし一度壊れたダムは留まることを知らず亮は笑い続ける、腹のそこからこころの底から。

そしてさらによく見れば久遠まで隠れて笑っていた、

「くーちゃんまで!？」

ガン！という擬音が聞こえてきそうな様子で頭のツインテールを跳ね上げながらシヨックを受けるなのは

「むう～～～～」

「ほらほらむくれない、むくれない、笑っていなきや幸せが逃げちやうよ?」

バックからタオルを取り出しなのは頭をわしゃわしゃと拭きつつ  
亮が苦笑を携えて語りかける。

[illegible]

「わははははははははははっ！！！」

なのはをまねて笑う

少しして一旦笑いをとめる二人は視線を交わした後に自然に笑いあうのだった。

電車の座席に座り、膝になのはの小さい頭を乗せ小さい寝息と共に規則正しく揺れる頭をなながら夕日によって赤く染まり始める緋色と紫陽花色の交じり合った空の下の後ろへと流れる景色を眺めつつ亮は物思いにふける。

…いったいいくつもの季節が音もなく過ぎ去ったのかも自分でも分からない

行きかう人々は皆 重い荷物を背負って遠くに揺れる陽炎の中に明日を見つけようと歩いていた

それは俺にも当てはまった。

この手を零れ落ちた砂のような感情

あの時胸に突き刺さった言葉が不意にうずくけど…

果てない夜を数えながら乾いた砂塵の陸をいくつも超え自分の破片カケラを探し

どうしてこの空はこんなに広いのだろうと叫んでみた

見上げた空で自由に風を切る鳥達は何処へ行くのだろうか？

決められた見えない道に従ってなのか、命の円環に従ってなのか

自分の意思によるものなのかそれとも運命フエイトという巨大な意思によるものなのか其れさえも分からない。

それでも鳥達は飛ぶことを諦めないのだろう  
すごした時間のように同じ場所に戻れないとも

だけどそれでいいのではないだろうか…

鳥達が果てのない空と雲を追いかけるように俺は自身の帰るべき場所を探していた

其れが死の果てにある安住の地とは決して信じたくなくて  
両親達の願いゆえに楽な道を選べなかった、選びたくなかった

だから僕が目指すのは絶望の先にある一筋の光  
ただそれだけ

其れだけがほしい

まだ其処は遠いのかも知れない、もう目の前にまで迫っているのか  
もしれない

だけど

永遠の翼を、清らかな風に乗って  
いつか来るやさしい未来を胸に描き信じながら羽ばたいて

鳥達と同じように決して諦めずに

人生という空を運命という見えない道に沿って飛んでいこう  
いつかはたどりつけるはずだから。

… っと思つた。

「くーちゃんまたね~~~~~っ!!!」  
「くうん!!!」

高町家の家のまで夕日に染まる空の下で元気よく手を振り久遠を見  
送るなのは

久遠は飼い主がおりあまり間を空けると心配するからといい今日は  
帰ることにしたのだった。

とことこと夕日に染まる町並みを尻尾を左右に振りつつ歩く久遠

そんな久遠を覆う人影、

「くうん？」

人影を見上げる久遠

その人影の主は背後から真っ赤なまるで血のような夕日と空を背に  
逆光の中で尚、暗く昏い赤い瞳を輝かせて久遠を見下ろしている。

「ほう？300年ものの祟り神か…あいつの力の回復を妨げるには



ちょうどいい」

久遠に向かって男の右腕が伸ばされ久遠に迫る。

「…こないで……………かおる…なみ……………」

恐怖に立ち竦みながらも久遠は拒絶を表す。

しかしかまうことなく男の右腕は久遠へとますます迫っていく。

「なに、案ずるな…恐怖など直ぐに判らなくなる」

「おとさん…おかあさん……………たすけて…」

「さあ其の内に秘めし暗い衝動に身を委ねろ…そうすれば貴様は本当の自分を思い出す。」

“ガキンっ！！”

男の腕が言葉と共に久遠に届いた瞬間、鎖が碎ける音がこだました。

### 第31話 楽園幻想（後書き）

君達に最新情報をお届けしよう

目覚める久遠の祟り

駆けつけ八咫鳥と相對する、刃菊と月砂

東雲、君は久遠を救えるか！？

次回、「二つの力を一つに」

次回もこのページに出撃承認！！！！

【ヘル&ヘブン】

これが勝利の鍵だ！！！！！！

半分以上冗談です。

## 第三十二話 タタリガミ

### タタリガミ

それは決まったカタチを持たず知性を持った神話怪物：高位霊的生命体に寄生する霊的生命体【タタリ】が寄生し力を増していった末にたどり着くもの。

この生き物はすべての神話怪物、時に人間にさえ宿る可能性があり、その神話怪物が思考する分野においてある特定の対象（時として事象）に強烈な憎悪の念を持ちながら死亡、あるいは退散させられた場合、その肉体を奪い取り、代わって復讐を果たそうとする。

タタリガミに乗っ取られた者は、復讐を果たすまでは自我を失い、すでに死亡しているなら復讐を終えても生き返りはしない。

彼らタタリガミは負の感情

憎しみ、悲しみ、怒りを栄養源とし宿主に焼きついた負の感情に従って行動し同対象に向かう負の感情を周囲から吸収しさらに巨大になり巨魅となる。

巨魅のその巨大な霊的質量は物質にも干渉できるほど強力、だがタタリガミはその中でも群を抜いて強い

なぜなら肉体を持っているが故に分離・気化する霊力が無い事に加え最も強い感情によって突き動かされ、さらには接触したものを自身の一部として取り込むのだから。

成長したタタリガミ…いや、祟り巨魅は文字通り手のつけられない怪物と化す。

祟り巨魅を放置すれば憎しみという本能に従い破壊の限りを尽くす、

祟り巨魅は滅ぼす事でしか止まらない……当然そうなれば宿主は

### 第三十二話 タタリガミ

“ガキンっ！！！！”

封の鎖が砕け、久遠の中の熱いドロドロした何か…が目を覚ます。

“ドクン……ドクン”

それはまるで心臓のように拍動を放ち徐々に熱を増していく。

「だめ……いやだ……起きないで！」

タタリ

まるで重度の風邪の様な強烈な暑さと倦怠感に似た眠気に襲われ、嫌な汗を？きながら必死にその衝動を押さえ込もうとする。

その脳裏には仲良しのドジ娘、那美やその気難しいけどほんとうはすごく繊細で優しい姉、薫

他にも仇である自分に親切にしてくれた神咲家の人たち

最近仲良くなったなのは、怖くて大きいけど暖かい何かを持つ亮

やっと見つけた懐かしい匂いをもつ同属：月砂と刃菊

それを壊したくない！！、まだ自分は此処にいたい！！  
あの暗い苦しい時に戻りたくない！！

必死に自分の中の衝動を思いだけで押さえ込む。

「ほう？意外と粘るな……そんなに人間が大事か？」

久遠の眼前に八咫鳥がしゃがみ顔を突き出しながら水に堕ち溺れな  
いようもがく羽虫を見るような嫌な笑みを浮かべる。

「貴様もタタリに憑かれたのなら識っているのだろう？憎しみこそ  
が最も強い力と成り得るのだと

それを受け入れるのだ、そうすれば貴様の望みは果たされるぞ？な  
ぜそれを受け入れない？」

「いや…だ！…くおんはこわしたくない…はなれたくない…ここに…居たい…！！」

「ほう、強情だな…いささか手間ではあるが貴様の怨念それと矛を  
同じくするものでも喰わせ

「【雷・撃・破】っ！！！」  
「っ！！！」

八咫鳥の言葉を遮り超高密度のプラズマ弾が天上より降り注ぐ。触  
れるもの総てを瞬時に蒸発させるそれはもはや光学兵器

とっさに手を掲げ概念顕現による透明の障壁を展開する八咫鳥。

ぶつかり合う否定と否定の互いに否定しあい概念が眩しい閃光を迸  
らせる。

「この雷撃は！？」

驚きの声を上げる八咫鳥の背後より迫る黒い影、刃菊

刃菊は地面を蹴り、まさに一陣の風となり迫る。

「我が魔笛を受けよっ！！」

「ちい！！」

背後から襲い来る脅威に八咫鳥は腕を打ち払うようにプラズマ弾を弾き飛ばし、背後に振り返る。

久遠から目を離し、攻撃に備える瞬間八咫鳥は意識を久遠から完全にはずす。

その瞬間に駆ける白い閃光……否、銀色とも取れる月の輝きにも似た毛色の天狐、月砂

その尾は普段と違い九つに分かれている。

月砂は地面を蹴り音さえも置き去りにして目にも留まらない速度で八咫鳥に迫りその傍から久遠を攫い離脱する。

「何!？」

「余所見していいのかな？」

「しゅうけつ【執血の咆哮】つ!!!」

つ  
!  
!  
!

月砂に意識が向いたその瞬間を狙い、刃菊が声にならない無数の怨念の本流とも言ふべき咆哮を発する。

それは巨魅に対する呪詛の咆哮、それはどす黒い音の波動となつて広がるが周囲のものは一切を素通りし広がった波紋が八咫鳥に群れ成す。

「ぬ、ぬ、おおおおおおおおおつ……！」

自身を覆う球体状に障壁を展開し耐える。

「ふうんっ！！！！ハアアアアアアっ！！！！」

裂ぱくの氣勢と共に八咫鳥は自身の障壁を刃菊の魔笛ごと吹き飛ばす。

「…貴様、稻荷神だな…そしてお前は犬神！！！」

八咫鳥は自身に襲い掛かった二匹の獣を交互見据えながら叫ぶ。

「そつだよ、稻荷神の一族…白狐、月砂」

「式、犬神…刃菊…よくも我等が娘に手を出してくれたな…万死に値する！！！」

自然と豊穰を…即ち命をつかさどる神、稻荷神

その実態は自然と人の和を保つために受肉化した自然霊、いわば精霊の一種が信仰を集め神霊の域に昇華したもの

そして、犬神…それは遙か過去、蟲術によって作られし人工の巨魅

目には目を、刃には刃を、巨魅には巨魅を

巨魅を屠る人類の守り手を生み出すため一人の陰陽師が自身に忠義を尽くす愛犬にあらゆる怨嗟を詰め込み巨魅とし式神としたもの

犬神は自らの忠義のため余りに無力だった主の変わりに巨魅を狩る巨魅となつた存在<sup>もの</sup>

故に自分と同じ高位霊的生命体の狐である月砂を母と、自身と同じ半ば怨霊である刃菊を久遠は父と慕い彼らはそれを受け入れ親子となつたのだ。

「…二対一…しかも片方は対巨魅用の特化型式神、いささか分が悪



い退散させてもらおうとしよう」

「待てっ！！血涙ノ槍よッ！！！！」

「逃がさないよっ！！！！聖なる意思よ、我に仇名す敵を討てっ！！！！」

ブラッディ・ランス！！

ディバイン・セイバーっ！！

八咫鳥を包囲するように虚空に空気中の粒子を集めたかの用に血のように紅いまるでルビーのような槍と水晶のような半透明の剣が生み出され

一斉に射出される。

聖と魔、二つの相反する力は終点にて交わり互いに対消滅を引き起こし膨大な無属性の破壊のエネルギーを撒き散らし其処に存在するものを消し飛ばす。

“ドガガガガガガガ

っ！！！！！！”

まるで重機関砲のごとく絶え間なく発射されるそれは轟音を轟かし地面を砕き粉塵を舞い上げる。

やがて、攻撃が止み粉塵の遮りが風によって運ばれ圧倒的な破壊がもたらされた其処を晒す。

しかし、其処には八咫鳥の姿は無くただクレーターがあるのみ。

「ククククククク………残念だったな

アーー　　はは

ははははははっ！！！」

不快な嗤いがこだましているのみだった。

「ちっ！逃したか……」

「次あつたら…… ・ 噛み千切る…… ってそんなことよりも！！」

少しはなれた地面の上、アスファルトの上に横たわる久遠に駆け寄る二匹

「…おとおさん、おかあさん……………」

「久遠しっかりして！！」

熱に魔されながらも自身を呼ぶ久遠に近づこうとする月砂

「まて月砂！！」

“バチイっ！！”

「っ！！共鳴反発っ！？」

刃菊の静止を聞かず近づいた月砂が虚空より生まれた稲妻により弾かれる。

今の久遠はタタリによって巨魅になりかけている、対して月砂は聖属性の存在

互いに同位存在にして相反する存在、対消滅による中性エネルギーが放出されプラズマと空气中に放出され同時に反発作用を引き起こし、月砂を弾き飛ばしたのだ。

「その子はタタリが憑いている、恐らくは祟り巨魅の域まで成長し

ているお前では触れることも出来ん…とりあえずお前は亮を呼べ俺が一先ず人気の無い場所に運ぶ」

刃菊は巨魅の一種であるため同じ魔の存在に障害なく触れることが出来る。

「…分かった、がんばってね久遠…必ず……………必ず助けてあげるから」

亮っ！！

部屋でくつろいでいると突如として月砂から念話が入る。

月砂、刃菊の二人と自身はそれぞれ原動力の違いから魔術回路、経絡を依り代という一種の令呪を通ずることで契約を行い不可視の靈<sup>パス</sup>的回線を通じて繋がっている。

其処から伝わる靈的波動は擬似神経回路であるそれぞれを通じやがて脳で音声電気信号に変換再生されそれを魂が認識することで思念による通話を可能としているのだ。

なんだ？月砂…戦闘があつたようだが…

正直、月砂と刃菊が揃えば大概の相手はどうにかなる。だてに数十年共に戦った分けではない、彼らの力はよく知っているし月砂は受肉化した精霊、刃菊は1000年を超える巨魅

あの二人相手に勝負になりはしても確実に勝てる相手は限りなく少

ない。

八咫鳥が…久遠の封印を解いた!!!

お願い!!!あの子を久遠を助けて!!!

月砂の悲痛な声を聞き、軽く舌打ちし己の警戒の薄さを悔いる

(ぬるま湯に浸かり過ぎたか…)

常在戦場の心構えで居たつもりだったが知らず知らずの内に戦闘思考が鈍っていたようだ。

分かった、直ぐに向かう…:場合によってはアムニスの花の実を使う

それはっ!!

そうだ、俺が人を喰らうと言うことだ

### 第三十三話 力

熱い

体が熱い、思考が薄れ徐々に意識が遠のくのを必死に繋ぎ止める。  
手放せばたぶん帰ってこれない

久遠は夜の町並みを抜け、丘にある墓地を抜けその向こうにある大きな湖を一望できる草原へと駆ける刃菊の背でタタリに主導権を奪われないように耐える。

「久遠、内なる声に耳を傾けるな傾けても同意するな…帰ってこれなくなる」

吹き抜ける風が僅かに熱を奪うけど直ぐに体内から熱が生み出されその小さな体を苛む。

「…うん……がんばる…」

もう目を開くほどの力も残っていないが弱々しくか細い声で刃菊に返事をする。

やがて人気の無い草原へと久遠は運ばれ草のカーペットの上に寝かされ月砂が心配そうに少し離れたところから見守る。

湖に月が写り揺れる水面にしたがってゆらゆあらとその姿を揺らしきらきらと光を乱反射させて幻想的な雰囲気をもし出す。  
なみち

「みつ…どこにいるの…」

その中で意識が朦朧とする久遠は原初の記憶、自分を育ててくれた16の少女を思い出す。

彼女は間違いなく自分にとつての親であり人間の姿をとるのもそうすれば本当の親子になれるかも知れないそうなたら突然消えた彼女が戻ってきてくれるかも知れないという思いからだ。

次々と走馬灯のように連鎖し記憶が掘り起こされて行く  
タタリによって

「…弥太……………っ！！！」

みつがいなくなってしまうってから20年強。

ある日突然に人型を取れるようになった久遠が、調子にのって走り回って転んで怪我してしまった。

そこで久遠は一人の薬剤師の少年と出会い看病を受ける。

そしてやがて双方共に恋に落ち今まで子供の形態しか取れなかった久遠は成体へも変身出来るようになり2人は結ばれる。

想いを重ね体も重ねた二人がいたのは幸福というものの絶頂にいます。いっても過言ではないものであろう。

しかし、そんな幸せな時は続かなかった。

流行り病によって村が壊滅していく中、薬師であった弥太は人を救いたい一身体で懸命に村中を駆け回りなんとかしようとするも、そ

れも叶わず。

やがて毒に耐性があつた弥太を除き、ほぼ全ての村人が病に冒された。

そして…

「久遠だめ!!」

「憎しみにだけになるなっ!!!」

その果てに、人を救いたいという無垢な願いで病に抗い続けた少年の末路…

それを思い出してしまった

「……………ない……………るさない……………許さないっ……………」

他者の悪意によつて完膚なきまでに打ち壊された二人で培つた幸福人の原型を留めていないほどに壊された最愛の人の体、小さくなつてしまつた唯一原型を留めていたそれは苦悶の表情を浮かべ自身の足元に転がつてきた。

「……………絶対に……………赦さないっっ!!!!!!!!!!!!!!」

タタリが目を覚ました。

「久遠!!」

「久遠!!」

っ！！！！！！

月砂、刃菊の声は届かず久遠は全身から赤黒い腐った血液で出来た寒天のような触手を生やしまるでミミズが表面にのたうち回る触手の塊のような異形へと変貌し大地を揺るがす咆哮をあげる黒い妖狐へと変貌する。

「間に合わなかったか…」

ちょうどその時、亮が森の木々を突き破りそして降り立つ。そして20メートルほどの大きさへと変貌した久遠を蒼い瞳：浄眼で見上げる、

「完全に？まれてしまったか…仕方が無い」

そう言つて亮は懷からひとつの呪符に包まれた4？ほどの物体を取り出す。

「アムニスの花の実のひとつ…カルマの実」

“ゴオオオオっ！！”

掌の上にあるそれを包み込んでいる呪符が音を立てるほどに勢いのある紅蓮の炎を上げて焼滅し中にあるモノの姿が露になる。

それは瞼を閉じた眼球を彷彿させる木の実であり、その瞳が見開かれた。



### 第三十三話 力

「亮おにいちゃんご飯なの!!」

勢いよく亮の部屋の扉が開かれなのはが入室する、がそこは蛻の殻であり亮の姿は何処にもなくただ開け放たれた窓から吹き入る風がカーテンを音を立てながら靡かせていただけであった。

「あれ? 亮おにいちゃん何処入っちゃたの?!」

亮の部屋を物色するのは、ふと亮の黒いロングコートがなくなっていることに気づく。

「もしかして…」

以前亮が言っていた言葉が脳裏に浮かび上がり不安がなのは心を染め上げる。

「いなくなっちゃったの…?」

その声に応える声は……………無い

亮の掌の上に存在する瞼と眼球が一体化したような木の実、カルマの実

それは欧米で【死を呼ぶ花】と忌み嫌われるアムニスの花の実である。

アムニスの花、それは地下深くに群生する紅い燐光を放つ葉を持たない一見、紫陽花に酷似した植物でありそれは特殊な条件化で多種多様な実を結ぶ。

その条件とは人を苗床にしたときだ

亮はその眼球のような実を口元へと運び…一気に放り込む。

“ゴリっガリっグチャグチャ…”

噛み砕き咀嚼する音が鳴り、そして

“ゴクっ”

「はぁ……………っ！…！」

飲み干し息を突く…その瞬間に亮の四肢を含む全身が強張り体を抱えるように俯く。

“ドクン、ドクン、ドクン！！”

亮から脈打つ心臓のように拍動が放たれる。

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおっ！！！！！！」

そして物理現象を伴うほどの膨大な魔力、氣、戦気など眼に見え無  
いが確かに存在する力が解き放たれ、草原の草花を撫で湖の水面を  
揺らし離れた森の木々を鳴らす。

その圧倒的に漲る力、これと比べれば普段の亮から発せられるオー  
ラとでも言うべきものがまさに干からびていると表現できるほどの  
密度と量だ。

普段と桁違いなほどに輝く金色の瞳もそれを示唆している。

アムニスの花は苗床にした人の氣：生命エネルギーによって結ぶ実  
を変化させる。人という形で凝縮された生命力がさらに濃縮された  
その実は膨大な生命エネルギーを秘め、幻想種はその実を喰らうこ  
とで生エネルギーを一気に吸収できる。

精霊種は世界から一定量の力の供給を受けているがそれは常に一定  
であり消費が供給を上回れば当然そこを尽く、しかも通常の生物と  
違い受肉化したモノ達は食事から活力を補給できない。

つまり力の完全枯渇とは存在維持エネルギーの枯渇をもさしている。

対して亮は混血であるが故に生体構造は人間と幻想の生き物の織り交ざった生体構造を持っているが幻想種の部分を形作っている特殊なアミノ酸、D型アミノ酸で体の何割かが構成されている。

そのため亮は地球上の生物の大半を構成しているL型アミノ酸を摂取してもD型アミノ酸を摂取できないため肉体のバランスを維持できない。

そのためL型アミノ酸を鏡面反転させD型アミノ酸を精製する必要がある、そのためにエネルギーを消費してしまう。

エネルギーを生み出す為にエネルギーを消費する。

それは全ての生命が内包する矛盾      しかし、亮はその矛盾が大きい… 大きすぎるのだ

通常、亮はその体内に秘められた生氣あふれるエネルギーを発振する生体機関『龍玉』を持ちその宝石が発するエネルギーによりその生体構造を維持しているがそのエネルギー出力は星に掛けられた枷によって制限されている。

つまり亮が普段の戦闘で使用できる力など真の全力の比べたら本当に微々たる物で本当にギリギリの綱渡りのな運用を行っているのである。



黒い生地に紅い紐、まるで平安時代の貴族のような着物を纏った黒い長髪に黒い犬の耳を持つ青年、  
彼も少女と同じく瞼を開く、そのルビーのような瞳が闇夜に輝く、  
その腕に携えられた蒼い刀身の刀、禍風が月明かりを反射し蒼い光を放つ。

黒と白、朱と蒼

まるでそれぞれ相反する色を携えて風に長髪を靡かせる

「我等魔を断つ二鬪流」

「斬魔の咆哮聞いて慄けつ！！！」

「前鬼、刀菊／後鬼、月砂」

此処に現臨つ！！！！

陰陽師や退魔師のうち直接戦闘が不得手のものは式神を用いて戦う。  
亮は直接戦闘に加え詠唱が必要な霊術も使用するため時に詠唱中の  
護衛が必要なときもありそういった時に二人を具現化、時としてよ  
り戦闘力の高い人型へと変化させる。

これは契約がサーヴァントの令呪に酷似していることもあり亮の認  
証無くては化神出来ないのだ。

契約術式から来るクラス、前鬼・後鬼ぜんき・こうきは、修験道の開祖である役小  
角が従えていたとされる夫婦の鬼からきている。  
余談だが前鬼が夫、後鬼が妻である。

「固有結界を展開する、詠唱時間を稼げ!!」

「御意っ!!!」

亮の掛け声に応え二人が同時に動いた

っ!!!

変貌した久遠…崇り巨魅が咆哮をあげると瞬く間に空が黒雲に覆われる。

空を時折、稲光が奔り轟音を轟かせる。

Ich ?berlie? sowohl den Traum  
als auch die Hoffnung der Verg  
angenheit weit

夢も希望も遙か過去へと捨てて来た

その中で確かに響き渡る祝詞にして呪言

っ!!!

五つの尾を揺らしながら触手の塊で出来た黒狐、崇り巨魅が咆哮に従い膨大な呪力を含んだ落雷が亮に伸びる。

それはかつて百年は草花さえも咲かない焦土と化した呪いの稲妻

「その程度の雷っ！……！」

月砂が地面を蹴り跳躍、稲妻を紅い金属光沢を放つ刃：白桜を閃光のとき鋭さを以って切り裂く。

「力任せで業が無い、密度も無いそんな張りぼてじゃ駄目だよ久遠」  
宙で結束を解かれきらきらと光る粒子に分解された雷の粒を身に受けながら月砂はにやりと笑みを携えてタタリを見下ろし諭すように口を開き天に刃を翳す。

「本当の雷つてのはこういうんだよ【稲妻招来】っ！……！」

“ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ”

月砂の掲げた白桜に閃光と共に白い稲妻が落ち刃に帯電する。

「暗雲を切り裂き敵を滅せよ…【飛雷剣】っ！……！」

帯電した刀を振るう、十字架ロザリオの形によく似た雷で作られた無数の剣が白桜の刀身から打ち出され“祟り巨魅”に降り注ぐ。

っ！……！！

次々とそのウネウネと蠢く赤黒い触手の表層に雷の剣が突き刺さり苦痛を訴えるように身を振るタタリガミ



Einfa ch , weil das Leben , um m i  
t Bl ut st il zu e in e m Tan z zu t a  
n zen , e in e K lin ge un d e r Au f s  
e h e r ? b e r a l l i m L e b e n w i r d

生涯、刃と供に血風と共に舞い踊る生涯なればこそ

「まだまだあつー!!」

地面に音も無く着地した月砂は腰貯めに刃を突き出すように構える。  
刀身に超高密度で収束する原子群、それはプラスの電荷を付加され  
無限に加速する。

「【光龍槍】つー!!」

月砂の叫びと共に刀が突き出され刀身に収束・加速された原始群は  
衝撃と熱量を持って撃ち出される。

反動により弾け飛ぶ月砂の足元の地面、余波により吹き飛ぶ空気  
それは逢えて言うのなら破魔の概念が付加されたビーム

そして文字通り閃光の槍と化したその一撃はタタリガミの尾そのうちの一本を切り飛ばす。

宙に無数の触手を撒き散らしながら千切れた尾は地面に落ち、周囲の草花を一瞬で腐敗させると共に自身も腐り堕ち消える。

Das Lied ist für mein Begräbnis  
der Berrester unnützig

我が葬送に歌は不要<sup>レクイエム</sup>

Die Blume ist für meinen grave  
post unnützig

我が墓標に花は不要

「どうかな？荷電粒子砲を靈力で再現した光龍槍のお味は？」

っ！！！

「あ、怒った」

怒り狂ったタタリガミは雄叫びを上げながら今度は触手で出来た肉の槍を全身から一斉に伸ばす。

表層を蠢く触手が嫌悪感や何やらを引き立てる。

「~~~~一本じゃ足りないかな？【雷神剣】っ！！」

月砂の左腕に稲妻が帯電したかと思うと一気に収束、雷で出来た剣が完成する。

「二鬪流：受けてみる？」

迫り来る赤黒い無数のミミズの塊のよう触手の槍に対して月砂は地面を蹴り跳躍。

「ハアアアアアアアッ！！！！」

右上から左下へ、左から右へさらにその返して左上、右下から右上へと二つの稲妻を宿した刃と雷で出来た剣で迫り来るそれを次々と切り裂き、その断面を灼く。

「へへへへんっ！！さすがに焼かれちゃうと再生できないよねっ！！」

っ！！！！！！

調子に乗る月砂、そんな彼女に先ほどの倍以上の数の肉の槍が伸び迫る。

「ちょ！！多すぎ！？」

空中であるため彼女は満足に身動きが取れず捌ける限界以上の量が迫ってきたため度肝を抜かれる。

「【緋刃風傷】っ！！」

刃菊の声と共に仄かに血の匂いが香る紅い風の刃が月砂に迫り来る  
凡ての触手を細切れにする。

辛くも難を逃れ地面に着地する月砂に刀身を肩に担ぐように立つ刃  
菊があきれたような視線を月砂に注ぐ

「だからいつも言っているだろう、調子に乗るなと」

「ごめ~~~~ん、でも助かったよ。ありがと刃菊!!」

チロつと舌を出して謝りつつも感謝する月砂にそっぽを向く刃菊

Ich setze fort, mit dem Namen  
der toten Person zu sich selbst,  
das ich frage, in meiner Seele  
zu schnitzen und wurdertosen  
tig

朽ち錆びた我が身 我が魂に死者の名を刻み続ける

「ふん、まあいいアレをやるぞ、いけるか?」

「大丈夫だよ!!」

それぞれ左右反対の下段に刀を構える二人

「唸れ疾風

」

「轟け雷光」

刃菊の禍風は暴風を、月砂の白桜は稲妻を

刀身にそれぞれ纏う

「」

双頭龍撃破

っ！！！！！！！」

まったくの同時に鏡合わせのように振りぬかれる刃  
エネルギー状の風と雷の属性を纏った龍が其々の刀身から生えタタ  
リガミに迫る。

っ！！！！！！

咆哮と共にどす黒い霧状の波紋が広がり、それに触れた地面が一瞬  
で泡立ち草花が枯れ落ちる。

っ！！！！！！

二匹の龍はその魔笛の波紋を突き破り、タタリガミの体に巻きつき  
噛み付きその体を拘束する。

「亮っ！！！！」

「いまだっ!!!」

祟り巨魅の動きが封じられた隙に亮は最後の一説を謳い上げる。

Wie f?r dieser K?rper ist es  
ine Konnotation. . H?gel im gra  
ve posts von der Phantasie, die  
das Ende von einer anderen Pe  
rson weg abhakte:

この身は他者の終わりを刻んだ幻想の墓標達を内包せし丘…

タタリガミに変貌した久遠、化神した刃菊、月砂、亮を囲う世界が  
ひび割れる。

地面、空、湖、遠くにともる街灯りそれら凡ての景色に輝が入る。

そして、最後の一節 世界の名を呼ぶことで4つの存在を囲う  
世界は異界へと変貌する

Fantasy graveyard

幻想墓地であつた

パリン

そんなガラスが割れるような音と共に世界が割れ異界が世界の現実  
を侵食した。

### 第三十四話 血闘のアンビバレンス（前書き）

ふう…ネタが多いなあ

### 第三十四話 血闘のアンビバレンス

現実世界を侵食し具現化する精神世界

それが固有結界

「此処が俺の心　その風景、あらゆる靈魂にとって此処は生を得ると同時に死に還る場所……」

一陣の風がその世界を風ぐ

そこに広がる世界は幾つ物、草花が咲き乱れる静かな生命の世界  
しかしそれらが咲き乱れるのは死を顕す墓標

亮の背後に広がる丘、その頂に天を突き延びる大樹その葉一枚一枚  
が発光し世界を照らし出す。

地面に突き刺さる朽ち果てた十字架、剣、銃剣、槍……戦士達の墓標  
石造り、自然石、大理石の古今東西の墓標群

それら総てにコケが生え蔭が巻きつき花を咲かせている。

生と死が入り混じった閉じた墓地それが亮の心象風景

そしてその世界を支配する法則は……霊質の物質化

「この世界にはイブン・ガズイの紛葉によく似た空気が満ちている



からだ

故に 虚ろなる存在は肉を得、生を得る…唯それだけのセカイ…しかし」

風が花びらを舞い上げ亮の髪と黒い外套を揺らす。

「生を得たが故に死をも得るのだ…第三魔法に最も近い固有結界  
俺はこの世界を幻想墓地と名づけた。」

### 第三十三話

### 血闘のアンビバレンス

手を天に向けて掲げる亮、それに従い丘の向こうから何かが昇ってくる。

「そしてこのセカイにはタタリ “お前を討ち滅ぼすモノ”が居るぞ」

来い 【セフィロス—流出せし神性】 つ！！  
！！！！」

その全容が露になる。

蒼いまるで真珠のような輝きを放つ鱗を全身に持ち

中国や日本に古くから伝わる長い体躯

その巨体に不釣り合いな小さめの前肢と後肢、その前肢の反対側の背には突起が伸びそこから青い炎の羽が翼を形作り。

そのあらゆるものを噛み砕けるであろう巨大な顎門は閉じられ鱗谷からはまるで水晶のような角が後方の天を突く様に伸びている。

圧倒的な威容、相対するどころかその姿を眼に納めるだけで平伏してしまいそんな神気

神と並び神に位置する幻想の獣、龍その神

## 龍神

「血こそ我が存在

我が力の証明

我が力の源泉

我が血に刻まれし神の刻印よ顕現し我が肉体ヨロイを成せ

【変神】

っ――」

人外の魂それを自身の肉体へ投影・具現化し神の本来の力に耐えうる様に自身を変革させる。

っ――！！！！

蒼龍が咆哮をあげると共に光る粒子となって分解し散り、魔力の本流となって亮の周囲に渦巻く。



しかし、それには神経がとおり血が通っている紛うこと無き亮自身の肉体

一瞬の閃光がセカイを白く染める

その中で重厚な質量を持つ何かが大地を踏みしめ翼を広げる

「輝龍戦鬼：闘牙

“ 此处に降臨っ！！！！”」

白い湯気を上げながら名乗りを上げる龍の神の力を持つ龍人

龍神人  
りゅうじん

「久遠… お前の怒り悲しみ憎しみ全てを受け止め

其の悉くを粉碎し破壊し尽してやろう

」

っ！！！！！！！！

崇り巨魅がほえ呪雷を全身に帯、そして口元に収束させ凶暴な光を携える。

「刃菊、月砂」

「「御意」」

その凶暴な光が迸り世界ごと亮を照らすなか亮は自身の従者の名を呼びその答えを聞く。

「刀神」

パン！！

亮の言霊と共に二人の姿が光の小塊に爆ぜその中に浮かぶ白桜と禍風

「龍斬鱗」

両腕を覆う龍の甲殻その両肘にある突起が伸び鋭利な刃と成る。

「コクタミネーション  
混合」

亮を中心に並ぶ刃は粒子に分解され亮の肘の刃、龍斬鱗に沁み込み浸透する。

右の刃は紅く染まり白桜と同じ文様が浮かび左の刃は黒い風の文様が浮かび上がる。

そして、亮に向け高密度に収束され指向性と呪いを付加された稲妻が放たれる。

“ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ”

轟音と共に地面が爆ぜ飛び墓標が砕け植物が吹き飛ぶ。

「ウオオオオオオオオオオ！！！！」

粉塵の繭を突き破り蒼い炎羽を舞い散らせながら猛スピードで亮…否、闘牙がその姿を現す。

「雷は我が眷属俺を害することはかなわんぞっ!!」

っ!!!!

迫り来る亮に向け祟りの体から生え撃ち出される蠢く触手で造られた槍

それは触れるものに死の呪いを与え肉を腐らせやがて骨まで届き腐敗と苦痛の後にそのものを死に追いやる不浄の槍

「龍斬麟：舞朱雀っ!!!!」

翼をはためかせ残像を残しながら上下左右の三次元的な軌道を急激な加減速を行いつつ肘の刃で触手の槍を切り裂く。

“呪っ!!!!”

触手を切り裂いた瞬間に感じる熱い黒い何か  
ドロドロに煮込まれたタールのようなしつこく粘りつく何かが胸中に渦巻く。

っ!!!!

違和感…侵食する感情により動きが一瞬鈍った隙を突き新たな触手が伸びる。

「っ!!!!」

とっさに右腕で触手の槍を受け止める。

しかし触手の集合体であるそれは蠢き形を変えながら右腕を取り込む。

「ぐっ！！！」

触手を通じて体内に侵入する呪い  
身を焼く昏く熱い感情、それが一体どういっものか亮には判った。  
痛いほどに

それは暗黒の光  
眸を焼く己を灼く世界を焼く熾烈と憎悪

愛は苦く激しく其の身を苛み  
憎しみは甘く重く心を蝕む

左足、腹部、右太腿、次々と突き刺さる触手の槍を通じて呪いと感情が流れ込む。  
蠢く触手が亮を取り込もうと蠢き四肢を侵食してゆく。

それは純潔な醜悪な交配の儀式

触手を通じ脳裏に浮かぶ光景  
それは唯一つ

ねえ…どうして？

苦しめるための殺され方の末苦痛の中で息絶えた最愛の人  
小さくなってしまった最愛の人  
消えてしまった幸福

必死に苦しむ人を不幸とした最愛の人を何もしない神主の戯言に従  
い惨殺した村人

最愛の人は

もう語りかけては                      くれない  
ふれあうことは                      出来ない

なぜこんな事をした？

自分達が助かりたいから？

そうすれば自分達を助けようとしてくれた人が本当に病を流行らせ  
たとでも信じたのか  
何の根拠も無いのに

どうして彼を殺したら自分達が助かるの？  
すでに病に掛かってしまっている彼を殺して助かるの？

悲しみは次第に裏切った怒りへ

愛は奪われた故に憎しみへ

思い出すのは常に苦悶の表情に満ちた彼の最期の表情  
壊れた彼の体

自分達は助かる、正しいことをしたと喜ぶ村人達と満足そうな表情  
の神主



こわれちあえ

「っ！！！」

亮は久遠が祟りに憑かれた光景を垣間見る  
流れ込む感情、それは自身も持ったことは有る。

愛しき人と場所を奪われた虚無を埋めようとする憎悪と怒り  
しかし今しがた胸中に生まれた感情は同じ怒りと憎悪しかしそれと  
はまったく別の怒りと憎悪

「久遠………巫山  
ああっ！！！」

戯るなああああああああああ

気迫のみで自身を取り込もうとする触手を弾き飛ばす。  
物理現象を伴うほどの闘気

「覇アアアアアアアアアアアアアアアアアアっ！！！！」

さらに迸る氣

それは陽炎のように周囲の景色を歪める。

其の中で龍の甲殻が螢火の燐光を発し始め亮自身を翡翠色に染め上げる。

青龍の青が指す色は青々しい緑、象徴は変化  
そう朱雀と同じく青龍もまた命を象徴するもの

数億年の月日の積み重ねを体現する彼にたかが300年の怨念凝り固まっただけの存在が害せる筈はない。

そして亮はタタリではなく久遠自身に怒っていた。

胸を引き裂かんばかりにあふれる感情は怒り、だけど相手を思いやることから来る怒りはただしい物だろう。

そう憤怒を持って邪悪を砕くそれが亮のあり方其の一つ

背の翼を形作っているフレアが迸り亮の肉体を超高速で押し出しタタリに一気に接近させる。

「久遠っ！！！！お前は自分で自分の宝物オモイデを汚しているっ！！！！」

“ 打アアアアンっ！！！！ ”

視認できるほどに濃密な魔力を宿した右拳をタタリガミの眉間に打ち付ける。

その常軌を逸した一撃によりタタリの巨大なビルほどある巨体は小石のように吹っ飛ぶ。

「楽しかった思い出っ！！！！」

今度は青白い光、左拳に霊力を込め振りぬく。

“ ガアアアンっ！！！！ ”

「美しいと感じた日々っ！！！！」

続いて蹴り上げられ宙を舞い触手の破片を撒き散らしながら吹っ飛ばタタリガミ

怒涛の勢いで続く連続打撃、其の一撃ごとに膨大な力が打ち込まれタタリの魂魄を梳り砕いていく。

「それを忘れて何故、其の最期だけを思い出してそれを思い出してやれないっ！？本当にそれだけに成ってしまうぞっ！！！」

復讐をするなどと言わない。

自分も同じ穴のムジナだから      今でも忘れない衛宮えみや 矩賢のりかたに両

親と親族を皆殺しにされたあの日を

だけど同時に忘れない、幸せだった日々

両親の無償の愛に包まれてすごしたあの暖かな日々を

その後、空虚を抱えながらも拾ってくれた義両親と過ごした日々を

其の日々があり思い出すから生きられる生きていられる  
時折それが失われたことが悲しくて、全く同じ幸福が得られないと  
いうことを思い出すたびに胸を締め付けられて苦しくて

絶望の中でそれだけを糧にすごすのは痛かった、心が痛かった。

久遠キミの痛さも苦しさも痛いほどによくわかる

だからこそ俺はキミが赦せない

復讐の内は殺人だが、それを超えた殺人は殺人じゃない“殺戮”だ。

「久遠っ！！キミはタタリ如きに負けて忘れたのかっ！？その程度で消えてしまうほど安い想いでなのかっ！？違うだろう！？」

己を見失うほど、忘れられないほどに愛していた！！だからこそ思い出せ！！最期が苦しみに満ちたものであったとしてもそこにいたるまでに君が見たキミと共にすごした彼の表情をっ！！！！」

ダメージにより地に伏せるタタリガミの頭上で手を掲げる亮、其の周囲に水気が集まり幾つかの水の塊を作り出す。

「君が受け取った大切なものをつ！！！」

ハイドラ・シュレッダー  
水龍裂斬っ！！！！

言葉と共に腕を振り下ろす、水塊が九頭龍へと変貌しタタリガミへと迫り其の四肢を食いちぎる。

### 其の瞬間

「忘れていないよ、だから殺してタタリごと久遠を」

タタリガミが久遠の言葉を発する。

「久遠っ！！気がついたの！？」

亮の肘の刃に同化している月砂が久遠に語りかける。

「うん、亮起こし方きついから起きちゃった…ぐ…はやくお願いまたタタリに主導権とられちゃう…」

ざわざわとタタリガミの肉体を形作っている触手の動きが活性化し食いちぎられた四肢が復元を開始する。

「お…お願い、久遠はタタリのまま死にたくない…久遠として死なせて…」

久遠の懇願、内なる世界でタタリと自身の憎しみと血闘を繰り広げる久遠その切実な願いを亮は

「それは出来ない相談だ」

拒否した

「どうしてっ!?!」

「俺が遣りたくないからだ  
“俺に任せておけ”  
帰してやる久遠お前の帰る場所につ!?!」

固有結界：幻想墓地

そこにある全ての虚ろなる存在は霊質を物質化させられることによつて実体化させられる世界。

久遠に憑いたタタリガミもその例外ではあらず。

崇り巨魅　このセカイでは大きくなりすぎ、実体化した肉体……  
久遠の魂に寄生しているタタリガミの制御できていない巨大化・実  
体化した靈魂に久遠は取り込まれている形だ。

ならば

「貴様から久遠を  
　　決り出せばいいだけの話だ……  
これがな」

平行世界のうち一つ亮の知らない聖杯戦争での出来事ではあるが聖  
杯を埋め込まれた間桐  
慎二を遠坂　凜が救助した方法と同じだ。

亮はゆつくりと翼を羽ばたかせ舞い散る羽が照らす中地面に降り立  
ち両手を広げる。  
三つの連結刃、刃物で出来たような鞭尾、それが真ん中の一本を残  
し分解する。

「ヘル・アンド・ヘブンっ！！！！」

分解した尾は粒子状に砕け亮の両手に纏わされ獣の鋭利かつ獰猛な  
爪を連想させるガントレットとして再構成される。

そして右手に靈力、左手に魔力を生成収束させる。

「二つの力を一つに                      ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオッ！  
！！！！」

同じにして相反する力を宿した両腕を近づけていく両掌間には共鳴反発現象が引き起こされプラスマが迸り斥力が発生する。

それを

「ふうんっ！！！」

力ずくで押さえつけ相反する力を一つに混ぜ合わせる。  
渦巻く反発力と対消滅のエネルギーがまさに氾濫した川の如く亮の肉体を覆う。

其の中で翡翠色に染まった肉体のなかで唯一輝きを変えなかった金色の龍眼が蒼に染まる。

見つけた

ありえないものを見通す瞳、浄眼がタタリの核にされている久遠を見つけ出す。

「<sup>ウィータ</sup>生命っ あああああああああああああああっ！  
！！！！！！」

合わさった掌を突き出すように噴出する背の翼を構成しているフレアに押し出され地面を両足で掘削しつつ怒濤の勢いでタタリガミに

迫る。

“ダアアアッ！！！！”

亮の突き出された合掌がタタリガミの触手で造られた肉体にその咽喉元に突き刺さる。

「フウウウウウッ！！！！」

手に確かに掴んだそれを大地を踏みしめ砕くほどの力を持って一気に引きずり出す。

タタリガミの触手の中から繋がった触手を引きちぎられながら取り出される久遠。

宿主を失ったことにより徐々に熔け崩れていくタタリガミの肉体、亮はそれを完全に消し去るべく呪文を口にする。

「光指す世界に汝ら暗黒住まう場所なしっ！！渴かず飢えず無に還れっ！！！！」

亮の右腕の肘、月砂が宿った龍斬麟が輝きを強く発する

「ルドラ極霸光っああああああああ！！！！！！」

縦に一闪、地面に巨大な断裂を造りながら放たれたそれは不定形なヘドロの塊に変貌していたタタリガミを焼き尽くし焼滅させる。



.....

声に音にさえ成らない断末魔の果てに灰さえも残さず消滅するタタリガミ

それに対し切り上げたモーションのまま背を向け右腕を下ろす、その左腕には小さい無垢な魂を持つ子狐：久遠が抱かれていた。

「光指す世界に涙救わぬ正義無し」

一陣の風が異界に吹き、花びらを乗せて舞っていた。

## 第三十四話 血闘のアンビバレンス（後書き）

### 魔法一覧

#### 第一魔法：創生

無から有を創造すること

#### 第二魔法

平行世界の運営、キシュリア・シュバインオーグ・ゼルレッチが魔法使いとして認定されている

#### 第三魔法：ヘブンスフィール

魂の物質化を経て新たな高位生命体への進化、ぶっちゃけ不老不死ベターマンに出てくるベストマン（カンケル）と同じようなコンセプト

#### 第四魔法：時間運営

衛宮の魔術師が目指していた到達点、第二魔法が横ならこちらは縦

#### 第5魔法：消滅

有を無に帰す究極の破壊、青崎蒼子が魔法使いとして認定されているどうやら三代前に到達したらしい

注：直死の魔眼を魔法という人はいるが、死とは消滅ではなく変化の一つにしか過ぎず殺すこと自体は極端な話、魔術にさえ頼る必要も無いため魔法に認定されることは無い

ただし、未来の状態を強引に持つてきているということから第四魔法もしくは因果律操作に近いかもしれない

### 第三五話 強者

「コンタミネーション・アウト  
混合解除」

言霊を口にする、それと共に両腕の肘から後方へと突き出ていた刃から其々闇と光が噴出し自分の肉体を離れ獣型の月砂と刃菊が現われる。

“ピシッ”

それと同時に世界に輝が入り、亮の肉体を覆う龍の甲殻も白く風化によく似た繊維化によって渴き硬化しひび割れていく

“パリン”

世界が陶器の割れるような音と共に砕け破片と共に散り、龍の甲殻も砕けセメントの粉末のようなものへと変わり風に運ばれていく

その中で亮は久遠を抱きなおし、左手の中指と薬指を立てた印を結ぶ。中指は「全てを超越した存在」を、薬指は「癒し」を意味している。

僕に出来るただ一つの願いを

言霊を紡ぎその力を最大限に行使しうるために意味を持った単語を特定のリズムで口ずさむ

「クーラティオテネリタースセクティオーサルース  
治癒、繊細、切断、安全、分解  
コクトゥーラ」

亮の剣指から緋色の暖やかな波動が発せられ久遠に染み付いていた  
タタリの残照を抽出、分解、蒸発させていく

「もう、大丈夫だ」

浄解を終え優しく腕に眠る久遠に語り掛ける亮  
月明かりを反射しきらめく水面が皆を照らし出す。

（…俺は守れたのか）

なんともいえない満足感が胸に宿る、忘れていたと思っていた感情  
の一つ【嬉しさ】だ

「ぐっ…」

唐突に体から力が抜けよろけ片膝を地面に突く。

「「亮っ！！」」

二人が慌てて駆け寄る。

「問題ない…力を使いすぎただけだ…」

苦しさを隠しきれず途切れ途切れに言う亮

「ごめんね…カルマの実、最後の一個だったのに」

そう、アムニスの花は何処にでもあるわけでもなくその中でもカル

マの実をつけるのは稀であり手持ちのカルマの実は先ほどの最後

しかし

「実ならもう一つある」

「アインナツシュの実…しかしそれは」

亮の答えに言葉を詰まらす刃菊

死徒二十七祖 腐海樹林アインナツシュが数百年に一度つけるといわれる実

それは人間ならば不老不死へと真祖の吸血鬼にはその生態欠陥である吸血衝動を抑制する効果を持つ

誤解されがちだが老いによる死が無く肉体が老化しないことを不老不死といい何をどうやっても死なない不滅の存在は不死身と呼ぶ。

「だめだよ、あんなの食べると幾ら亮でも反転しちゃう」

月砂が警告する。

混血にはすべからず本能とでもいうべきもう一つの自分が存在し獣として、魔としての自分が人間としての自分を塗りつぶしてしまうことを反転と呼ぶ。

それを五つの…いや、正確には6つの霊能力者の生命の結晶とでもいうべき霊祁によって人間の属性を強化し獣、魔としての自分を制御しているのだ。

「幾ら霊祁が五つあってもアインナツシュの実に宿っているのは何百、何千、何万という人たちから抽出された命、その濃厚な血の匂いで魔としての亮が目覚めちゃう…相手が悪すぎるよ」

「判っているさ…アレは本当に最後の手段の一つさ」

苦笑を携え理解している旨を伝える自身の奥底に眠る獣、その残虐性と不条理な強さを生み出す凶暴性は誰よりも何よりも理解している。

なぜなら獣に真つ先に喰われるのは自分が培った自分、人間としての自分、小我<sup>オレ</sup>であるのだから。

その時、

“ガサガサ！”

近くの森の茂みが揺れる、そして一組の男女が現れる。

「…タタリはどこですか」

男女の内、少女：先日出会った藍色の髪をリボンで括りポニーテールにしている払魔師の少女が霊剣：十六夜を手に亮の手の内に眠る久遠に鋭い視線を注ぎながら問う。

「既に滅した」

「……では久遠は」

簡潔に結果のみを告げる亮、それを見下ろしながらに久遠が死んだと自分の内でたどり着く薫

「いや、久遠は無事だ…タタリを切り離し消滅させた」

亮の答えに目を？く、歴代の払魔師の何物もできなかった偉業をなしたというのだからそれも当然、生まれつき高い霊的遺伝子を発現し膨大な霊力を持った自分でさえ封印が精いっぱいだったのだ。

「どうやって…あの時のうちでも封印が精いっぱい、しかも私には再封印できないというのに……」

「そんなにタタリってやつはつよいのか？」

薫と一緒に居た男性、槇原 耕介が隣に居る少女に質問する。

「久遠は神咲当代全員でかかってても封印できないほどの戦闘力を持っています。現に那美の両親は久遠の暴走によって命を落とし前代の当主であった祖母も瀕死の重傷を負い退役に追い込まれたほどです、次世代の払魔師は私を含めてまだ未熟 久遠は封印が切れる直前に処分することになっていたんです。」

神咲家は古い歴史を持つ退魔の家系であり分家を合わせるとその技の多様性、威力ともに凄まじいものを持っている。

彼ら全員でかなわないと言われているそれをたった一人でしかも久遠に宿ったタタリのみを滅したというのだから薫の驚きは相当なものだった。

「すごいんだんな、あんな…」

「…俺は眠りにつく、この子『久遠』を待っている子のもとに送り



届けてやってくれ…月砂」

「そうれはどういう…

自分に近寄ってきた月砂に久遠を預け亮は力なく立ち上がりふらふらと湖に向かう。

「なのはちゃんに…遅くなるって伝えてくれ

」

“バツシャアアアアアアんっ！！！”

湖へと落ちる亮の肉体

「「なっ！！！」」

驚き駆け寄ろうとする二人

「主の眠りを妨げるな」

その行く手を黒犬、刃菊が遮る。

「貴様は…犬神！！」

犬神を作る術は下手をすれば自分で自分の敵を生み出してしまう危険性から遙か過去に禁術に指定され後に一部の呪者により人間に向ける呪いの式神として運用されたことから退魔師には忌み嫌われている。

「主が目覚めるまで何人たりとも近づけさせはせん」

そんな地上の騒動など関係なしに亮の肉体は湖の底へゆつくりと沈んでいきその周囲の水分が凍り始め結晶のような氷塊に亮を閉じ込める。

まるで繭、もしくは琥珀である。

カルマの実は膨大なエネルギーを一気に摂取、使用できる反面、数時間は強制的な眠りについてしまうという弱点がある。  
その間、全くの無防備

亮は制限された力でも人間を軽く超えるが短いサイクルでの持久力が致命的に欠けているカルマの實の摂取はそれをさらに顕著に顕わさせる。

寒い

それは自身を覆う氷繭によるものなのか

寒いな

かつて幾度か味わったこの凍てつく寒さが嫌いだ、両親の温もりに

包まれ眠った記憶がさらにその寒さを引き立てる。

やがて水底に氷繭が土砂を舞い上げながら着きその中で亮は眠る  
温もりが欲しいと願いながら、その脳裏にとある少女の姿を浮かべ  
ながら。

場所は変わって高町家

「ねえ、なのはもうねんねしょ？」

「やだ、りょうおにいちちゃんかえってくるまでまつのー!!」

桃子の諭しに真っ向から反対し玄関から動かないのは  
そんななのは様子にお手上げ状態の高町家の面々

「東雲は全くどこへ行っただんだ？」

恭也が疑問を口にする。

「…わからない、ただ急を要する事態になったことだけは確かだと思っ  
思う」

「私たちに何か言う暇もないほど？」

「恐らく…たぶん大丈夫だろう」

美由紀の言葉に相槌を打ちながら土郎は自分の予想をいう。

「?どうして、お父さん」

「いいか美由紀、武道家つてのはいくつも分化していく未来の内最適なもの自身が生存する確率をとっさに感じ掴み取ることに優れているんだ。亮君は真に達人と呼ばれる人間のそういう領域に居る。

御神の内殆どの人間がたどり着くことさえできないそういう領域に」

神速は脳内のリミッターを解除し限界以上の動きを可能とする技能……いや業だが亮曰くそれは剣士としての真の成長にとっては障害ではない。

いくらリミッターを解除していても一度に処理できる情報が増えるわけではない、さらに意識速度に肉体が追い付かない、音と色が消えるなど戦闘において少なくはないデメリットが存在する。何事にも起きる前にはわずかといえど予兆が必ずありそれを見逃す可能性が高いのだ。

土郎自身も神速を使わずにその速度に対応した強敵と幾度となく相対したそのうち一人は妹の娘である美由紀の友人である陣内 美緒の父、啓吾である。

彼らこそ真の強者への一步を踏み出した超越者、神速という奥義はその領域の近いところまで疑似的に押し上げるいわばズルなのだ。

本当に強者足りたのなら神速を使わず神速の領域へと踏み込む必要がある。

そして東雲 亮はその領域さえ飛び越え瞬時に自身が生き残るため

の可能性を察しそこに全力を賭ける覚悟を持つ超越者の域に居るのだ。

「つまり、本当に強いってのは、生き残る死に抗う力を持った人たちを指すんだ。だから彼は生き残るだろう、そして彼はなのはが泣くことは良しとはしないだろう。」

亮は捻くれていてあまり本音を吐かないが内には熱いものを秘めた誠実な人間だ。

そうじゃないのならなぜあの亡霊の幼子たちを救えない自分を憎悪するか、他者を食い物にする存在に憤怒するか

故に信頼も信用もできる。

“コンコン”

不意にドアが叩かれる。

「にゃっ！！帰ってきたの！！」

とことこと元気よく駆け出すのはが扉を開く。

扉の向こう、そこに待ち人が微笑を携えながら扉が開かれるのを待っていることを幻視する。

しかし

「くう~~~~ん……」

扉の向こうに亮はおらず小さな子ぎつね、久遠を背に乗せた白狐、

月砂かじさがそこにいた。

「かづちゃん！ーりようおにいちゃんはどうしたの！？」

月砂に詰め寄り問うのは

「ごめんね、亮は少し遅くなる久遠を助けるために使った力の反動で数時間は動けないんの」

「迎えに行くのー！！」

ダッシュでどこにいるともしれない亮の元へと向かおうとするのは、しかしその首元が月砂によって啜えられブランと宙につるされるのは

「なにをするなのー！！かづちゃんー！！」

手足をばたつかせるなのはを啜えたまま家に入る月砂は玄関内部でトスンと音をたてたなのはを落とす。

「にゅっ！？」

「いま、亮のそばにいてもなのはちゃんには何もできない、それにこんな寒い夜に歩いて何かあっても亮は喜ばない…考えてあげて、自分の大切な人が自分のために無茶をするのがどれだけつらいのか」

「でもお……」

顔を俯かせるのは

「亮は、ずっとずっと探していた自分の帰る場所を自分が守りたい  
と思う存在ものを

それがなのはちゃん、だからなのはちゃんが亮の帰りを待っている  
ただそれだけで亮は頑張れるだから信じて待っていてあげて」

「でも！なのははりょうおにいちゃんと一緒に居たいの！！」

「明日迎えに行つてあげよう？亮はきつとうれしい筈だから」

「…りょうおにいちゃんこのままいなくなったりしなよね？」

不安げに月砂の顔を見上げ問いかけるのは、月砂はその不安に揺れる瞳をまっすぐ見据えながら答える。

「それは絶対じゃないよ、亮が帰るのはなのはちゃんのところ  
そう決めたからそう還るそれだけは譲らない何があっても、だから  
今日は夜も遅いからねよ？」

「…うん、わかったのかづちゃん約束なの！！あした絶対に亮おにいちゃん迎えに行くの！！」

「うん！！嘘ついたらかづちゃんに針10本飲ませるの！！」

「ちょ！？何その具体的な数字！？怖いんだけどっ！！！」

できそうな数字によってやけに現実味を帯びる罰に冷や汗をかく月砂

「え？おとうさん嘘ついたらお母さんに飲ませられてるって言うってたけど？」

「誰がつ！？」

「おにいちゃん」

玄関の奥の扉にもたれ掛った恭也をビシイっ！！と指さしながら即答するなのは

即座にダッシュで逃げ出そうとする恭也しかしその肩はいい笑顔の高町夫妻によりしつかりとつかまれている。

「ちょ、父さん母さん俺は学校の課題があるから部屋に戻るんだから邪魔しないでくれると有り難いんですが……」

冷や汗をかきながら後ろの存在の顔を見ないように言い訳を出しつつ逃走の機会を完全に失ってしまった恭也

「なに、すぐに終わるさ……なあ桃子？」

「ええそうねあなた、かわいい息子とじっくり『お話』するだけだもの安心していいわよ恭也」



『お話』という単語に自分の行く末を悟る恭也は天井を仰ぎ見る

「お手柔らかにお願いします…」

その日、恭也を見たものは

いない

### 第三六話 空（から）

暗い水の底そこでまさに琥珀様に自信を覆う氷晶の繭に包まれ眠る亮

その夢の内で彼は相対する。肉体が持つもう一つの人格、大我に

「なぜお前は外界へ出ようとする、知性を持たず本能のみで欲求に従うだけの獣が」

無限の墓標が立ち並び草花が咲き乱れる丘、それは亮の心象風景によつて作られる世界、幻想墓地

亮は其処に存在する魂が具現化した存在である丘の頂上に存在する大樹の麓において生命力を表す輝く葉に照らされている。

『知っているはず、自分より弱きものが自身に跨るのならばそれを振り落とし噛み砕き喰らうのが獣であると。』

その幻想的な清涼さと儚さが入り混じった世界の丘で頂上に頂く存在、蒼い竜が語る。

「そして外へでてどうしようというのだ!？」

『<sup>のそ</sup>慾むがままに力を振るい貪り喰らうまで』

「俺がそれ許すとも？」

『人格とは知性が生むものではない、肉体が生み出す本能という人格、起源が持つ方向性それらを原型とし知性の芽が環境に最適化さ

せるために加工し育んだものである。故に貴様の本質は変わらない。  
」

「だからどうした!」

『気付いているのだろう』

貴様に好意を抱いているあの少女を貴様は喰らいたいと思っている  
そう欲望の儘に虐げ凌辱し服従させ己のものにしたいと、好  
意とは本来そういうものだ。  
」

「違うつ!」

好きという感情は他者を欲するというもの、故に奴の言うとおりな  
のかもしれない  
だけ

ただ「笑ってくれている」ただそれだけが自分の求めるものなのだ。  
それを打ち壊すモノが自分の奥底に眠っているなど認められはしな  
い。

『貴様という人格の知性を使い今こうして我は語りかけている、逆  
に貴様の人格に生まれる感情という欲求もまた我から漏れ出たもの。  
ほんのう

紅赤朱は大我の思考を上塗りされた混血、起源の方向性に上塗りさ  
れた人格となんら変わらん。貴様が我に勝利することなど不可能、  
貴様という人格は水泡のように消え去るだろう。  
」

起源覚醒者、紅赤朱、この二つはよく似ている

肉体、起源それぞれ違うものではあるが個人が誕生してから育まれ  
た人間としての己、育まれた知性が生み出した思考／人格：それは

生まれてから育まれたものである以上、祖先／前世から延々と繰り返し受け継がれてきたものに対して余りに矮小で儚い。

やがて、混血の肉体に宿る人格／大我は力を行使するたびに小我を喰らい知性を強奪する。。

逃れえぬ運命<sup>サダメ</sup>  
しかし

「オレは：ただあの子に笑っていてほしい、涙させたくないだけだ。あの笑顔を見ていたい　　これは俺の心だ！！あの子には貴様とて　　貴様にこそ手出しはさせない」

ピシ

世界に蒼竜に罅が入る。

「オレは貴様を御して服従させてみせよう！！感情を理性で制御し、荒ぶる魂と魔力を融合・精錬させるそれが魔術だ！！感情が貴様であるのなら俺は貴様を小我<sup>オレ</sup>の意志で使役してやろう！！」

例え好意がやつから生まれ出たものだとしても、あの子の笑顔を美しいと感じまた見たいと思ったのは俺の思考　　人格だ。ならば人格の原型がやつだったとしても俺と本能はすでに別れた存在、別物だ。

原点とそこから進み変わった存在　　ならば

「俺は負けない何者であろうと、何より自分自身には　　絶対に負けない」

『ならば魅せてみせろ、青竜　守亮　　いや、明の冥星：東雲

亮

光と闇を内包せし存在、そのうちの光よ、闇に打ち勝つて魅せる』

人間としての本能か魔としての本能か、闘争を望むそれは亮を挑発する。

「違う、オレは光なんかじゃない…知性と本能、生と死、聖と魔、光と闇、愛と憎それら相克の狭間に存在し両者を内包する存在、人間だっ！！！」

肉体と知性が人格を作る。それゆえ二つの要素を内包しまるでそれは命の螺旋のようでもありそれは人格のみに当てはまるものではない。

この世すべての情報は概ね対極となる存在との組み合わせで構成されている。

+と-、NとS、男と女、陰と陽…DNA等々  
なぜならそれが最も多くの属性を内包するから。

『…“東雲”それは夜明けの空を、そして“亮”それは高きところで輝くものを指す　すなわち明の冥星…ルシフェル　神に弓引きし邪竜よ、いや　』

蒼い竜の姿が陽炎のように揺らめきながら別の存在へと変わる

それは50メートルを超える機械の人型、頭から鮮血を被ったような紅い堕天使、竜の翼をもつ鮮血堕天使

機械仕掛けの神、機械神  
デウス・マキナ  
鬼械神

その名は【法の書】の名を冠する神の模造品

そしてそれは自分の魔が凝縮し容を持った姿、自分の魔という側面そのもの

『邪竜<sup>われ</sup>に力と権威を与えられる七角十頭の獣、聖書に弓引きし獣、マスターテリオンよ見事運命<sup>フエイト</sup>を覆し神にさえ反逆して見せるその身に宿す”残った”五頭を以て

貴様もまた、人間もまた、獣なのだから』

“パリン”

世界が崩壊する。それと同時に現実世界で亮を覆っていた氷繭が割れ亮が眼を覚ます。

幾つかの水泡を身にまとう亮は頭上より差し込む日の光を見上げる。それは湖の水面に屈折されゆらと揺れながらキラキラと輝きながら差し込む光、その光を目指し水中を登っていく。

“ザパアアア”

「ぷはあっ!!」

水の境界の向こうそこには何処までも澄み渡るような青空が広がっていた。

仰向けで水面に浮かびそれをぼんやりと眺める。

「空はいいな…孤独だけどそこには何にも縛られない自由がある…  
…だけど」

この身は比翼の鳥

片翼だけでは飛べない、飛び立つこともできない。

そう、対となるもう一体の比翼の鳥と寄り添わなくては何もできない、自分が居るべき空へ帰ることさえも

「なあ？君はどこに居るんだ…俺の比翼…俺を必要としてくれる誰か、【冬の今】から【春の明日】へと飛び立つための翼」

比翼の鳥は寄り添うことで互いに足りないものを補い、在るべき空へと飛び立ちその温もりで互いを支える。

「あの子が…俺の求める君だったらどんなにいいか　だがその可能性はあまりにか細い」

あの子の翼はまだ若く、安らぎの枝はまだ遠い  
そして万華鏡のように分岐していく未来の内で自分を必要としてくれる、自分の比翼と為る可能性は殆どない、それこそ夜天に広がる星の大海からその一粒を掴み取るほどの低確率

「それでも」

そんなことは関係ない

おもむろに天空に向かい手を伸ばす、手の先に在る流れる白雲を掴

み取るように

「お前たちにあの笑顔を奪わせたりはしない　絶対だ」

拳を握りしめ誰にとも知れぬ、いや己自身に誓いを立てる

この身は破邪の刃、魔を絶つ剣、命を鰐る存在を破壊する破壊者  
己に課す使命、それは自身の退路を塞ぎ前に進ませる力となる

「ガランドウの世界を歩み、孤独に満ちた世界を歩み、痛みさえない世界を終わらせてくれた希望の灯火…奪わせるものかつ!!」

かつての冷徹だった瞳に今はギラギラと輝く熱い想いが宿っていた。

リヨウおにいちやあ~~~~~んっ!!!!!!

ふと横から声が聞こえ姿勢を変えそちらに水を?きそちらを向く。  
視線の先、湖の水際でなのはがぴょんぴょん飛び跳ね自己主張しながら手を振っていた。  
そして…

「なのは…落ち着いて…」

その横で紅と白の巫女風の装束を纏った金色ポニーテールに狐耳と



尾をもった少女がたどたどしい口調でなのはをなだめていた。

姉妹にも見えるその光景を遠くから刃菊と月砂が眺めているのを見ながら岸へと水を掻き分けながら泳いでいく。

そして岸に上がり自分の膝を超える程度しかない身長なのはを見下ろす。

「どうして……………ここに？」

半ば呆然とした口調で問いかける亮、

「ばかあああつ！！りょうおにいちゃんのパカああああつ！！」

亮の答えに対し叫びながら飛びつきその足をポカポカと対して力の入っていない手で叩く。

「りょうおにいちゃん勝手に居なくなっちゃったかも知れないって！！それがすつごく嫌だったの！！かなしかつたの！！！！」

「ごめん…」

悲痛という痛みさえ感じさせる訴え  
足に縋り付く幼い少女と目線を合わせるべくしゃがみ謝罪の言葉を紡ぐ

「でもね…かづちゃんが来た時に気付いたの！！りょうおにいちゃ

んが例えどこへいっても迎えに行けばいいんだって…だって約束したもん！！」

もし、りょうおにいちちゃんがお空で独りぼっちになってもなのはが迎えいくの

あの夜空で花火を共に見た日の約束、それが脳裏に木霊する。

「そうか…そうだったね

」

ありがとう、 “ なのは ”

その感謝言葉と共に微笑む亮の顔はいつもの干からび擦り切れた老人が子供に向けるような羨む様な見守るような笑みではなく

満開の向日葵のような満面の笑顔であった。

「あ…」

なのはは思わずその笑顔が亮が初めて自分自身の為の笑みだと悟った。

亮の通常の笑みは二種類、

相手を挑発し圧倒するための戦闘者としての顔  
誰かを安心させるための他人の為の笑み

しかし亮は今、なのはの想いがうれしくて笑みを浮かべた。

それは間違事まちがごとく無き自分のための笑み

だから自分もそれに応える。同じく満面の笑顔で

「どういたしましてなの！！！」

「……そして君は……久遠か……」  
「うん」

亮はなのはと一緒に居た少女に向き直り問いかけ、少女もそれに応える。

「想い出は優しい　　だから、甘えちゃいけないしそれに吞まれてもいけない。」

「うん、でも……タタリは”くおん”が弥太のことを好きだった。繋がりの一つでもあった……消えたのは悲しい」

「……………」

久遠の独白を沈黙の元聞き届ける亮、草原を舐める風の音が耳に届く。

「でも、弥太の最後の苦しい姿だけを思い出してばかりいるのは間違いだって亮が教えてくれた……だからこうして瞼を閉じれば聞こえる　　弥太の懐かしい声が……何より久遠この名前は弥太がくれた大切なもの」

瞳を閉じ青空へと顔を上げる久遠。風に颯れた草と紅葉が宙に舞っていた。

「なら君が君である限り彼と君との繋がり……絆は消えないよ」崇  
り巨魅”であつたなら君はその繋がりや失つていた。君は一つの繋  
がりを失つたと同時に本当の意味で絆を取り戻したんだ。」

「うん…ありがとう

お母さんとお父さん、なのは、那美、薫

それに亮も

みんなみんな”大好き”」

亮の言葉に久遠は再びその瞳を開きなのはと亮を見据えながら笑顔  
で淀みなく言い切る。

久遠のその真直ぐな心からの言葉に亮は微笑を浮かべる。

「久遠、君のその真直ぐな心には好感を抱くな

」

「????りようおにいちゃんそれどういう意味なの?」

亮の傍らでズボンを引っ張りながらなのはが小首を傾げ亮に言葉の  
意味を問いかける。

「好きってことさ」

「にゃ!りようおにいちゃんクーちゃんのこと好きなの!?」

「そうなるね」

「クーちゃんもりようおにいちゃんとなのことが好きで、なの  
はも二人が好きで…

新発見の”サンカクカンケイ”なの!」

”ピシリ”

なのはの言葉により亮の表情が一瞬で石化したように固まる。

「な、なのはちゃん……その言葉、三角関係って誰に聞いたのかな？」

ヒクヒクと頬を引き攣らせながら問いかける。

「お姉ちゃん!」

#### あの耳年増め

純粹無垢なのはに要らんことを教え込んだメガネへの折檻を心に固く、固く誓った亮であった。

## 第二章 試作プロローグ

ある二十代前後の少女と青年がシーツに身を包み横たわっている。二人は衣服を纏っておらず少女は青年の腕の中で厚い胸板に穿たれた傷痕に手を這わせる。

腕一本が貫通しそんな傷痕、その向こうには存在しているはずの臓器、命の根幹たる臓器心臓が欠落している。

なぜならその心臓は少女が胸の中で脈付き彼女を生かしているからそして少女の内で作られる命力が不可視のラインによって青年に送られ青年を生かす。

どうした眠れないのか？

青年は腕の中の少女に問いかける。  
すると少女は顔を上げその栗色の髪を揺らしながら青年の穏やかな顔を見据える。

最後かもしれないから話しておきたいんだ

その夜は永い永い時を経て色あせず私の心に残っている夜でした。  
魔法という力に出会い、あなた彼と再会し境界線に立った夜

昔、昔に私を守るために人を超え、獣を超え、神様さえも超えた彼あなた私を庇って死んでもずっと見守り続けてくれた彼が自分とい

う存在を摩り減らしてまで来てくれた。

今はねそれがすごくうれしいんだ。

胸に温かい何かが満ちて沁み出してくるほどにね

「GUAAAAAAAAAAAAAAAAAッ!!!」

夜の街、そこで不定形な黒いへドロ口のような塊が蠢き白いドレスにも似た衣服をまとつた栗毛色の髪をもつ少女に襲い掛かる。

「ふえええええつ！！！」

少女は慌てふためきながらも地面をから跳ねとびそのまま宙に佇み寸差で不定形の異形が雪崩込みアスファルトの地面を容易に砕き粉塵を巻き上げる。

魔法についての知識は？

その少女が持つ機械的で幾何学的な杖、その先端にあるまるで欠けた月のような装飾の中央に埋め込まれた紅い宝玉が点滅し電子音声を発する。

「ぜんぜん！全くありませんっ！！！」

必死に力いっぱいで答える少女

『では、全て教えます。私の指示通りに』

「は、はいっ！」

少女が答えると共に足元の粉塵の幕を突き破り先ほどの異形が飛び出す。

[illegible]

それは雄叫びを發しつつタールのような体を変形させまるで毒蛇のようにその体を細長く變形させ少女を飲み込もうとする。

『飛びます』  
フライヤーフィン

宙に浮かぶ白亜の衣服の少女の足首から桜色の光で形作られた翼が生える。

「ふああああ、ああっ！！！！」

まるで自転車に乗りたての子供の用にフラフラとめちやくちな軌道を描きながらもなんとか蛇のような怪物の突撃を回避し近くの民家の屋根に降り立つ。

しかしビルの屋上に着地していた異形は再び不定型な塊となっており少女に向けていくつものヘドロでできた触手の槍を高速で伸ばす。





巨大な質量をもっているであろう異形が衝突する寸前に桜色の膜が少女の前に展開そのすさまじい衝突の衝撃と一緒に異形の突進を食い止める。

「くううつつ…!!」

手に伝わる過負荷に思わず少女が唸る。桜色の障壁は波打ちその向こうで異形が自分を喰らおうとする大口を広げているのを目にし思わず息をのむ。

その時

「舞え、乙姫っ!!!!!! 鳳凰天翔突っ!!!!!!」

キュアアアアアアアアアアアっ!!!!!! -

「え? な、何なのっ! ?」

拮抗し、宙に火花を散らしながら浮かぶ両者の内、黒い異形を謎の声とともに飛来した炎の鳥、それが甲高い鳴き声を上げながら貫きその巨体を粉々に弾き飛ばす。

その不死鳥は宙を舞い電柱の上に佇む人影の腕にまるで船の錨が引き上げられるように炎の赤い尾に引き戻される。

そしてその炎による明りが闇を背負う人影を照らし出す。

黒い外套を羽織り金色の縦に割れた瞳孔の目を持つ20代前後の青

年、やがて彼の腕の不死鳥はその紅炎の衣が剥がれおちその真の姿をさらす。

それは弓、幾何学的な模様と装飾を施されたまるで船の錨のような白亜の弓。

その“く”の字の先端の鋭角には青い菱のような形をした宝石が刺さっている。

「まずは一つ……残り二十」

それをおもむろに右腕で抜き去る青年。

そして彼は夜空に浮かぶ少女を高町なのはを金色の瞳で視線を注ぎ口を開く。

「宣告する、君は昼の世界へ戻れ闇に関わるな。

自覚がないようだが君はいま分岐点に立っている。後ろへ戻れば日常の君がいるべき光の世界、踏み込めば血と怨嗟が渦巻く闇の世界……そこは境界線だ」

青年がまっすぐに夜空の星星を背に背負うなのはを見上げ、なのはの足元を指さす。

彼が纏う外套が風に揺られバサバサと音を立てていた。

「君のような少女に血と怨嗟は似合わない。日常に光の世界へ帰るんだ。

それでもこちらの世界へと踏み込むのなら 決死の覚悟を抱い

て来い」

「あ、……」

その光景がひどく懐かしかったんだ。

細い柱を足場に夜の闇を背負い白亜の弓を手に月光に照らされ浮かび上がるその人が目に映る光景が

言葉が出なかった、初めて会うはずだけどその人を心が魂が知っていると云っていた。

ただ私はあの時、喜んだと同時に恐れていたんだと思うあの人の再会を

それはあの時の私には解らないこと、まだ翼が若く飛び立てなかった雛鳥の私には

だけど

あの時から私たちの物語が、止まっていた物語がまた動き始めたんだと思うんだ。

## 番外編 キシュアゼルレッチ

「人生は眼が覚めているだけでたのしいのだ」

風が吹き抜ける草原で虹色に輝く宝石の剣を携えた老人は俺に言った。

「だからこそ、真の意味で俺の眼を覚<sup>まごこ</sup>ませるモノを。俺の心の還る場所を俺は探しているのだ」

黒衣赤眼の老人に俺は返す。

「そうか、求める貴様が見つけれずに求めているなかった我が姫が見つけるとは皮肉もいいところだな、“4番目”」

「何が言いたい“二番目”」

「何、簡単な事だ“殺人貴”と“月の姫”を救つてはやれんか？貴様が求めてやまないモノを見つけた矢先にそれを奪われた彼らを」

黒衣の老人キシユア・ゼルレッチは己の偽善に従い訴える

「……俺がこの世界に希望を見出さなくなった時、門を開け。それが条件だ」

「ほう、貴様が嫌いな魔術師の様な事を言うのだな“魔法使い”？  
ゼルレッチの赤い瞳と俺の龍の瞳の視線が交差し、同時に一際強い風が草原を撫で、草原の草をさらっていく。

「等価交換は世界の基本だ、それを破れば碌でもないことになる。ただ一つ等価交換が成り立たない現象、人はそれを“奇跡”と呼ぶ」

## 番外編 時の皇

最も大切なモノとの別れ、だけどそれははじめから決まっていたことで結果自体は来て当たりまえ結果は同じでも過程が違った。

唯、ただ違ったのは……

俺は、あいつを愛してしまった。

吸血鬼の姫である彼女は血を吸うことで眠りを避けることができるだから俺は

俺の血を吸えアルクエド

だけどあいつは…

ううん、吸わない

なんでだ？吸えない理由でもあるのか？

うん、好きだから吸わない

今にも泣き出しそうな笑顔であいつは言った。

そして、

お願いこれからもずっとそのままで

“笑って生きていてね”

そう言っ

ばいばい

そう言い残し、霞のように消えていった

蒼い夜空を見上げ、月を見つめる

「あのバカ女…」

何度目かわからないがあいつのことを指す言葉を口にする

「お前がいないと素直に笑えないだろうが…そんな事もわからないのか…」

遠野 志貴は旅に出ることを決めた。

そして幾たびかの月日が巡った。

「いい加減あきらめたらどうだ代行者？」

真つ赤な夕日によつて赤く染められていた大地

そこには周囲一帯に肉塊が散らばり、死臭と硝煙、それえに血の臭いが立ち込める丘の上で、その顔を横から消えかけている夕陽に照らされながら十の武具を地面に突き刺してそこに佇む青年。

その一つ漆黒のハルバートに背を預けながら黒のロングコートに身を包んだ青年、東雲 亮は肩や手に十字架と羽の様なペイントのある青い瞳の日本人の面影がある地面に這い蹲る少女に問いかける。

「…誰が！」

「女を殺すのは趣味じゃないのでな、諦めて二度と来ないでほしいものなんだが。」

「どの口で言っているのですか！」

周囲に散らばる肉片は元々、聖堂教会と魔術協会の混成部隊であり、亮を討伐するために集められた者たちだ。その構成メンバーは魔術協会からは執行者、聖堂教会からは代行者という超実戦派の実力者のみが集められていた聖堂教会きつての実力者であるいましがた亮



が問いかけた少女“弓のシエル”を投入していることから本気具合が見て取れる。

「あなたが殺した者達に女だけがいないわけないでしょう!!」

男女、協会と教会関係なく何のためらいなく葬った亮に対してシエルは叫ぶ

「俺に殺意を向けるのが悪い、殺そうとするのなら殺されることを覚悟しなければならぬ正義の味方気取りで人を殺そうとするモノに遠慮する義理も義務もない」

“ガキン”

「あなたの様な強大な力を、魔王の力を持ちながら星に縛られることもなく、さらには魔法さえ己がモノとする異形の血をひくあなたは間違いなく世界のバランスを壊す存在です」

両手持ちのパイルバンカーを地面に突き刺しそれを杖にして立ち上がるシエル。

「だから、俺の存在を否定するのか？オマエタチ聖堂教会は、モルモットだから、モルモット実験材料として俺を欲するのかじゅうりょう魔術協会は」

亮はハルバートを引き抜き、その切っ先と視線ををシエルに向ける。その瞳は赤と金のオッドアイへと変化している。

「あなたには同情出来るところも多分にあります。実験体として殺され続けた私には魔術協会、聖堂教会この二つが正しいなんてことは絶対がないという事は理解できます。しかし、元とは言え吸血鬼であった私が生きていくには組織の狗になるしかないんですよ」

パイルバンカーを構え、瞳を閉じ息を整え自分に向けられる刃を感じながら眼を再び見開き。巨大な杭打ち機“第七聖典”の切っ先を亮に向ける。

「そうか…ならば心安らかに逝け!!」

亮がハルバートを持ち、シエルに向かい一気に駆けだし、

「はあああああああつ!!!」

シエルも魔術で身体能力を強化し亮に洗礼の杭を打ち込むべく駆け出し、二人が接触する瞬間僅かに先立ち第七聖典が突き出される

「ふっ…」

亮は不敵な笑みを浮かべ、ハルバートの切っ先を地面に突き刺し棒高跳びの要領でシエルを飛び越える。

「!!!!!!」

洗礼の杭は、無様にも虚空を突き刺すにとどまる。

“タンっ…”

シエルの背後に軽やかに亮は着地し、その着地の動作さえも利用しハルバートを放つ構えをとっていた。

「力を抜け…苦しいと感じるも間もなく逝けるぞ…」

シエルの背後から声をかけ、反射で振り向きつつあるあるシエルにハルバートの斧刃を振るう。

“フュン”

ハルバートの大質量を乗せた刃が空気を引き裂きながらシエルの首元へと迫る。

やらせない

“ シャンっ！！ ”

明かりと暗闇、昼と夜、その境目の刻限に一つの閃光が奔る。

「へえ……」

「え……」

亮は驚嘆、シエルは驚愕の声を其々上げる。

亮が振るったハルバートのそれが柄の中から先がすっかりとなくなっていたのだから…

“フン、フン、フン…ガキンっ！！！”

少し遅れて、ハルバートの消えていた先が回転しつつ宙を舞いながら落下し地面に突き刺さる。

そして、亮とシエルの視線がそれをなした人物の背へと向けられる。

「うそ…何故あなたが此处に?!」

「知り合いか…」

その人物を眼に納めシエルはありえない者を見る。

「遠野君!!!」

遠野志貴はゆつくりと振り返りながら口を開く。

「先輩、少し聞きたいことがあるんだけどいいですか？」

一つの閃光を走らせた張本人は宝石のように青く輝く瞳で、右手に握るナイフをきらめかせながら、まるで学校で宿題の応えを聞くかのような気軽さで語りかける。

「っとその前に…」

が、しかし亮を瞳に納めた瞬間、志貴の空気が変わる。

まるで底なしの暗闇で蠢く何かの様な、絶対零度の氷の刃の様な負の無限大の殺意が纏われる。

「…ソイツヲ殺サナイト…」

「殺人衝動か…それに地雷王を一度とはいえ殺すとは何かしら厄介な能力も持っているようだな」

志貴に特大の殺意を浴びせられながらも何も変わらない様子で亮は手元と少し離れたところに突き刺さった漆黒のハルバート“地雷王”を交互に見やる。

漆黒のハルバートはまるで吸血鬼の末路のように黒い灰と成って崩れ風にさらわれていつている。

「来たれ！二つのハヤテよ…」

丘に突き刺さっていた残りの武具の内、二振りの刃がひとりで引き抜かれる。

それは亮の呼び声に応えるように宙を舞いながら亮のもとへと移動する。

“ガシッ！チャキンッ！！”

二振りの刃、直刃の日本刀を両の手に掴む。

白い半透明の結晶体クリスタルの様な刀身の刃、“颯”を右手に、漆黒の刀身を持つ禍々しい空気を漂わせる刃、“疾風”を左手に

そして無為の構えで、遠野志貴を見つめる。

「俺に殺意の刃を向けたモノには殺意の刃を反すのみ」

青い瞳の殺人貴は右手のナイフを逆手に持ちかえ眼前に構える。

さあ…殺し愛おう／殺シテヤロウ

続く

## 番外編 直死と時の皇

私は夢を見る

流れるように過ぎ去っていつてしまった大切な人との思い出  
もう、その先がなくなってしまった物語り

私は、語りを遮りながら、出鱈目（ＩＦ）を織り交ぜながらゆつくり風変わりな出来事を映し出し

在り得たかもしれない物語りを私に魅せる

それは不定期に私を楽しませ、心を癒し、救いが在るような錯覚を  
覚えさせる。

だけど、それは、想像するほど、創造するほどに私の心を蝕む  
時の流れが思い出を徐々に劣化させ、あの人の顔をぼやかしていく

今はまだ、

今はまだ………覚えていられる。

だけど、あなたと共に生きられないのが

共に駆け抜けた景色が思い出になってしまったのが

悲しい、哀しい、かなしい

この身を捕らえる千の鎖が冷たくて

千の城の玉座が冷たくて

何よりこの孤独と、時折見るあなたの隣に私が居ない…

あなたの笑顔は私の心を癒やすけれど、同時に私の心を凍てつかせる

寒い…怎いよ………志貴

私は、ますます心が凍える事がわかっていながらそれを止められない  
星を通して彼の姿を見る

なんで？

星から送られてきた彼は辺り一面の死体が転がる丘であの…代行者の、先代ロアの女と共にいた…

とあるモノと相對して

だめ！！

それは人間の勝てる…いや、どうにか出来るものではない

やめて！！志貴！死んじゃう！！

星の血栓、負の思念集積体を己が身の一部として取り込み武具とし



て振るうも一つ一つの真祖

月の民が月のアルティメット・ワンの複製品なのに対してあれは…  
対アルティメット・ワンの超攻性免疫抗体

## 時の民

精霊王の一族、同時に星霊王の血さえ受け継ぐ彼は異質にして最高峰  
人間がどうにか出来るようなモノではない

愛しい男性おとこの死、それが明確に浮かび上がってしまう。

制御できない感情の本流が私の中に渦巻く

そして鎖が砕ける音が聞こえた。

## 番外編 死と時

赤と金、魔を表す二色の残光…赤は血に飢えし獣を意味する生粹の  
魔を表す色

金は魔眼にして魔眼にあらず祖は神眼

蒼…本来清いモノを表す色だがそれがもたらすのは漆黒の“死”のみ  
その普通から乖離した超常の瞳を持つ二人が交差する。

「……………」

「閃っ！！」

“ キーン！！ ”

月のみが照らす丘で火花が散る。

月の明かりを受け鈍い光を放つ短刀：七夜と闇の中においてその輝きを喪わない風の刃と月の明かりさえ反射しない漆黒の闇風の刃が二刀を操り高速で立ち回り、その不安定な重心を利用し変幻自在に立ち回り斬撃を放つ金と赤のオッドアイの黒ずくめの青年

東雲 亮

対して、ただ異様：東雲が旨いのに対して異様：

東雲が風ならば彼は蜘蛛

人の意識の死角を付きながら、蒼い残光を残しつつ移動し、閃光の如き斬撃を放つ

同じく黒ずくめに青い瞳を光らせる、遠野志貴

「その体術…貴様、七夜の生き残り…か…」  
「……………」

亮の言葉は自意識を極限まで薄め、殺人衝動により遠い忘却の果ての修練を浮かび上がらせ、一つの殺人マシーンと化した志貴には届かない。

更に二つの閃光を纏った異なる闇風が交差する。

“キーンっ！！”

「……………」

「言葉さえ喪ったかつ！！」

嘲りを含めた怒声を放つ。

自分と同じ退魔の一族…その中でも七夜と亮の生来の一族“青龍”はあらゆる意味において対極をなしていた。

青龍家は退魔というより守護を前提とし、魔性の存在でありながらその実対極な力をもつ一族でありその力は魔なるモノにしか影響を与えない式典や方術を人の属性故に受け付けられない混血であろうと例外なく葬り去る。

人を捨て特別になりながらも人間らしさを喪わず、それゆえに力を発揮する一族

対して七夜は混血のみを対象にした退魔の一族であり、暗殺の一族だ。

人間で在りながら特別に至るが、その過程で人間らしさを捨てた一族この二つは永久に相いれない。

さらに、この二人は内面的にも在り方も対極をなしている

遠野 志貴に好感を持つ人間は多いがその実彼が持つ濃厚な死の気配故に皆近づこうとはしない、志貴自身善人の人格を為しているがそれは後付けのモノでありその根底には世捨て人的な思考が眠って

いる。

対して亮は、その過去から逆に表層に世捨て人的な人格を形成してはいるがその根底はどうしてもぬぐいきれない、人の良さが眠っていた。それは復讐相手の息子であるキリツグに対して手を出していない事から窺う事が出来る。

つまりこの二人、表層人格と潜在人格が完全に逆なのだ。

更には得物にも言える

短刀それは暗殺において如何に相手に気取られずに殺すかという部分においては最適だろう。

二刀、亮がそれを選んだ理由は、いつか自分が守りたいモノが出来た時一つの剣では一つしか、己の身しか守れない。つまり己を含めた何かを守る際には二つの剣が必要という思いから派生している。

幾度もの交差、そのたびに地面が爆ぜ砂塵を舞いあげるも鋭い剣閃が砂塵のカーテンを切り裂き、その剣風がまた新たな砂塵を舞いあげる。

お互いが互いに一撃必殺を放つもの二人とも高度な未来予測と超直感故に未来を読んでいるため相互に回避される。

“ダっ!!”

同時に二人が砂塵と剣風の嵐から離脱する。

「……………機械の様な人間は見るに堪えん、此処で終われっ!!」

龍魂…覚醒っ！！」

志貴の感情を亡くした瞳を鋭い視線で射抜いていた亮の瞳の瞳孔が縦に割れる。

周囲に魔力の本流が吹き荒れ物理的な干渉を起こすほどの高密度の魔力、龍族のみが使う事の出来る魔力が亮の周囲に渦巻きコートをはためかす。

「刹那の間に鳴り響く鋼の鎮魂歌レクイエムの内に眠るがいつ」

亮は地面を踏み砕き爆発の如き砂埃を巻きあげながら、志貴に迫る。右手の颯を投げ捨て、疾風を肩に担ぎ両手持ちに変える。

「……貴様八邪魔ダ……」

志貴の蒼い瞳から赤い線が…血涙が流れ出る。

亮の死を理解しようとして脳に過負荷がかかり毛細血管が破裂したのだ。

極死：七夜

飛奏

互いに死の風と化した二人がぶつかり合う、志貴の眼が捕らえる死は何者で在ってもしても逃れる事の出来ない死をもたらし

亮の一撃は空間さえも切断するほどに研ぎ澄まされた一撃、龍の魔力と風の魔力を纏い放たれるそれはどのようなものであるかと破壊

を与える。

この後に待っているのは……どちらかあるいは両者の死という結末……

ではなかった

「ぐっ!!」

突然、二人の間に衝撃波が奔り、次に瞬間には黒刀を握った亮の左腕が宙に舞った。

「あ……」

「あなたはっ!!」

宙を舞っていた左腕が堕ちると同時に二人は驚きの声を挙げる。

真っ白なドレスを身にまとった永遠を象徴するかのように静かにたたずむ

金色の髪の姫

まるで月が人の形を取ったような儚さと静かな明るさを纏った女性

アルクエイド・ブリュンスタッドその人だった。

「ア、アルクエイド……」

遠野志貴の瞳から血涙を洗い流す滴が溢れる…止め処なく  
求め続けた

求め続けていたそれが眼の前に

愛して、愛して

狂おしいほどに愛した愛おしい女性が

眼の前に…居るのだから…

志貴の顔は笑顔なのか泣き顔なのか既に判別がつかない

せっかく愛おしい人が眼の前に居るのに景色がぼやけてはつきりとは見えない

だけど景色をぼやかしているモノを止める事は出来ない

志貴はアルクエイドに向かって一歩

歩を進めようとする。

「アルクエイド…会いたかつ

「志貴…それ以上…来な…いで…お願いだから」

志貴はアルクエイドの拒絶の言葉によってその出そうとしていた一歩を止める。

「

っ！……！！……！！」

アルクエイドの雄たけびと共に彼女の瞳が金色に変わる

そして、彼女が地面を蹴ると同時に地面が爆ぜ、音速を超えて亮に  
迫り

“ザアアアアあんっ！！！！”

狂爪が切断された腕の断面を押さえている亮に振り下ろされた。

“ダ

ンッ！！！！”

「くっ！！」

亮はその狂爪の一撃を右手一本で掴みこらえる。地面に足がめり込み蜘蛛の巣状の罅が奔る。

「月の姫…と、言うことはその七夜の小僧が殺人貴…ということか」

「

っ！！！！！！！！」

亮が掴んでいる腕に力が押し込まれ、地面の輝を押し広げる。

徐々に押し負け狂爪が亮の頭部を抉り砕こうと迫る。

「……仕方がない…か、【獣神変】っ！！！！！！」  
「っ！！！！！！」

亮の腕…いや、全身に血管が浮き出ると同時にアルクェイドは全力で掴まれた腕を振り払い離脱する。

亮の千切れた左腕から蒼い炎が噴きでて新しい腕を作り出し、それだけにとどまらず全身を炎が覆う。

天を衝くような巨大な蒼炎の柱

それは逆巻くように渦巻、まるで天へ螺旋階段が伸びているようで



ある。

そして炎の中の人影は徐々にその姿を変える。

“ ジャアアアアン ”

炎の柱を内側からその鋭利な爪で引き裂き、連結刃のような三本の尾で切り裂きそれが顕れる。

体を覆うマグマが冷え固まったような質感を持つ固体の炎を連想させるような青黒い竜の甲殻

その重厚な気配はそれを纏う存在が超越者であることを知らしめる。

その背後でゆらゆらと揺れるのはあらゆるものを切り裂き、削り取る三本の連結刃に酷似した尾

そしてその存在は体中から白い湯気を上げながら名乗りを上げる。

「輝竜戦鬼 闘牙

ここに現臨

っ！」

第三七話 一期一会（前書き）

難産でした

### 第三七話 一期一会

出会いは別れへの確約

出会った時既に別れは必ず来ると確定している

だが、人々は次に出会えることを望み、願う

故に人は別れの言葉として、いつかまた出会える日が再び来るように  
祈るように其れを口にする

“またね”と

### 第三七話 一期一会

「ぐじゅ……クーちゃん……」  
「くうん………」

さざ波寮の入り口でぐずるなのは、その様子を困ったように見下ろす面々

久遠の飼主パートナー兼相棒である少女が熊本に帰郷する日になったのだ。それは久遠となのはの別れをも意味していた。

「久遠、別にここに居てもいいんだぞ？」

「そうだよ、久遠……せつかくタタリから自由になったのに……」

神咲 薫が久遠に語りかけ、一緒に居る少女、薫の義理の妹 那美がそれに同意するが久遠は首を横に振る。

「クーちゃん……せつかく仲良くなれたのにお別れなんて……いやなの……」

「……那美達のおとうさんおかあさんを取ったのは久遠……償い、しないといけない……」

タタリに執りつかれた久遠によってその命を奪われた那美の両親、大切な存在を奪われた悲しみと怒りの傷の深さを久遠は身を以て知っているため自分で自分を許せない。

「なのはちゃん、もう絶対会えないわけじゃないから笑って見送ってあげなよ」

ぐずるなのはの小さな頭を撫でながら言い聞かせようとする亮、なのはそんな亮のズボンに顔を押し付け嗚咽を漏らす。

「えっと、なのはちゃんだったけ？私も高校生になったらこっちに

くるし、他にもちよくちよく遊びに来るよ。                      久遠と一緒にね  
?」

「ほんと?」

薫の妹である那美がなのはに語りかけ、亮のズボンからチョコッと  
涙目の顔を見せるのはが返す。

「はうわっ!!」

その様子を見た那美に落雷のごとき衝撃が奔る。

「お、おねえちゃん…この子抱きしめてもいいっ!?!? 可愛いすぎる  
!」

思わず保護欲を掻き立てるのはの仕草に堪らず姉に詰め寄る那美。

「我慢しないか、怖がられるぞ」

那美の耳元で舌打つ薫、そのすぐ後に二人の視線がなのはに注がれ  
る。

「うにゅ?」

内緒話のあとに注がれる視線に“コテン”と首をかしげる幼女、頭  
の動きと連動して短めのツインテールが揺れる。

「もう……限界　　っ！！！」  
「はにやつ！？」

一瞬でなのはに飛びついた那美の腕に捕らえられるのはが驚きの  
声を上げるが捕獲者にはそんなもの関係なし

「かわいいねえ！かわいいねえ！！！」

なのはの小さい体を撫でまわしそのもちの様にやわらかい頬に頼ず  
りする那美、

「はにゃ　　っ！！！！！」

なのはの悲鳴が秋の空にそれはよく響いたのだそうだ。  
。

「うつゝゝゝよござれちゃったの………もうおよめにいけないの  
………」

さざなみ寮の塀に手を突き顔を地面に向けて頂垂れるのはがつぶ  
やく

しかし亮の脳内にはなのはに妙な言葉を教えたであろう黒幕／桃子  
が親指を立てていい笑顔を輝かせている光景が浮かんでいた。

気にしないことにしよう

この数か月で桃子のハツチャケ騒動に幾たびか巻き込まれた亮はその思考を丁寧なベールで包み心の本棚に決して開かれることのないアルバムとして仕舞った。

「なのちゃん気にするな…お嫁さんが無理ならお嬢さんになればいいだけだ」

からかう気100%で慰めかどうか微妙な言葉を発する亮の口元はにやけている。

「あ、あの東雲さん……？」

神咲 薫が蟀谷に汗を浮かべながら亮の名前を呼ぶがそれは亮の右耳から左耳へと抜けていく。

「にゅ？りようおにいちゃん、“おむこさん”ってなんなの？」

「ああ、お嬢さんってのは女の子の夢、お嫁さんに絶対なくてはならない大切なものなんだ。」

文脈上は間違っではないが明らかにおかしい  
亮の言葉はまるで白い絹のような純真無垢なのはの心にまるで墨汁をぶっかけたように浸透していく

「そうなの！じゃあなのは、お婿さんになるの！！！」

元気よく答えるのは

その様子を見る亮は吹き出しそうになるのをポーカーフェイスで隠す

無邪気に喜ぶなのはを不憫に思った薫がなのはの前に屈み語りかける

「なのはちゃん……女の子が結婚したらお嫁さんになるんだよ」  
「しってるの」

頷くなのはに薫もまた首を縦に振る

「じゃあ、男の子が結婚したら何になると思う？」

薫の問いかけになのはは口元を一刺し指で押さえ唸りながらその小さな頭を左右に振り子のように交互に傾ける。

「う~~~~ん……わからないの」

「うん、男の子が結婚したらお婿さんになるんだ。つまりお嫁さんの反対なんだ……」

一瞬の静寂、まるでそこだけ時間が止まったかの様になのはが固まり、風が木の葉を落とす音が場を支配する。

「ふ……ふええええええ  
！！！！！」

っ！



場に轟く叫びと共に時間が再び動き出す。

薫の教えた言葉と先ほどのまでの自分の言葉が一致し恥ずかしさとその他もろもろが脳内でこんがらがっている。

「りょうおにいちゃんっ！！！！」

混乱させた張本人の存在を思い出したなのはが視線を注ぐとその先には

「くっ……くくく……」

我慢しきれず笑いを漏らしている亮の姿があった。

「笑っちゃダメなおお　　っ！！！」

プンスカ頭から湯気を吹き出すのはが亮の元へととてとてと駆け寄り亮の足をポカポカ叩く。

「ごめんごめん」

怒り心頭なご様子のなのは頭の頭を苦笑しながら撫でながら謝罪することて諫める亮、その眼はとても暖かい眼差しを秘めていた。

未だご立腹な様子のなのはではあるがその怒りが多少、収まったのを確認した亮は那美に向き直り膝を着きその視線を合わせる。

「那美……といったね？」

「あ、……はい、そうです神咲 那美です。」

亮の問いかけに他人行儀ながらも答える那美、亮はその那美の目を真直ぐに見つめる。

「……………あの？」

「うん、君なら大丈夫だろう。久遠がタタリから自分を取り戻したのは君によるところが大きかったのだらうな。」

「いえ……そんな」

亮の言葉に照れる那美

「君に託したい存在ものが居る。それは久遠にとっても大切に君の力にもなるものだ……託させてくれるかい？」

「……………」

真剣な物言いの亮な言葉に思わず無言で亮の目を見つめる那美  
それは何の冗談でもなくただ純粹に他者を想う心を秘めた視線だと  
那美は悟る。

「はい、任せてください！」

那美の返事に亮は一度、目を瞑り頷く

「両手を出してくれるかな？」

亮の言葉に従い両腕を差し出す那美、亮はその小さな掌に自分の掌を重ねる。

そして言霊を紡ぐ

「Aufgabe des Vertrages（契約譲渡）」

口から紡がれるドイツ語の言霊に連動、亮の腕から淡い緑色の燐光を放つ刻印が浮かび上がる。

「っ!？」

「怖がらないで、難しいことはこっちでやる。君はただ心穏やかに受け入れるだけでいい」

Ein Prozeß? anfang

プロセスの開始

続いて奏でられる調べの中で腕から放たれる燐光にその顔を照らされる那美は頷いたあと瞳を閉じ心を落ち着かせる。

それに伴い亮の腕に光る魔術文字がスライドし重ねられた掌从那美の腕へと移動していく。

Das Prozeß? ende

プロセスの終了

やがてすべての魔術文字が那美の腕に宿ると共にそれは徐々に発光

を納めまるで腕に吸い込まれていくように消え去る。

「ふう、終わったよ。」

呼んで彼等の名を月砂、刃菊と」

「えっと…月砂！刃菊！！」

亮に促され那美がその名を呼ぶと同時に服越しに腕が発行し、腕から緑色の燐光の粒がまるで蛍の群れのように沁みだし溢れ出て二つの獣を形作る。

「…刃菊、月砂」

お前達との契約を破棄、譲渡した。

久遠の傍に居てやれ。」

かつての従者に声を掛ける亮、すでに契約譲渡の儀は終了した。二人の今の主は那美となる。

「亮…いいの？私たち本当に往っちゃっていいの？」

月砂が亮を見上げ語りかける。

それに続いて刃菊も無言で同様に問いかけていた。

「ああ、問題ないそういう契約だっただろう。」

二人とも今までよく俺に尽くしてくれた。感謝している

」

亮の言葉に二人の脳裏にそれぞれ出会った時の情景が浮かぶ。

月砂：まだそんな名もなかったころ自分はいつの頃か判らないが崖をくり貫いて造られた石の牢に鎖で繋がれ閉じ込められていた。

時折訪れる小鳥たちを石郎の格子の隙間から眺め、空に浮かぶ変幻自在の月と星を眺めそれだけを慰めにただ過ごしていた。

何時も来てくれた小鳥の寿命が尽きかけて、それでもその最期まで自分の元へと往こうとしていたその小鳥の元に行こうとしていた石牢と鎖に阻まれ往けずただその命の焰が尽きるのを見ているしかなかった。

その時初めて“悲しい”という感情を理解した。  
その瞬間こそが同時に心が完全に形を持った瞬間でもあった。

ここが深い地の底であつたのなら、自分も孤独も知らずに済んだのに

それがこれから幾たびも繰り替えされると悟った。

絶望浸り何にも興味を指さずただ石牢の中で絶望に浸りながら過ごしていた。

そんなある日、彼は現れた。

「…こんなところで何をしている？」

初めて掛けられた言葉に若干の興味を示し重たげな頭を上げ瞼を開いた。

「…絶望かそんなもので世界を一括りにして黄昏ているような顔だな…」

正直反吐が出る。 来い、闇の中でこそ真の光は見いだせる

お前が光を見つけれるように手を貸してやる。」

彼は太陽を背負い逆行の中の闇から手を伸ばした、そして私はその手を格子の隙間から伸ばした手を取った

その瞬間、鎖が石の格子が砕けた。

あれは月の存在しない新月の夜だった。

終わりにして始まりを司る夜…

遙か過去に主を失い現世との繋がりが立たれたが故に揮発する霊子を巨魅を喰らうことで補充しその力を増していく

それは主との盟約の為か

それとも純粋な生存本能故か

それさえも判らなくなった彼はその夜もまた、怨霊を喰らい巨魅の肥大化した本体、の腸を貪り食っていた。

しかし訪れた気配に貪るのを止め赤く染まった口をその気配へ向け同じく赤く染まった牙をむき出しにして唸った。

「巨魅の気配を辿ってきたが…これはまた随分と珍しいものに出会えたな…」

それは漆黒のコートに金色に輝く双眸を携えながら一匹の白狐を携えて現れた。

その光景に一瞬、何かの景色と言葉が意識に浮上する。

すまないな

汝、魔を断つ剣と為れ

往くぞっ！！

すまんな私は途中退場みたいだ、お前の忠義に感謝を

かつてよく見た光景に情景、それを振り切るように四肢を以て駆け出しその存在に牙を向け、食い破ろうとした。

しかし

「全く自分が何のために戦うか忘れるとはとんだ阿呆だな貴様は

」

自分を降し敗北という二文字を刻み付けたそれは紅い刃の日本刀を肩に担ぎ見下ろしながら呟く

「かつての主との盟約を守りし誇り高き魔戒の戦士よ、その穿たれた眼を凝らして世界を見る、こんなにも醜いが故にかくも美しい世界を　　お前が守った世界を」

その時、ほんとうに久しぶりに目を覚ましたように感じた。

その存在が手を広げる向こうには人の営みの証である光に彩られた街があつた。

見る、刃菊…これが私たちが守るものだ

今と違いその遙かな昔には電気など便利なものは無かつたが松明や提燈の灯りで彩られた平安の街をかつての主は眺めてそれを呟いた。其処に込められた意志は一体なんなのか確認する術はない

「お前も守りたいものを得ればその心が判るさ　　俺と共に其々の守りたいものを探すか？」

こうして契約を交わした。

「我らが嘗ての主、東雲　亮」

「あなたに仕え共に戦場を駆けたことは私たちの生涯の誉れであります。」



刃菊と月砂が並んで頭を垂れ別れの言葉を紡ぐ

「ああ、お前達も息災にな…」

亮の言葉を聞き届けると同時に二匹は久遠の元へと寄り添う

「おとうさん……おかあさん………」

「久遠、これから一緒だよ」

月砂が久遠を見下ろしながら優しく語りかける。

「でも………」

「子供は親に甘えるものだぞ久遠」

「…うん！」

刃菊の言葉に久遠は二人にすり寄りその身を寄せる。

「みなさ……ん準備はいいですか？」

そんなとき一台の紅いミニカーがエンジンをと共に駐車場から出てきて止まるとその運転席から顔を出す女性が呼びかける。

「あ、はい愛さん、那美、久遠それにそっちの二人も…行くよ」

さざなみ寮のオーナーであり獣医師希望の大学生、楨原 愛に返事する薫が皆を呼びかけなのはと亮を除いた面々が車へと乗りこみ後部座席のウィンドウが下がりそこから久遠が顔を出す。

「クーちゃん」

それに駆け寄るなのはの両脇をつかみ目線が合う高さまで抱き上げてやる亮

「クーちゃん元気でなの！また一緒に遊ぶの！！カズちゃんとはきくちゃんと仲良くね」

「うん…なのはも元気で…りょう、ほんとにありがとう……」

車のウィンドウから顔を出す久遠になのはが語りかけ久遠もそれに答える。

「永久<sup>とわ</sup>に遠く在っても幸福にあるように…久遠、君の名はそのように願われてつけられた名前なのだろう、この子の“なのは”と同じく」

腕の中のなのはが宙で小首を傾げる

「だから俺も願おう…どうか久遠、君に清らかなる風の恩寵がありますように、永久に」

「…あり、がとう……」

亮が語ったそれ、

遠く在っても久しく在るように

君の名前は久遠だ

かつて自分に名をくれた最愛の人のそれと酷似する言葉、それがなぜか無性に久遠の心に響き感情の本流に揺れ動かされ途切れ途切れになるが感謝の言葉を久遠は口にする。

それを聞き届けた亮は運転席の槇原 愛に視線を移す。

「行ってくれ」

「あ、わかりました。……じゃあなのはちゃん今度、久遠達が来たらお家に電話してあげるからね？」

「お願いしますなの」

亮に抱えられたまま宙でちょこんと頭を下げる。

車の窓から顔を出す愛がそれに頷き顔を引っ込めると、さざなみ寮と街をつなぐ坂道を力強く乗り切るために強化されたエンジン系が唸りを大きくし車のタイヤが車体を押し出す。

「なのは！楽しかった！！ありがとう！！またね  
！！」

っ！

小さくなっていく紅いミニカーの窓から首をだした久遠が叫ぶ

「クーちゃん！！なのはも楽しかったの！！！！またね  
っ！！！！」

なのはも声を張り上げてそれに応じる。完全にその姿が見えなくなるまで手を振り続ける。

「……………いつちゃったの」

やがて姿が完全に見えなくなるとなのはその手を力なくおろしポツリと呟く

「なのははアイツらと一緒に居るのが楽しかったか？」

「うん…みんなが居なくなっって少しさみちいの……………」

涙声になっているなのはの小さな…とても小さな体を持ち替えて抱きしめてあげる亮

トクン、トクンとなのはの脈動と子供特有の高い体温が衣服越しに伝わる

他者の温もりそれが最も人間の心を安心させ慰めるものである。

「出会は別れへの約束、でもそれは次の出会いへの一歩、君は今日、一歩ほんのちよつとだけ大人になったんだ。」

人は悲しみそれを乗り越えるほどに強くなれ優しくなれる

この出会いは今回だけだけどそれ故に次はもつと違う出会いがある。

別れがつかつた分だけ再会の喜びも大きい

この別れを悲しむということはこの小さな子はこの出会いをそれだけ大切にしていたということ

一期一会

同じ出会いは二度とない、それ故にこの出会いをそれだけ大事にするべきという言葉

永遠は存在しないそれ故に今この一瞬の幸福を噛みしめ大事にしなければならぬ

そしてそれは幸福にとつても当てはまる。幸福は有限で貴重だからこそ価値があり悲劇があるからこそ幸福は美しく眼に映る。

幸福は容易く壊れてしまふからこそ守る価値がある。

「ねえ？」

「ん、何だい？」

「なのはの名前がクーちゃんと同じってどうということなの？」

「ああ、それが……」

菜の花の花言葉は【小さな幸せ】、【元気いっぱい】…君は桃子と士郎が得た幸福の証明であり、また葉が太陽の明かりを全身に受けるように皆の愛を一杯に受けて元気よく育ってほしいという願いが込められていると思う。

つまり、君も久遠も愛されているんだ。」

「えへへ……なのはみんなに愛されてるの！」

照れくさいが隠しようのない喜の感情に緩むその笑顔は簡単に本当に簡単に曇ってしまう。

だからこそ守る価値があるんだ。

どうかこの子の歩む世界が清らかなエーテルに満たされているように

人知れず亮は願う、最も新しき旧き神が己の子に向けた祈りの歌と一字一句違わないその祝詞を心中で歌い上げながら

第三七話 一期一会（後書き）

edテーマ 最遊記セカンドED『Alone』 下川みくに

## 日常外伝：乙女の夢

「ハアアアア                    つ！！！！！！」

「ゼアアアアアア                    つ！！！！」

夜の武家屋敷風の住宅、高町家

その普通の家庭とは比較にならないほど大きな庭、そこで鈍い鋼の光沢を放つ刃を手に火花を散らす男性二人。

高町士郎と東雲亮

「負けられない…負けられないんだよっ！！！！」

「貴様…！！いい加減にしろ                    この痴れ者があ                    つ！！！！」

左右に分かれた二人が同時に地面を蹴り、目も止まらぬ速さで衝突風を切り裂く音と共に二人が携える双刀が振るわれる。

片割れたる亮の左の大太刀が振り下ろされ、それを右の小太刀で軌道をずらし士郎はいなし、無防備な腹へ小太刀を奔らす。

もらった

攻撃が確実に命中する確信を抱く士郎、相手の虚を突き、間を外し、仕掛けを外した筈だからだ。



「ッあ！！」

迫る刃を握るその手を亮は蹴り上げ弾くと同時に蹴り上げた足をそのまま思いつきり落とす。

「フンっ！！」

士郎が垂直に振り落とされる亮の右足に刃を握ったままの腕を殴りつけ軌道をずらす。

しかし次の瞬間、亮は肩から士郎の体へ当て身を行いその体勢を崩す。

「吹っ飛べっ！！」

#### 獅子戦功

無防備な腹へ刃を逆手に持ち帰ると握ったままの拳を下から上へと突き抜けるように打ち出す。

「ぐ　　っ！！！！」

亮の拳の余りに重さに士郎はうめき声を漏らしその体は宙へ舞う。しかし、士郎は宙で反転、後方へ軽やかに地面に着地する。

「見事だよ　　亮君、俺は君に勝てないかもしれない、でも【負けられないんだ】」

士郎は咄嗟に交差させ亮の拳を受け止めた対の小太刀を構え直しながら語りかける。

「いい加減にしろと言ったはずだ士郎……!!」

亮の蟀谷に青筋が浮かびヒクヒクと震える。相当にイラついているのだ。

「なのはは渡さんっ!!」

「幼児の戯言を真に受けるなっ!!!!」

二人の双剣士が再び動いた

始まりは約一時間前

亮は一人、高町家のキッチンにて調理を行っていた。卓上に在るのは白桃と黄桃の空となったカンスメの缶

角切りにした桃の身を砂糖とレモン果汁を加え煮込んだものをタルト型に整えたパイシートに敷き詰めたクッキークラムの上に均一に並べ、アーモンドクリームが蓋になる様に桃の上に塗りとくりオーブンで焼く

なのはの翌日のおやつであるピーチパイを作っているのだ。

しかしなのはを始め高町家の面々は今、桃子の親戚のなぜか膨大な規模と独自のネットワークを有する高町家親戚連合会の結婚式に参加しており家を留守にしている。

桃子の親の妹の娘の従妹の結婚式とほぼ他人じゃないのか？と言いたくなるような遠い親戚ではあるが招待されたのだから行って祝ってあげなくてはならない。

しかし向こうさんが知る由もない亮が留守番をしながらなのは翌日のおやつを作っていたのだ。

待つこと約30分、パイが焼きあがりオーブンから取り出す、そして焼きたてのパイに紅茶風味のジャムをヘラを用いて塗りその上に飾り用の櫛切りにした桃を眺めていく。

「とりあえず完成か…」

キッチンでエプロンを装備したまま完成したピーチパイを眺めながら亮は一息つく  
その時

“ガチャ”

「りょうおにいちゃん！ただいま~~~~~！！！」

ドアが開く音と共になのはの元気のいい声が台所まで響く

「ふう…やれやれ……………もう少し御淑やかになってもいいだろうに」

手を洗いエプロンで水気をふき取りながら玄関へ出迎えに向かう。  
その顔にとっても優しい眼差しの苦笑を携えて

「でね！お嫁さんすっごくキレイだったの！！！」

テーブルに着き素麺をすすりながら半ば興奮気味に亮に親戚の結婚式のことを言って聞かせるのは、帰宅途中でお腹が空いてしまい体も冷えてしまっていたので亮が温かい素麺を用意したのだ。

「そうか、よかったな」

向かいに座り相槌を打つ、如何に幼子といえどやはり憧れるモノなのだろう。

「ふう……お嫁さんか……確かにあこがれるよね……」

テレビ前のソファーに腰掛けていた美由紀が思い出すように虚空を眺め、数瞬の後に同じくソファーに腰掛ける恭也を見る。

「……………なんだ？」

視線を注がれそれに訳が分かんという表情を形作る恭也

「……………鈍感」

ため息と共にその言葉を吐き出す美由紀であった。

「なのはもお嫁さんになりたいの!!」

「そうだな、君ならいつか必ず素敵なお嫁さんになれるよ」

なのはの向かいの席に座る亮は微笑みながら返す

そうだ、この子は何時か最良の相手を見つけその者と共に人生という一方通行の道を歩むだろう

その時を少し想像する。

自分は多分隣には居ないだろう、そして彼女の晴れ姿をこの目に納めているかは分からない。

自分からこの子の元を去っているかも知れない、それに半人半魔故にいつ尽きるか分からない此の命が尽きているかもしれない。

それでもこの子が微笑みながら真っ白なウェディングドレスを纏いバージンロードを歩む姿を夢想する。

其れ位なら許されるだろう。

たくさんの人々に祝福されそれを笑顔で返し、そして自分の足跡を辿り、両親の思いを聞きやがて感極まって泣いてしまっだろう。

その時この子の瞳から零れるのは歡喜の涙、そして士郎や桃子たちも寂しいようなうれしいような複雑な感情によって理性の制御を離れた涙を流すだろう。

そしてそのあと、最愛の人の子を身ごもり、産み育て、その子が最愛の者を見つけ共に歩むと決めその時もまた涙するだろう、今度は

桃子の立場に立つて。

そんな有り触れた極当たり前の幸福がこの子に待っているはずだ。  
至って普通の幸福が

「にゅ？どうしたのりょうおにいちゃん？」

素麺を食べながらなのはが問いかける。何とも言えない表情を作る  
亮に

「いや、なんでもないよ……ただ、少し君がお嫁に行く時の事を想像しただけだ。」

「どうだったの？」

「とても綺麗だったよ」

「にゃ~~~~~~~~」

微笑みながら告げる亮の言葉になのはは両手で顔を覆い隠しながら  
顔を赤くし悶える。

小さいながらに彼女も立派な乙女なのだ。

「あらあら、なのは照れちゃってかわいいわねこの子」

その様子を見守る桃子が椅子の後ろからなのはを抱きしめ頬ずりす

る。

「にゅ～～～～」

母親の抱擁に嬉しそうに目を細めるのはしかし、この後の桃子の発言が騒動を呼ぶこととなる。

「でなのはは誰のお嫁さんになりたい？」

ニンマリと嗤う桃子、それに士郎が私服に着替えた士郎が苦笑しながら近づく

「おいおい桃子、なのははまだ三才だぞ」

「りょうおにいちゃん!!」

ピシッ!!

なのはの全く躊躇、躊躇いのない一言になのは本人を除く人間の時間が凍る

「ふう……………ハアッ!!」

やがて亮がため息を突くと共に凄まじい速度で駆け出し窓から外へと飛び出る。

卓越した戦略眼と戦闘経験からくる危険察知能力が発揮された瞬間であった。

一  
 一  
 一  
 一  
 一  
 一  
 一  
 一  
 一  
 一

⌋  
⌋

声をハモらせて怪しい笑いを上げる恭也&士郎、彼等の腕にはいつの間にか双刀が握られている。

「父さん」

L

「分かつてゐるさ、恭也　前々から思つてはいたんだ。御神の業が何処まで彼に通じるか試してみたいと」

L

立ち並び視線を交わす二人、しかし言っていることと思っていることとは全く一致していない。

そして彼らは抜き放つ、嫉妬という砥石で研ぎ澄まされた刃を同じく嫉妬という原動力を以て

「丁度いい機会だな」

L

「ああ、本当に丁度いい機会だ」

L

互いに肯きあい、亮が飛び出した窓を血走った眼で見つめ

「アハハハハハハハハハハ」

……東雲えええええ

えええええええつ！！！！」

١٠٠

雄叫びを上げつつ神速を使い文字通り目にも止まらぬ速さで飛び出す二人、

しかし

“  
ドス！ドス！ドス！  
”



「くっ!!」

「なんのっ!!」

丁度飛び出した所で三本の黒鍵が風切音と共に降り注ぎ、二人は咄嗟に左右に飛び退くが

「恭也!!」

「くっ……体が動かない

っ!!」

黒鍵が飛来した方角を無効とした恭也の体が硬直する。よく見ると恭也の月明かりと窓から零れる灯りによって作られ地面に映し出されていた影に黒鍵が突き刺さっていた。

「これは影縫い　　っ!!」

ふふ、久しぶりに燃えてきたよ! 亮君!!」

動けなくなつた恭也から塀の上に月を背負つて佇む亮に視線を向ける土郎

そして冒頭に戻る

「へえ……面白ね……これ」

文字通り火花を散らす二人を余所に動けなくなつた恭也を突つつき

遊ぶ美由紀

その手に油性マジックが握られてたりする。

恭也がどうなったか言わずともという奴だろう。ただそのあと恭也が

「覚えていろよ」

と地獄の底から響くような声で妹の特訓メニューランクEXを考案していたとか

「あわわわわっ！……！どうしようなの！……！おとうさんとりょうおにいちゃんケンカ始めちゃったの！……！」

パニくってリビングで慌てふためくなのは、そんな桃子は諭す。

「大丈夫なのは、あれは男同士の友情を深めるための行動だから喧嘩じゃないのよ。」

ほら、よく言うでしょう？ケンカするほど仲がいいって」  
「そうなの？」

最早確信犯である桃子の言葉に首をかしげるなのは

「そうなの、だから今邪魔しちゃだめよ？」

「わかったの……！」

元気よく返事するのはだった。そう彼女は三才、大人の言うことは何でも信じてしまう年頃なのだ。

## 翌日

「りょうおにいちゃん、ピーチパイおいしいの!!」

冷蔵庫で一日冷やし生地と桃の実が馴染みシットリとした感触になったパイを頬張るなのは

「そうか、それはよかったよ……… 本当によかったよ………」

それを何処となく疲れた様子の亮が答えていた。

士郎に丸々一夜追われ続けた上にそのまま昼間留守になり一人になるのは面倒見ていたのだ。エネルギーが無尽蔵の子供の面倒を、まさに精も根も尽き果てたといっても過言じゃあるまい。

「ほら、口元に食べかすがついているぞ」

布巾を使ってなのは口周りに散在するパイのカスを取る。

「にゃ~~~~」

それをちよつとうつとおしそうにも嬉しそうにも受け入れるのは、昨夜のことは完全に彼女の頭から消え去っている。子供とは少し経てばどうでもよくなって忘れるモノなのだ。

口周りがきれいになると同時に再び文字通りパイに食い付きハムス

ターカリスの様に頬を膨らませパイを堪能する。

「ほらほら、そんなに慌てなくてもだれも取やしないよ」

「…んつと、だつておいしいだもん」

苦笑しつつ言つて聞かせる亮に満面の笑みでなのはが答える。

「ハハハ…ありがとう」

釣られて亮も笑顔になる。

「ん~~~~でもこのままじゃ“おとめ”のピンチなの!」

ある程度パイを食べ終わつたなのはが少し困つたように言う。

「?何がだい」

「お嫁さんになるのにお料理できないのは“ちめいてき”なの!」

「そうか、じゃあ今晚の食後のデザート一緒に作つて覚えてみたらどうだい?」

「やったの!」

亮の申し出を受けやる気を漲らせるなのは、  
しかし、そのデザートを土郎が絶賛した後に「これでりょうおにいちゃんのお嫁さんになれるかな?」とよりにもよつて土郎に聞いてしまった為、再び激突が繰り返されることとなる。

### 第38話 聖夜の誓約（前書き）

遅くなりました、あと数話で終わります。

### 第38話 聖夜の誓約

「つ……………つ！！！！」

夜明け前の青白く染まる空の下、風に揺らぐ木々の音とは別に文字に変換不可能な裂帛の氣勢を発しつつ鋼を打ち合わせる二人の双剣士がいた。

幾たびもの金属の擦れ合う音と地面や草木が蹴られる音と共に亮と士郎が木々に囲まれた空間を前後上下左右、超三次元的な軌道を描き剣を打ち合わせていた。

「つ……………つ！！！！」

地面、あるいは木の幹を蹴り空中でぶつかり合う二人はその交差する刹那の間に幾たびもの剣閃を交え文字通り真っ赤な火花を散らす。

通り過ぎた二人が地面に着地し即座に振り向き構える。

向かい合う双剣士、二人の間に一陣の風が凧、木の葉が吹き抜ける。

「……………つ！！！！」  
「つ……………」

双方の内の片方、士郎の意識に僅かに穿たれた穴を縫い亮が切り込む。

そのあまりに早く強烈な踏込は絶妙な意識の隙間を縫うタイミングで行われ常人であれば瞬間移動したように感じるだろうが

士郎はそれに対応する。

一度始まった攻防は止まる事を忘れてしまったかのように森を駆け抜けながら刃を交え火花を散らし閃音の旋律を奏であげる。  
フレシユード

腕を上げたな…

限がないと一端切り上げた攻防、再び士郎を構えた剣越しに見据えながら内心、嘆息をつく。  
出会って間もない頃、士郎は単なる直観と神速のみに頼った戦法しか取らなかった。

それは仕方がないことかもしれない。

全ての戦闘において相手の『間』を外し、『仕掛け』を外し、『動き』を外し虚を突かなければ相手に対し有効打撃は与えられない。

超高速移動歩術、神速はその速度故に“間”を図り損ね、仕掛けを見逃してしまう正しく奥義と呼ぶに相応しい技術

しかし、一流を超えた超一流には通じない。

真の達人はあらゆる状況下であらゆる情報を収集し狙いを読みそこから動きを読み、間を読み、仕掛けを読み取る。

故に神速は亮の前では無力と化していた。

「そろそろ終いにするぞ……土郎」

「来い……!!」

両が構えを変える、相手に次の動きを読ませないための直立状態で両の腕をぶらんとぶら下げた“無為の構え”に

紅き弓兵と同じその構えはその人生を同じく闘争で彩ったものが到達する境地

土郎も何時如何なる攻撃が来ようと対応できるように全ての神経を尖らせ感覚を鋭くする。

「つ!!」

先に動いたのは亮

その左手に携えた大太刀、蛍丸を投合しそのすぐ後を疾走する。

「つ!!!!」

縦に豪速で回転しながら迫る蛍丸、それはもはや巨大な粉碎機シュツレッダー

土郎はそれを横に跳躍することで回避する。通り過ぎた蛍丸が地面を抉り幾つかの木々を粉碎する音を耳にしながら

「示現流、秘奥義」

回避に成功しし安堵の息を吐きそうになるその瞬間、亮が右手の大



包平を半ば背負うように肩に担ぎ迫っていた。

「雲耀の太刀・極みっ！！！」

地面を陥没させるほどの凄まじい踏込とそれに連動し全身の重心を一斉に移動、さらに振り下ろす大包平を持つ右手を中心点に、柄の端をもつ左手を作用点とし“てこの原理”を応用した加速を与える。ただ振り下すその瞬間的にくつもの加速を刀身に与える。

その速度は正しく雲耀、脈拍の8000分の一に相当し当然、破壊力もそれに比例する。

正しく隕石の墜落という言葉が相応しい一瞬にして絶対的な破力を秘めた太刀

それが解き放たれ、士郎は……

「影視：モノにできたようだな」

「グっ……掠っただけでこれか……」

どうにか回避に成功していたが右肩から左脇腹へと紅い筋が奔り衣服が紅く染まる。

が亮の右肩にも紅い筋が表れている。

回避しそこねながらも反撃を行ったのだ。

「すべての感覚情報を統合し自身を第三者視点を得ると同時に統合した情報から未来状況を予測する技能<sup>スキル</sup>」  
「影視」

「神速を超えた先にある境地、何とかたどり着くことができたよ」

視線を交え微笑を口元に表す二人

オーバークロック

神速とはパソコンでいうOC、脳の演算速度をリミッターを外すことで行われる超高速認識技術だが、影視はべつアプローチだ。

人間の感覚器官は元を辿れば野生のそれでありそこから得られる感覚には多分な情報が含まれている。あとはそれを察知できるようになれば脳も自然と並列演算に対応しあとは想像力を鍛えることで先読みや危険察知を強化できる。

その到達点の一つが影視でありこれに到達できた人間は僅かな危険の兆候を感じ取りそれに対応することが可能となる。

武の先の先を読むとはこのことである。

「さて、亮君戻ろうか、」

「ああそうだな…」

二人は朝焼けの森を後にかえるべき場所へとその歩を進める。

### 第38話 聖夜の誓約

タタリの撃退と久遠となのはの別れから幾何かの月日が流れた  
それから色々な出来事があった

11月25日の美由紀の誕生日をみんなで祝い、その際、恭也の女装アルバムが紐解かれ恭也が絶叫を上げたり

美由紀の作った物体X？をちょびつと食べてしまったのはが食中毒で病院に緊急搬送されそのお仕置きで料理のいろはを桃子と一緒にスパルタで叩き込んだり、おかげで美由紀の料理は同年代と比べればうまいといえるレベルにはなったが

なのはに料理で負けた美由紀が膝を着いた。

「やったの！」

バンザイをしながら飛び跳ねるのはの背後で…

「幼稚園児の妹に負けた……………」

黒い影を漂わせている彼女が印象的だった。

「ふう……」

軽くため息を吐く

吐き出された生きは凍てつく大気によって白みがる。

高町家の屋根の上で瓦に腰掛け夜空を見上げ夏から始まった思い出を振り返る。

雪が……降りそうだな…

見上げる空を覆い尽くす雲と凍てつく空気、今夜あたり雪が降れば明日には一面の銀景色がお目にかかれる。

そんなことを思い浮かべながら更に深い思いを巡らす。

運命だったかもしれない

龍族が体内にもつ龍玉その中でも青竜は特異。

生き足掻く命の力、緑色のエネルギー、起源の命力を放つ宝石を持っている

そしてなのはは、

地下より湧き出る命の源『シムゾニア』学術名『リンカージェル』と呼ばれる桜色に発光する古細菌がジェル状に結合した液体。

それが発振する誕生の活力と全く同波長の魂を持っていた。

極論から言えばこの世界全てに存在する物質・エネルギーは第一原質エーテルの周波数の違う固有振動で成り立っている。

だからこそ投影は魔力というエネルギーで物質を作り出すことが可能なのだ。

そして固有振動数のみで見れば「なのは」リンカージェル」という図式が成り立つ

命が二重螺旋で作られるように二つのエネルギーが組み合わせり命を生み出した。

だから自分が男であの子が女なのかもしれない。

「ふ、随分とロマンスなことだな」

自分の思考に嘲笑を漏らす。

「でも                    あの子に出会えて俺は全て報われた」

昏い迷宮の如き混迷の人生を歩み続け  
その身を削ぎ落とし心を殺ぎ落として

唯、只管ひたすらに力を蓄え続けた                    全てはいつか出会う大事な人を守  
りきる絶対的な力を手に入れるため、許してはいけない邪悪を弾劾  
するために

生きる意味は無く、夢も希望もなく  
ただ生きるという誓約ギアスにのみ従って生きてきた。

でも生きたいとあの子の未来を見てみたいと思ってしまった。  
あの子が俺に生きる意味をくれた。生きる意味と為った。

それ故に今までの全てが報われた。

「八咫鳥                    見ている、俺の起源の命力。生き足掻く命の力は守  
るための力だ。  
守るべきモノがある限り俺の力は無限を超えた“絶対勝利”の力と

なる」

一瞬、亮の体を若葉のような淡い緑色の氣が包み込む  
困難を打ち破り、未来に進もうという闘志　　勇気に感応し亮の  
体内、胸腺と置換されている生体機関、龍玉が純粹な命の力、原初  
の生命を生み出したエネルギーを発振しているのだ。

しかし、龍玉のエネルギー発振率は星から掛けられた枷のせいで出  
力が上がらない。  
故に祟り巨魅戦ではカルマの実で力をプールしなくてはいけなかつ  
た。

「りょうおにいちや~~~~~んっ！！！」

ふと、自分を呼ぶ元気な声に屋根から見下ろすと、なのはが飛び跳  
ね大きく手を振って自分を呼んでいた。

「今くよ！」

腰掛けていた屋根から立ち上がり跳躍、空気の流れを身に感じなが  
ら十数メートルはある高さを一気に飛び降り、タンと軽やかに着地  
する。

「わあ！すごいの！！！」

目を輝かせながらなのはが駆けり自分を見上げる。

「呼びに来てくれたのかい？」

自分を見上げるなのはに屈み視線を合わせ問いかける。

「うん！クリスマスなの！！」

そう、今日は12月24日クリスマス・イブだ。

朝からそわそわしているのははいろんなことが待ちきれない！といった調子でいる。

「そうか、もどろつか……ん？」

「

なのはの小さな手を握り家の中へと歩みだそうとするが天より降ってきたそれに気づく。

「わあ……！！！」

夜空を見上げる亮につられ仰ぎ見たなのはもそれに気づく。

「  
雪か」

ホワイトクリスマス、幻想的だ。

何時以来だろう、こんなにも当たり前前の祝い事を普通に祝えるのは

「明日には積りそうだな」

「雪合戦なの！！」

雪の降量からあたりをつける。

しかし、なのはには『花より団子、銀世界より雪合戦』のようだ。

「フッ……」

そんな無邪気なのはに微笑を洩らしながら手を引き、彼女の家族が待つ家中へと歩を進める。

なのは

君が笑ってくれるだけで幸せだった

君が居て歩いているそれだけでうれしかった

ずっと同じ場所に居られるよ、君は笑った  
誰かにずっと  
言っ  
てほしかった

それは本当に夢のような日々だった  
ありがとう



### 第38話 聖夜の誓約（後書き）

リンカージェル

『ベターマン』に登場した物質。

1990年代に発見されたピンクのジェル状物質であり、調査の結果「シムゾニア」と呼ばれる古細菌がジェル化したものであるという事が分かっている。他の生命体と接触した際にエネルギーを生み出す性質を持ち、この事から新種の埋蔵生物資源として注目を集めた。

ニューロノイドの動力源として使用できる事から、少量でかなり膨大なエネルギーを生み出す事が可能であると思われ、しかも透析する事によって再利用ができる。また、同用法から、エネルギーを放出する際に何らかの化学反応を起こし、不純物を生成する事が分かる。

古代から「生命の源」として扱われてきたものであるらしく、太古の人々はこれから「知識」を得ていたとされている。実際に膨大な情報が蓄積されている事は確かな様であるが、それを利用しようとした人間の驕りが惨事を招く事となる…

### 第三九話 プラネットオブメモリ

ホワイトクリスマスから数日  
凍てつく空気の立ち込めた廊下をやや早歩きで腕にみかんの入った  
籠を抱え亮が歩く

板張りの廊下の先に現れる襖、本来の用途は客室ではあるが現在は  
亮の私室として使用されている和室である。

その襖を開き中へと足を踏み入れる。

「……………？」

揺れていた、もそもそ時々ゴン！と部屋の中央に置かれた炬燵が揺  
れていたのだ。

炬燵に入る小さな体躯…小動物の類の可能性もあるが残念ながらこ  
の家にペットはいない、唯一可能性のある久遠は遠い瀬戸内海の向  
こうだ。

「…ク、やれやれだな」

思わず苦笑を漏らす。

そして炬燵に潜ってしまったその子と呼ぶ。

「出てきなさいな、なのちゃん」

「うにゅ~~~~~~~~」

間延びするような鳴き声と共に炬燵の四面のうち一つからなのはの

小さな頭が出てくる。

ひょっこり頭だけ炬燵から出している様はカメのようであり、少し和む

「……………ちゃんと座ったらどうだ？」

「さむいのやなの！こっちのほうが暖かいの！！」

子供らしい我儘に思わず苦笑を漏らす。冬に寒いからと炬燵に丸まっているその様子は有名な歌のようだ。

「まるで猫のようだな」

「なのはネコさんのの、にゃー にゃー にゃー」

「ふ、仕方のない子だ」

炬燵から頭を出したまま楽しそうに猫の鳴き真似をするのはを愛おしげに見つめ優しい声色でやはり苦笑を漏らす。

ある程度癒しを得たところで手に持っていたみかんを箆ごと炬燵の上に置き自分も炬燵に胡坐を掻き座る。

するとなのはが炬燵へと頭を引込め、もそもそと炬燵内部を移動する。

「にゃー」

そして亮の懷から顔を出すと、そのまま胡坐を椅子に懷にきれいに収まり「えへへ」と何やら嬉しそうに笑う。

その愛らしい仕草に口元が綻ぶのを感じながら目の前のみかんに手を伸ばしその皮を剥ぐ

オレンジの瑞々しい実が露わになりそれに根のように張り巡らされた白い筋を剥いていく

「はい、なのちゃん」

「あ~~~~ん」

分かれた実の一つを懐のなのはの口元へと運ぶ、まるで雛鳥に餌をやる親鳥のような心境だ。

なのはは其の後、幾つかのみかんを頬張ると亮を懐から見上げ強請<sup>ねだ</sup>る

「ねえ！ねえ！りょうおにいちゃん何かお話を聞かせて！！」

「あまり楽しい話は識らないが…そうだな……………」

これはむかし、むかしのお話

暗黒神話を打ち破る荒唐無稽な御伽話

他者が嘆き悲しむのを見ていたくない、

何もしないでただ命が蹂躪されるのを見ていられない

そんな在り来たりな普通の正義感に従って普通の人間だった彼はちよつとづつ特別になって、彼女とであって  
また少しづつ特別になって

神様になつたんだよ

むかし、むかし人間が生まれ出るよりもずっと昔のお話

地球の外、宇宙の外からオールド・ワンと呼ばれる神様がやってきて地球を自分たちのものにしてしまったんだ。

そして、空が、海が、大地がそこに住むあらゆる命が彼等、悪い神様に苦しめられて泣いた。

みんなみんな泣いた、怒った、憎悪した。

助けてと泣き叫んで救いを求めた。祈ったんだ。

それに応える声があった。良い神様がやってきたんだ。

祈りの祝詞を携え高らかに歌い上げながら。燃える五芒の星を背負って

憎悪の空より来たりて

正しき怒り胸に

「我等は魔を断つ剣を執る

っ！！！！」

世界の壁を切り裂いて、無数に積み重ねた世界の屍で出来た神剣を携え、鋼の巨神の鎧を纏って

その白亜の神様はねちっぽけだけど壮絶な願いと祈りと覚悟が鍛え上げた一振りの剣でもあったんだ。

「汝、無垢なる刃

」

「汝、明日への翼

」

「魔を断つ剣ノデモンベインっ！！！！」

まあ、簡単に言っしまえばその良い神様はね他の悪い神様には最初勝てなかったんだよ。

宇宙規模の悪意、その軍勢 全身から血を流し嗚咽を漏らさずには居られない程に彼らは痛めつけられ続けた。

でも、彼はそれを意に介さない。  
ただ正面を見据え、絶望の嵐と  
巨大な運命と対峙する。

己が敵と

立ちほだかる

そしてそして、後には全部の悪い神様をその剣に閉じ込めちゃったんだ。

そして、オールド・ワンたちは自分を閉じ込める世界の檻の中で彼らを憎悪しながら恐怖しながら考え続けるんだ。

なぜ、他者の為に苦しい思いをして闘い、すごく痛いすごく辛いのにあきらめないのか

その答えは人間なら誰しも持っていた、けど貫ける人間は本当に少ない強い人間だけの答えだった。

その傷だらけの全身、自らと敵の血に染まった両の腕  
辛いはず、辛くないはずなのに彼はね太陽みたいな笑みと共に答えた。

「怖いよ…だけど  
何もしなかったらヤバいって分かっている  
いで…」  
それでなにもしな

やっぱりその通りになってしまっ方が怖いっ！っ！」

ただ、それだけの理由……

普通のだけど、それを最後まで貫く特別を持った彼

オールド・ワンたちには絶対に理解できない答え、最も新しき旧き神である彼が神の中で最も特異かつ普遍

そう、暗黒を享受を出来ない脆弱な心の元で宇宙に敵対する壮絶な覚悟を以て不屈の闘志を貫くことが彼の強さだったんだ。

今話した、御伽噺は星に刻まれ記憶　大昔に在った英雄神話、本来だれも語ることのできない孤独で孤高だけど最も気高い御伽噺始まるのに全宇宙に匹敵するほどの勇氣が必要だった物語

「だからね、なのちゃん。

どんなに辛くても、どんなに絶望が君の世界を覆い尽くしている。

【そんな風に】見えてもそれは君の世界全てじゃあない。」  
腕の中で自分の言葉に耳を傾ける幼子<sup>なの</sup>に言い聞かせる。

その言葉を

「悪夢も恐怖も絶望も……………」

そんなものは本当にちっばけな君の世界の破片<sup>パーツ</sup>にしか過ぎない、それは世界の仕組みなんかじゃない　あきらめないで」

懐の幼子の小さなほんとうに小さな体躯を抱きしめる。

「悪夢も恐怖も絶望も、乗り越えたら笑っていける。それらがあつ



たからこそより笑える。

だから、君がくじけそうになったら思い出して  
君は独りじゃない。  
ない。

どんな時であろうと例え一人でも独りじゃいられないんだ。」

誰かを背中に庇っているから戦わなくてはならない  
誰かが背中を守っているから戦うことが出来るんだ

「信じて、高町なのは、君はどんな時であろうと決して独りじゃない。  
い。

兄が君を想い、姉が君を想い、父が君を想い、母が君を想い、友が  
君を想う　そして【俺が君を想う】たとえ俺が死するともそれ  
だけは変わらない。」

俺が想ったそれだけは、その事実だけは何モノにも否定させはしな  
い。

彼女の幸福を祈った  
彼女の未来を望んだ  
彼女の喜びを願った

だから、それを忘れないでほしい。

「わかったの！」

理解しているか甚だ疑問の元気のいい声が返ってきたが、今はこれ  
でいい。

彼女がこの言葉の意味を理解したとき言葉が意味と力を得て彼女を  
支える一因となればそれでいい。

「そうか、それはよかった」

”ごーん、ごーん、ごーん……………”

唐突に耳に届く鐘の音、除夜の鐘。年の境目が迫っているのだ。

「さて、皆のところに行こうか？」

「なのー!!」

元気よく返事をするなのはを抱え立ち上がり、高町家のほかの面々が寛いで年明けを待っているであろうリビングへと向かう。

「ろく、なな、はち、きゅう、じゅう…あとなんだっけ？」

指で鐘の音を数えながらその数が限界に達したところで混乱するのはに苦笑しつつ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8189o/>

---

魔法少女リリカルなのは 春よ、来い

2011年9月28日21時45分発行